九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―XVII―

福岡県大野城市・筑紫郡太宰府町所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福 岡 県 教 育 委 員 会

正　　誤　　表

頁	行	誤	正
1	6	四王寺山系により	四王寺山系より
4	4	遺跡の招介	遺跡の紹介
〃	5	なっている原始時代	なっている。原始時代
19	17	(Fig 70-10と	(Fig 71-10) と
37	26	にぶく	にぶい
62	5	問題もありあり	問題もあり
〃	15	A式期相当が	A式期相当か
97	10		「十字形土製品」はゴチック体
107	Tab. 13	裏の田	裏ノ田
144	表題	(Fig・2)	(Fig・②)
148	17	Ⅳ期に	Ⅵ期に
	〃	Ⅳ期と	Ⅵ期と
	〃	ⅣA期の	ⅥA期の

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―XVII―

福岡県大野城市・筑紫郡太宰府町所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昨年度をもって終了し，本年度はこれまで未発表であった遺跡の報告書を漸次刊行してゆく予定であります。

この報告書は太宰府町から大野城市にまたがる地域で発見されました集落跡と窯業跡の調査記録であります。遺跡は大野城の西麓に位置し，水城大堤に近接した古代景観を留める好地に位置しております。この報告書が地域史研究や教育に活用いただければ幸甚です。

発刊にあたり，調査に参加された地元の方々をはじめ、種々の協力をいただいた関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和52年7月30日

福岡県教育委員会
教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1. この報告書は，昭和47年度に福岡県教育委員会が道路公団福岡建設局の委託をうけて実施した九州縦貫高速自動車道路路線内の埋蔵文化財のうち「裏ノ田遺跡」「成屋形遺跡」及び工事に伴う土取り場内の「雉子ケ尾遺跡」の調査記録である。
2. 本書の執筆は，次のとおりである。

Ⅰ	岩瀬正信
Ⅱ	酒井仁夫
Ⅲ	酒井仁夫
Ⅳ	酒井仁夫
Ⅴ—1	酒井仁夫
2	川述昭人
Ⅵ	岩瀬正信　酒井仁夫　川述昭人

3. 掲載写真のうち遺構写真は酒井仁夫が，遺物写真は石丸洋の指導の下に岡紀久夫・松山芳文が撮影した。
4. 実測図の作成は，遺構については酒井仁夫・川述昭人・中司照世・上村佳典・内田始・副島源司・川述公紀があたった。遺物の実測は酒井仁夫・川述昭人・宮原真裕美・木川恵子が担当した。
5. 製図について，挿図目次に上げたとおりである。
6. 第Ⅲ章「裏ノ田遺跡」の出土遺物は5桁の番号で示した。前2桁は住居跡番号，後3桁は遺物通し番号である。例えば第1号住居跡の第1番土器は01001である。また表土中出土土器については頭にBを付し，B 001のごとく示した。なお縄文土器・鉄器・石器については番号を改めた。
7. 本書の編集は酒井が担当した。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　立地と環境……1

Ⅱ　調査の経過……5

1.　裏ノ田遺跡……5

2.　雉子ケ尾窯跡……7

3.　成屋形遺跡……8

Ⅲ　裏ノ田遺跡の調査内容……9

立　　地……9

1.　住居跡の調査……9

A　各住居跡と出土遺物……9

B　遺構・遺物の検討……55

(1)　遺　　構……55

(2)　遺　　物……58

2.　窯跡の調査……100

立　　地……101

A　第1号窯……101

B　第2号窯……103

C　灰原出土遺物……103

D　小　　結……106

3.　その他の遺構と遺物……113

A　縄文時代の遺物……113

B　奈良時代以降の遺構と遺物……118

Ⅳ　雉子ケ尾窯跡の調査内容……123

立　　地……123

1.　第1号窯と出土遺物……124

2.　第2号窯と出土遺物……128

3.　雉子ケ尾古墳群……134

Ⅴ　成屋形遺跡の調査内容……137

立　　地……137

1. プレ縄文・縄文時代の遺物 …… 138
2. 古墳時代の遺構と遺物 …… 138
VI 御笠川東岸における須恵器の編年について …… 144

図 版 目 次

第 III 章

本文対照頁

PL. 1 遺跡遠望（四王寺山屯水より） …… 1
PL. 2 遺跡遠望（釜蓋より） …… 1
PL. 3 (1) 調査前の状況（北東より） …… 9
(2) 調査後の状況（北より） …… 9
PL. 4 (1) O～R 区北半調査後の状況（南より） …… 9
(2) O～R 区南半調査後の状況（北東より） …… 9
PL. 5 (1) 第3号住居跡（南より） …… 12
(2) 第4号住居跡（南より） …… 14
PL. 6 (1) 第1号住居跡出土土師器 …… 10
(2) 第3号住居跡出土須恵器・支脚 …… 13
(3) 第4号住居跡出土須恵器・土師器・支脚 …… 15
PL. 7 (1) 第5号住居跡（南より） …… 16
(2) 第9号住居跡竈（北より） …… 24
PL. 8 第5号住居跡出土須恵器 …… 17
PL. 9 (1) 第9号住居跡（北より） …… 23
(2) 第10号住居跡（南より） …… 25
PL. 10 (1) 第7号住居跡出土須恵器 …… 21
(2) 第8号住居跡出土須恵器 …… 22
(3) 第9号住居跡出土土師器 …… 24
PL. 11 (1) 第10号住居跡出土須恵器 …… 25
(2) 第11号住居跡出土土師器・支脚 …… 29
PL. 12 (1) 第11号住居跡（南西より） …… 28
(2) 第11・12号住居跡（南西より） …… 28・30
PL. 13 第12号住居跡出土須恵器・土師器 …… 31

PL. 14 第12号住居跡出土土師器 ①……31
PL. 15 第12号住居跡出土土師器 ②……31
PL. 16 (1) 第13号住居跡（南東より）……33
(2) 第13号住居跡竈（南東より）……34
PL. 17 (1) 第13号住居跡竈（北東より）……34
(2) 第13号住居跡竈南西側土器出土状況（南より）……37
PL. 18 第13号住居跡出土須恵器……37
PL. 19 第13号住居跡出土土師器……38
PL. 20 (1) 第14・15号住居跡（南より）……38・39
(2) 第16～18号住居跡（南より）……39・40
PL. 21 (1) 第21号住居跡（南より）……44
(2) 第21号住居跡竈（南より）……44
PL. 22 (1) 第18号住居跡出土須恵器……41
(2) 第20号住居跡出土須恵器……43
(3) 第21号住居跡出土須恵器……44
PL. 23 第21号住居跡出土土師器 ①……46
PL. 24 第21号住居跡出土土師器 ②……46
PL. 25 (1) 第22号住居跡竈（南より）……48
(2) 第23号住居跡竈（南より）……50
PL. 26 (1) 第22号住居跡出土須恵器・土師器……48
(2) 第23号住居跡出土須恵器・土師器……51
PL. 27 (1) 左 第25号住居跡 右 第24号住居跡（南東より）……52・53
(2) 第24号住居跡（西より）……52
PL. 28 (1) 第25号住居跡（北東より）……53
(2) 第25号住居跡覆土中土器出土状況（南東より）……54
PL. 29 各地点出土須恵器 ① 杯・高杯……58
PL. 30 各地点出土須恵器 ② 杯……59
PL. 31 各地点出土須恵器 ③ 杯・高杯……59
PL. 32 各地点出土須恵器 ④ 杯……61
PL. 33 各地点出土土師器 ① 杯……72
PL. 34 各地点出土土師器 ② 杯……72
PL. 35 各地点出土土師器 ③ 杯……72
PL. 36 各地点出土土師器 ④ 杯……72
PL. 37 各地点出土土師器 ⑤ 椀……76
PL. 38 各地点出土土師器 ⑥ 高杯……77

PL. 39 各地点出土土師器 ⑦ 壺……79
PL. 40 各地点出土土師器 ⑧ 甕……81
PL. 41 各地点出土土師器 ⑨ 甕……81
PL. 42 各地点出土土師器 ⑩ 甕……81
PL. 43 各地点出土土師器 ⑪ 甕……81
PL. 44 各地点出土土師器 ⑫ 甑……92
PL. 45 各地点出土土師器 ⑬ 鉢・片口鉢……79・95
PL. 46 各地点出土土師器 ⑭ ミニチュア土器……95
PL. 47 滑石製品……98
PL. 48 (1) 土玉・十字形土製品……97
(2) 土製鏡……97
(3) 焼成粘土……97
PL. 49 鉄製鋤先・刀子・耳環……19・48
PL. 50 (1) 調査地点東側谷部……101
(2) 調査後の全景（東より）……101
PL. 51 (1) 第1号窯燃焼部及び焼成部……101
(2) 第1号窯焼成部及び煙道部……101
PL. 52 第1・2号窯灰原出土須恵器 ①……103
PL. 53 第1・2号窯灰原出土須恵器 ②……103
PL. 54 (1) 打製石鏃……116
(2) 削　器……116
(3) 磨製石斧……116
PL. 55 (1) P-6～7区井戸平面……118
(2) P-6～7区井戸掘り方土層断面……118

第　IV　章

PL. 56 (1) 四王寺山からの遠望……123
(2) 全景（東より）……123
PL. 57 (1) 表土剝ぎ後の第1号窯灰原（東より）……124
(2) 表土剝ぎ後の第2号窯灰原（南より）……128
PL. 58 (1) 第1号窯全景（前庭部より）……124
(2) 第1号窯全景（煙道部より）……124
PL. 59 (1) 第2号窯全景（前庭部側より）……128
(2) 第2号窯焚口……128
PL. 60 (1) 第2号窯全景（煙道部より）……128

(2) 第2号窯焚口遺物出土状況…… 129
PL. 61 第1号窯出土須恵器 ①…… 124
PL. 62 第1号窯出土須恵器 ②…… 124
PL. 63 第2号窯出土須恵器 ①…… 129
PL. 64 第2号窯出土須恵器 ②…… 129

第 V 章

PL. 65 崖面露頭土層…… 137
PL. 66 (1) 北区トレンチ（西より）…… 138
(2) 第1号石棺…… 138
PL. 67 (1) 石器（表）…… 138
(2) 石器（裏）…… 138
PL. 68 須恵器・土師器…… 140

挿 図 目 次

第 III 章

頁
Fig. 1 裏ノ田遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/10,000）（二神和子製図）…… 2
Fig. 2 御笠川周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）（川述昭人作成）…… 4
Fig. 3 裏ノ田遺跡地形図（縮尺1/1,000）（岩瀬喜久代製図）…… 8—9
Fig. 4 裏ノ田遺跡住居跡分布図（縮尺1/600）（酒井製図）…… 8—9
Fig. 5 第1号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）…… 9
Fig. 6 第1号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）…… 10
Fig. 7 第1号住居跡土師器実測図（縮尺1/4）（宮原真裕美製図）…… 10
Fig. 8 第2号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）…… 11
Fig. 9 第3号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）…… 12
Fig. 10 第3号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）…… 13
Fig. 11 第3号住居跡出土須恵器・支脚実測図（縮尺1/4）（宮原製図）…… 14
Fig. 12 第4号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）…… 14
Fig. 13 第4号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）…… 15
Fig. 14 第4号住居跡出土須恵器・土師器・支脚実測図（縮尺1/4）（宮原製図）…… 16
Fig. 15 第5号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）…… 16

Fig. 16　第5号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……17
Fig. 17　第5号住居跡出土須恵器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……18
Fig. 18　第6号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……18
Fig. 19　第6号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……19
Fig. 20　第6号住居跡出土支脚実測図（縮尺1/4）（二神製図）……19
Fig. 21　第7号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……20
Fig. 22　第7号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……20
Fig. 23　第7～9号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……21
Fig. 24　第8号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……22
Fig. 25　第9号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……23
Fig. 26　第9号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……24
Fig. 27　第10号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……26
Fig. 28　第10号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……26
Fig. 29　第10号住居跡出土須恵器・土師器・埴輪実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……27
Fig. 30　第11号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……29
Fig. 31　第11号住居跡出土須恵器・土師器・支脚実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……30
Fig. 32　第12号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……31
Fig. 33　第12号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……32
Fig. 34　第13号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……34
Fig. 35　第13号住居跡竈断面及び遺物出土状況実測図（縮尺1/20）（二神製図）……35
Fig. 36　第13号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……36
Fig. 37　第14・15号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……39
Fig. 38　第16・17号住居跡実測図（縮尺1/60）（宮原製図）……40
Fig. 39　第18号住居跡実測図（縮尺1/60）（宮原製図）……40
Fig. 40　第18号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……40
Fig. 41　第18号住居跡出土須恵器実測図（縮尺1/4）（二神製図）……41
Fig. 42　第19号住居跡実測図（縮尺1/60）（酒井製図）……41
Fig. 43　第20号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……42
Fig. 44　第20号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……43
Fig. 45　第20号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……43
Fig. 46　第21号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……45
Fig. 47　第21号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……45
Fig. 48　第21号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……46
Fig. 49　第21号住居跡出土鉄器実測図（縮尺1/3）（宮原製図）……48
Fig. 50　第22号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……49

Fig. 51 第22号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……49
Fig. 52 第22号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……50
Fig. 53 第23号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……50
Fig. 54 第23号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……51
Fig. 55 第23号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……51
Fig. 56 第24号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……52
Fig. 57 第24号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……52
Fig. 58 第25号住居跡実測図（縮尺1/60）（岩瀬製図）……53
Fig. 59 第25号住居跡竈断面実測図（縮尺1/20）（酒井製図）……54
Fig. 60 各地点出土須恵器実測図①（縮尺1/4）（宮原製図）……60
Fig. 61 各地点出土須恵器実測図②（縮尺1/4）（宮原製図）……61
Fig. 62 各地点出土土師器杯実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……73
Fig. 63 各地点出土土師器椀・高杯実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……77
Fig. 64 各地点出土土師器壺・鉢・片口鉢実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……80
Fig. 65 各地点出土土師器甕実測図①（縮尺1/4）（宮原製図）……82
Fig. 66 各地点出土土師器甕実測図②（縮尺1/4）（宮原製図）……83
Fig. 67 各地点出土土師器甕実測図③（縮尺1/4）（宮原製図）……84
Fig. 68 各地点出土土師器甑把手心実測図（縮尺1/3）（二神製図…）……92
Fig. 69 各地点出土土師器甑実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……93
Fig. 70 各地点出土土師器ミニチュア土器・土製品実測図（縮尺1/2）（宮原製図）……96
Fig. 71 滑石製品及び石器実測図（縮尺1/2）（平ノ内幸治製図）……99
Fig. 72 窯跡周辺地形実測図（縮尺1/200）（岩瀬製図）……100
Fig. 73 第1・2号窯実測図（縮尺1/120）（岩瀬製図）……102
Fig. 74 第1・2号窯灰原出土須恵器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……104
Fig. 75 第1・2号窯灰原出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……105
Fig. 76 各地点出土縄文土器実測図（縮尺1/3）（酒井製図）……114
Fig. 77 各地点出土石器実測図（縮尺1/2）（平ノ内製図）……115
Fig. 78 P－6区方形ピット実測図（縮尺1/20）（二神製図）……117
Fig. 79 P－6～7区井戸実測図（縮尺1/40）（宮原製図）……118
Fig. 80 各地点出土奈良時代須恵器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）……119
Fig. 81 各地点出土奈良時代以降土師器・土製品実測図（縮尺1/4）（二神製図）……120

第 Ⅳ 章

Fig. 82 雉子ケ尾窯跡周辺地形実測図（縮尺1/1000）（岩瀬製図）……122
Fig. 83 雉子ケ尾窯跡地形実測図（縮尺1/200）（岩瀬製図）……123

Fig. 84 第1号窯実測図（縮尺1/60）（二神製図）……124—125
Fig. 85 第1号窯出土須恵器実測図①（縮尺1/4）（宮原製図）…… 125
Fig. 86 第1号窯出土須恵器実測図②（縮尺1/4）（宮原製図）……126—127
Fig. 87 第2号窯実測図（縮尺1/60）（二神製図）……128—129
Fig. 88 第2号窯焚口遺物出土状況実測図（縮尺1/30）（二神製図）…… 129
Fig. 89 第2号窯出土須恵器実測図①（縮尺1/4）（宮原製図）…… 130
Fig. 90 第2号窯出土須恵器実測図②（縮尺1/4）（宮原製図）…… 131
Fig. 91 雉子ケ尾第3号墳石室実測図（縮尺1/40）（二神製図）……134—135
Fig. 92 雉子ケ尾第3号墳墳丘土層断面図（縮尺1/40）（二神製図）……134—135
Fig. 93 雉子ケ尾第3号墳地形実測図（縮尺1/200）（岩瀬製図）…… 135

第 V 章

Fig. 94 遺跡周辺地形実測図（縮尺1/2000）（岩瀬製図）…… 137
Fig. 95 石器実測図（縮尺2/3）（平ノ内製図）…… 139
Fig. 96 石棺実測図（縮尺1/40）（二神製図）…… 141
Fig. 97 須恵器・土師器実測図（縮尺1/4）（宮原製図）…… 142

付 図 目 次

Fig. ① 裏ノ田遺跡出土須恵器・土師器編年図（縮尺1/6）（宮原製図）
Fig. ② 御笠川東岸における須恵器編年図（縮尺1/6）（宮原製図）

表 目 次

第 III 章

頁
Tab. 1 住居跡各部位計測表……56
Tab. 2 竈構造一覧表……57
Tab. 3 須恵器観察表……63～72
Tab. 4 土師器杯観察表……74～76
Tab. 5 土師器椀観察表……77
Tab. 6 土師器高杯観察表……78

Tab. 7　土師器壺観察表……80
Tab. 8　各時期出土甕分類一覧表……81
Tab. 9　土師器鉢・甕観察表……85～92
Tab. 10　土師器甑観察表……94～95
Tab. 11　土師器片口鉢観察表……95
Tab. 12　土師器ミニチュア土器観察表……97
Tab. 13　窯出土須恵器観察表……107～113

第　IV　章

Tab. 14　第1号窯出土須恵器観察表……126～128
Tab. 15　第2号窯出土須恵器観察表……132～134

第　VI　章

Tab. 16　福岡県における窯跡とその年代……150

I 立地と環境

裏ノ田遺跡は太宰府町下水城に所在する。四王寺山南西裾部に延びた丘陵が洪水で寸断されて，独立丘陵を形成する。

丘陵は東西に延びて，東側基部に裏ノ田窯跡があり，南裾が裏ノ田住居跡群である。

丘陵西側裾を県道臼井線が走っており県道に接した丘陵上に昭和44年以来県教委で発掘調査を行った成屋形遺跡が所在する。

四王寺山系により発した谷水は，出発点を異にする2支流があり，山道の両側を並行して流れるが合流はしない。裏ノ田遺跡の300m位上で並行に左折する。裏ノ田より見て上側の川は水量が豊富であるが，下側の川は冬は渇水する。梅雨の季節になると，せまい谷間を濁流となって，裏ノ田遺跡上方で土手を寸断し，大量の土砂を押し流す。

裏ノ田遺跡は氾濫原に古墳時代の住居が営まれていた。現在は川も深くなっているが，当時は何度か洪水に見舞われた事であろう。住居を営むにはあまり条件の良い土地とは言い難い。この事は酒井氏が住居跡の考察の中でのべている。

裏ノ田周辺の遺跡を見るとプレ縄文，弥生，古墳時代と各時代の遺跡が存在していたが，現在は裏ノ田をも含めてほとんどの遺跡が消滅した。

まず南より順を追って行くと前に述べた成屋形遺跡がある。本遺跡は県教委で数回発掘調査が行なわれたが，昭和22年11月，以前より果樹園にするため古墳が数基破壊されて石が放置されていた。その石の間よりその古墳の副葬遺物が発見された。類別すると刀子・矛・直刀・鋳造鉄斧，雛形鉄斧，ガラス玉等が出土した。

成屋形南西方向にエーザイ製薬福岡支社がある。ビル建設以前には用地内に古墳が数基所在していた。現在はエーザイ製薬の好意で破壊されずに丘陵上に三基残されている。

成屋形北側に太宰府町側と谷を境に大野城市側に御太子様原の台地がある。その南西裾に円墳が1基所在する。墳丘径20mを計る。御太子様原に接した釜蓋原の古墳は5m内外が主で，10基点在する。いづれも石材を抜き取られて墳丘だけが残っている。出土品の一部は太宰府天満宮宝物館に保管してある。成屋形遺跡ではプレ縄文の石器も多数出土している。

成屋形の北側に金ケ浦という農業用貯水池があるが，その池周辺もプレ縄文及び土師器が出土する。

裏ノ田，成屋形丘陵より右側の谷をはさんで大野城市瓦田字釜蓋中ノ原遺跡が所在する。本遺跡は遺構は不明であるが遺物，特に石鏃の散布量は広範囲にわたつて見受けられた。昭和28年より31年の3年間で1,000余本表採された。その中には未成品も多数混じつていたし，黒耀

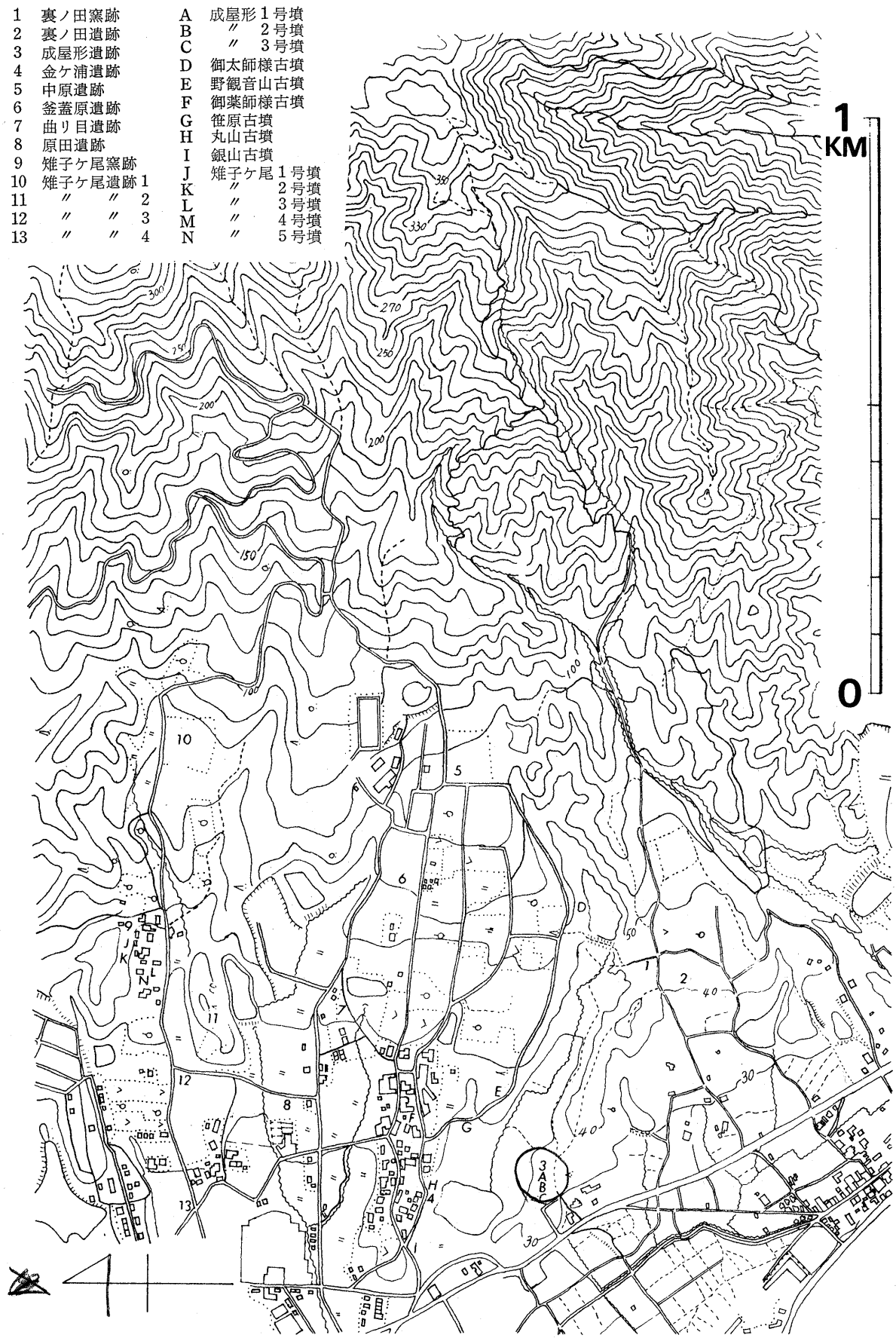


Fig. 1 裏ノ田遺跡周辺遺跡分布図（縮尺 1/10000）

石，サヌカイトの原石も数点あった。

さらに北東方300m下に釜蓋原遺跡がある。釜蓋原遺跡では縄文早期より古墳時代までの遺物が多数発見された。遺物として早期押型文土器片数10点・晩期夜臼式土器片数点・弥生前期土器片及び土師器杯残片多数・石斧・石鏃等である。

さらに150m程下った所に曲り目遺跡がある。曲り目遺跡は弥生土器片及び古遺時代住居跡遺構が発見された。昭和24年7月大雨が降った洪水で川土手と水田の一部まで削り取られたが，これの修復工事のため一段高い畑の土取りをした際偶然に発見された遺跡である。表土より70㎝位の所に2軒分くっきりと住居床面と柱穴が断面を露出していた。遺物も多数出土した。その器種は土師器甕・甑・小型丸底壷・土師器高杯等である。遺物は子供の頃で管理が悪くていつの間にか紛失してしまった。現在も一部は果樹園として存在する。

さらに曲り目遺跡より300m程西側に原田遺跡が在る。本遺跡は昭和28年11月地権者の藤義信氏が畑を葡萄園にする際，溝掘り作業中に発見された。深さ80㎝位の位置に住居床面が，くっきりと浮き出ているのが見られた。

遺物は縄文晩期夜臼式土器が住居床面に埋まっていた。6本溝が掘られたが，出土土器片はほとんどが夜臼式土器片であった。他に土製紡垂車・石斧・石鏃・石匙・使用不明石器等がある。使用不明石器は，現在九州産業大教授，当時福岡高校教師だった森貞次郎氏に参考資料として提出した。翌12月に森貞次郎氏が福岡高校の生徒と葡萄園の下の畑にトレンチを数ケ所入れたがその際の出土遺物は弥生前期，板付式土器片が数点のみであった。現在は葡萄園もなくなって庭園用植木が密植されている。

成屋形丘陵より北東800m位の位置に雉子ケ尾遺跡がある。遺跡は点在するが昭和48年1月縦貫道の路線内の小古墳1基，道路盛土用土取り場で窯跡2基が県教委文化課で調査された。くわしい事は本文で酒井氏が述べよう。

文化課で，窯跡発掘中に雉子ケ尾丘陵より南側60mの所の丘陵が区有林組合の依託で土建業者によって土取り作業が行なわれた。その時古墳時代の住居跡が多数破壊された。土取り場には，甑の取手や甕，壷，須恵器の破片が散乱していた。

窯跡より四王寺林道雉子ケ尾入口から300m林道を登ると岡本鹿次郎氏所有の果樹園があり，縄文，弥生の土器片及び石器が散布している。遺物は早期押型文式土器・晩期夜臼式土器・弥生前期土器片や，石斧・石鏃・石匙等が表採された。

四王寺林道乙金側で福岡市水道配水場工事中，古墳が配水場敷地内に3基埋められた。

雉子ケ尾窯跡より西に100m位の位置に独立丘陵があったがここも縄文早期押型文土器が散布していた。この丘陵も大野城市道路整備の土取り場となって完全に消滅した。

この丘陵よりさらに西北方80mに縄文前期・晩期・弥生中期までの遺跡が所在する。畑を蜜柑園にした際かなり深く掘った穴中より，遺構は確認出来なかったが土器類は多数出土した。

その時古墳も1基破壊された。遺物は，縄文前期轟式土器・晩期夜臼式土器・弥生中期城ノ越式土器等の土器多数が出土した。土器はスコップで割られていたが完形に近いものが数個出土し，石器も石斧・石匙・石鏃・石鑿等が数点含まれていた。

遺跡の招介をだらだら書いたが，四王寺山の西側は東側に比べると山裾がゆるい勾配の扇状地となっている原始時代から，人の住むのに適した場所であったろう。狭い場所に遺跡が密集しており，四王寺の西側は東側に比べて自然災害は非常に少ない。ここに記した遺跡は全体の極く一部でまだ多数の遺跡が破壊されたり，一部では住宅の下に埋まったりしている。裏ノ田も成屋形も今は九州縦貫自動車道の太宰府インターの下に消え去った。雉子ケ尾窯跡等は丘陵すらも運び去られて面影は何所を見ても忍ばれない。

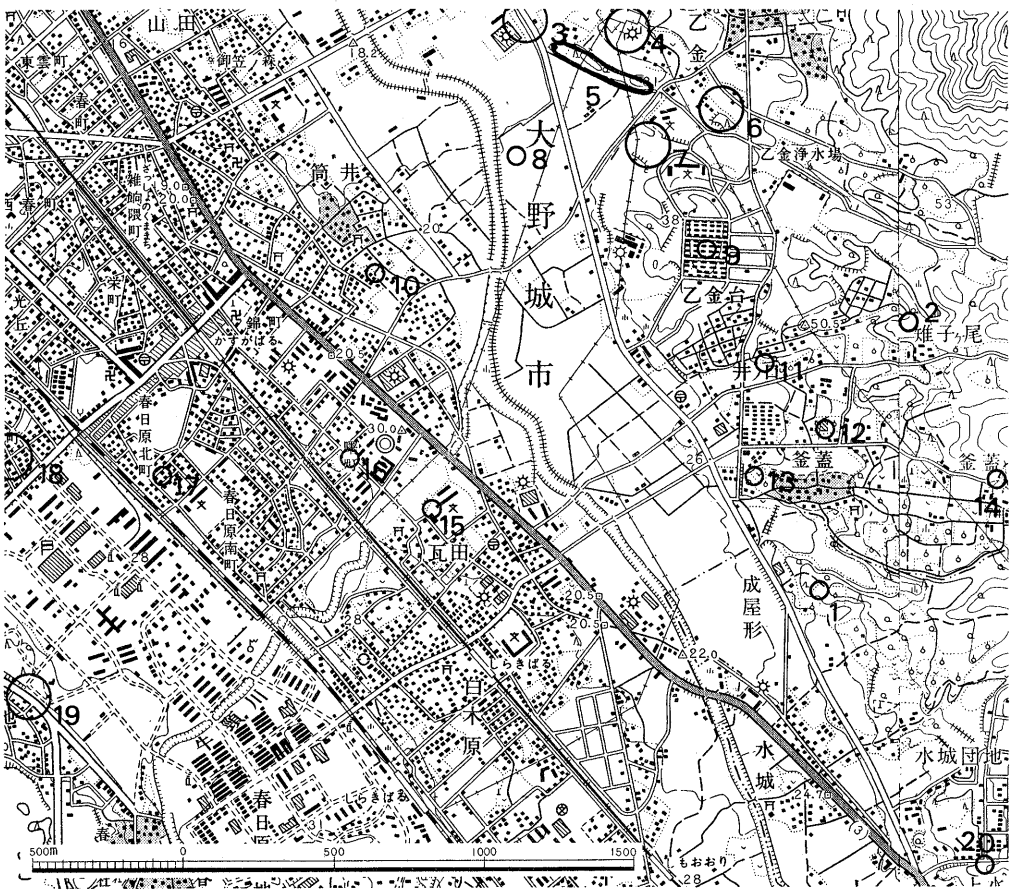


Fig. 2 御笠川周辺遺跡分布図（縮尺 1/25000）

1 裏ノ田遺跡　2 雉子ケ尾窯跡　3 ヒケシマ遺跡，甕棺70基(中，後期)
4 森園遺跡，甕棺(銅戈出土)　5 中・寺尾遺跡　6 甕棺(中期)・石棺
7 平ノ隈遺跡，石棺(彷製内行花文鏡，鉇)　8 甕棺(中期)　9 銀山遺跡，住居跡・石棺
10 甕棺　11 雉子ケ尾3，住居跡
12 原田遺跡，住居跡(夜臼～板付Ⅰ)　13 野口遺跡，後期甕棺(銅釧出土)　14 中ノ原遺跡，散布地
15 住居跡　16 甕棺(中期)　17 甕棺(中期)
18 甕棺(後期)・住居跡　19 甕棺　20 銅戈出土地

Ⅱ 調 査 の 経 過

昭和47年度に大野城市，筑紫郡太宰府町所在遺跡の調査を実施することとなった。北より唐山古墳，乙金古墳群，原口遺跡，雉子ケ尾遺跡，釜蓋原遺跡，裏ノ田遺跡，成屋形遺跡の計7個所であり，その後土取場として雉子ケ尾窯跡が追加された。

4月6日より原口遺跡，12日より雉子ケ尾遺跡，14日より釜蓋原遺跡の調査を開始する。いづれも遺構は検出されず，21日には調査を終了する。原口遺跡からは黒耀石片，青磁片が採集された。雉子ケ尾遺跡からは古墳残骸1基が検出され，石室内部より若干の須恵器と土師器が出土した。他に遺物は出土しなかった。釜蓋原遺跡は果樹園造成に際して大規模に攪乱されており，5個所にトレンチを設定したが，いづれも遺構は検出されなかった。表土下の黄色粘質の堆積層直上より須恵器片・土師器片・縄文晩期土器片・押型文土器片が若干出土した。

以上の遺跡調査を終了して後，裏ノ田遺跡の調査を開始する。

1. 裏ノ田遺跡の調査

4月24日　丘陵部をA区，南側の山裾部をB区とし，A区より調査を開始する。丘陵の東側裾部には須恵器の散布が著しく，丘陵斜面には幅1*m*，長さ10*m*の陥没坑がみられることから，須恵器窯の存在が推測された。丘陵に直交する発掘区を設定して掘り下げると裾部では表土下30～40*cm*で炭化物層があり，丘陵斜面では窯壁が検出された。28日には窯体を追って発掘区を拡張する。落ち込みは3個所にわたって認められたので，南より1号，2号，3号窯とする。灰原は2号窯に続いており，厚い堆積層間に3枚の炭化物層を挾んでいた。

5月3日　3号窯は小規模で，焼成部上半のみが残っていた。灰原確認のため2号窯東側の水田に相直交する2本のトレンチを設定する。窯体主軸平行の東西トレンチでは灰原は検出されず，灰原は窯前庭部のみに堆積したものと考えられた。11日には窯全体を掘り終える。1号とした窯は内部が焼けておらず，2号窯の附属通路と考えられた。15日には周辺の地形測量及び写真撮影を終了する。

5月11日　B区の調査を開始する。全域を9*m*グリッドで区切り，東より西に向ってアルファベット，南より北へ向ってアラビア数字で区名とする。9*m*グリッドの中をさらに3*m*方眼に区切り，千鳥に発掘した。A・Bラインの発掘区では表土下に厚く再堆積層がみられ，遺構の存在は考えられなかった。よって22日より西に下ったⅠ—4・5区に調査の主点を移動した。須恵器や土師器の出土が多く，竈らしきものもみられたので，調査区をⅠ～F—5区へと拡張する。27日，地層が砂質で遺構範囲の確認が困難であったので，グリッド線にそって50*cm*

幅の小トレンチを設定した。その結果H—5区でようやく住居跡壁線を確認した。

5月29日　住居跡の存在が確定したのでF～H—5区を全面的に拡張したところ，6月2日には9個所の落ち込みを確認した。これらは切合いが甚しく，土質の関係もあってプラン認定はなかなか困難であった。各落込み内部を掘ったところ，7軒の住居跡と2個所の断面摺鉢状の楕円形ピットが検出された。住居跡7軒中4軒には竈が附設されており，その残存状態は良好であった。

6月5日　中司照世・上村佳典両君が調査に参加し，A区窯跡の実測を開始した。翌6日には内田始・副島源司両君も加わり，住居跡の実測を行った。一方，発掘区をD・E区に拡げ，8日までに4軒を追加した。

6月14日　E—6区で1軒の住居跡を検出した他，D—6区，C—7区では遺構はまったくなかった。J～K—4～5区は埋土が深かったのでブルドーザーを利用して排土する。15日には窯実測作業を終了した中司君は唐山古墳の調査へ移る。

6月19日　C—6区で住居跡1軒を検出し，周辺へ調査区を拡げたが，4個所の楕円形ピットの他に遺構はまったくなかった。

6月21日　O～Q—3～10区をブルドーザーを利用して全面的に表土剝ぎを行う。その後23日にグリッド杭を打つ。調査はJ～L—4区に主体を移す。

6月28日　J～L—4区で住居跡の検出が相継いだ。各々は甚しい切り合を呈していた。7日には全て完掘し，8日に写真撮影する。

7月10日より豪雨が降り続き，13日まで太宰府町，大野城市内各所で河川の氾濫や土砂崩れが続発する。裏ノ田遺跡は四王寺山塊を開析した谷部に立地するため，甚しい水量が集中する。砂質土層を掘り窪めた住居跡の壁は忽ちに崩され，床や柱穴中に砂が堆積した。雨中に土嚢を積んだり水路を作ってその防御を計ったりしたが，その効果は微々たるものであった。当遺跡住居跡中のいくつかは床面出土の遺物が多く，用具を使用可能のまま放擲したかに考えられていたが，今回の水害を目の当りにして，遺跡廃滅の原因が水害によるものでないかと想像された。

7月15日　雨後の処理を行い，調査を再開する。J～K—6及びN～R—6～9区で遺構検出を計る。N～R区中ではP—6で摺鉢と杯を副葬した方形ピットが見つかった他遺構はまったくなく，黄白色や黒色の砂層が波状をなして堆積していた。19日にはI～J—6で2軒の住居跡と4個所のピットを検出した。第25号跡中からは夥しい量の須恵器や土師器が出土する。集中的に投げ棄てられたものであろう。

7月20日　N～Sの全面発掘区南側を伐採し，グリットに合わせた3*m*幅のトレンチを4本設定する。27日には全てのトレンチを掘り終えた。須恵器・土師器・瓦の破片が若干出土したが，遺構はまったくなかったので，この地区の調査はトレンチのみで終えることとした。

7月31日　E～J－4区の南半に調査区を拡張した結果，I～J区で相切り合う7軒とE－4区で1軒の住居跡を検出した。8月2日には全て掘り終え，写真を撮影する。一方P－6区で検出した石組み井戸は湧水をポンプアップしながら内部を掘り上げた。井戸底より土師器や木製椀の小片が出土した。

8月4日　全ての作業を終え，機材を徹収し，乙金古墳群へ移動する。

調査の担当者は次の通りである。

福岡県教育委員会文化課　技師	酒井　仁夫	
調査補助員	中司　照世	上村　佳典
	副島　源司	内田　始
	岩永　司	
九州産業大学学生	近畿大学学生	
福岡大学学生	西南大学学生	
福岡教育大学学生		

2.　雉子ケ尾窯跡の調査

昭和47年12月19日，新たに工事に追加された雉子ケ尾所在の土取場中に須恵器窯跡の所在することが明らかとなり，その調査について道路公団及び工事業者側と協議を行った。工事の工程が切迫しているとのことで，成屋形遺跡調査終了直後の1月8日より開始し，2月15日までに調査を終えることとした。費用は1月に追加計上するとのことであった。

1月9日　調査を開始する。伐採作業に引き続き，表土剝ぎを行った。灰原は3個所で認められた。

1月12日　煙道と窯壁の一部が検出され，1号窯とした。15日には発掘区内西端でさらに煙道がみつかったので2号窯とし，発掘区を西側へ拡張する。

1月16日　1号及び2号窯の焼成部を検出する。2号窯の焼成部では一部天井が残っていた。同日，調査費の確定がなされないため，調査を中断せざるをえなくなった。

1月22日　予算の計上がなされ，調査を再開した。1号窯灰原の範囲確認のため東西トレンチを掘り進める。

1月29日　1号窯の焚口及び灰原を掘り終える。2号窯の燃焼部床面からは夥しい量の須恵器が出土する。また1・2号間で新たに3号窯が検出されたが，窯内はまったく焼けておらず，未使用と考えられた。

2月2日　1・2号共に焼成部を掘り終え，清掃した後に写真を撮影する。

2月6日　全ての発掘作業を終了する。

2月14日　各窯の平面及び断面実測を終了する。

2月16日　地形実測を終え，全ての作業を終了する。なお，この間に地権者の岡本鹿次郎氏は自宅内の古墳を整備して保存したいとのことだったのでトレンチを掘り墳丘の範囲確認を行った。同時に石室内を清掃し，実測も併せ行った。

調査の担当者は次の通りである。

福岡県教育庁文化課　技師	酒井　仁夫	川述　昭人
調査補助員	川述　公紀	内田　始

5.　成屋形遺跡の調査

昭和47年10月3日より6日までの4日間，工事を急ぐ個所についてのみ調査を実施した。相直交する2本のトレンチを丘陵北側斜面に設定して掘り進めた。その結果遺構はまったく検出されず，石鏃及び土師器，須恵器片が若干出土した。

12月11日　機材を搬入して調査を開始する。遺跡を南北に区分けし，まず南側より掘り始めた。

12月21日　南区の調査を終了する。開墾を受けており，遺構はまったく検出されなかった。ただし，プレ縄文時代のポイントとナイフが各1点発見された。

12月22日　北区の調査を開始する。伐採後に直交する3 *m*幅のトレンチを設定する。

12月26日　南区と同様開墾を受けており，石棺の残骸2基を検出して調査を終了する。

調査の担当者は次の通りである。

福岡県教育庁文化課　技師	酒井　仁夫	川述　昭人
調査補助員	川述　公紀	内田　始

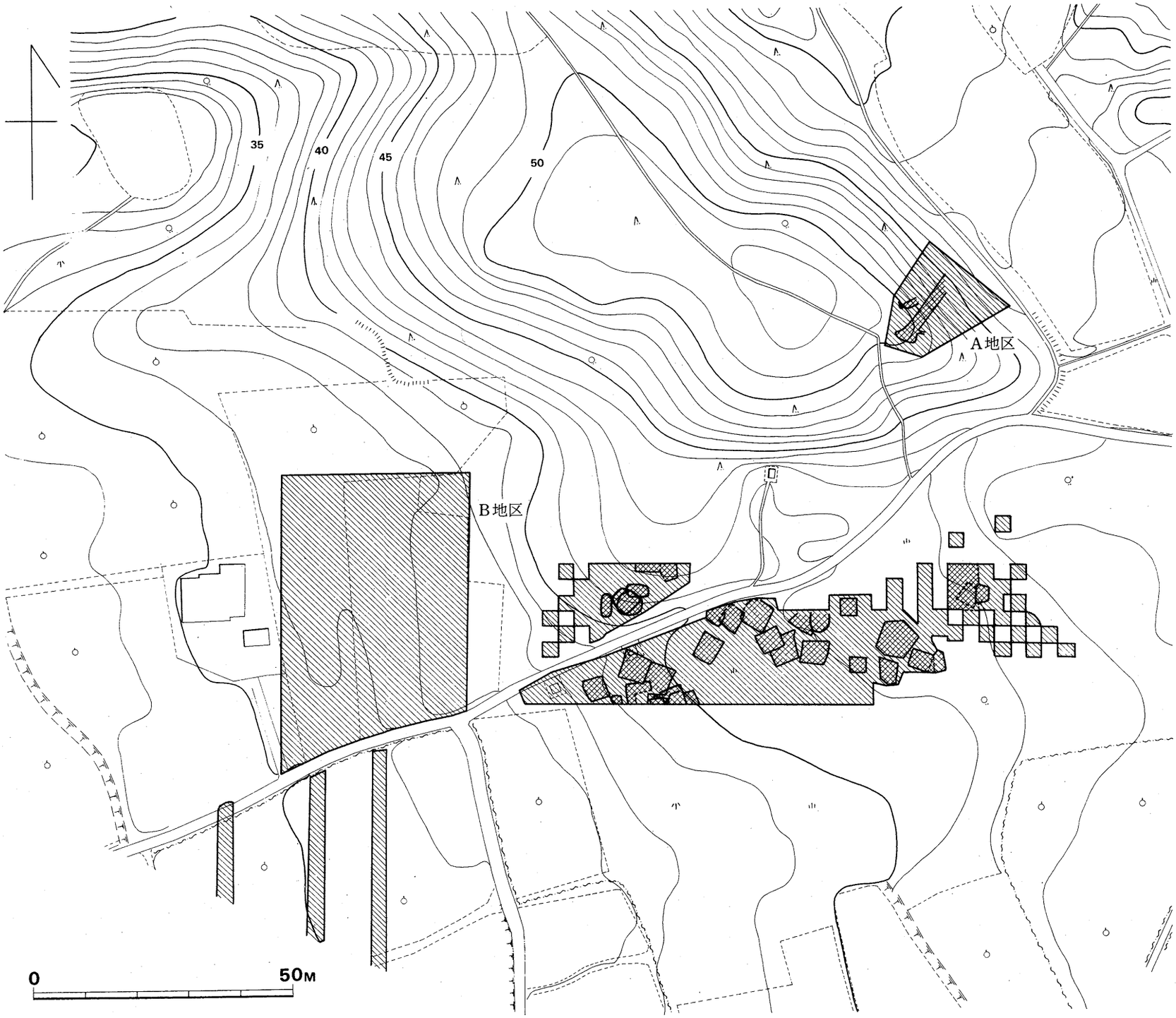


Fig. 3 裏ノ田遺跡地形実測図（縮尺1/1000）

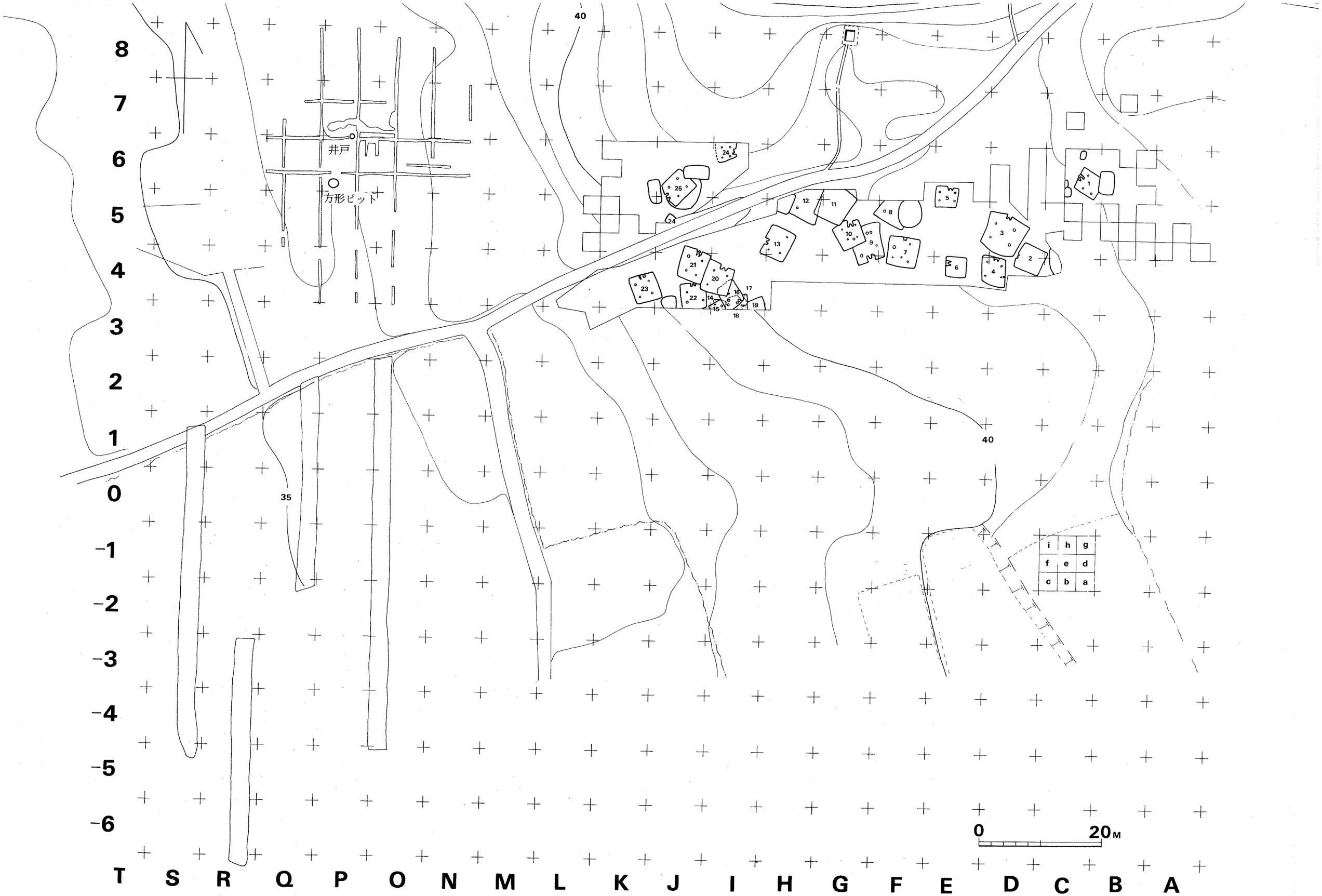


Fig. 4 裏ノ田遺跡住居跡分布図（縮尺1/600）

Ⅲ　裏ノ田遺跡の調査 (Fig. 2～4, PL. 1～4)

裏ノ田遺跡は筑紫郡太宰府町大字水城字裏ノ田に所在する。四王寺山から西に派出した丘陵が標高45*m*まで下り，その西にはさらに瓢形の低丘陵が続いている。低丘陵の最高位点は標高52.8*m*である。丘陵の南北両側には小谷が入り込んでいる。瓢形丘陵の東半は裏ノ田，西半は成屋形と呼称される。裏ノ田側の丘陵南面は緩斜面をなす部分があり，そこから住居跡群が発見された。標高は39～42*m*である。丘陵の東側先端部に近い斜面から窯跡2基がみつかった。標高45*m*から50*m*にかかる斜面である。

土質は住居跡立地地点及び西側調査区や窯跡下方の谷部共いづれも山砂の再堆積層であった。丘陵部は花崗岩風化土ないしは赤色粘質土であった。

1. 住居跡の調査

A. 各住居跡と出土遺物

第1号住居跡
(Fig. 5)

位　　置

C－6区で発見された。遺跡東端に位置している。南側に谷が迫っており，山砂が厚く堆積していた。東側壁は中世の楕円形ピットで切られている。

構　　造

形状・規模　壁が竈裏の一部を残してまったく検出できず規模は不明であるが，柱穴及び竈の位置より推定して，1辺がほぼ3.4～4*m*の方形を呈すると考えられる。

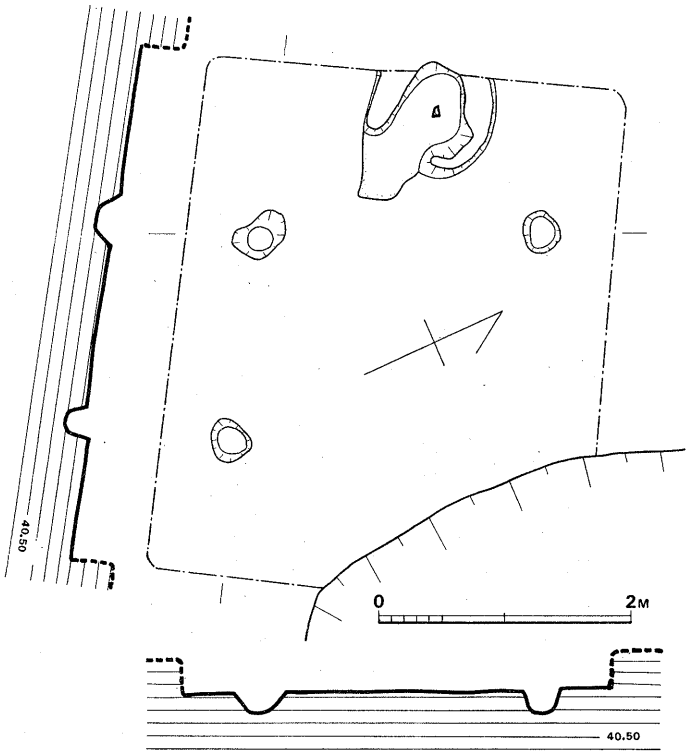


Fig. 5　第1号住居跡実測図（縮尺 1/60）

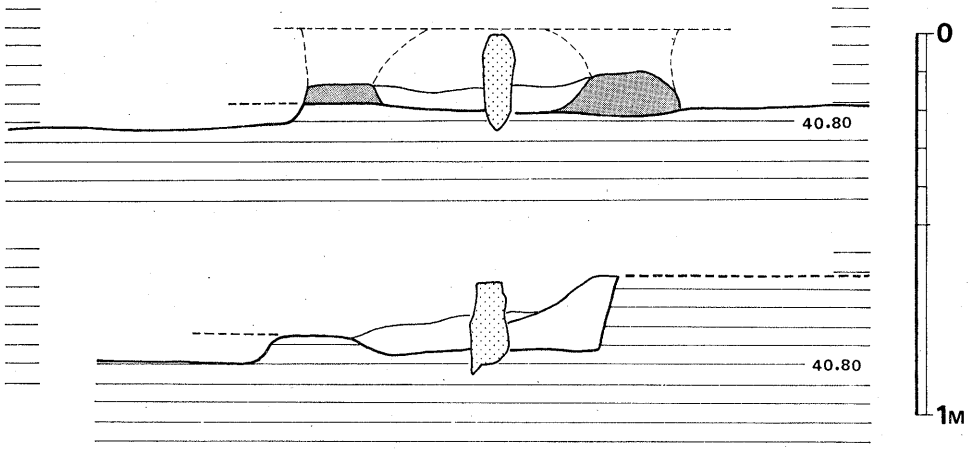


Fig.　6　第１号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

主軸の方向　N-60°-W

竈（Fig. 6）　北西側壁の中央に接して黄色粘質土を固めて作られている。支脚は柱状の自然石を利用している。煙出しは不明である。

柱穴　4柱穴配列をなすと考えられるが，西側柱穴は切られており，不明である。3個所の穴はいづれも床面から10㎝前後の深さである。

床面　黒色山砂上に作られており，非常に崩れやすい。

壁　竈裏側を除き，検出し得なかった。床面と同様黒色砂層を掘った壁なので，天災（水害等）により崩れ去ったとも考えられる。

出土遺物（Fig. 7，PL. 6-1）

出土状況

甕2点及び須恵器小片が竈内から出土した。他に住居跡埋土中と考えられる黒褐色土層中より須恵器杯3点（01001・01002・01004）が出土している。

須恵器　杯蓋　01005・01006共に小片である。

口縁部内側に緩い稜をもつ。天井部はヘラ削りしている。

土師器　甕　01003は口縁部を欠損する。頸部の締まりが悪く，胴下半が張る。外面全てと

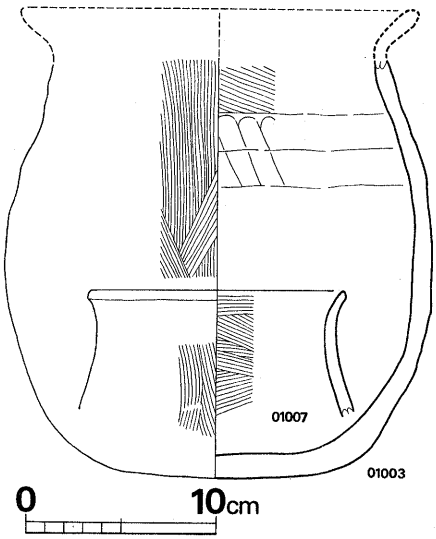


Fig.　7　第１号住居跡出土土師器実測図（縮尺1/4）

内面の頸部から上に粗い刷毛目調整を施し，口縁部の内外面はその上をさらにヨコナデしている。胎土中に多くの砂粒を含んでいる。01007は口縁部が短く緩く外反する。 内外面を丁寧に刷毛目調整し，口縁部外面から端部をヨコナデしている。

時　　期

竈内出土杯蓋はB(註)式と考えられる。住居跡埋土中出土杯類はA式とB式のものである。

第2号住居跡 (Fig. 8)

位　　置

D—4区で発見された。東北隅は中世楕円形ピットに切られ，西北壁は第3号住居跡に近接している。

構　　造

形状　方形を呈する。西の壁隅は崩れて丸味を持っている。

規模　東壁は欠くが，ほぼ4.4×4.3*m*であろう。

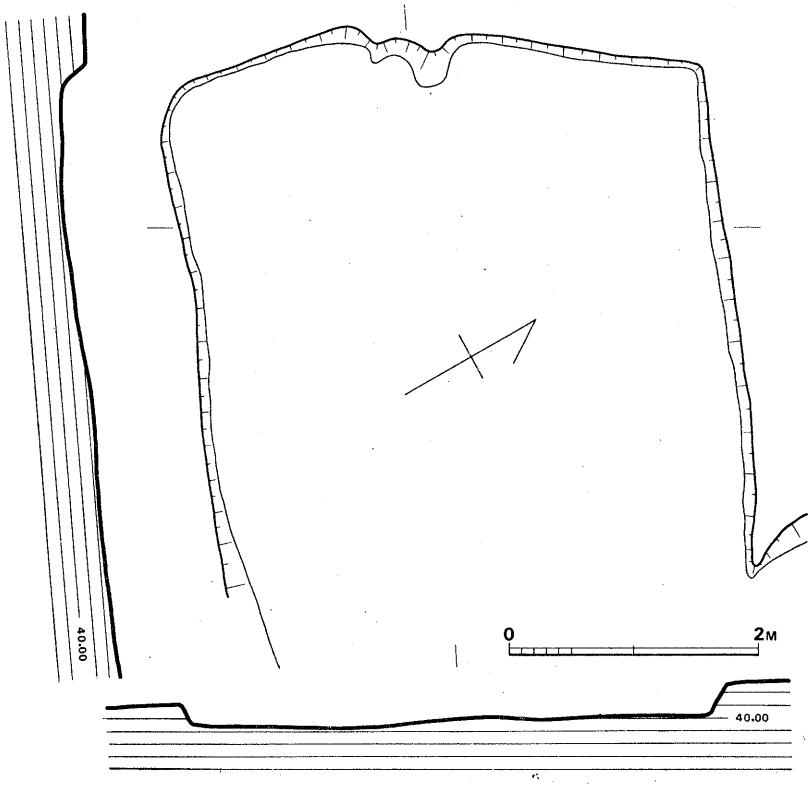


Fig. 8　第2号住居跡実測図（縮尺 1/60）

主軸の方向　N-65°-W

竈　西壁中央が内側に若干凸出しており，この部分が竈と考えられる。築かれた粘土及び焼土は残っていない。

柱穴　まったく検出し得なかった。

床・壁　砂を掘り込んで作られており，崩れ方が甚しい。東壁は残っていなかった。

註　以下AからE型式と分類しており，それについてはB項の遺構・遺物の検討のうち，須恵器の部を参照されたい。なお，各個体の詳細については63頁以下の観察表に記している。

出　土　遺　物

住居跡埋土中より須恵器杯蓋2点（02001・02002）と須恵器甕口縁片1点（02003）が出土したが，床面出土遺物はない。

時　　期

落ち込み土中出土須恵器はB式のみであり，それに近い時期の所産と考えられる。

第3号住居跡（Fig. 9，PL. 5-1）

位　　置

E～D—5区から検出され，第2号，第4号住居跡と近接している。

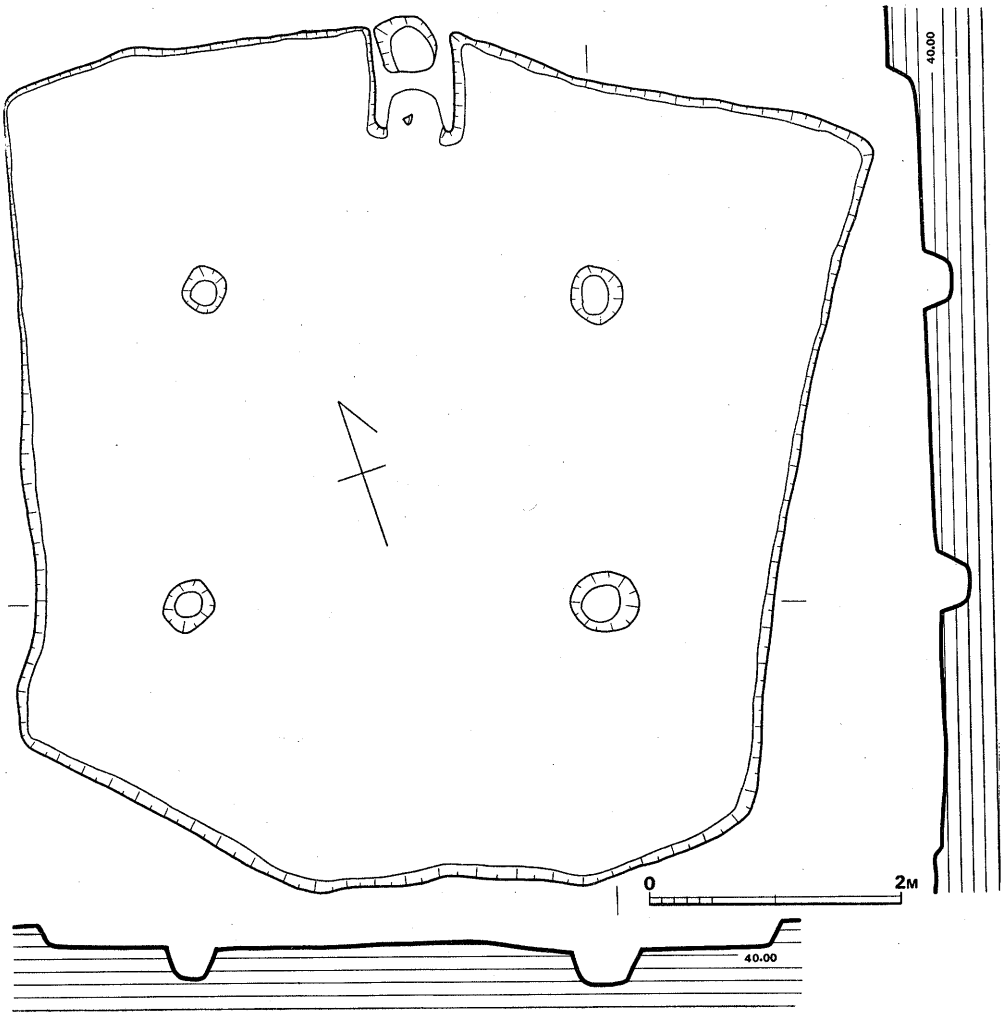


Fig. 9　第3号住居跡実測図（縮尺 1/60）

構　　造

形状　略方形であるが，南北の両壁は中央がく字状に広がっている。四隅は崩れて丸味をもっている。

規模　北辺表　6.8*m*，　南辺長　5.6*m*

　　東辺長　5.2*m*，　西辺長　5 *m*

主軸の方向　N-17°-E

竈 (Fig. 10)　北壁中央に接して附設されている。黄色粘土を固めて作られており，中央に土製支脚を据え，壁との間に煙道が広く開いている。崩れて広がったのであろう。

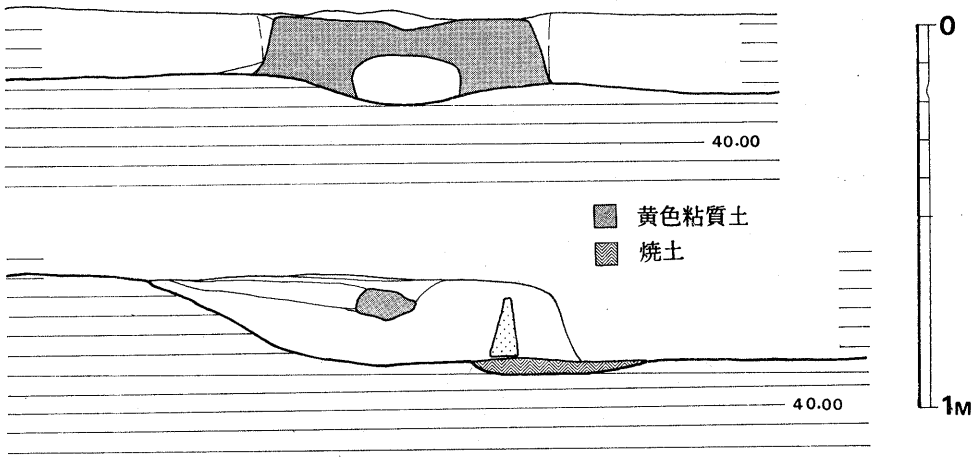


Fig. 10　第 3 号住居跡竈断面実測図 (縮尺 1/20)

柱穴　四柱構造で床面から約30*cm*掘り込まれている。柱穴間距離は北側で3.1*m*，南側で3.3*m*，東側2.5*m*，西側2.5*m*であり，東西方向に広い。

床　南側に若干傾斜している。竈周辺の床は焼けている。

壁　崩れて緩い傾斜をなしている。壁高は10～15*cm*を残している。

出　土　遺　物 (Fig. 11, PL. 6-2)

出　土　状　況

床面からは 2 点の須恵器が出土したのみである。覆土中からは須恵器杯 (03005・03006・03008・03009・03011)，摺鉢 (03003)，土師器 (03001・03002) が出土した。

須恵器　杯蓋　03007は天井部は天坦で，体部に軽い稜をもつ。口縁部内側のやや深い位置に浅い沈線を 1 条引いている。天井部内側に青海波叩き目が残っている。03010は天井部が丸く，体部に 1 条沈線を刻んでいる。口縁部内側に緩い稜をもつ。

支脚　03009は竈内に立っていた支脚である。断面隅丸の四角形を呈し，底面と頂部及び図上右側辺が強い二次加熱を帯びている。高さ16.2 *cm*である。

時　　期

床面出土の杯蓋はC式の類である。落込み土中の出土遺物は6世紀終末より中世までさまざまである。

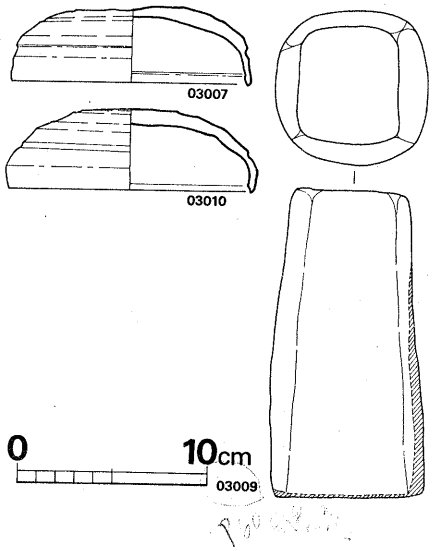


Fig. 11　第3号住居跡出土須恵器・支脚実測図（縮尺 1/4）

第4号住居跡 (Fig. 12, PL. 5-2)

位　　置

D—4区の北西隅に位置する。第2，第3号住居跡と近接している。

構　　造

形状　南東に長い略長方形を呈し，南西隅は崩れ歪んでいる。

規　　模

北辺長　4 *m*

南辺長　4 *m*

東辺長　4.7*m*

西辺長　4.7*m*

主軸の方向

N-8°-E

竈 (Fig. 13)

北壁中央に接して附設されている。黄色粘土に砂を混ぜて築かれている。袖は最も残りの良い部分で厚さ

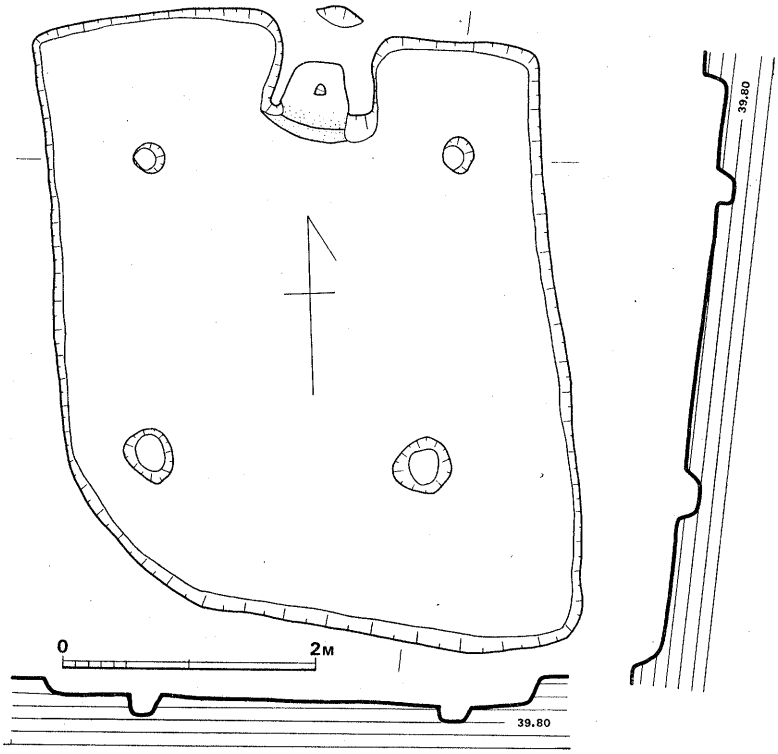


Fig. 12　第4号住居跡実測図（縮尺 1/60）

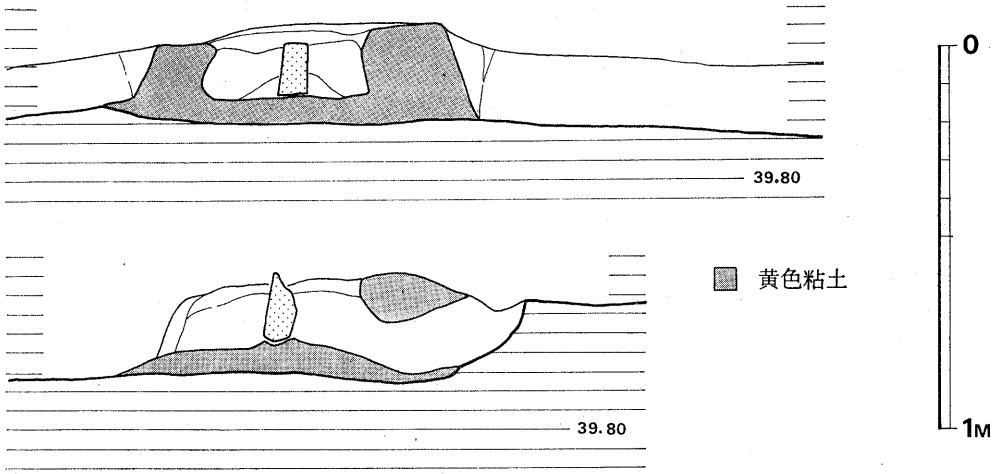


Fig. 13　第 4 号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

50㎝計る。底面にも粘土が貼られ，その上に土製支脚が立っている。煙道は壁との間に開けられている。現存径は30㎝である。

柱穴　四柱構造で，床面からの深さ約15㎝である。柱穴間距離は北側 2.46*m*，南側 2.2*m*，西側2.3*m*，東側2.5*m*である。

床・壁　床面は西側が若干高まる。壁は崩れて歪み，特に南西隅は緩いカーブをなしている。壁の残存高は北東側が最も残りが良く，22㎝を計る。

出　土　遺　物（Fig. 14, PL. 6-3）

出　土　状　況

竈の西側床面上に須恵器杯 3 個体と土師器甕 2 個体が完形で置かれていた。覆土及び表土層直下より須恵器杯（04002・04003），土師器杯（04006）及び手づくね土器（04009）が出土した。

須恵器　杯　04002・04004・04005 共に16㎜と長い立ち上がり部を有している。受部径は各々13.4㎝，14.0㎝，13.9㎝である。器壁外面に砂粒が目立ち，暗青灰色を呈する。製作手法や胎土がいづれもよく似ており，同時一括製作されたと考えられる。

土師器　甕　04007は短かく僅かに外反する口縁部を持ち，胴部は脹らない。調整法が粗雑で，内面にマキテゲ痕を明瞭に残している。器形の歪が大きく，胎土中に砂粒を多く含んでいる。04001は緩やかに外反する口縁部を持ち，胴中央部が最も脹る。外面と口縁内面に刷毛目を施し，口縁外面は上をヨコナデしている。内面のヘラ削りは丁寧で，マキテゲ痕を残さない。口縁部がやや歪むが整美な作りである。

支脚　竈中から出土した。断面は底面は丸いが，頂部は隅丸の 6 面形をなす。

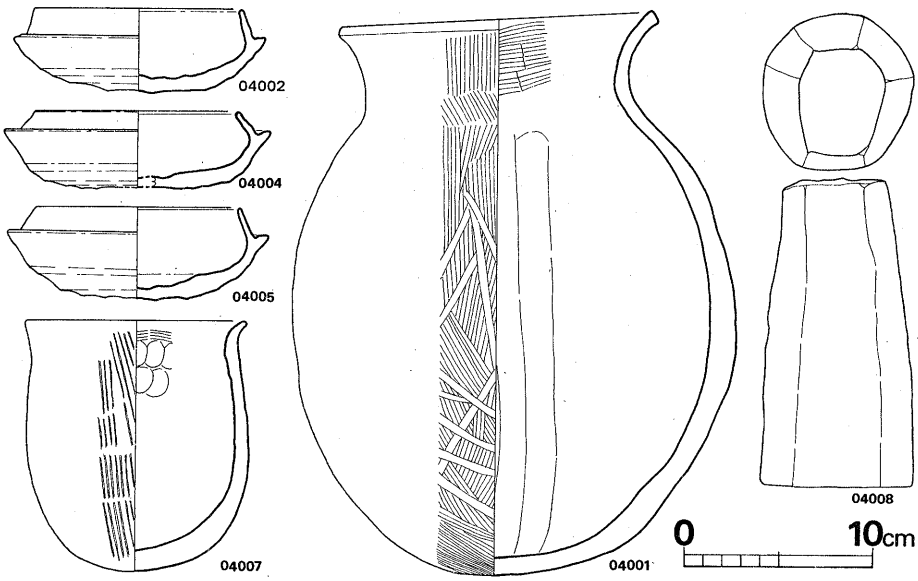


Fig.　14　第4号住居跡出土須恵器・土師器・支脚実測図（縮尺 1/4）

時　　期

須恵器杯は全てB式の類である。覆土中から出土した須恵器はB式及びE式である。

第5号住居跡

(Fig. 15, PL. 7-1)

位　　置

E—6区に位置し，第3号住居跡の西北に約5 *m*，6号住居跡の北に約8 *m*，8号住居跡の北東に3 *m*離れている。

構　　造

形状　方形を呈し，隅がやや丸い。

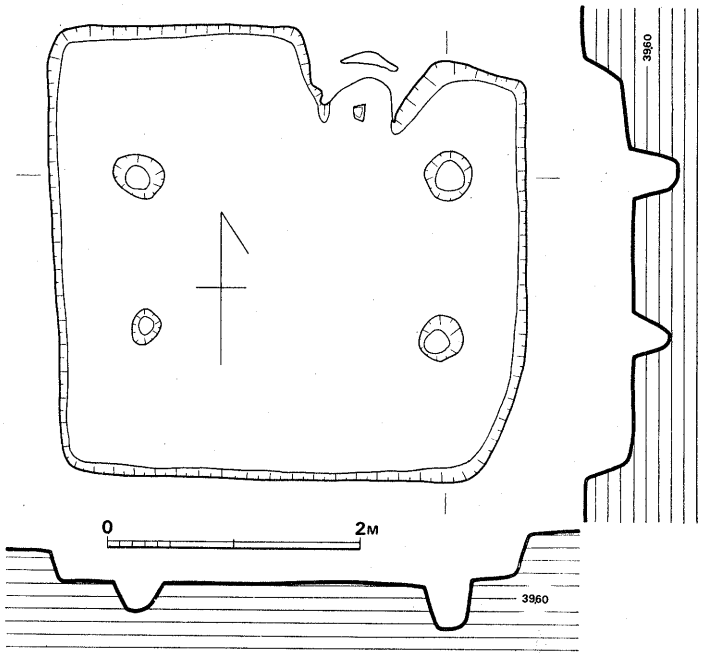


Fig.　15　第5号住居跡実測図（縮尺 1/60）

規模　北辺長　3.8*m*　　南辺長　3.7*m*

　　西辺長　3.5*m*　　東辺長　3.3*m*

主軸の方向　N-1°-E

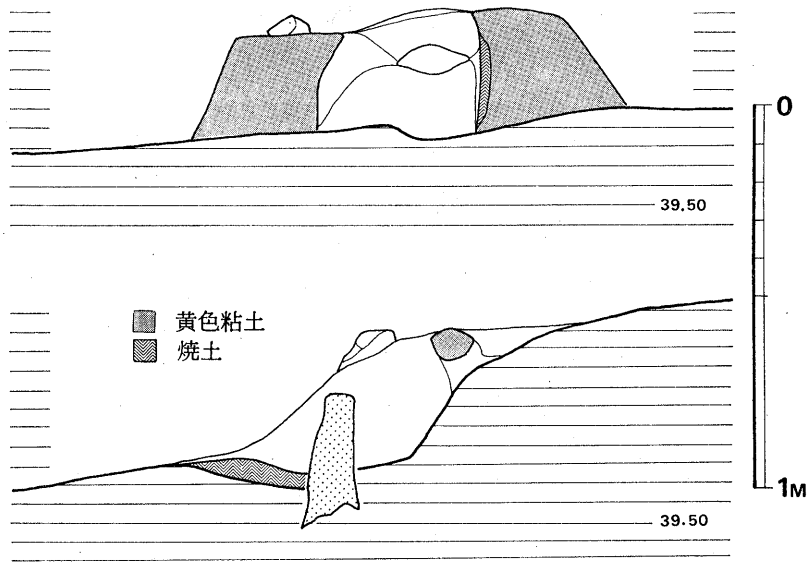


Fig. 16　第5号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

竈（Fig. 16）　北壁のやや東に寄って接している。黄色粘土を盛って築かれており，袖基部の厚さは東側で40*cm*である。西側袖中には高さ30*cm*の石を埋め込んでいた。支脚は柱状自然石を利用しており，基部を床面中に埋めている。煙道は住居壁を斜めに切り込み，竈体との間に設けている。

柱穴　四柱構造で，床面より30～35*cm*掘り込んでいる。柱間距離は北側で2.5*m*，南側で2.3*m*，西側で1.2*m*，東側で1.3*m*であり，南北間距離が極端に狭い。

床・壁　黄色砂層を掘り込んで作られている。床は竈周辺が約10*cm*高くなり，他は平坦である。壁は残存高30*cm*あり，崩れて傾斜をなしている。

出　土　遺　物（Fig. 17, PL. 8）

床面から須恵器が多く出土した。覆土中の出土遺物も土師器はごく少なく，ほとんどが須恵器であり，高杯（05010），杯蓋（05011），坩蓋（05012），を含む。土製玉1個が床面から出土している。

須恵器　杯蓋（05006）は生焼けで，外面調整はまったく不明である。端部は磨耗して丸い。

杯身　05009は受け部径14.3*cm*，器高4.8*cm*，立ち上り長1.3*cm*である。灰褐色を呈し，焼成

悪い。05008・05007は共に生焼けで，立ち上りは太く端部が磨耗している。05008は受け部径14.1㎝，器高4.7㎝，05007は径15㎝と大きく，現存器高は3.9㎝である。

高杯　脚部のみである。05004は小形で短い柱部と裾部間に緩い稜を持ち，裾端部は平坦である。焼成堅緻である。05003は裾部に段を有し，端部は尖る。4孔を外面から開けている。堅緻である。

提瓶　05005は口縁部のみである。大きく開く口縁の端部は平坦である。

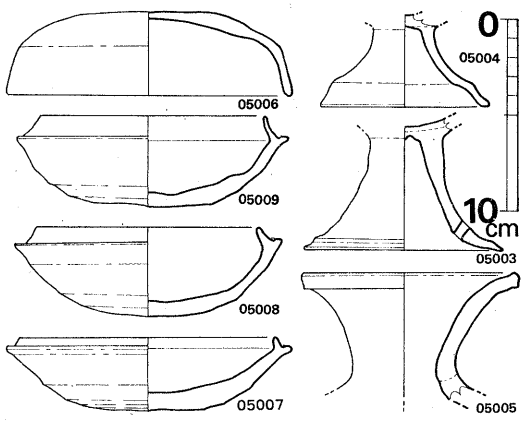


Fig. 17　第5号住居跡出土須恵器実測図（縮尺 1/4）

時　　期

須恵器の形式はBからEまで含んでいる。住居跡の時期は最終のE式期と考えられる。須恵器が多く出土し，中でも生焼け須恵器が集中したことは，当住居跡の性格を考える上で意味を持つであろう。

第6号住居跡 (Fig. 18)

位　　置

E—4区にあり，第4号住居跡の西に2m，第7号住居跡の東4mに位置する。

構　　造

形状　方形を呈し，隅は丸くならない。

規模　北辺長　3.1m
　　南辺長　3.3m
　　西辺長　3.3m
　　東辺長　3.3m

主軸の方向　N-88°-W

竈　西壁の中央より北側に偏して附設されている。灰黄色の砂質土で

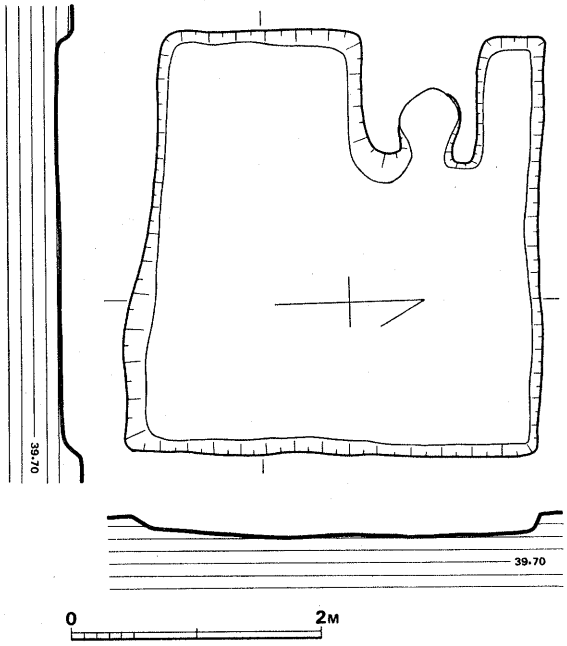


Fig. 18　第6号住居跡実測図（縮尺 1/60）

築かれた基礎部のみ残っている。南側の袖基部は幅50㎝である。煙道は不明である。

柱穴　まったく検出し得なかった。

床・壁　床はほぼ平坦である。壁の残りは極めて悪く，最も高い北壁で15㎝残すのみである。崩れて緩い傾斜をなしている。

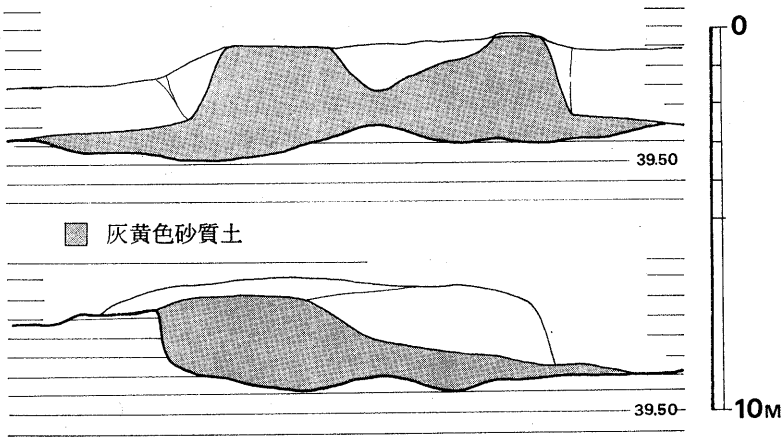


Fig. 19　第6号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

出　土　遺　物

出土状況

床面から土器はまったく検出されず，耳環1点が出土した。竈内から支脚と磨石が出土した。覆土中から子持勾玉（Fig. 70—10と高台杯（06001），手づくね土器（06004）及び糸切り底土師器（06005）が出土した。勾玉についてはP98参照

耳環（PL. 49）　径1.5㎝の細作り金環である。

支脚（06002）は截頭円錐状を呈し，器高12.5㎝である。柱状部やや上部に指頭による押え痕が巡っている。

磨石（Fig. 70—17）　安山岩製で一面の中央に凹陥部がある。周辺が磨耗している。

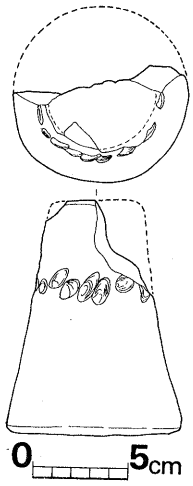


Fig. 20　第6号住居跡出土支脚実測図（縮尺 1/4）

時　　期

床面出土土器が皆無で，遺物からの時期決定は困難である。

第7号住居跡（Fig. 21）

位　　置

F—4～5区にあり，第8号住居跡の南1m，第9号住居跡の東50㎝に接している。

構　　造

形状　東壁は崩れて歪んでいるが略方形を呈している。

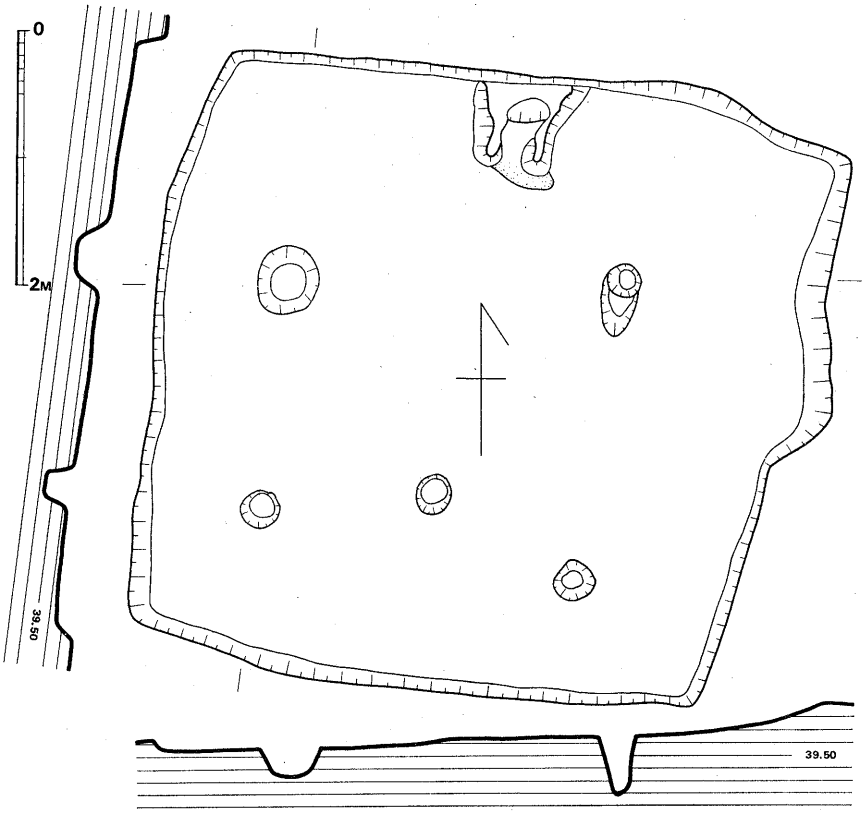


Fig. 21　第 7 号住居跡実測図（縮尺 1/60）

規模　北辺長　5.0*m*　　南辺長　4.6*m*

　　西辺長　4.6*m*　　東辺長　4.5*m*

主軸の方位　N-9°-E

竈（Fig. 22）　北壁中央に接して附設されている。黄色粘土で築かれており，西側袖の基部幅は45*cm*である。焚口に焼土が広がっている。煙道は残っていないが，背後の壁が直に立っ

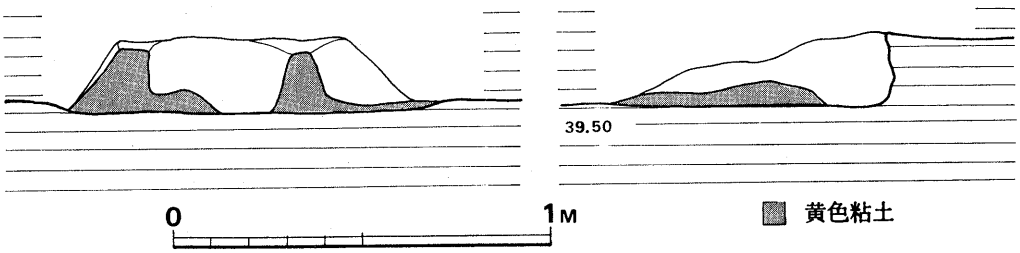


Fig. 22　第 7 号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

ていることから，壁手前にあったと想定される。

柱穴　床面上に5個の柱穴が検出されたが，中間の1個を除いた周囲の4個が主柱になると思われる。柱間距離は北側2.7m，南側2.5m，西側1.8m，東側2.4mで，歪が大きいが，東西間が，南北間よりやや広い。床面からの深さは南東隅の柱穴が最も深く48cmあり，径は床面上で26cm，底で10cmをはかる。

床・壁　黄色砂質土を掘っており，床面は南へ若干傾斜している。西側床は崩れて深くなっている。壁の残存も悪く，東壁は緩傾斜をなしている。北壁の残存高は22cmである。

出　土　遺　物 (Fig. 23, PL. 10-1)

出　土　状　況

床面からは須恵器杯1点が出土したのみである。覆土中から杯3点 (07001・07003・07005) が出土した。出土遺物は須恵器が圧倒的に多い。

須恵器　杯 (07002) は受け部径13.4cm，器高4.3cm，立ち上り部は直線的に伸び，端部は丸い。長さ1.5cmである。

時　　期

C式期の所産である。覆土中出土遺物もC式期のものが多い。

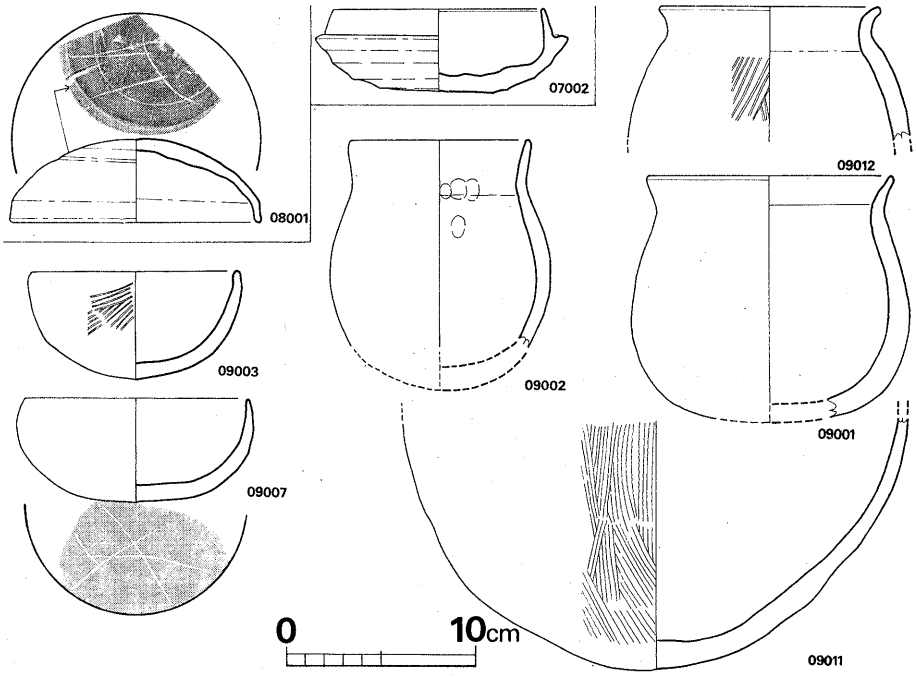


Fig. 23　第7～9号住居跡出土須恵器・土師器実測図 (縮尺 1/4)

第8号住居跡 (Fig. 24)

位　　置

F—5区に位置し，北半は道路下で調査できなかった。東側は中世楕円形ピットに切られている。

構　造

形状　方形を呈すると思われる。

規模　南西辺長5.5*m*

主軸の方向　不明

竈　不明

柱穴　床面西隅より1個のみ検出した。床面からの深さは22*cm*で，口は大きく崩れている。

床・壁　黄色砂層を掘り込んで作られている。西南壁は崩れて歪んでいる。

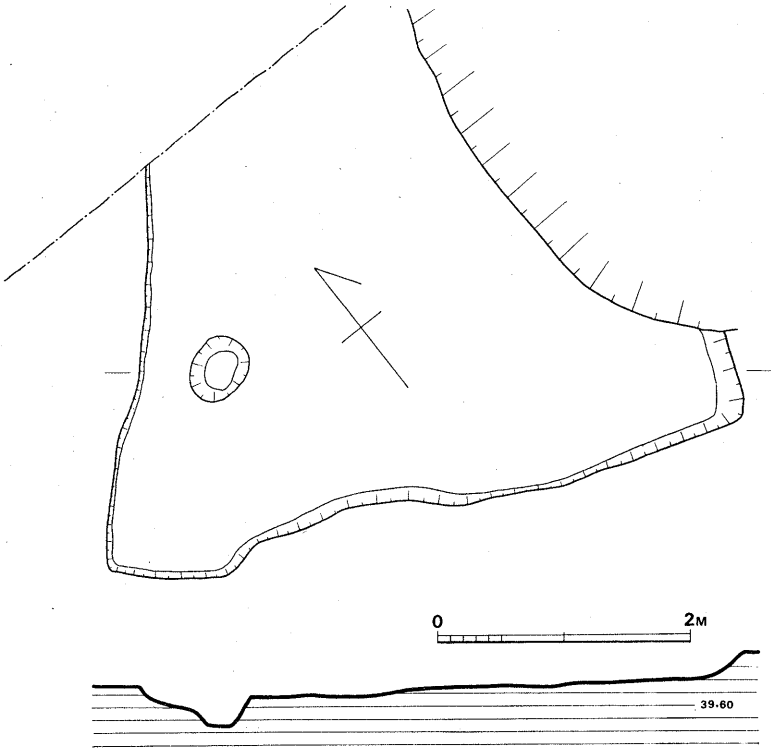


Fig. 24　第8号住居跡実測図（縮尺 1/60）

出　土　遺　物 (Fig. 23, PL. 10-2)

出　土　状　況

南壁下で須恵器が1点出土した。覆土中より高杯完形品 (08003) が出土した。

須恵器　杯蓋 (08001) は口径13.4*cm*，器高4.4*cm*であり，天井部は丸い。口縁部は体部との境に緩い稜をなして直立し，端部は丸い。

時　　期

床面遺物が1点のみで不確実ではあるが，D式期の所産と考えられる。覆土中出土の高杯も同期のものである。

第9号住居跡 (Fig. 25, PL. 9-1)

位　　置

主にG—5区に位置する。北西部は第10号住居跡に切られている。

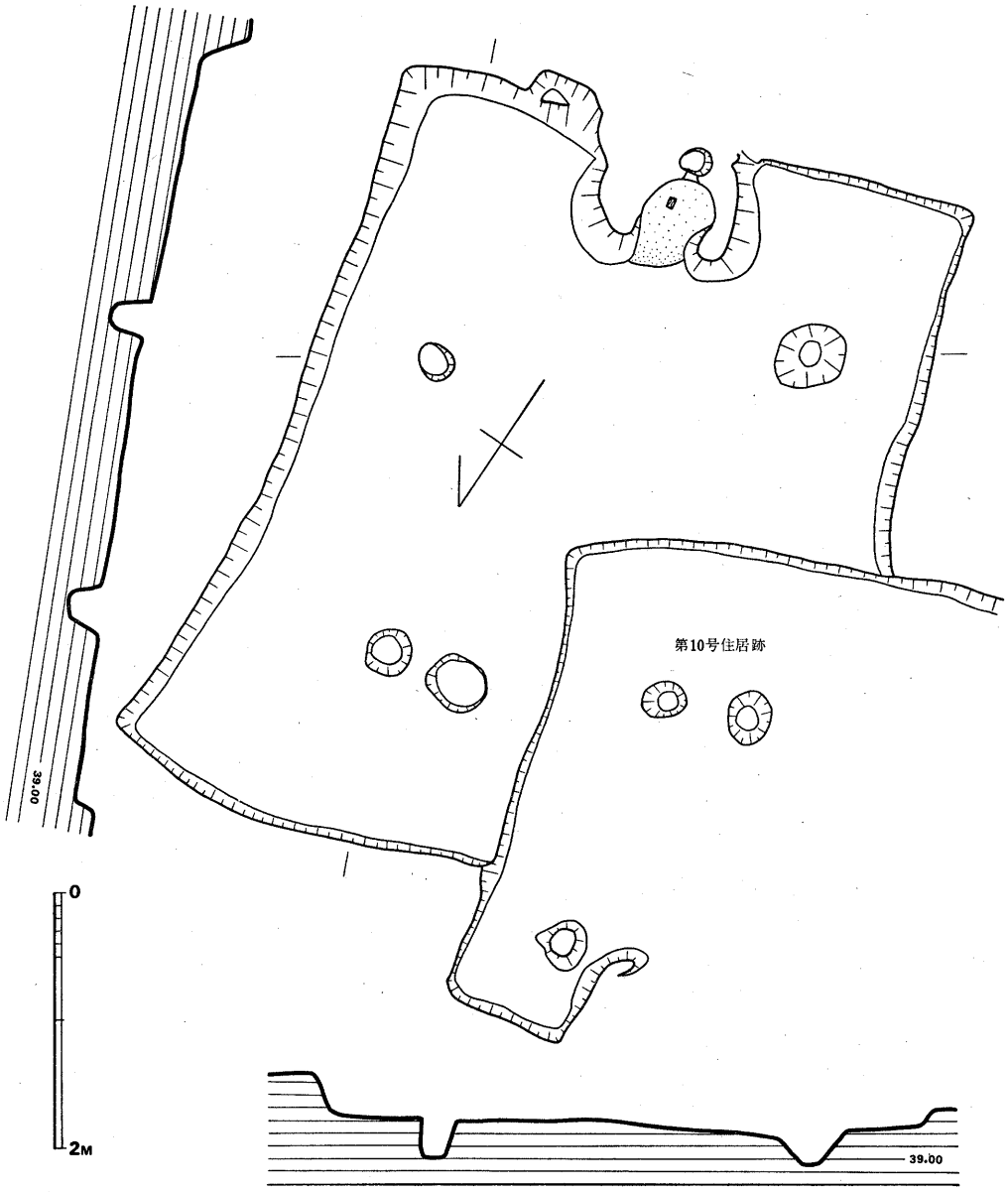


Fig. 25　第 9 号 住 居 跡 実 測 図 (縮尺 1/60)

構　　造

形状　長方形を呈しており，北東隅は崩れて広がっている。

規模　北辺長　約 5 *m*　　南辺長　4.35*m*

　　西辺長　約5.8*m*　　東辺長　5.8*m*

主軸の方向　N-170°-E

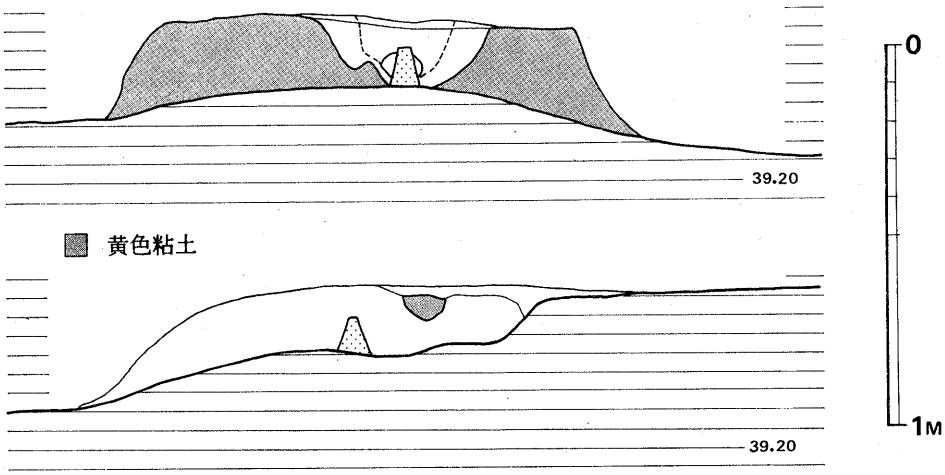


Fig. 26　第 9 号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

竈（Fig. 26, PL. 7-2）　南壁中央に附設されており，黄色粘質土で築かれている。東側袖の基部幅は60*cm*と厚い。底面は住居築造時に床面より16*cm*高く削り残しており，その上に土製支脚を据えている。煙道は住居壁を斜めに切り残し，竈体との間に空間を設けている。底面はよく焼き締っている。

柱穴　四柱構造である。１本は第10号住居跡床面より発見された。柱間距離は北側2.9*m*，南側3.0*m*，西側2.9*m*，東側2.4*m*で，東側柱穴間が歪んでいる。床面からの深さは各々30*cm*前後で，東南隅柱穴の底部径は約20*cm*である。

床　灰白色砂層上に築かれている。主柱間の床面はほぼ平坦であり，柱と壁間がやや迫り上がっている。西側床面の北半は第10号住居跡に切られ，南半は崩れている。

壁　黄色及び黒色砂層を掘って築かれている。前述したように東北隅の壁は崩れて広がっている。残存壁高は南側で35*cm*である。

出　土　遺　物（Fig. 23, PL. 10-3）

出　土　状　況（PL. 7-2）

竈周辺から遺物が集中して出土した。09003・09007が完形品である。09010及び09011が竈内より出土した。覆土中より土師器杯（09004）及び椀（09005・09006）が出土した。

須恵器　杯（09010）は小片である。口縁内側の稜は明瞭である。灰黄色を呈し，焼成堅緻である。口径は14cm弱になると思われる。

土師器　杯　09003は口径11.3cm，器高5.6cmである。口縁部は直立し，端部は厚く丸い。体部外面も刷毛目を施し，口縁部と体部下半は上をヨコナデしている。焼成堅緻である。09004は口径11.8cm，体部最大径12.5cm，器高5.5cmである。口縁部は若干内彎し，端部は尖る。体部外面はヘラ磨きしており，口縁部内外面にススを塗っている。底部に須恵器に見られるようなヘラ記号がある。

甕　いづれも二次加熱によって外面器壁は剝落し赤変している。09012・09001は短く外反する口縁部を持ち，やや下脹れの球形胴部を持つ。胴部外面は刷毛目調整，内面はヘラ削りである。09002は直線的に開く口縁部を持ち，頸部の締りは緩い。胴部は中央が脹る。器壁厚は均等である。09011は大甕の底部である。長胴甕であろう。

時　　期

竈内出土須恵器小片はB式であり，同期の所産と考えられる。また第10号住居跡に切られているので，10号住居跡より古いことは確実である。

第10号住居跡（Fig. 27, PL. 9-2）

位　　置

G—5区にあり，第9，第11号住居跡を切っている。

構　　造

形状　正方形を呈しており，北壁は第11号住居跡との切り合いで崩れ，突出している。

規模　北辺長　4.3m　　南辺長　3.8m

　　西辺長　3.8m　　東辺長　3.6m

主軸の方向　N-12°-W

竈（Fig. 28）　北壁中央に附設されており，黄色粘質土に砂を多く混ぜて築いている。西側袖の基部幅は約30cmである。底面にも地山上に粘質土を貼っており，よく焼き締っている。煙道は検出されなかった。

柱穴　床面上に5本の柱穴がみられるが，南側中央の柱穴は第9号住居跡のものであり，4柱構造である。柱間距離は北側2.2m，南側1.6m，西側1.8m，東側2.1mであり，歪である。床面からの深さは南西隅が最も深く34cmである。

床面　灰白色砂層上に築かれており，東側がやや迫り上っている。

壁　黄白及び黒色砂層を掘り込んでおり，残存高は高いところで15cmである。

出　土　遺　物（Fig. 29, PL. 11-1）

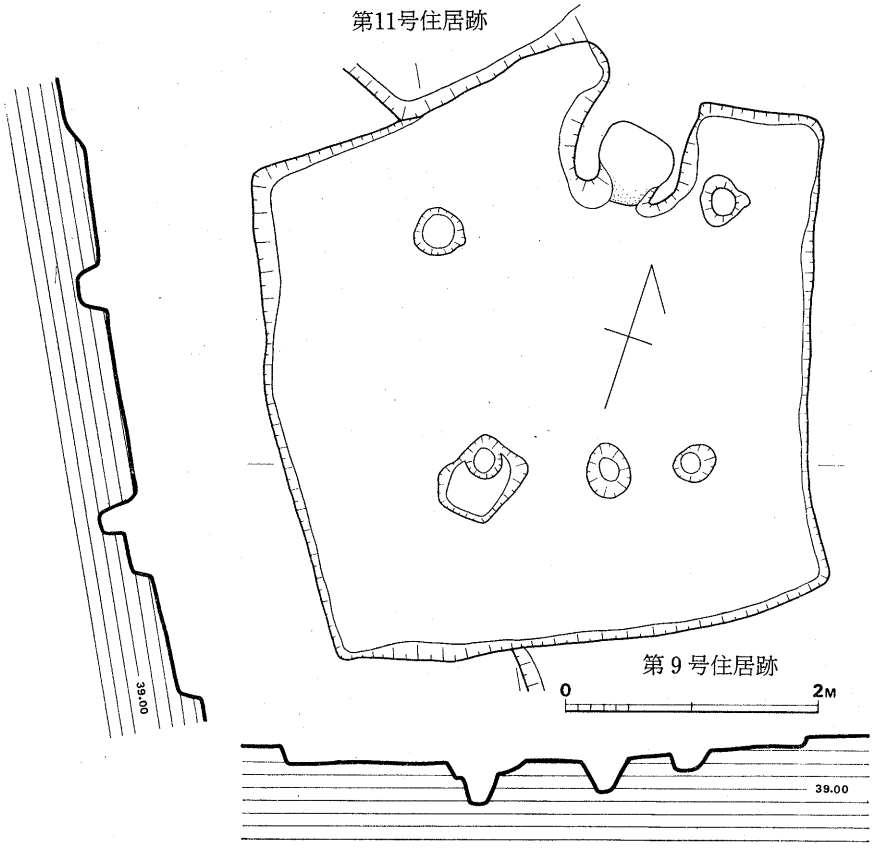


Fig. 27　第 10 号 住 居 跡 実 測 図（縮尺 1/60）

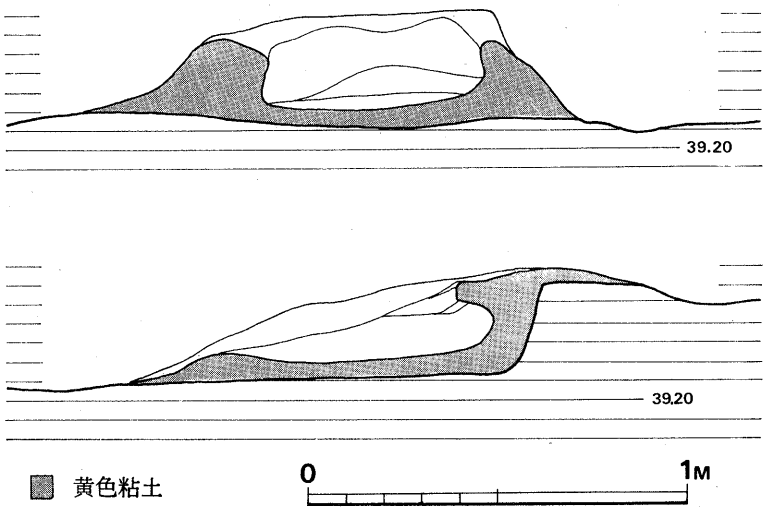


Fig. 28　第10号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

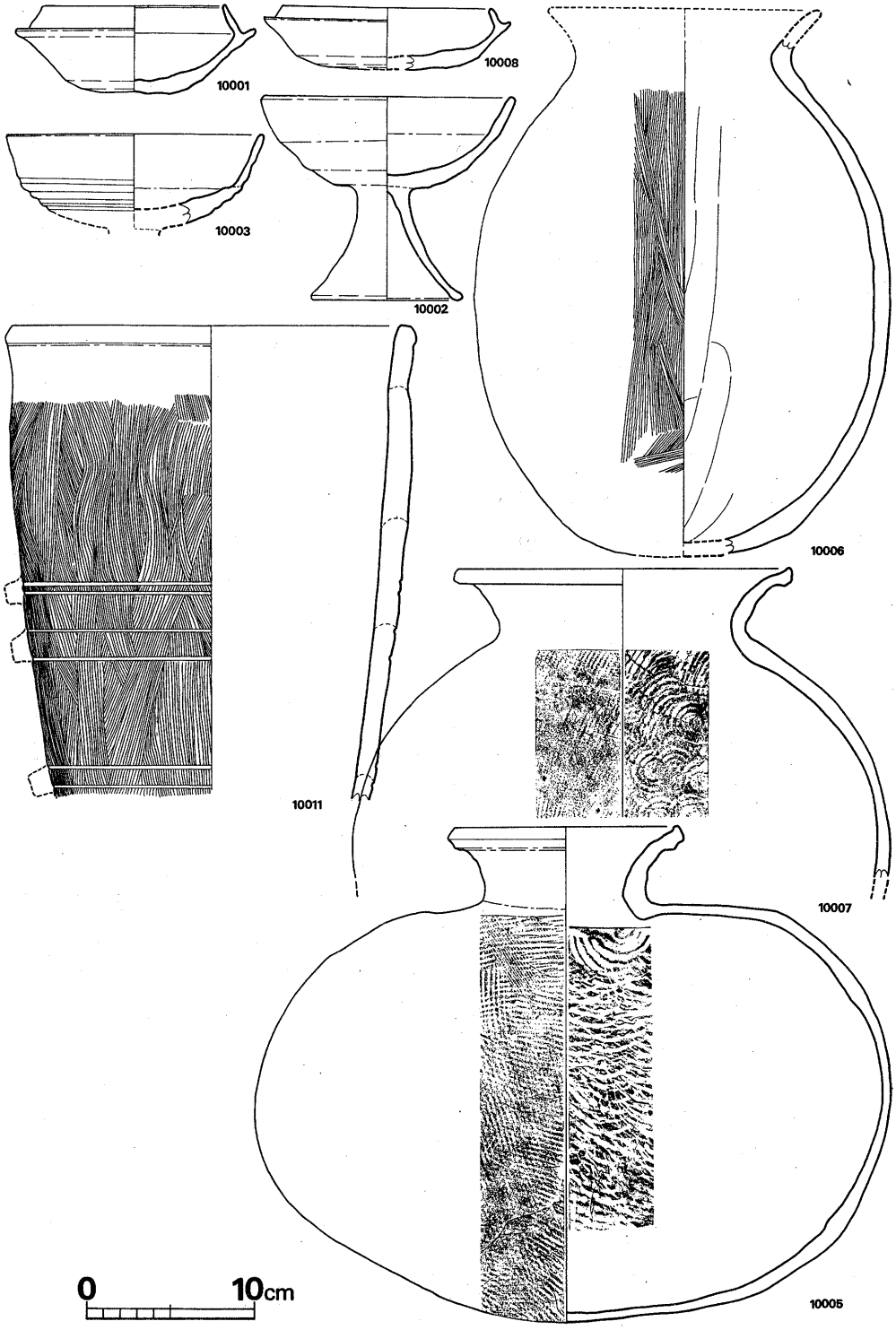


Fig. 29　第10住居跡出土須恵器・土師器・埴輪実測図（縮尺 1/4）

出　土　状　況

床面から多くの須恵器・土師器・埴輪片が出土した。また竈の焚口中から土師器甕（10006）が破砕した状態で出土した。覆土中から土師器杯（10009）と須恵器杯（10010）が完形で出土した。

須恵器　杯　10001は受部径14.3㎝，器高5.1㎝である。立ち上り長は2㎝と長く，端部は丸い。焼成不良で淡黄色を呈する。10008は受部径14.5㎝，器高3.7㎝であり，立ち上りは1㎝で端部は丸い。焼成堅緻で淡青灰色を呈する。

甕　10007は焼成堅緻で口縁部から肩部の内外面に釉が流れている。口縁部は短かく無紋で，端部の張り出しは弱い。外面平行叩，内面青海波叩である。

横瓶　10005は床面から出土した完形品である。口径13.2㎝，器高30㎝，胴部最大径37.9㎝である。短い口縁の端部稜は緩い。外面平行叩，内面青海波叩である。青灰色を呈し，堅緻である。

土師器　高杯　10003は杯部のみである。直線的に伸びる口縁部と体部との接合部稜は不明確で，体部に3本の沈線を施している。外面にスリップをかけている。10002は完形であるが，焼成悪く器面が剝落しており，外面調整は不明である。杯部口径15.3㎝，脚部径9.2㎝，器高12㎝である。杯部は接合部で僅かの稜をなすが丸い。口縁部内外面は若干厚味を増し，端部は丸い。

甕　10006は竈内より出土した。口縁部は短かく，頸が締った長胴甕である。外面全面に刷毛目調整した後，口縁部と底部をナデている。

埴輪　10011は約⅕の残存片から図上復元した。推定口縁部径は24.7㎝で剝離痕より3段の笠が想定される。淡黄橙色で焼成は軟質である。

時　　期

出土した須恵器杯のうち，10001はB式，10008はD式のものである。図示できなかったが，床面出土の須恵器小片はいづれもD式のものであり，当住居跡はD式期のものと考えられる。

第11号住居跡（Fig. 30, PL. 12）

位　　置

G—5～6区に位置し，第10，第12号住居跡に切られている。北壁は道路下にあり，未調査である。

構　　造

形状　方形であるが，北側は不明である。

規模　北辺長　推定　5.2*m*　　南辺長　4.4*m*

　　西辺長　推定　5.4*m*　　東辺長　5.3*m*

主軸の方向　N-63°-W

竈　切り合い関係にある第12号住居跡東壁側床面に黄色粘土及び灰色粘土がみられた。この粘土が当住居跡の竈の名残りと考えられる。

柱穴　床面中央に深さ約15㎝の摺鉢状のピットがある他，主柱穴と考えられるものは検出し得なかった。

床　黄色砂層，一部灰色層上に築かれており，南西方向に若干傾斜している。

壁　黄色土・黄色砂質土・黒色砂層を掘って築かれている。検出し得た西側の北壁は崩れており，不確実である。残存高は東北壁で約50㎝である。

出　土　遺　物 (Fig. 31, PL. 11-2)

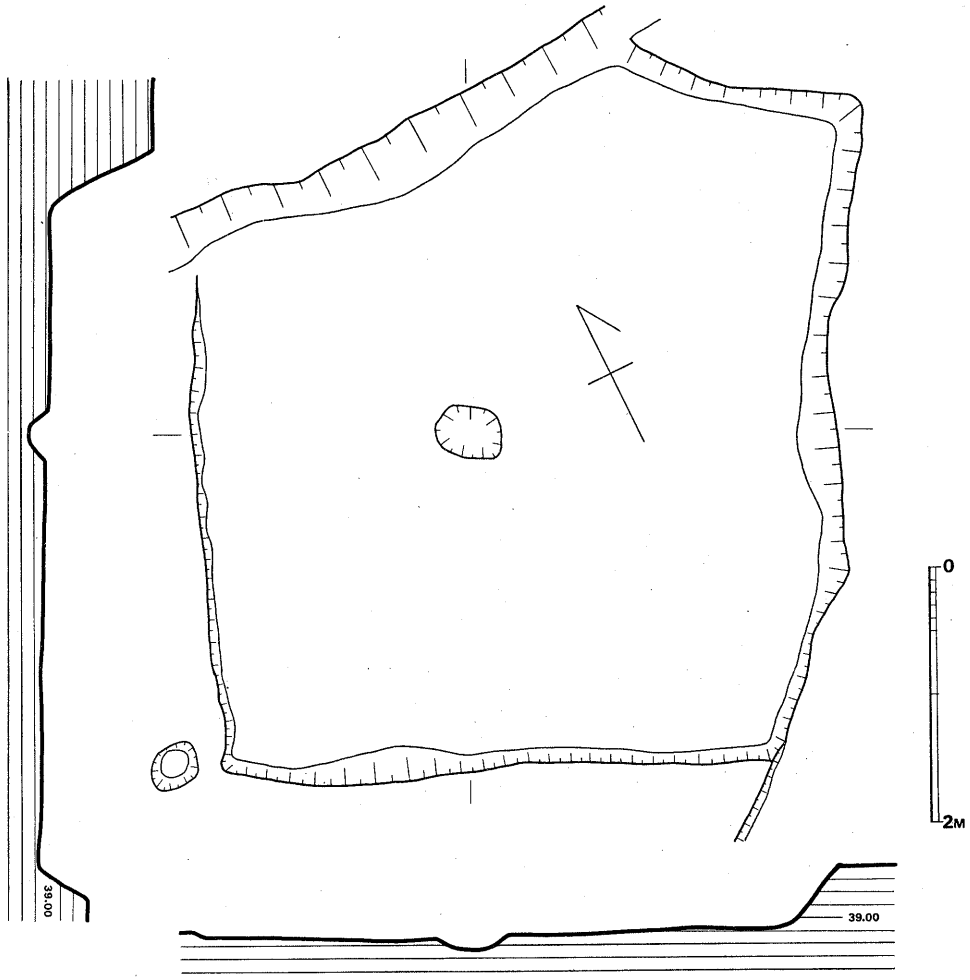


Fig. 30　第 11 号 住 居 跡 実 測 図 (縮尺 1/60)

出　土　状　況

床面上及び覆土中からも遺物の出土はほとんどなかった。

須恵器　杯　11004は受部径13.7㎝である。立ち上り長は1.5㎝でほぼ直立している。受部は浅い。11005は受部径14.4㎝である。立ち上り長は1.6㎝で，端部は丸い。

土師器　椀　床面出土の唯一の完形品である。口縁部は直立している。外面は口縁部ヨコナデ，体部は条痕が付されている。内面はヘラ磨きである。焼成堅緻で，胎土精良である。口縁部径11.7㎝，器高6.9㎝。

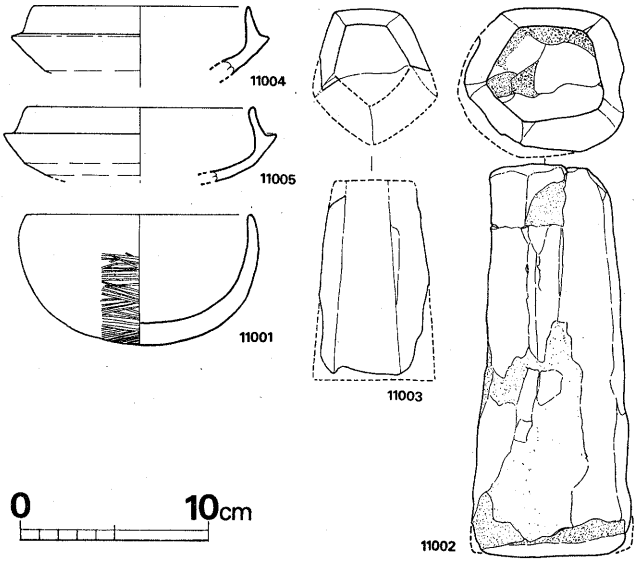


Fig. 31　第11号住居跡出土須恵器・土師器・支脚実測図（縮尺 1/4）

支脚　11003は竈中から出土した。破損が甚しいが整美な作りで，五角柱である。11002も加熱によって破損が多いが，長20.7㎝の不整五角柱である。

時　　期

床面出土の須恵器杯は少量であるがC式のものと考えられ，同時期の住居跡であろう。

第12号住居跡 (Fig. 32, PL. 12-2)

位　　置

H—5～6区に位置する。北半は道路下にあり，未調査である。東壁は第10号住居跡上に築かれ，西壁は中世楕円形ピットに切られている。

構　　造

形状　方形であろう。

規模　北辺長　推定　1.6$m+\alpha$　　南辺長　4$m+\alpha$

　　西辺長　不明　　東辺長　推定　5.1m

主軸の方向　N-63°-W

竈　床面の中央と西北側が焼けていた。中央は炉，西北は竈跡と考えられる。

柱　床面南半に2柱穴が検出された。床面からの深さは約30㎝である。

床・壁　黄色土とその直下の灰色砂質土を掘り込んで築かれている。床面は平坦である。残存壁高は5～10㎝と低い。

出土遺物 (Fig. 33, PL. 13～15)

出土状況

多量の土師器と若干の須恵器が床面から出土した。土師器のうち椀は11個体以上，甕は10個体以上出土し，多くは東南隅に集中した。

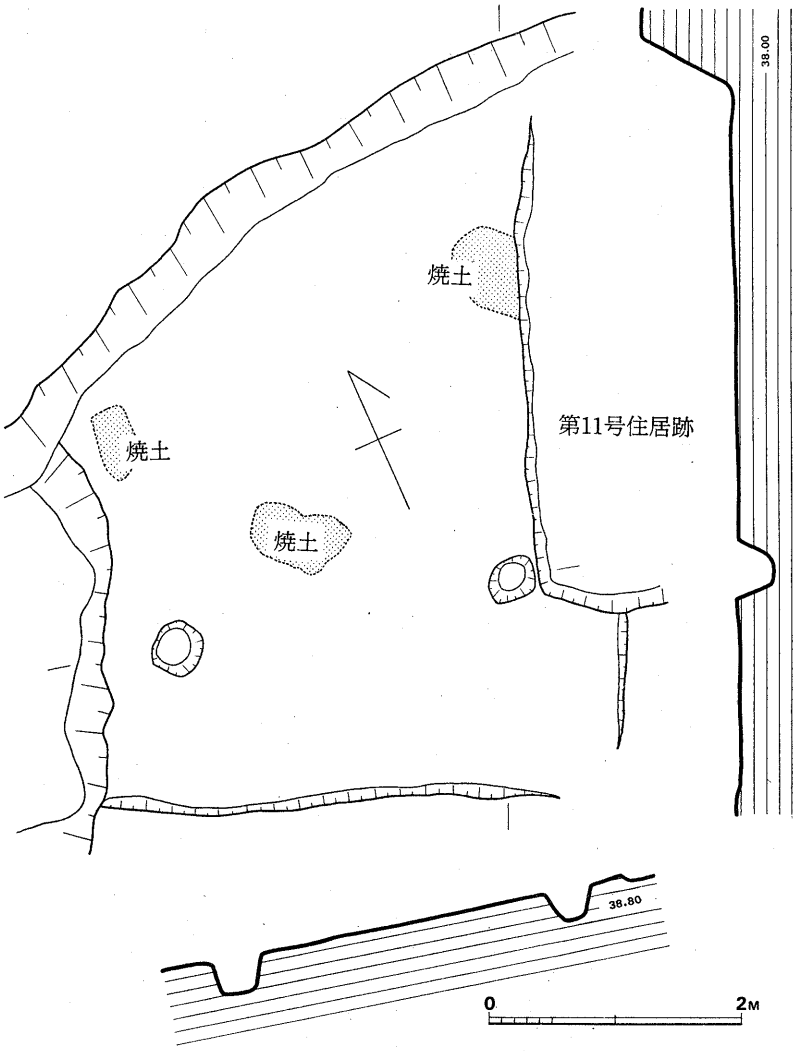


Fig. 32　第12号住居跡実測図（縮尺 1/60）

須恵器　杯　12021は受部径14.2㎝，器高3.8㎝である。立ち上りは内傾し，長さ1.2㎝である。体部外面中央までヘラ削りしている。

土師器　杯　口縁部の形状により4種に区分される。

Ⅰ類　口縁部が直立する。12017は口縁部内側を面取りし，稜を有する。体部外面はヘラ削りし，口縁部内外面をヨコナデしている。スリップをかけている。

Ⅱ類　口縁部が若干内彎する。12001・12003・12004・12018・12019が含まれる。いづれもロクロ成形で体部上半から口縁部にかけて丁寧にナデられ，器壁は薄く均一である。体部外面は基本的にヘラ削りし，その上を12003・12004はナデ，12019は磨きをかけている。内外面には

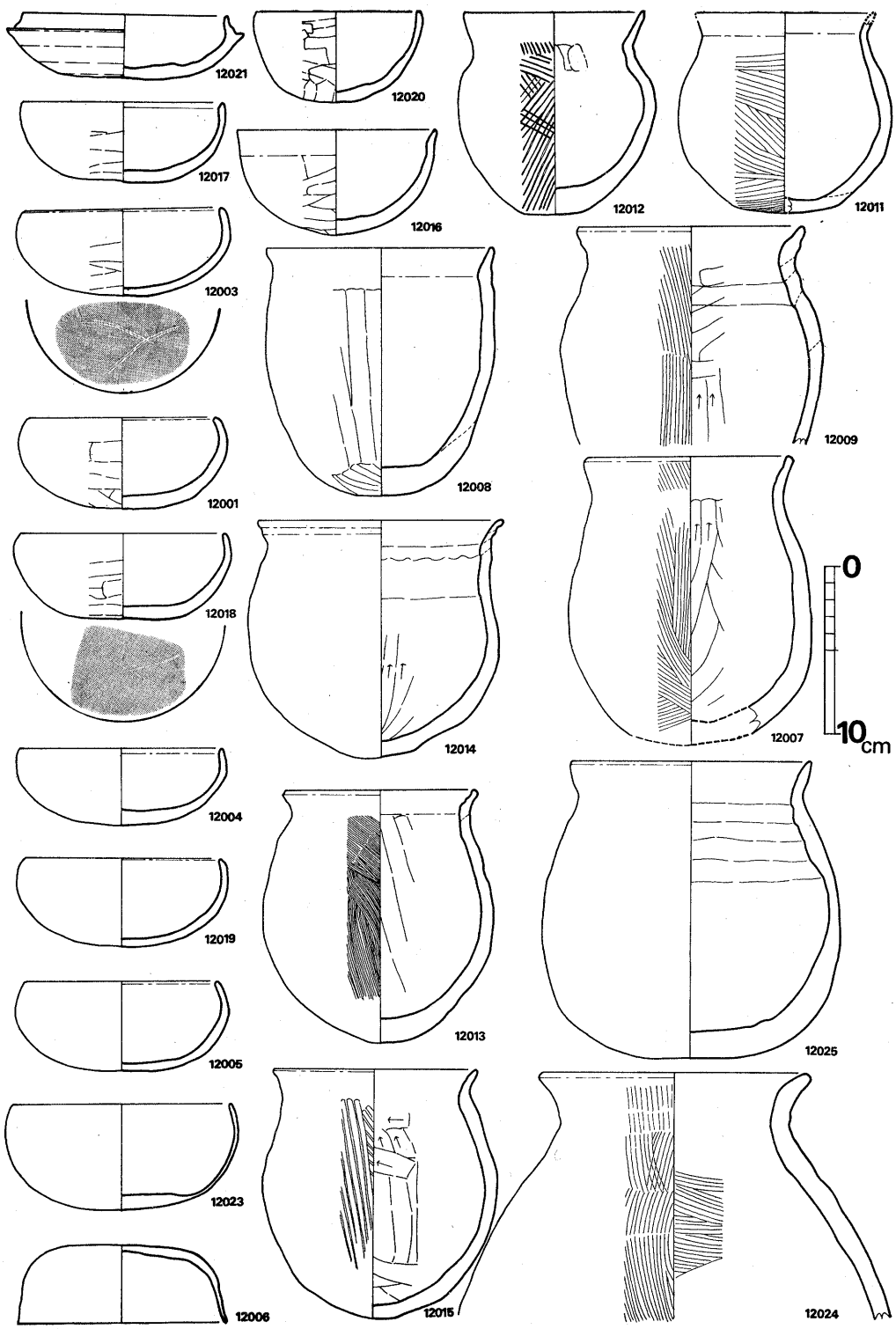


Fig. 33　第12号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

全てスリップをかけている。胎土は密であるが，焼成は12004のように軟質なものも含まれる。

Ⅲ類　口縁部が強く内彎する。12005・12023が含まれる。ロクロ成形で，整形法はⅡ類と同様である。12023の体部から口縁部にかけては極めて薄く引き伸ばされ，丁寧にヘラ磨きされている。いづれも内外面にスリップがかかっている。

Ⅳ類　口縁部が外反する類で，12006が含まれる。ロクロ成形で体部から底部にかけては刷毛目の上から丁寧にナデられている。全体に調整は整美である。内外面漆塗りである。胎土は密であり，焼成は悪い。

椀　12020は口縁部が直立し，体部外面全体を丁寧にヘラ削りしている。胎土，焼成共に良好である。12016は口縁が軽く外反する。調整法は12020と同様で，胎土，焼成も同様に良好である。

甕　大きさからみて大中小の3種あるが，口縁部から胴部にかけての形状から5種に区分される。

Ⅰ類　球形に近い胴部を持つ小形の甕であり，12011と12012が含まれる。12011は短い口縁部を持ち，底部は平底に近い。外面刷毛目，内面ヘラ削り調整である。胎土中砂粒多く，焼成はやや軟質である。12012は口縁部が内彎気味に立上る。底部は小さな平底に近い。外面は粗い刷毛目調整，内面ヘラ削りである。

Ⅱ類　口縁部は短かく，胴部は脹らない。12008は底部が部厚く，外面はタテのヘラ削りを施している。砂粒を多く含み，胴下半部の器壁が二次加熱により剝落している。

Ⅲ類　短かい口縁部を持ち，胴部中央が脹る。底部は丸底か，やや尖る。外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整であるが，調整法が悪いため，マキアギ痕の凹凸がそのまま残っている。12009・12013～12015が含まれる。

Ⅳ類　Ⅲ類に比べて口縁部がやや長く，頸部の締りが悪い。胴部は下半が最も脹る。12007及び12025が含まれる。調整法はⅢ類と同様である。二次加熱による赤変及び器壁剝落が著しい。

Ⅴ類　頸部の締りがよく，肩の下った長胴甕である。12024は外面から肩部内面まで刷毛目を施し，口縁部内外面を上からヨコナデしている。砂粒を多く含み，焼成堅緻である。

時　　期

床面出土遺物のうち須恵器はごく僅かであるが，12021はD式の類と考えられ，当住居跡も同時期のものと思われる。第11号住居跡との切り合い関係からも，上記のことが首肯される。

第13号住居跡 (Fig. 34, PL. 16)

位　　置

H—5区にあり，最初に発見された住居跡である。

構　　造

形状　方形を呈しており，南東隅は崩れて隅丸になっている。

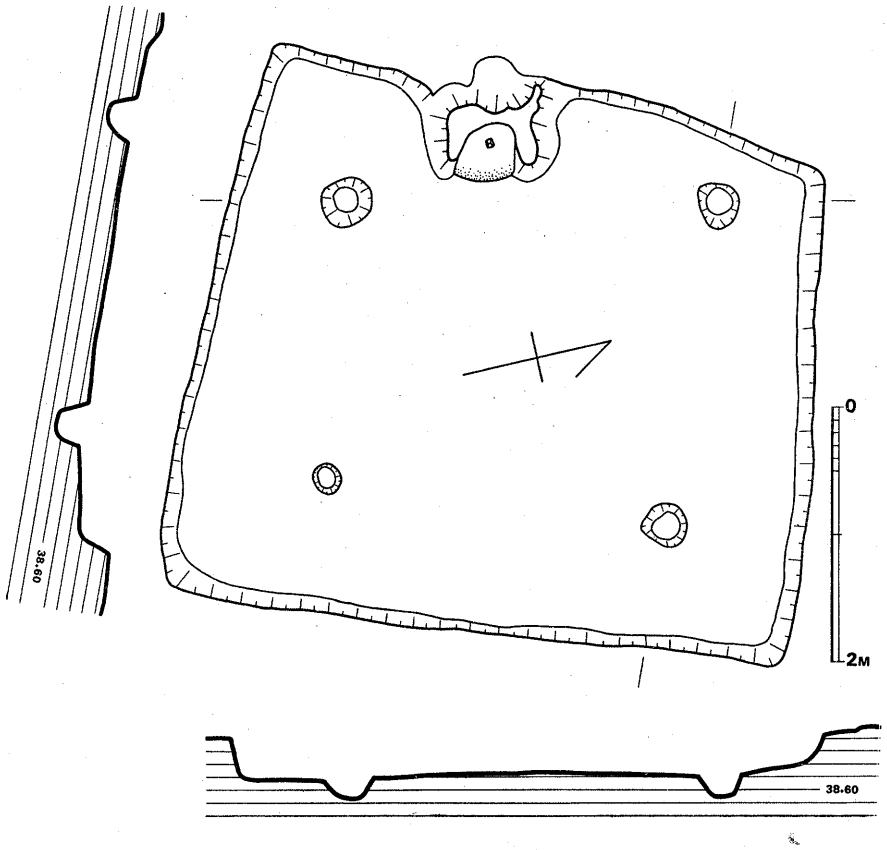


Fig. 34　第13号住居跡実測図（縮尺 1/60）

規模　北辺長　3.7*m*　　南辺長　4.1*m*

　　西辺長　4.2*m*　　東辺長　4.7*m*

　　南北方向に比べ東西方向がやや長い。

主軸の方向　N-77°-W

竈 (Fig. 35, PL. 16-2・17-1)　西壁中央に附設されており，地山を削り残した段上部の上に灰黄色粘土で築かれている。南側袖基部幅は約30*cm*である。底面には焼土が堆積し，その上に土製の方柱支脚が据えられていた。煙道は焚口裏の住居跡との間に開けられていた。崩れて口を大きくした煙道中に甑が転倒していた。

柱穴　四柱構造である。柱穴壁は崩れて摺鉢状になっており，深さは北東隅のもので床面より約20*cm*であった。柱間距離は北側2.6*m*，南側2.2*m*，西側3*m*，東側2.7*m*と一定しない。

床　西壁下の一部及び北半は黄色砂層，他は灰色砂層上に築かれている。南側に向けて傾斜しているが，北壁と柱列の間の傾斜が特に甚しい。

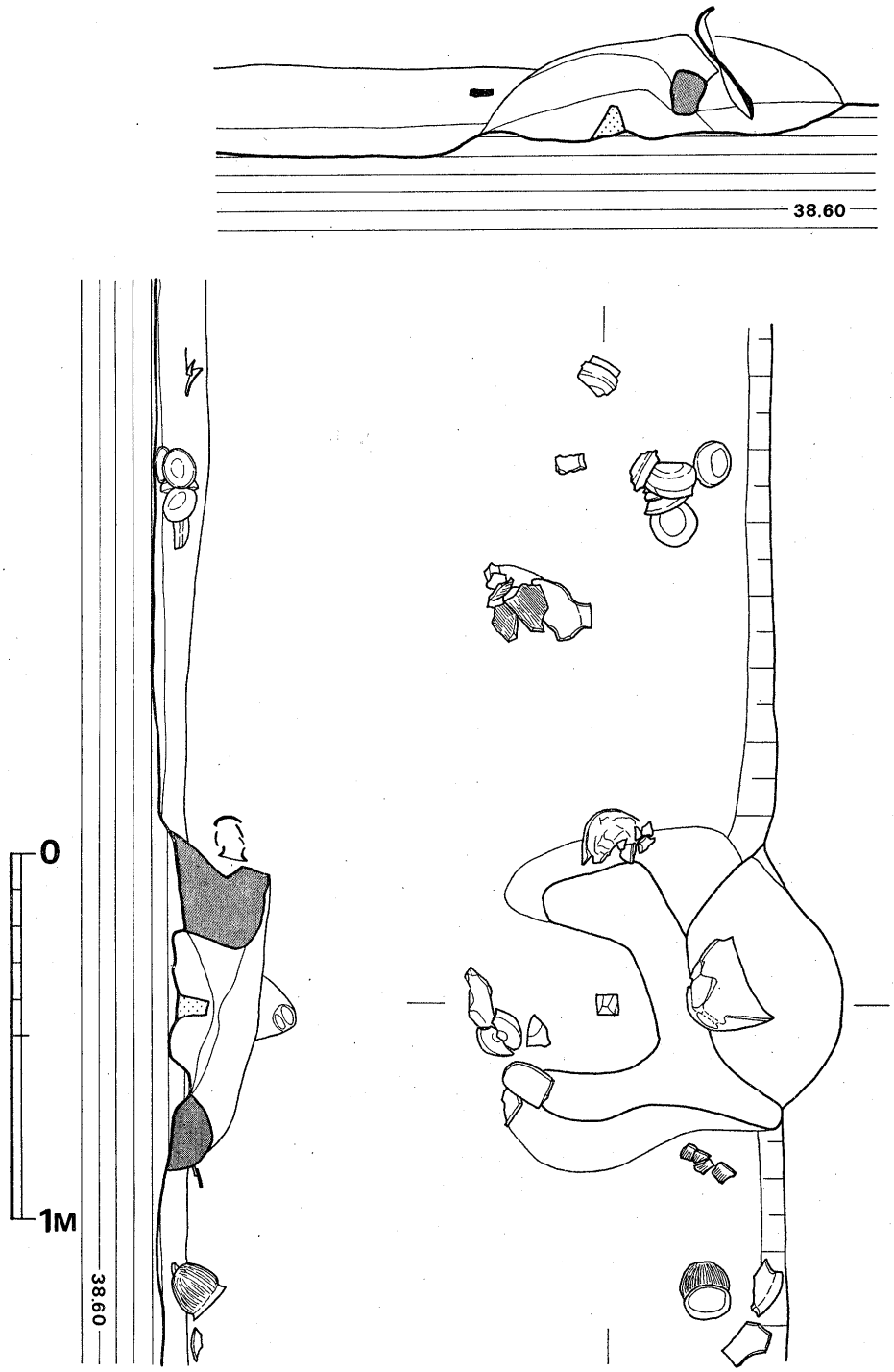


Fig.　35　第13号住居跡竈断面及び遺物出土状況実測図（縮尺 1/20）

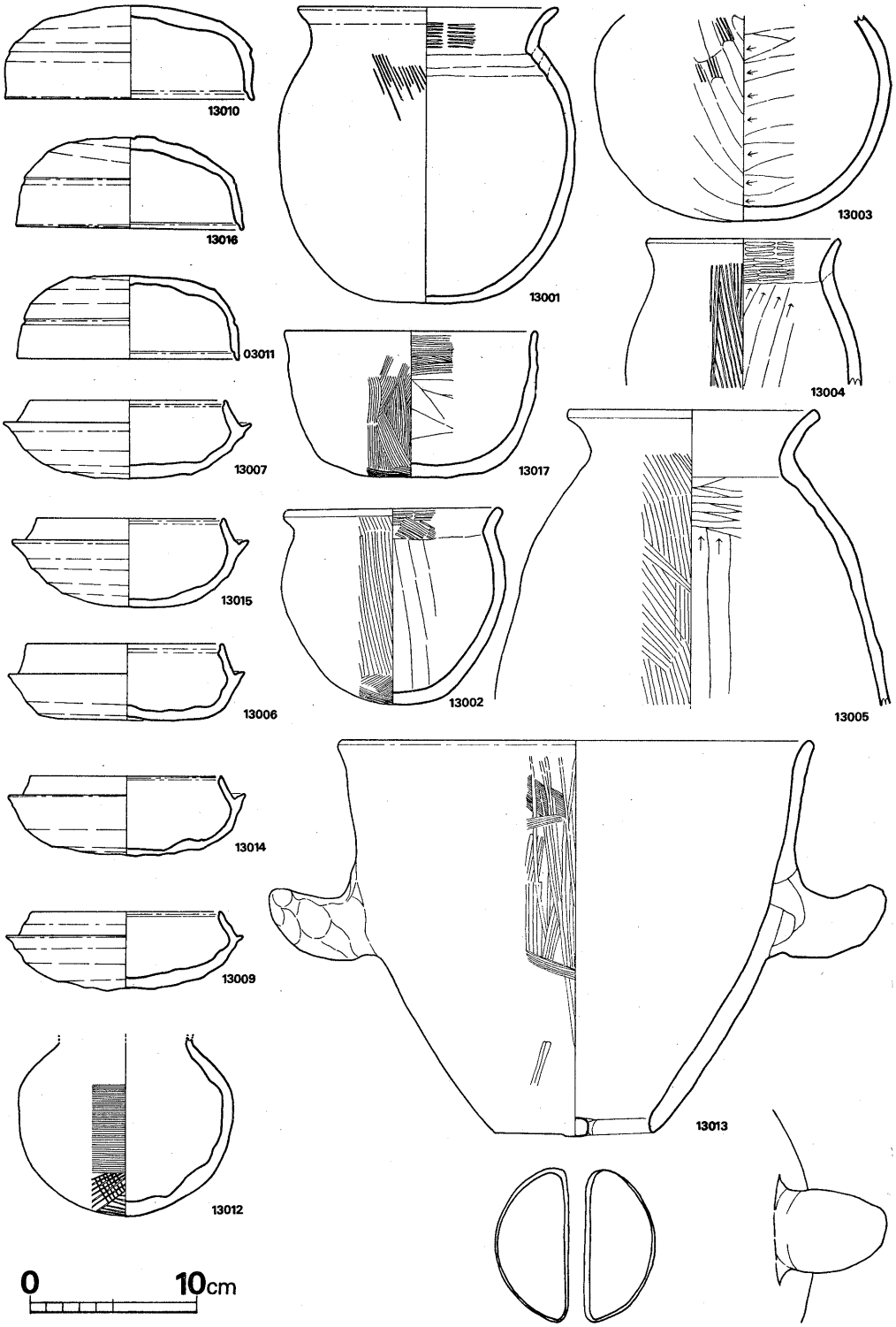


Fig. 36　第13号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

壁　粗質黄色砂層を掘り込んだところから確認された。一部灰色砂層を切っている。崩れており，垂直に立つ壁はない。残存高は最高30cmである。

出　土　遺　物 (Fig. 36, PL. 18・19)

出　土　状　況 (Fig. 35, PL. 17-2)

竈内転倒の甑の他竈南脇に積み重ねられた須恵器杯類が床面密着土器である。土師器甕類は竈周辺にやや浮いた状態で破砕し，散乱していた。13002のみが竈北脇壁側より完形で出土した。13001は竈の崩れた粘土に混って床面より約10cm浮いて出土した。本来竈上に据え置かれていたのではなかろうか。以上の出土状態からして，当住居跡は天災，恐らくは洪水に合い，生活用具をも含めて一挙に埋めつくされたのではなかろうか。

須恵器　杯蓋　13010・13011・13016の3点が出土している。いづれも胎土は密で焼成堅緻である。13010は口縁部が内彎しながら下り，外反して端部に至る。端部は内傾する凹部を有する。稜は明瞭で鋭く，口縁部との間に浅い沈線を有する。天井部は浅く，やや丸味をもつ。口径14.9cm，器高5.6cm。13011は口縁部はふくらみを持って直立し，その後部分的に僅かに外反し，端部は内側に丸い稜をなす段を形成する。天井部は平坦で，口縁部との境に深い沈線を有する。口径13.3cm，器高5cm。13016は口縁部が凹凸を持ちながら外反気味に下り，端部は丸い。内側に稜の丸い段を有する。深く平坦な天井部と口縁部との境に沈線を有する。天井頂部はヘラ削りし残している。

杯身　13006・13007・13009・13014・13016の5点は一括出土で，いづれも完形品である。灰黒色か青灰色を呈し，焼成堅緻である。13007は13011と対になる可能性がある。立ち上りは直線的に内傾し，端部は内側に稜の丸い凹面を有する。受部は外上方へのび，断面薄い。底部は浅く，やや平坦に近い。受部直下までヘラ削りが及ぶ。受部径14.7cm，口径11.8cm，器高4.7cm，立ち上り長1.9cm。13015はたちあがりが内傾した後，若干立ち上る。端部は内側に浅い段を有する。受部は立ち上りとの境に沈線をめぐらして後，外上方へのびる。底部は深く丸い。底部¾にヘラ削り調整している。受部径14.1cm，口径11.2cm，器高5.2cm，立ち上り長1.7cm。13006の立ち上りは長く，わずかに内彎してのち若干直立気味になる。端部内側に稜のにぶく浅い段を有する。受部は立ち上りとの境に沈線をめぐらし，浅い。底部は焼き歪みで窪み，平坦で¾ヘラ削りを施している。受部径14.1cm，口径11.7cm，器高4.5cm，立ち上り長2.0cm。13014は立ち上りが直線的に内傾して後，端部近くで若干立ち上る。内側に稜の不明瞭な浅い凹面をもつ。受部は立ち上りとの境に沈線を有し，断面三角形である。底部は平坦で，ヘラ削りは⅓までである。底部外面に重ね焼き痕があり，内面に叩きがみられる。受部径14.2cm，口径12.5cm，器高4.7cm，立ち上り長1.5cm。13009のたちあがりは強く内傾してのび，その中間に強いナデ稜をもつ。後若干立ち上る，端部の内面に稜の弱い段を有する。受部は浅く短かく，立ち上りとの境に沈線をめぐらしている。底部は浅く丸い。⅔までヘラ削りされている。

受部径14.2cm，口径11.3cm，器高4.6cm，立ち上り長1.8cmである。

壷　13012は球形胴部をもち，口縁は強く外反すると考えられる。胴部はカキメを施し，底部には平行叩が残っている。極硬質で，胎土も密である。

土師器　片口鉢　13003は片口鉢であろう。球形胴部で，底部はやや平坦になる。外面は刷毛目調整後斜横位に丁寧にナデており，一部磨いたような光沢を有する。内面は横位の一定方向にヘラでなでている。外面目立たないが胎土中に多くの砂を沈めている。

鉢　13017の口縁部は直立し，端部近くで僅かに外反する。体部外面を刷毛目調整し，口縁部内外面と底部は体部と別の粗い刷毛目を施し，上からヨコナデしている。砂多く，焼成は堅緻である。

甕　13001・13002・13004・13005の4点が出土しているが，全てタイプを異にする。13001は広口である。口縁部が外上方へのびた後，さらに強く外反し端部は丸い。肩は緩やかで，胴部は球形である。底部はやや平坦である。外面及び口縁内面に刷毛目調整を施しているが，二次加熱により赤変し，器壁は多く剝落している。内面に有機物が付着している。13002は外反する短かい口縁をもち，端部は丸い。肩が脹り，胴下部は尻つぼまりになる。外面と口縁部内面を刷毛目で調整し，口縁端部のみヨコナデしている。内面ヘラ削りである。13004は口縁から肩にかけては緩やかで，胴部中央が最も脹るタイプである。口縁部内面も横位平行移動の刷毛目を施している。外表面の二次加熱による破損が著しい。13005は口縁部短かく頸の締った長胴甕である。胴部外面を粗い刷毛目調整し，内面は肩部横方向，胴部縦のヘラ削りである。

甑　13013は竈煙道中に転倒して出土した甑である。口縁部は僅かに外反し，端部は丸い。把手は心棒刺込みののち外面貼り付けである。底部には1本の桟を残し，両側を半円状に削り取っている。外面は細かくヘラで削り，その上を部分的は刷毛目調整している。内面のヘラ削りは粗く，その上をナデている。胎土中砂粒多く，焼成堅緻である。口径28cm，器高23.5cm。

時　　期

床面出土須恵器杯類は全てA式のものである。当遺跡では最も古い住居跡の一つであろう。

第14号住居跡 (Fig. 37, PL. 20-1)

位　　置

Ⅰ—4区に位置している。第15号，第16号住居跡に大部分切られており，また南半は調査していないので詳細は不明である。

構　　造

方形を呈するであろう。北辺長は2.3m と短い。東北隅のピットは当住居跡に付属するものである。

出　土　遺　物

床面からの出土遺物は皆無であり，時期も不明である。

第15号住居跡 (Fig. 37, PL. 20-1)

位　　置

Ⅰ—4区に位置しており，第14号住居跡を切り，第16号住居跡に切られている。

構　　造

方形を呈すると考えられるが，北西側壁の2.1*m*を残すのみである。床面上に2個の柱穴がみられるが，当住居跡に伴うものかどうかは不明である。

出　土　遺　物

床面からの出土遺物は皆無で，時期は不明である。

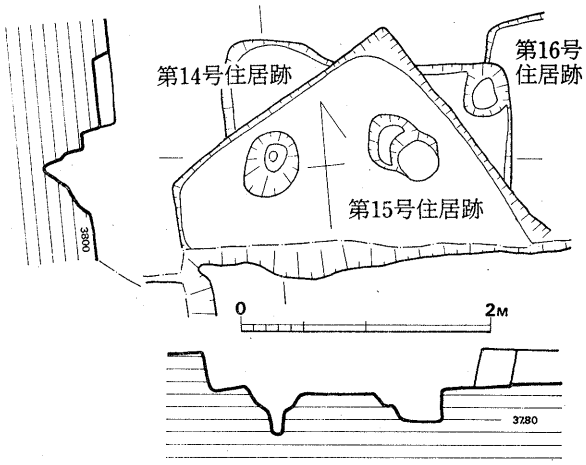


Fig. 37　第14・15号住居跡実測図（縮尺 1/60）

第16号住居跡 (Fig. 38, PL. 20-2)

位　　置

Ⅰ—4区に位置し，北西隅は第20号住居跡に切られ，南隅は調査し得なかった。また床面下より第14号，第17号住居跡が検出された。

構　　造

形状　規模　不正方形を呈する。各辺長は，北東辺2.4*m*，南西辺推定約3*m*，北西辺推定2.5*m*，南東辺推定約3*m*であり，かなり小さい。

主軸の方向　中央2個の柱穴を主軸とすれば，N-44°-W

柱穴　床面から掘り込まれていた柱穴は4個検出されたが，断面図を取った2個が主柱と思われた。

床・壁　床は第17号及び第14号住居跡埋土上に築かれており，南東壁は34*cm*の高さを残していた。

出　土　遺　物

床面上出土遺物は皆無で，時期は不明である。

第17号住居跡 (Fig. 38, PL. 20-2)

位　　置

Ⅰ—4区に位置し，第16号及び第18号住居跡の床面下より検出された。また第14号住居跡に西壁を切られている。

構　　造

北西辺長2.4*m* の方形と思われるが，詳細は不明である。

出 土 遺 物

床面出土遺物は皆無で，時期も不明である。

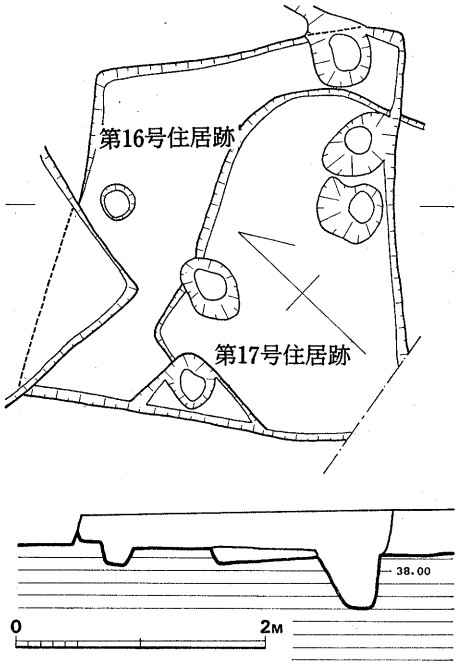


Fig. 38　第16・17号住居跡実測図（縮尺1/60）

第18号住居跡 (Fig. 39, PL. 20-2)

位　　置

Ⅰ—4区で検出された。第16号住居跡に切られ，北側の大半は不明である。また床面下から第17号住居跡が検出された。南半は未調査である。

構　　造

方形を呈するであろうが，形状及び規模は詳細でない。

主軸の方向　東壁の一部を検出したのみで，不正確ではあるが，ほぼ　N-111°-Eである。

竈 (Fig. 40)　南半を検出したのみである。床面上に削り出した段上部の上に粘土を貼り水平

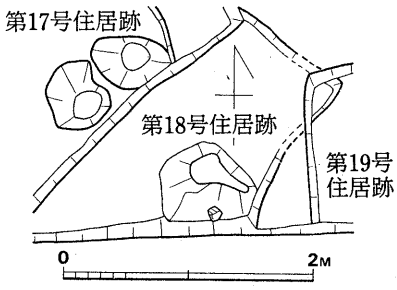


Fig. 39　第18号住居跡実測図（縮尺 1/60）

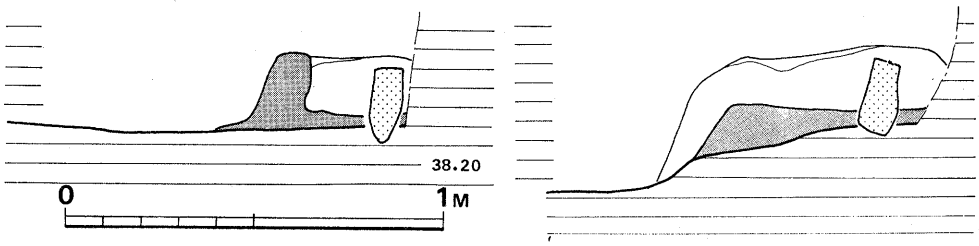


Fig. 40　第18号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

面を築いて，中に自然石製支脚を据えている。

出　土　遺　物 (Fig. 41, PL. 22-1)

出　土　状　況

竈周辺の床上から須恵器2点と土師器甕が出土した。

須恵器　杯　セットの蓋と身である。18002は口縁部が天井部から稜をもって直立し，端部は丸い。天井部は浅く丸い。天井部外面の⅓がヘラ削りである。口径12.3㎝，器高4.2㎝。18001の立ち上りは内傾が著しく，端部近くなってやや直立気味になる。端部は鋭く尖る。受部は浅い。底部は浅く丸い。底部外面の½がヘラ削りである。受部径14㎝，口径11.7㎝，器高4.1㎝，立ち上り長1.2㎝である。両者共青灰色を呈し，焼成堅緻である。

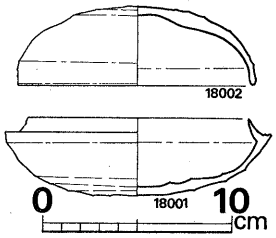


Fig. 41　第18号住居跡出土須恵器実測図（縮尺 1/4）

時　　期

床面出土の須恵器はE式のものであり，当住居跡は同式期のものと考えられる。

第19号住居跡 (Fig. 42)

位　　置

I－4区で検出され，第18号住居跡を切っていた。南半は調査し得なかった。

構　　造

方形を呈するであろう。規模で判明したのは北辺のみで長さ2.5*m*である。竈・柱穴等の床面施設は明らかでない。床は東側がやや高くなっており，壁は約5㎝を残すのみであった。

出　土　遺　物

床面遺物は皆無である。

時　　期

覆土中からはB及びE式の須恵器が出土した。住居跡使用の時期がいづれとも決しがたいが，E式期の第18号住居跡を切っており，それ以降であることは確かである。

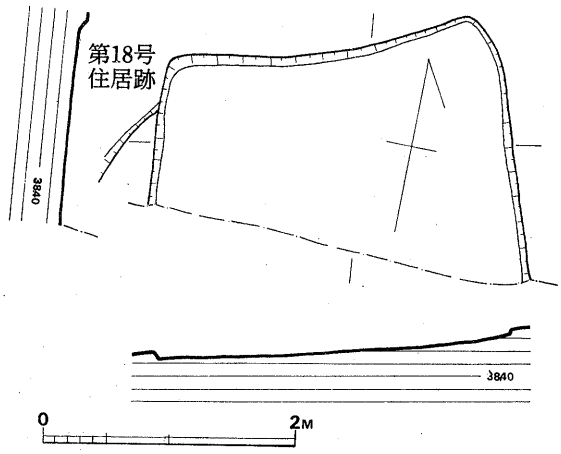


Fig. 42　第19号住居跡実測図（縮尺 1/60）

第20号住居跡 (Fig. 43)

位　　置

Ⅰ～J－4区に位置しており，第16号住居跡を切り，第21号，第22号住居跡に切られている。

構　　造

形状　東辺は崩れており，大部分不明であるが，方形を呈した住居跡であろう。

規模　北辺推定長　約　5 *m*　　南辺推定長　約 4.8*m*

　　西辺推定長　約 4.9*m*　　東辺長　　5 *m*

主軸の方向　N-20°-E

竈 (Fig. 44)　北壁中央に附設されており，黄色粘土を用いて築かれている。底面は煙道

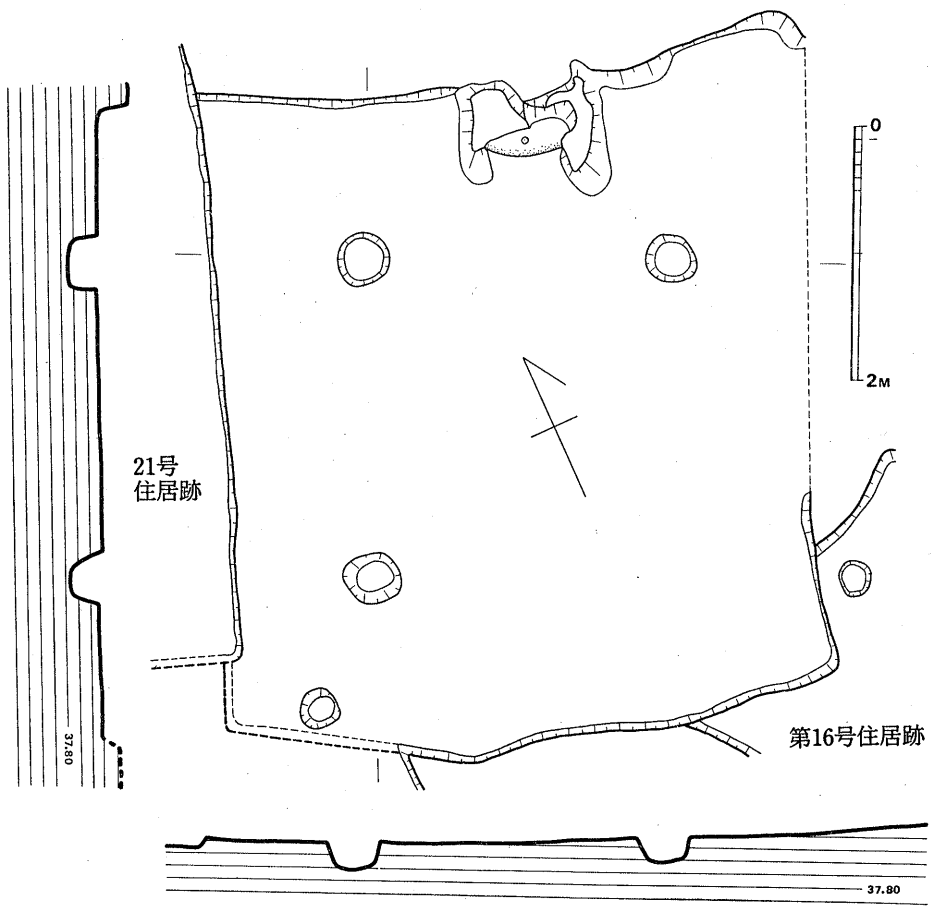


Fig. 43　第 20 号 住 居 跡 実 測 図 (縮尺 1/60)

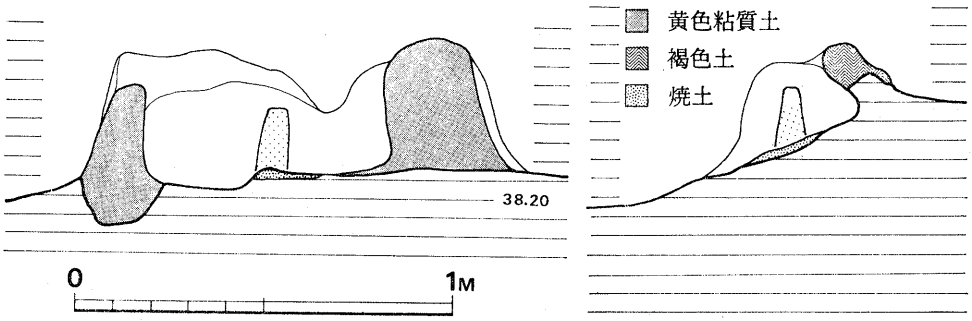


Fig. 44　第20号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

側に向ってかなりの傾斜をもっており，東西幅は65㎝，東側の袖基部幅は35㎝である。底面に焼土が堆積し，その上に土製支脚が据えられていた。煙道は住居壁との間に開口していたであろうが崩れている。

柱穴　四柱構造であろうが，南東隅の柱は検出し得なかった。南西隅の柱が最も深く，床面よりの深さ28㎝である。各柱間の距離は北側2.5m，西側2.5mである。

床・壁　床は東から西に向けて傾斜している。壁の残りは悪く，北側の残存高は25㎝であった。

出　土　遺　物（Fig. 45, PL. 22-2）

出　土　状　況

崩壊した竈内土中から焼土に混って須恵器や土師器片が出土した。床面遺物としてはこれらのみである。覆土中からの出土遺物は多い。

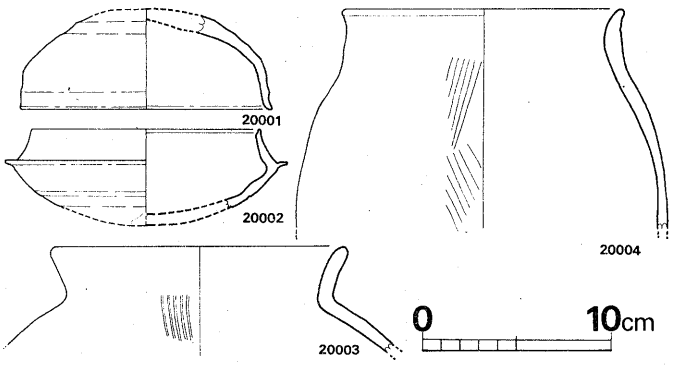


Fig. 45　第20号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

須恵器　杯　20001と20002はセットと思われる。灰黒色〜灰青色を呈し，焼成堅緻である。20001は口径13.4㎝，残存器高5㎝である。口縁部は直立し，端部近くで外反する。内側に内傾する平坦面をもつ。天井部は丸く深い。底部½がヘラ削り調整されている。20002は受部径14.9㎝，口径12㎝，残存器高4.2㎝，推定器高5.1㎝である。立ち上りは長く緩やかに内傾し，端部内側に小さな段を有す。受部は立ち上りとの境に沈線をめぐらし，水平に断面薄く脹り出している。底部の約⅔がヘラ削りされている。

土師器　甕　20003は直ぐ外反する口縁部を持ち，端部は丸い。肩部との境も緩やかである。外面刷毛目調整である。20004は口縁部が内傾し，端部近くで僅かに外反する。肩は脹らず，外面に粗い刷毛目を施している。

時　　期

須恵器杯はC式である。覆土中よりA式～E式までの須恵器が出土したが，最も多いのはB式～D式である。当住居跡は床面土器より考慮してC式期のものであろう。第21号住居跡との切り合い関係からも，上記の指摘は首肯される。

第21号住居跡 (Fig. 46, PL. 21-1)

位　　置

J—4区に位置し，第20・22号住居跡を切っている。

構　　造

形状　方形であるが，西壁がやや歪んでいる。

規模　北辺長　4.6*m*　　南辺長　4.2*m*

　　西辺長　4.8*m*　　東辺長　5 *m*

主軸の方向　N-15°-E

竈 (Fig. 47, PL. 21-2)　北壁中央に附設され，両袖前面に板状石を各1個立たせていた。竈体は下部を黒褐色土，上部を黄色粘質土を用いて築かれていた。西袖は崩れて残りが悪く，東袖の基底幅は45*cm*と厚い。煙道は崩れており，不明である。

柱穴　四柱構造であるが，南東隅の柱穴は検出し得なかった。北東隅の柱穴が最も深く，床面より32*cm*である。各柱間の距離は北側2.2*m*，東西側2 *m*である。

床・壁　床はほぼ平坦であるが，壁と柱列間ではやや傾斜している。壁は北側が最も深く34*cm*を残していたが，崩れており垂直には立っていない。

出　土　遺　物 (Fig. 48, PL. 22-3・23・24)

出　土　状　況 (PL. 21)

竈内及びその両側から土師器類が集中して出土した。21009の甑は竈内から，21010の甑は竈西脇に直かれたままの状態であった。竈の西脇に出土土器が集中したことは，炊事用具を置く場所が決っていたかのようである。

南東側柱穴の南側には方形台石があり，その周辺から滑石の原石及び半加工品，製品が集中して出土した。住居跡の南東隅は滑石加工の作業場として用いられていたことは明白である。また南西壁側からは鉄製鋤先及び刀子が出土した。

須恵器　杯蓋　21017は竈内より出土した。口縁部は緩やかに内彎し，端部内側に稜の不明

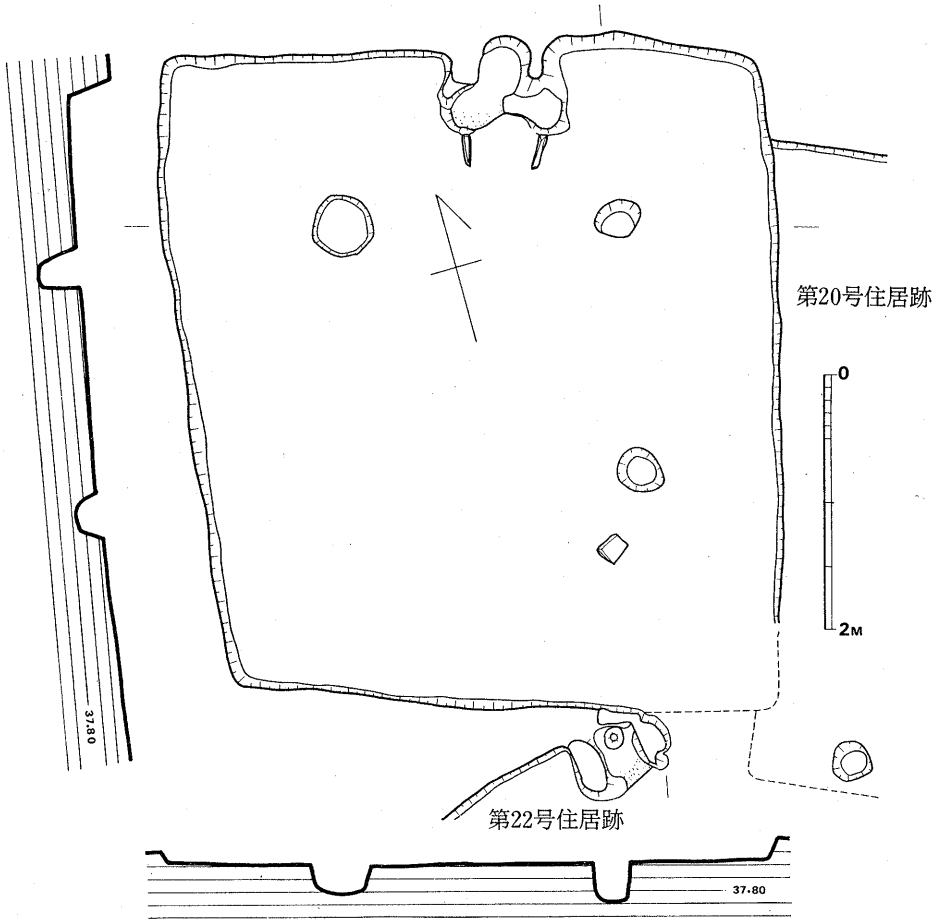


Fig. 46　第 21 号 住 居 跡 実 測 図 (縮尺 1/60)

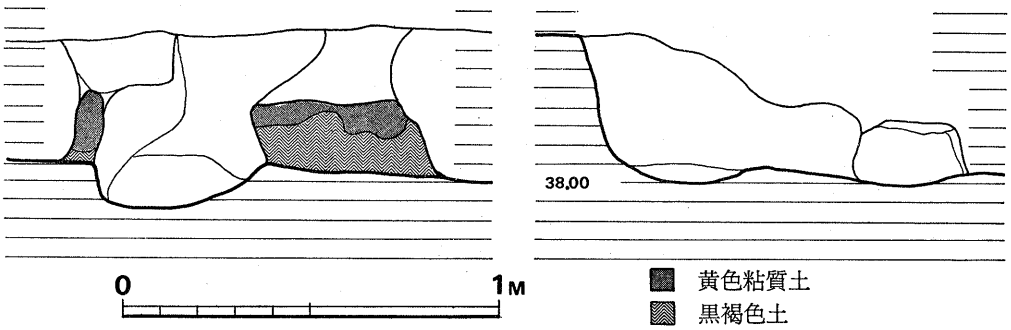


Fig. 47　第 21 号 住 居 跡 竈 断 面 実 測 図 (縮尺 1/20)

瞭な僅かな段がある。口縁部と天井部との境に段がある。天井部は浅く平坦である。天井部のヘラ削りは段部まで及ぶ。口径12.5㎝，器高4㎝。杯身21018は竈西脇から出土した。立ち上りは強く内傾し，端部近くでやや直立気味になる。受部は浅く，水平に張り出している。受部直下は強く内彎し，底部は浅くやや丸味をもつ。受部径14.1㎝，口径11.4㎝，器高4.4㎝。

土師器　杯　21001は床面中央，21002は竈内，他は全て竈西脇から出土した。口縁部の形状により4種に区分される。

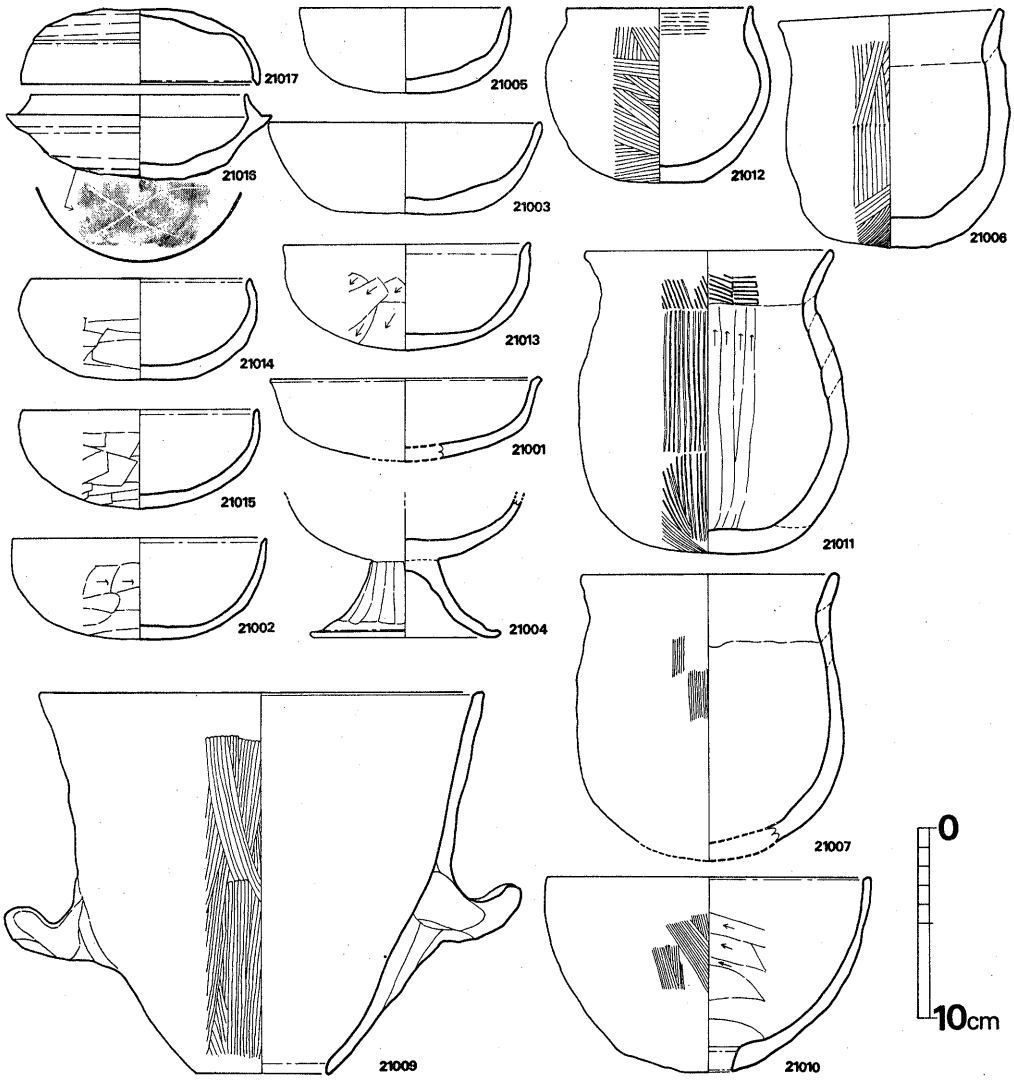


Fig.　48　第21号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

Ⅰ類　口縁部が内湾する。21014は手づくね成形で外底部刷毛目の上ヘラ削り，他はヨコナデ調整である。胎土は密，焼成不良である。21015は21014と同一成形，整形であるが，胎土は粗く，堅緻である。

Ⅱ類　口縁部は直立する。21002はロクロ成形で，整形法はⅠ類と同様である。

Ⅲ類　口縁部は直線的に外傾する。21003は手づくね成形でヨコナデ調整を施している。軟質である。21005も同様の成形及び整形法，焼成であるが，口縁端部は尖る。

Ⅳ類　口縁部が軽く外反する。21013は外底部をヘラ削りし，他はヨコナデ調整である。口縁部内外面にスリップを塗っている。胎土密で，焼成良好である。21001は全面ヘラ磨きされている。明茶褐色を呈し，胎土は密，焼成良好である。

高杯　21004は球状杯部から脚柱部にかけて外面を丁寧に削っている。胎土密で，焼成堅緻である。

壷　21012は竈西脇から出土した。口縁部が短かく直立し，端部は尖る。広口で偏球な胴部を有し，底部はやや平坦になる。外面から口縁部内側まで刷毛目調整し，体部内面はナデている。器壁に有機物が付着し，二次加熱を受けている。胎土は密で，焼成良好である。

甕　3個体あり，いづれも竈周辺の出土品である。21006は口縁部の外反が弱く，胴は脹らない。底部は平坦に近い。粗雑な作りで，刷毛目調整も粗い。21007及び21011は胴下部が最も脹る。かなりの二次加熱を受け赤変したり，器壁剝落したりしている。

甑　21009の口縁部は直線的に外傾し，端部に内傾平坦面をもつ。底部素孔である。把手は幅広で下方に大きく粘土を貼り付けて補強している。ソケット式である。外面刷毛目調整，内面ヘラ削りであり，把手付着部及び口縁と底部の内外面をナデている。胎土中大粒砂粒が多い。21010は鉢形で口縁は直立する。外面刷毛目，内面横位のヘラ削りである。外面の体部中央から下の幅3～4㎝にかけては無数の小さな磨耗痕が観察される。甕口縁部との摩擦による傷であろう。

滑石製品（Fig. 71-2～5・8・9・11・12, PL 47）　当住居跡からは滑石製品が集中して出土した。

2～5は平玉の半製品である。板状にした滑石の両面を磨研したのち条線を刻み，四角形の各々中央に穿孔して後折り取ったものであろう。2の上下両小口は折った後磨研されている。他は折ったままである。8・9・12は紡錘車である。8・9は製品で特に8の上面には使用痕がみられる。12は径6㎝と大形である。上下両面は磨研されているが周縁には削り痕が明瞭に観察される。恐らくは半製品であろう。

11は子持勾玉の未製品と考えられる。第6号住居跡出土勾玉とほぼ同大で全長9.8㎝である。粗く打ち割って，抉り部に加工削り痕がみられる。

土製鏡（Fig. 70-31）　径3.8㎝の凸面鏡を模したものである。鈕は指で両側から摘み出さ

れており，片側から穿孔している。表裏両面共指の圧痕が明瞭である。

鉄製品 (Fig. 49, PL. 49)　1は完形の鋤先である。刃部先端は磨耗し，幅狭になっている。ソケット部の叉は根元に近づくにつれ広がり，地金も先端に比べて薄くなっている。2の刀子は刃部先端と茎端を欠損している。両関である。直刀で刃部長は推定11.4cmである。

時　　期

床面出土の須恵器は少量であったが21016・21017共に竈周辺の一括出土品であり，当住居跡の時期を決定するにたる資料である。21018はその立ち上りの形状よりE式のものと考えられる。

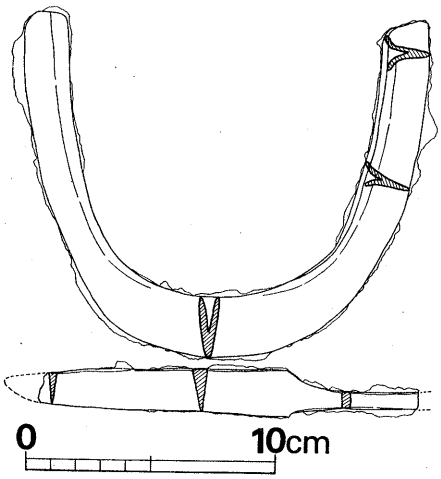


Fig. 49　第21号住居跡出土鉄器実測図（縮尺 1/3)

第22号住居跡 (Fig. 50)

位　　置

J—4区に位置し，第21号住居跡に北壁一部を切られている。南壁の大半は未調査である。

構　　造

形状　方形を呈するが，壁は所々崩れて歪んでいる。

規模　北辺長　約4.2m　　南辺長　3.9m

　　西辺長　推定約4m　　東辺長　3.9m

主軸の方位　N-3°-W

竈 (Fig. 51, PL. 25-1)　北壁中央に附設され，地山の砂層を削り出した段上に黄色粘土を盛って築いている。袖の基底幅は22cmである。竈底には焼土が堆積しており，その上に高杯を再利用した支脚が据えられていた。高杯は杯部を伏せ，その上に脚裾部を据えていた。煙出し部は残っていなかった。恐らくは竈体自身に開けられていたのであろう。

柱穴　4柱構造である。各柱間距離は，北側2.8m，南側2.7m，西側1.6m，東側1.8mであり，南北間距離が短い。南西側柱穴が最も深く，床面からの深さは36cmである。

床・壁　床はほぼ平坦である。壁はほとんど残っておらず，北壁の西側で約10cm残すのみである。

出　土　遺　物 (Fig. 52, PL. 26-1)

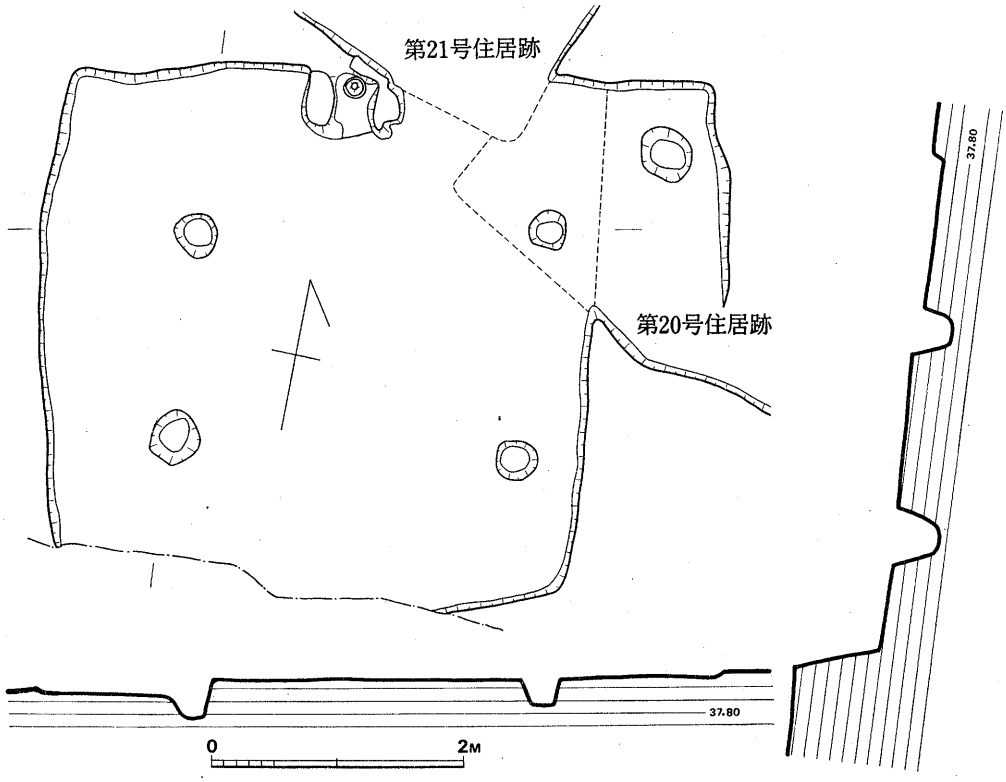


Fig. 50　第 22 号 住 居 跡 実 測 図（縮尺 1/60）

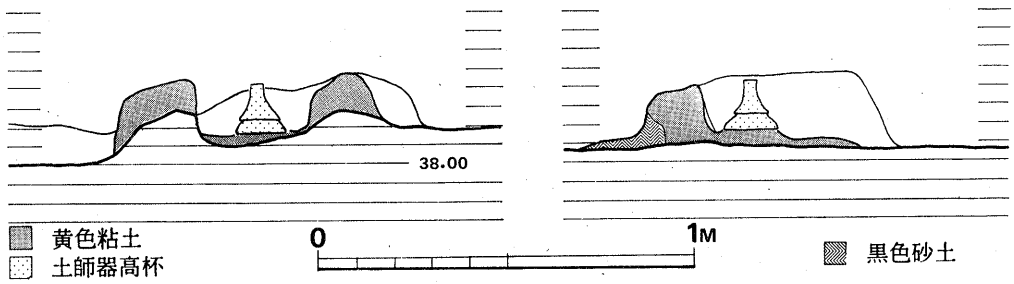


Fig. 51　第 22 号 住 居 跡 竈 断 面 実 測 図（縮尺 1/20）

出　土　状　況

竈内で支脚として用いられた高杯の他，須恵器１点と土師器１点が床面から出土した。

須恵器　杯　22002の立ち上りは内傾し，中間でやや直立する。 端部内側に稜の緩い段部を有する。受部は浅く水平にのびる。底部は深く丸い。ヘラ削りは底部½まで施されている。受部径13.4*cm*，口径10.7*cm*，器高5.3*cm*，立ち上り長1.8*cm*である。

土師器　高杯　22001が支脚として用いられていた。かなりの加熱を受けているので，器面は剝離し，調整は不明である。全体に端正な作りである。22003も同様の作りで，外形も同じであろう。

時　　期

22002の杯は口径が小さいが，立ち上りの状態からA式と考えられ，当住居跡は同式期のものであろう。

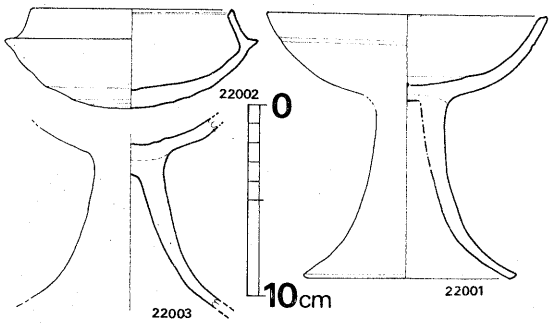


Fig. 52　第22号住居跡出土須恵器・土師器実測図(縮尺 1/4)

第23号住居跡 (Fig. 53)

位　　置

F—4区に位置している。

構　造

形状　方形を呈する。

規模

北辺長　4 *m*

南辺長 4.2*m*

西辺長 4.4*m*

東辺長 4.4m

主軸の方位

N-21°-W

竈 (Fig. 54, PL. 25-2)　北壁中央に附設されている。地山を削り残した段上に板状石を各2個立てて埋め込み袖心とし

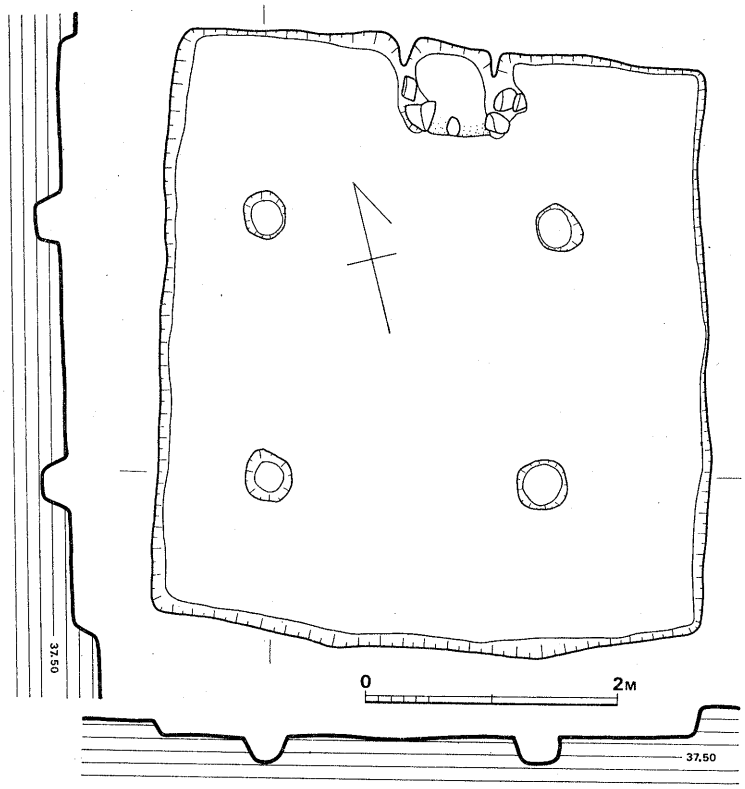


Fig. 53　第23号住居跡実測図(縮尺 1/60)

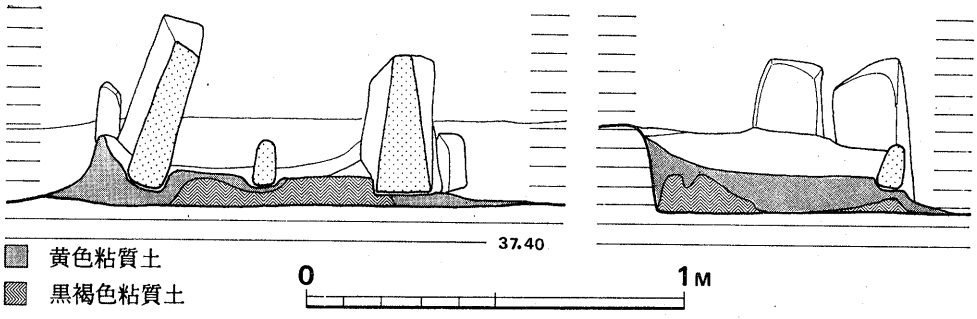


Fig. 54　第23号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

ている。底面中央に土製支脚を立てている。煙道は不明である。

柱穴　4柱構造である。各柱間の距離は北側2.3*m*，南側2.2*m*，西側2.1*m*，東側2*m*で，ほぼ正方形である。各柱穴とも床面から約20*cm*の深さである。

床・壁　床は平坦である。壁は東側が最も残りが良く，24*cm*残している。

出　土　遺　物 (Fig. 55, PL. 26-2)

出　土　状　況

5点の土器が床面から出土した。このうち23001の須恵器が竈東脇からの出土品である。

須恵器　杯蓋　23003の口縁部は丸く内彎し，端部は丸い。天井部との境に2条の浅い沈線がめぐっている。天井部は浅く丸い。口径13.2*cm*，器高4.3*cm*。

杯身　23004の立ち上りの内傾は甚しい。受部は浅く，ほぼ水平である。底部は浅く平坦である。ヘラ削りは底部⅔に施されている。受部径13.9*cm*，口径11.2*cm*，器高4.1*cm*。

甕　23001は灰白色を呈し，軟質である。口縁部は短く，端部を外側へ引き伸ばしてまるめ

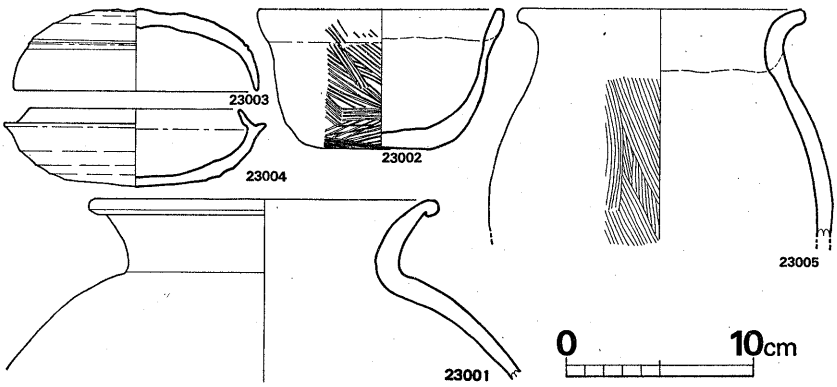


Fig. 55　第23号住居跡出土須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

込み段部としている。

土師器　鉢　23002の口縁部は直線的に外傾し端部は丸い。巻き上げ部が稜をなす。体部は僅かのふくらみを持って平坦な底部に至る。底部中央はやや窪む。外面刷毛目調整，内面ナデ調整である。

甕　23005の口縁部は強く外反し，端部は丸い。胴部中間が最も脹る。外面を粗い刷毛目調整し，口縁部内外面をヨコナデしている。

時　　期

23003はD式，23004はE式の杯である。当住居跡の時期はE式期と考えられる。

第24号住居跡 (Fig. 56, PL. 27)

位　　置

I—6区にあり，当住居跡群中では最も北側の山寄りに位置する。北半は調査し得なかった。

構　　造

形状　方形を呈する。

規模　北辺長 推定3.7*m*

南辺長 約 3.7*m*

西辺長 推定3.1*m*

東辺長 推定2.8*m*

主軸の方向　N-90°-E

竈 (Fig. 57)　西壁中央に附設されていた。住居跡壁は竈部分が内側に約30

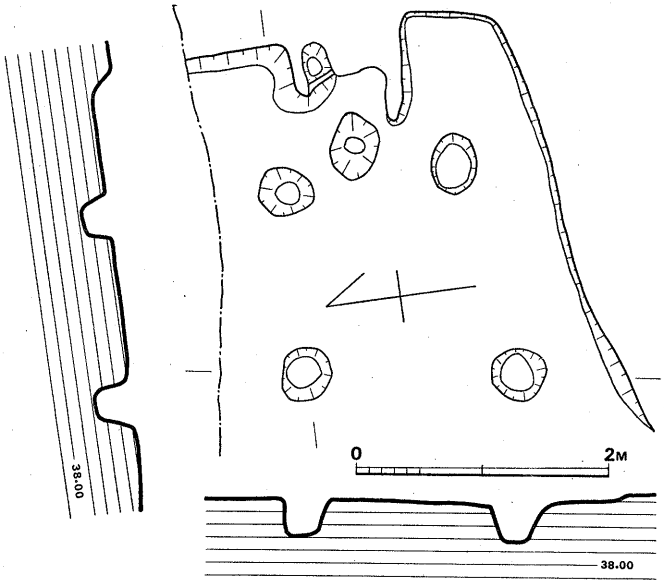


Fig. 56　第24号住居跡実測図 (縮尺 1/60)

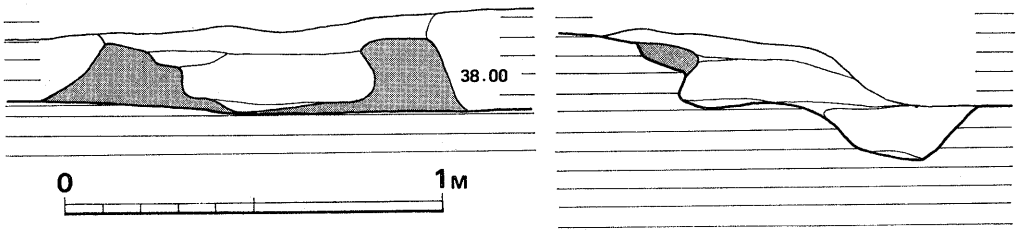


Fig. 57　第24号住居跡竈断面実測図 (縮尺 1/20)

cm張り出し，その上及び手前に黄色粘土を用いて築いていた。南側の袖基底部幅は22cmである。焚口に床面からの深さ14cmの楕円形ピットがある。煙道は崩れて残っていない。

柱穴　4柱構造である。いづれも床面から30cm前後の深さである。各柱間距離は北側1.4m，南側1.7m，西側1.7m，東側1.3mで歪である。

床・壁　床面は平坦である。壁の残りは悪く，東側の竈脇で15cmの高さを残しているものの崩れて傾斜している。

出　土　遺　物

床面出土遺物は皆無で，遺物からの時期決定は不可能である。

第25号住居跡 (Fig. 58, PL. 28)

位　　置

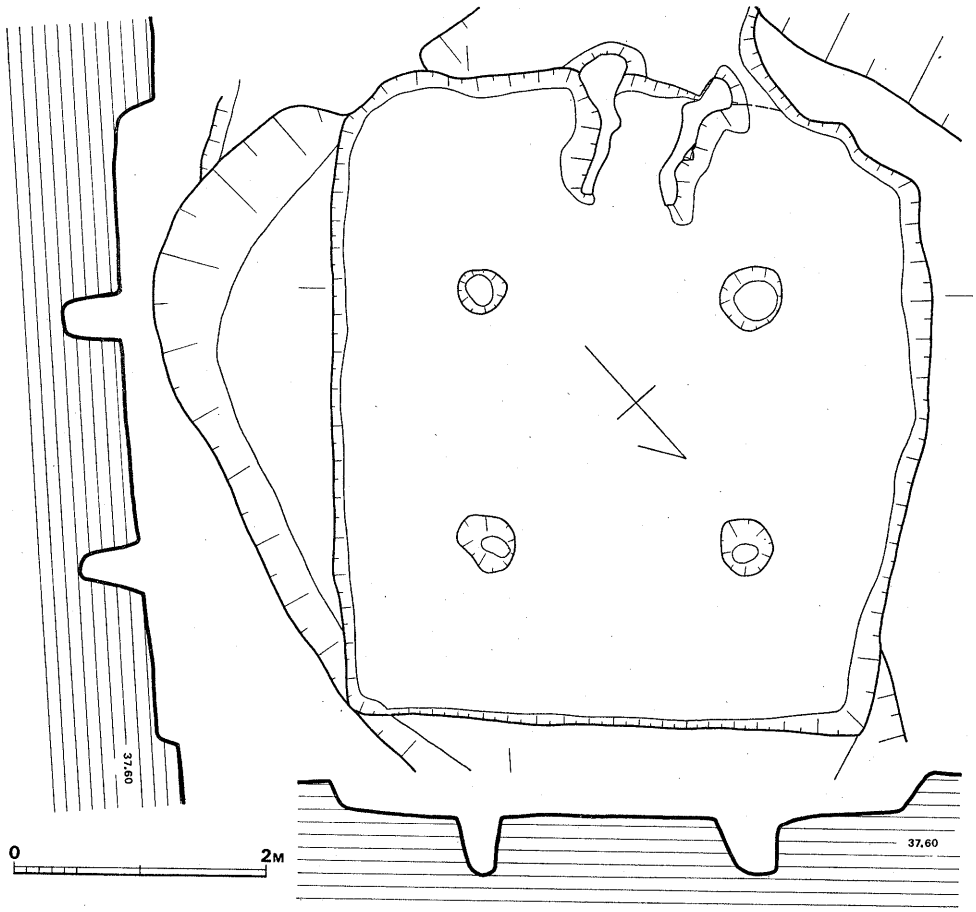


Fig. 58　第25号住居跡実測図（縮尺 1/60）

J—5～6区に位置している。

構　　造

形状　調査当初，楕円形を呈していたが，東南部は住居跡廃絶後に拡充され（あるいは崩壊によって）たことが判明し，本来は方形を呈していたと考えられるに至った。

規模　北西辺長　4.5*m*　　南東辺長　4.8*m*

　　南西辺長　4.4*m*　　北東辺長　3.9*m*

主軸の方向　N-135°-W

竈（Fig. 59）　南西側壁中央に附設されており，住居壁上から床面にかけて，茶褐色粘土を用いて築かれていた。竈の内部壁は加熱を受け，良く焼けている。袖の基底部幅は25*cm*である。支脚及び煙道は崩れており，検出されなかった。

柱穴　4柱構造で，各柱間距離は南西側2.2*m*，北東側2*m*，南東側2*m*，北西側2*m*でほぼ正方形である。床面からの深さは各柱穴共50*cm*前後である。

床・壁　床面は柱間の空間は平坦で，その周囲の壁との間はやや迫り上がっている。壁は崩れて大きく歪み，隅丸になっている。北西側の壁は32*cm*の高さを残している。

出　土　遺　物

出　土　状　況（PL. 28-2）

南東側に広がる弧状部も含め，覆土中から多量の土器が出土した。その数150個体以上である。土砂よりも土器の方が多く，まさに土器溜であった。そのため，本来当住居跡で用いられていた土器を判定することは不可能であった。出土土器については後節で報告する。

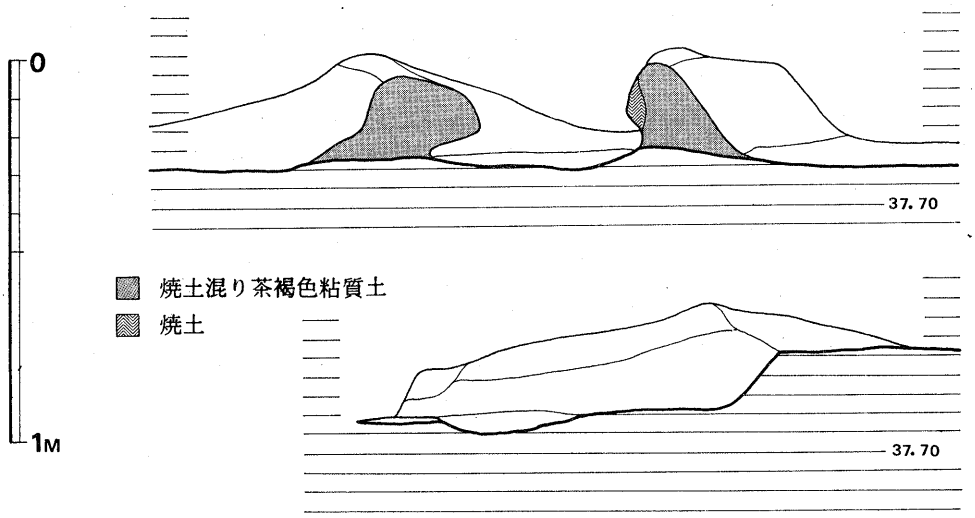


Fig. 59　第25号住居跡竈断面実測図（縮尺 1/20）

B.　遺構・遺物の検討

(1) 遺　　構

構　　造

全て方形である。規模・方向・柱穴についてはTab. 1の通りである。また竈構造についてはTab. 2の通りである。2表を参照して以下各部の報告を述べる。

規　　模

面積で最大の住居跡は3号跡であり，面積は31.6m^2である。最小は4.4m^2の15号住居跡である。10m^2以下の住居跡は全てJ－4～I－4区に集中する第14～第19号跡である。これらは激しく切り合い，密集することは，存在範囲が限定されていたと考えられる。柱穴，竈施設が不明瞭なことは，単に切り合いで崩されたという由ではあるまい。これらが他区域住居跡とは異なる使途があり，区別されていた可能性がある。内部からの出土遺物が少ない点も注目される。

時期差による規模の変遷であるが，A式期は第13号跡が16.6m^2，第22号跡が16.0m^2である。B～C式期は最小は1号跡であるが，面積認定が不確であり，確実なのは2号跡の18m^2である。最大は3号跡の31.6m^2である。D式期は2軒のみで10号跡の14.8m^2と8号跡の27m^2である。E式期は最少は5号跡の12.7m^2で最大は21号跡の21.6m^2である。つまりA式期からB～C式期にかけて各住居跡間の床面積格差が広がり，E式期になって差が収束するといえる。同様の事は後述する竈の底幅についてもいえる。なお，各時期の床面積の平均値はA式期16.3m^2，B～C式期22.5m^2，D式期20.9m^2，E式期17.4m^2である。

主軸の方向

前節で主軸の方向としたのは竈位置の方向を指したものである。建築物としての家屋の主軸は棟木方向を指すべきであろう。

第1・3・5・7・9・13・22・23号の各住居跡の主柱穴は平面正方形を示さず，長方形となる。竈側と竈向側の柱間距離は竈を挾んだ左右の柱間距離よりいづれも短かい。つまり，短かい柱列間上に棟木が架けられたと想像され，平の方向に竈が附設されたことになる。従って主軸の方向は第1号跡と第13号跡が南北方向に近い方向，第3・5・7・9・22・23号の各住居跡は東西に近い方向が主軸といえる。他の住居跡は棟方向不明であるが，判明した限りでは竈が全て平の方角にあり，竈と直角方向が棟木方向になると予想される。

竈

方向は一定しない。一般的な傾向としては北を向くものが多いようである。

竈体は全て壁内側の床面上に粘土や砂を用いて築いている。床面となる地山を一段高く削り

Tab. 1　住居跡各部位計測表

住居番号	辺長(m) 竈側	竈向側	竈左側	竈右側	面積(㎡)	柱間長(m) 竈側	竈向側	竈左側	竈右側	竈方向	棟方向	入口方向	時期
1	3.4 ?	3.4 ?	4.0 ?	4.0	13	2.3	?	1.6	?	N- 60°-W	N-150°-W	N- 30°-E N-150°-W	B
2	4.4	—	4.3	4.3	18	—	—	—	—	N- 65°-W	?	N- 25°-E N-155°-W	B
3	6.8	5.6	5.0	5.2	31.6	3.1	3.3	2.5	2.5	N- 17°-E	N- 73°-W	N-107°-E N- 73°-W	C
4	4.0	4.0	4.8	4.7	19	2.46	2.2	2.3	2.5	N- 8°-E	?	N- 98°-E N- 82°-W	B
5	3.8	3.7	3.5	3.3	12.7	2.5	2.3	1.2	1.3	N- 1°-E	N- 89°-W	N- 91°-E N- 89°-W	E
6	3.3	3.3	3.3	3.1	10.5	—	—	—	—	N- 88°-W	—	N- 2°-E N-178°-W	—
7	5.0	4.6	4.6	4.5	21.8	2.7	2.5	1.8	2.4	N- 9°-E	N- 81°-W	N- 99°-E N- 81°-W	C
8	—	—	—	—	27	—	—	—	—	—	—	—	D
9	4.35	5	5.8	5.8	26.7	3.0	2.9	2.4	2.9	N-170°-E	N-100°-W	N- 80°-E N-100°-W	B
10	4.3	3.8	3.8	3.6	14.8	2.2	1.6	1.8	2.1	N- 12°-W	—	N- 78°-E N-102°-W	D
11	5.4	5.3	4.4	5.2	25.7	—	—	—	—	N- 63°-W	—	N- 27°-E N-153°-W	C
12	—	5.1	4＋α	1.6＋α	—	—	—	—	—	N- 63°-W	—	N- 27°-E N-153°-W	D
13	4.2	4.7	4.1	3.7	16.6	3	2.7	2.2	2.6	N- 77°-W	N-167°-W	N- 13°-E N-167°-W	A
14	—	—	—	—	5.3	—	—	—	—	—	—	—	—
15	—	—	—	—	4.4	—	—	—	—	—	—	—	—
16	—	—	—	—	7.5	—	—	—	—	N-136°-W N- 44°-W	—	—	—
17	—	—	—	—	5.8	—	—	—	—	—	—	N- 21°-E N-159°-W	—
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N-111°-E	—	N- 21°-E N-159°-W	E
19	—	—	—	—	6.3	—	—	—	—	—	—	—	—
20	5.0	4.8	4.9	5.0	24.0	2.5	—	2.5	—	N- 20°-E	—	N-110°-E N- 70°-W	C
21	4.6	4.2	4.8	5.0	21.6	2.2	—	2.0	—	N- 15°-E	—	N-105°-E N- 75°-W	E
22	4.2	3.9	4.0	3.9	16.0	2.8	2.7	1.6	18	N- 3°-W	N- 93°-W	N- 87°-E N- 93°-W	A
23	4.0	4.2	4.4	4.4	18.0	2.3	2.2	2.1	2	N- 21°-W	N-111°-W	N- 69°-E N-111°-W	E
24	2.8	3.1	3.7	3.7	10.9	1.3	1.7	1.4	1.7	N- 90°-E	—	N-180°-E N- 0°-W	—
25	4.4	3.9	4.8	4.5	19.3	2.2	2.0	2.0	2.0	N-135°-W	—	N-135°-E N- 45°-W	—

Tab. 2　竈　構　造　一　覧　表

住居番号	方　向	竈内巾	竈　体	支　脚	煙　出　し	備　考	時　期
1	N- 60°-W	57cm	黄色粘質土	石			B
2	N- 65°-W	—		土製品			B
3	N- 17°-E	27cm	黄色粘質土	土製品	壁　手　前		C
4	N- 8°-E	44cm	黄色粘質土＋砂	土製品	壁　手　前	底面も粘土貼り	B
5	N- 1°-E	42cm	石心黄色粘質土	石	壁手前切込み		E
6	N- 88°-W	42cm				竈体基礎は灰茶色砂質土	
7	N- 9°-E	35cm	黄色粘質土	土製品	壁　手　前		C
9	N-170°-E	47cm	黄色粘質土	土製品	壁手前切込み	底面地山削り出し	B
10	N- 12°-E	59cm	黄色粘質土＋砂			底面も粘土貼り	D
11	N- 63°-W	—	黄色粘土＋灰色粘土				C
12	N- 63°-W	—					D
13	N- 77°-W	45cm	灰黄色粘質土	土製品	壁　手　前	底面地山削り出し	A
18	N-111°-E	42cm		石		底面地山削り出し	E
20	N- 20°-E	65cm	黄色粘質土	土製品	壁　手　前	底面地山削り出し	C
21	N- 15°-E	38cm	石心粘土				E
22	N- 3°-W	30cm	黄色粘土	高　杯		底面地山削り出し	A
23	N- 21°-W	54cm	石　心	土製品		底面地山削り出し	E
24	N- 90°-E	50cm	黄色粘土				—
25	N-135°-W	55cm	茶褐色粘質土				—

残し，その上に築いている例も多い。中には竈体の心として石を据え，そのまわりに粘土を貼って築いた例がある。第5・21・23号の住居跡である。この3軒の住居跡はいづれもE式期の住居跡であり，この時期に流行した竈築造技術であろう。筑紫野市所在池田遺跡第2号住居跡も同様の竈をもち，出土遺物実測図を見る限り同時期の所産である。

支脚は方柱の土製品を用いた例と自然石を利用した例の2種がある。(註1) 第22号跡のみは高杯廃品を二次利用していた。第13号跡の土製支脚は四面体の整美な支脚を用いていた。高さ9㎝である。胎土も良質である。他住居跡の土製支脚は円に近い多面体で，胎土は悪い。A式期とB～C式期以降の時期的な差とも考えられるが，例が少なく確証はない。

煙出しは判明した限りでは全て竈体焚口裏側にあけられ，住居跡壁手前に煙が出るようにな

っている。中には壁を斜めに削って傾斜をつけた例もある。竈を出た煙は当然住居跡内に籠ったであろう。前記の通り竈は平の方角にあり，そこに小窓を開けたか，平方向屋根から屋外へ出していたと考えられる。

使　用　状　況

当遺跡は扇状地北端に位置し，数度の水害を受けたものと考えられる。現在も遺跡地南側の水位は高く，僅かの雨でもたちまち水没する区域が広がっている。地山は全面山砂の堆積層である。

第13号住居跡と第21号住居跡は恐らくは水害に会い廃棄された住居跡である。そのために床面より多量の生活用具が出土した。

第13号住居跡はA式期，第21号跡はE式期の所産である。第13号住居跡の竈中及び左右の壁側から須恵器及び土師器が集中して出土した。竈中より甑，前面に長胴甕，左に須恵器杯類及び土師器甕，右側に土師器甕類があった。全て炊事用具である。竈左側袖に接しており床面よりやや浮いて出土した甕は竈上あるいは棚上より転落した可能性がある。

第21号住居跡も水害によって廃棄されたと考えられる住居跡である。竈内後方に甑，焚口に長胴甕，左右に鉢形甑を含めた炊事用具が出土した。また住居跡南東隅より台石と滑石製品及び半製品，原石が，南西隅より鉄製鋤先と刀子が出土した。一つの住居跡内部で炊事用具セット，石製品加工場，　農工具置場がセットで検出された例は極めて稀有であり，　貴重な例である。この例よりして住居跡内部での生活の復元がある程度なされるであろう。農工具の出土位置が原位置を保っているかどうか疑問の点は残るが，貧窮問答歌が想察されてくる。住居跡内の生活の場としては炊事場と作業場の二面の用い方があることが明らかとなった。この用い方及び冬場における竈の火種保存の事を考えると，住居跡入口は竈と直角方向になるのではなかろうか。　後述する窯跡と当集落は密接な関係にあったと容易に推察される。　この点については，後記窯跡の小結を参照されたい。

（2）遺　　物 (Fig. ①)

須　恵　器 (Fig. 60・61, PL. 29～32, Tab 3)

蓋杯と高杯を利用してA～Eの5型式に分類してみた。各住居跡面出土須恵器については前節で述べてきたが，ここでは各型式について概略述べ，後に各型式の時期について触れてみたい。なお，Fig. 60・61 は第25号跡を中心とした各住居跡覆土中及び表土層から出土した須恵器であり，各遺構の時期を決定するに際して利用し得なかったものである。各須恵器の法量及び特徴については Tab. 3 を参照されたい。

A　型　式 (Fig. 60, PL. 29)

第13号跡床面出土須恵器及び Fig. 60 の左側上位8個がこの型式に含まれる。杯蓋は口縁部が直立もしくは内湾して立ち，端部で短かく外反する。端部は内傾する段部を有する。ヘラ削りは天井部の⅔以上に及ぶ。天井部の形状及び口径については，さらに2分類しうる。a）天井部は浅くやや平坦になる。稜部は鋭い段をなす。口径は13.5cm前後で，13011・13016及び25042が含まれる。b）天井部は深く丸い。稜の段は緩く，口径は12.5cm前後で，25041，25036が含まれる。杯身のたちあがりは内傾してのちやや直立気味になり長い。受部は短かく，ほとんどが水平にのび，たちあがりとの境に沈線をめぐらす例も多い。たちあがり内側と底部の形状から2種に細分される。a）底部は浅く平坦で，たちあがり端部内側に内傾する凹面をもつ。口径は11.1～12.5cmで，01002・07003・13006・13007・13014が含まれる。b）底部は深く丸い。たちあがり端部内側には稜が不明瞭なかすかな凹面をもつ。口径は10.5～11.3cmで，13009・13015・25064が含まれる。01001と07001は両種の中間形態である。杯蓋aは杯身aに，杯蓋bは杯身bに，それぞれ対応するものと考えられる。形態的にはb類が後出のものであろう。なお，当型式の須恵器は後述する窯跡からは検出されておらず，他地より運び込まれたか，あるいは周辺に別に窯が営まれていたと考えられる。

B　型　式 (Fig. 60, PL. 30)

第1・2・4・9号各住居跡床面出土須恵器と Fig. 60 の6個の須恵器が含まれる。このうち25045の高杯は脚が短かく裾端部が太い。透しは一段で，A型式に伴うものかもしれない。杯蓋は口縁部がふくらみをもって直立してのち端部で軽く外反するが，開いてのち端部で直立する。端部内側に内傾する稜の不明瞭な凹面をもつ。天井部との境に一条の沈線をめぐらしている。口径は12.5cm前後が多く，B 032のみ 14.8cmと大きい。器高4.5～4.8cmである。ヘラ削りは天井部の中央½に及んでいる。杯身はたちあがり高が1.6cm 以上あり，内傾してのび，端部は丸い。受部は短かく水平にのびる。底部は深く平坦になるものが多い。口径は10.6～11.0cmである。ヘラ削りは底部約½に及んでいる。

C　型　式 (Fig. 60, PL. 30)

第3・7・11・20号跡床面出土遺物と Fig. 60 の8個が含まれる。杯蓋は口縁部が丸味をもち，外反してのち端部が直立するが，軽く外反する。端部内側に稜をもつ。07005・25005の口縁部の形状はB型式に近い。天井部との境に浅い沈線をもつ。天井部の約½がヘラ削りされている。口径は12.5～13.6cmで，器高は3.6～4.8cmであり，B型式より若干大きい。25126の口径は15.1cmを計る。杯身のたちあがりはB型式より短かくなり1.3～1.5cmで，端部は丸い。受部は短かく水平にのびるものが多いが，若干外上方へのびるものも含まれる。底部約½～⅓にヘラ削りが施されている。口径は10.8～11.3cmで，例外的に12cm前後の大形品を含む。

D　型　式 (Fig. 60, PL. 31)

第8・10号住居跡床面出土須恵器と Fig. 60 の9例が含まれる。この型式には底部が天井

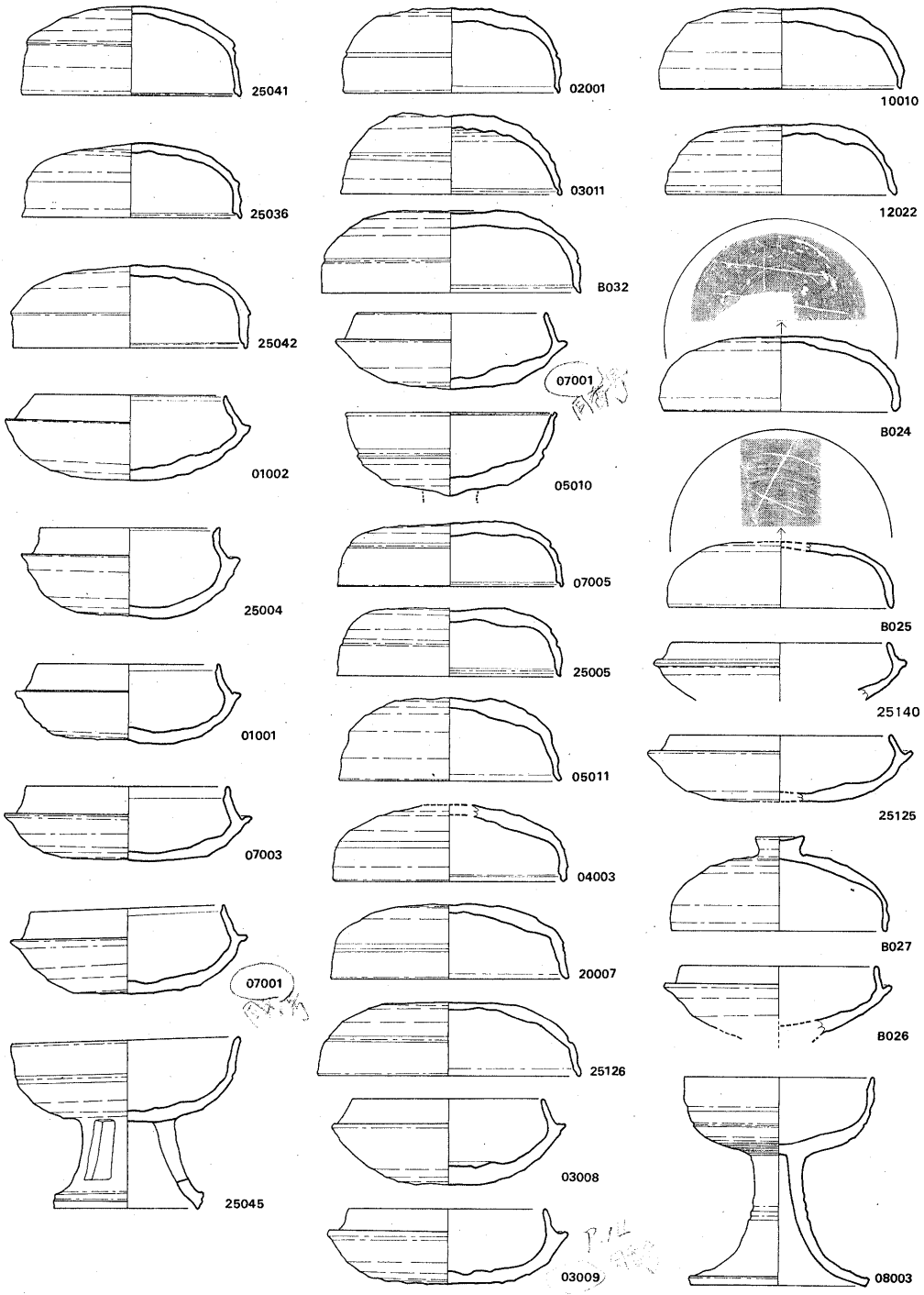


Fig. 60　各地点出土須恵器実測図①（縮尺 1/4）

部にヘラ記号をもつ例が多い。杯蓋は口縁部が丸味をもって彎入し，端部は直立して丸い。体部は丸く，天井頂部が平坦になる。頂部のみヘラ削りが施されている。口径は13.1～13.9㎝，器高3.7～4.6㎝であり，C型式よりは大形化するが，器高は変化ない。杯身のたちあがりは内傾が著しくなり，高さは1.0～1.3㎝である。端部は丸い。受部は外上方へのびる。底部は平坦で，大きく開いて内彎しながらのび，やや直立してのち，外反して受部端に至る。口径は11.7～12.8㎝で蓋と同様にC型式より大型化する。B026・B027・08003の高杯及びその蓋も当型式中に含まれるであろう。

E　型　式 (Fig. 61, PL. 32)

第5・21・23号跡床面出土須恵器及び Fig. 61 の須恵器が含まれる。D類と同様に天井部や底部にヘラ記号をもつ，杯蓋は口縁部の形状はD式と同様であるが偏平になり，口径は12.4～13.3㎝と小形化する。ただし05006のように口径が14.8㎝を計るものも例外的にある。この種の蓋は05007の身とセットになり，窯出土品中にも同種のもの (Fig. 74-27) が含まれている。杯身のたちあがりは内傾が甚しく，細味で端部がやや尖る。高さは0.8～1.0㎝である。口径は10.7～12.5㎝で，蓋と同様にD型式よりは小形である。ヘラ削りはD型式よりも少範囲に施されている。

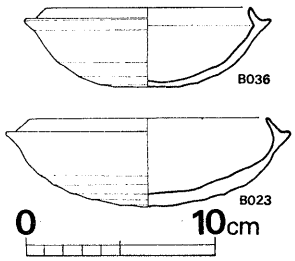


Fig. 61　各地点出土須恵器実測図②（縮尺 1/4）

以上簡単に蓋杯を中心とした各型式について触れてきた。これらの時期的な前後関係については住居跡の切り合い関係により，C（第11号跡）→D（第10号跡），B（9号跡）→D（第10号跡），A（第22号跡）→C（第20号跡）→E（第21号跡），C（第11号跡）→D（第12号跡）が明らかである。以上を整理してみると，A→B・C→D→Eの各型式に新しくなることが知られる。B型式とC型式については前後関係は住居跡の切り合いからは不明である。同時期の所産とも考えられる。ただし，C型式を出土する第7号住居跡とB型式を出土する第9号跡は近接しており，住居跡の上部構造を考慮するならば，同時に建て並んでいたとは考え難い。消極的にではあるが，形態によりB→Cの時期差が想定される。

以上を総括するならば，A型式で杯蓋にみられた稜部や口縁端部内側の段部はB型式・C型式になるに従ってしだいに不明瞭になり，稜部は沈線に，段部は凹面→稜と変化する。杯身口縁端部内側の段部はB型には消滅する。B式の杯身のたちあがりの高さは1.6㎝以上あり，端部も太くしっかりしていたものが，しだいに内傾し，高さや長さを減じてゆく。口径は Aa 型式としたものが13.5㎝あり，Ab 型式とB型式は12.5㎝で小形化する。その後大形化し，D型式が13.1～13.9㎝と最大になり，E型式になると再度小形化する。ヘラ記号はD～E型式にのみ認められ，それ以前にはみられない。

以上推定した編年は，これまでの編年観とどのような関係になるのか，住居跡及び窯跡出土

品について次に記してみる。

住居跡が46軒検出された筑紫野市所在野黒坂遺跡の古墳時代後期の土器は第9類～第11類に分類されている。第9類土器を出土した住居跡は2軒，第10類土器を出土した住居跡は21軒，第11類は1軒のみである。(註2) 第9類土器や第11類土器を出土した住居跡の軒数に比べて第10類土器を出土した住居跡の軒数は極端に多い。調査範囲の限定という問題もありあり一概には言えないが，報告者も記している通り，第10類土器はさらに細分される可能性があろう。第10類土器を出土する住居跡同士の合い関係も多分にあり，同様なことが首肯される。第9類土器は43号住居跡床面及び30号住居跡覆土中から出土している。当裏ノ田遺跡のA型式に類似している。第10類土器は34号住居跡出土一括遺物を見ると，A型式に類似したものからC型式に近いものまでを含んでいる。時期は6世紀中葉頃とされている。

小郡市所在西中隈遺跡第4号住居跡は完掘されてはいないが，一括して須恵器を床面上から出土している。いづれも器高が高く，口径の小さな古式須恵器で，外形のみでは25004に近似している。(註3) A型式の範疇に入ろう。

同市津古内畑遺跡第2号住居跡から須恵器，土師器が共伴して出土している。杯身は口径11.4㎝，器高5㎝でたちあがりは垂直に近く上端は平坦である。A式期相当がそれ以前であろう。(註4)

若宮町所在田尻遺跡から1軒の住居跡が検出されている。(註5) 住居跡は耕作に際する削平を受けて壁及び竈の残存状態は不良であるが，周溝中より主に遺物を出土している。床面遺物として認定できるかどうかは不明にしても，廃棄されて間もない遺物と考えられる。杯蓋は古い様相を呈し，A型式に相当するが，杯身はたちあがり高が1.8㎝あり，端部は丸い。B型式に相当するであろう。

A～C型式に相当する須恵器を伴った住居跡で県内で発見された例は以上である。野黒坂第43号住居跡及び西中隈第4号住居跡出土須恵器は当遺跡A型式と大差ない。なお津古内畑第2号跡出土須恵器はA型式以前と考えられる。しかしB及びC型式については純粋な状態で出土している例はなく，同型式の時期別についてはなお問題を残しそうである。地域性あるいは細部については窯別の差，製作された須恵器の使用期間の問題もあろう。

D型式以降の須恵器を伴う住居跡の発見例は最近急増している。D・E両型式は住居跡内出土状況を見れば，ほぼ時期差として確立しているといえる。その詳細については九州縦貫自動車道関係調査報告—XⅣの Tab. 110 (p. 289) を参照されたい。(註6)

次に窯跡を見るならば，裏ノ田遺跡と御笠川を挟んで対峙する大野城市所在野添，大浦窯跡を検討せねばなるまい。(註7) 小田氏はこの窯跡群をもって筑前の須恵器を編年おられる。野添第6号窯跡第1～7次床面からはa・b類の蓋杯が出土しており，7次床面上からはさらにc類の蓋杯が出土している。杯蓋a類の体部段は当遺跡のB型式に類似し，b類の体部沈線はC型式に類似している。口径は当遺跡出土例に比して一般に大形である。c類は口径が12.2㎝でセッ

トとなる杯身c類を考慮するならば，当遺跡のE型式に対応するであろう。杯身はa類は口縁部内側に段部を有しており，たちあがり高は1.2～1.7㎝である。たちあがり端部内面に段部を有するという点ではA型式に対応するが，実測図を見る限り端部が基部に比して薄手になり華奢である。A型式の様相を残してはいるが，一段新しいものであろう。b類はたちあがりが長く，B～C型式に対応しよう。c類はたちあがり高が8㎜前後ということで，その形状のみはE型式に該当する。野添6号窯は上記b類を中心とするとのことで，小田氏はⅢA（Ⅲ式期前半）とし，6世紀中～後葉の時期とされている。なお，当時期の高杯は実測図で見る限りC型式の所産と見られる。

野添第9号窯跡からは前記b・c類に対応する蓋杯が出土しており，そのうちc類が中心であるという。小田氏はこのc類をⅢB（Ⅲ式期後半）としており，6世紀後半の時期に比定されている。

御笠川を対峙した野添窯跡と裏ノ田遺跡においてさえ，須恵器形態の細部に差異がみられるが，おおまかに記せば，当遺跡のA形式は小田氏のいうⅢA以前，B・C型式はⅢA，D型式はⅢB，E型式はⅣということであろうか。

各型式については次節裏ノ田窯跡，次章雉子ケ尾窯跡，成屋形遺跡の内容を記す中で補強し，結章において総括すると共に，対応する絶対年代についても考慮したい。

Tab. 3　須　恵　器　観　察　表

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
01001	杯身	Fig60 PL29	口径 10.6 器高 4.3 たちあがり高 1.6	たちあがりはややそり気味に内傾する。端部は内傾する狭小な凹面を有す。受部は短かく水平にのび、端部は丸い。底部は平坦で歪んでいる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整、底部受部端より2.9㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面　中央部付近に不定方向のナデ調整	焼成　良好、堅緻 胎土　やや粗 色調　内外面灰色	B
01002	杯身	Fig60 PL29	口径 11.0 器高 4.9 たちあがり高 1.6	たちあがりは内傾し中央に回転ナデによる稜をもつ。端部は内傾する浅い凹面を有す。受部は短かく浅い。底部は丸く内湾して上外方にひらき口縁部にいたる。	マキアゲ、ミズヒキ成形 外面　底部受部端より2.8㎝の所から回転ヘラ削り調整 他は、回転ナデ調整	焼成　不良 軟質 色調　内外面灰色	B
01004	杯身	—	口径 11.0 器高 4.8 たちあがり高 1.6	たちあがりは直線的に内傾し、端部は丸く太い。受部は短かく上外方へのび端部は丸い。底部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　底部は未調整 他は、回転ナデ調整	焼成　不良、軟質 色調　灰白色	B
02001	杯蓋	Fig60 PL30	口径 12.3 器高 4.8	口縁部は直立気味に外反したのち、内湾し端部付近で再度外反する。端部は内傾する凹面を有している。天井部と口縁部の境に1条の深い沈線を有している。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　沈線より2.8㎝のところから荒い回転ヘラ削り調整 他は、回転ナデ調整 回転ナデ調整は丁寧で、口縁部は薄く仕上げられている。	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色 胎土　良好	B

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
03007	杯蓋	Fig11 —	口径　12.5 器高　3.8	口縁部は直立気味に立ち、端部近くなってやや外反する。端部は丸く、外面の端部から34mmのところに浅い沈線を有する。天井部と口縁部との境には巾広の1条の沈線を引いている。天井部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　沈線より5mmの所より回転ヘラ削りが始まっている。他は回転ナデ調整 内面　中央部に青海波叩きが残っている。	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色 胎土　大粒砂粒若干を含む	C
03008	杯身	Fig60 PL31	口径　11.1 器高　4.9 たちあがり高 1.3	たちあがりはややそり気味に内傾する。端部は丸い。受部は浅く水平に短かくのびる。底体部との境はスムーズで稜を有しない。底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　受部端より3.2cmの所から回転ヘラ削り調整　他は回転ナデ調整	焼成　不良、軟質 色調　灰黄色	C
03009	杯身	Fig60 PL31	口径　11.3 器高　4.3 たちあがり高 1.4	たちあがりは内傾したのちやや立上り、端部近くで再度内湾する。端部は丸い。受部は浅くやや上外方へ短かくのびる。端部は丸い。底部は平坦で上外方へ広がって受部にスムーズにいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　受部端より2.1cmの所から回転ヘラ削り調整他は回転ナデ調整 内面　中央部に青海波が残る。 調整は全体に雑である	焼成　良好 色調　灰色 胎土　砂粒多し	C
03010	杯蓋	Fig11 PL 6	口径　13.0 器高　4.2	口縁部は外方に張ってのち軽い稜をもって内湾する。端部は内傾する浅い凹面を有している。天井部と口縁部との境に1条の沈線を有する。天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　沈線から上すぐに回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整 内面　中央部不定方向にナデ調整	焼成　良好 色調　灰黄色 胎土　砂粒多し	C
03011	杯蓋	Fig60 PL30	口径　12.6 器高　4.5	口縁部は広く外反したのち、端部直上で軽く内湾する。端部は丸く内側に浅く狭小な沈線を有する。体底部との境に巾広の沈線を有する。天井部は高いが頂部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　沈線より1.9cmの所から上は回転ヘラ削り調整　他は回転ナデ調整 内面　中央部の一部不定方向のナデ調整	焼成　良好 色調　灰色	C
04002	杯身	Fig14 —	口径　10.8 器高　4.3 たちあがり高 1.5	たちあがりは太い。内傾してのち、やや立上り、端部は丸い。受部も太く短かく水平にのびる。底部はやや平坦で大きく広がって受部へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より1cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　暗青灰色 胎土　外面に砂粒が目立つ	C
04003	杯蓋	Fig60 —	口径　13.2 器高　4.4	口縁部はやや外方へはり、後、稜をもって直立する。端部は丸く内面は浅く、稜の不明瞭な段部を有する。天井部との境に浅い1条の沈線を有する。天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線から0.6cmの所から回転ヘラ削り調整		C
04004	杯身	Fig14 PL 6	口径　10.6 器高　4.0 たちあがり高 1.1	たちあがりの内傾は著しく、端部近くでやや立上る。焼歪みであろう。端部は丸い。受部は上外方へ短かくのびる。太目で端部はやや尖る。底部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ調整 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　底部に青海波叩残る。ヘラ削りの凹凸が著しい	焼成　良好、堅緻 色調　暗青灰色	B
04005	杯身	Fig14 PL 6	口径　10.7 器高　4.8 たちあがり高 1.5	たちあがりはやや湾曲気味に内傾し、端部は丸い。受部はたちあがりとの境に沈線を有し、水平に短かくのびる。底部は浅くやや丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.2cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　外面に大粒砂目立つ	B

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
05003	高杯脚	Fig17 PL 8	脚部径　10.5 脚部高　5.9	脚部は基部がやや太く、外反しながら下り、裾部近くでさらに広がって屈曲して段をなす。段部は浅い凹面を呈す。5㎜下って端部にいたる。端部は鋭く尖る。脚部下位に直径6㎜の円形スカシが外→内へ穿たれている。	マキアゲ、ミズビキ成形 脚部はハリツケによる 回転ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黒色	E
05004	高杯脚	Fig17 PL 8	脚部径　8.9 脚部高　4.0	脚部は基部が外反しながら下り、裾部近くでさらに広がって屈曲して段をなす。段部は浅い凹面を呈す。1.3㎝下って端部にいたる。端部は丸く、底面は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 脚部はハリツケによる 回転ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色	E
05005	横瓶	Fig17 —	口径　11.1 残存高　6.2	口縁部は外反して端部近くで水平に開く。端部は平坦面をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　淡灰色	E
05006	杯蓋	Fig17 PL 8	口径　14.8 器高　4.4	口縁部は直線的に開き端部は丸い。体底部との境に軽い稜をもつ。天井部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部に回転ヘラ削りを施しているらしい。	焼成　不良、生焼け 色調　灰白色	E
05007	杯身	Fig17 PL 8	口径　13.4 器高　3.9 たちあがり高 0.5	たちあがりは極めて短かく、断面三角形を呈する。受部は上外方へ短かくのび、端部は丸い。体底部との境が、やや窪む。底部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　受部端から2.7㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　不良、生焼け 色調　灰白色	E
05008	杯身	Fig17 PL 8	口径　11.6 器高　4.7 たちあがり高 0.6	たちあがりは内傾甚しく、端部近くでやや立ち上がる。端部は丸い。受部は浅く、短かく水平にのびる。体底部との境がやや窪む。底部はやや深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より3.5㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　不良、生焼け 色調　灰白色	E
05009	杯身	Fig17 PL 8	口径　11.7 器高　4.7 たちあがり高 1.1	たちあがりは内傾甚しく、端部近くでやや立ち上がる。薄手であり端部はやや尖る。受部は浅く短かく水平にのび体底部との境がやや窪む。底部はやや深く丸い。	マキアゲ、ミズヒキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より3㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面　中央部に不定方向のナデ調整	焼成　不良 色調　灰褐色	E
05010	高杯	Fig60 —	口径　12.2 杯部高　4.4	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部で僅かに外反する。端部は丸く、内傾する狭小な凹面を有す。体底部との境に一条の深い沈線を引いている。脚部との接合部は中央が凸出する。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は沈線より1.3㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　密	C
05011	杯蓋	Fig60 PL31	口径　12.5 器高　4.8	口縁部は外反してのち、軽い稜をもって直立気味になり、端部近くで再び外反する。端部は丸く、内側に内傾する平坦面をもつ、天井部との境に稜をもつ。天井部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁部との境の稜より1.5㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰黒色	C

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
05012	坩蓋	—	口径　7.1 器高　2.4	口縁部は外反したのち、直立気味に立つ。端部は丸い。天井部はやや平坦。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部、口縁部端より2.3cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰褐色 天井部　ヘラ記号あり	E
05013	甕	—	口径　11.2 残有高　81	口頸部は短かく肩部からゆるやかに外反する。端部下は断面三角形に肥大し、下面中央には1条の沈線を引き、上面は凹面となる。端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整、肩部以下は不明	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　小礫を含む	E
05014	横瓶	—	口径　10.4 残存高　7.2 頸部径　5.1	口頸部は大きく外反し、一条の断面三角形の凸帯がめぐって端部にいたる。端部は丸い。内面に巾7mmの凹面を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整、肩部以下の調整は不明	焼成　良好 色調　灰色	E
07001	杯身	Fig60 PL29	口径　11.1 器高　4.8 たちあがり高 1.7	たちあがりは直線的に内傾し、端部近くで僅かに立ち上がる。端部内側に内傾する凹面を有す。受部は水平に張り出し、体底部との境に稜を有す。底部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2cmの所から回転ヘラ削り調整。ヘラ削りは深い。	焼成　良好 色調　灰色 窯土及び蓋一部が付着	A
07002	杯身	Fig23 PL10	口径　11.0 器高　4.3 たちあがり高 1.4	たちあがりは直線的に内傾し、端部は丸い。受部との境に一条の沈線を有す。受部は下り気味で、断面三角形を呈す。底部は浅く平坦で外反してのち、受部端まで直線的にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より1.5cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　不良 色調　黄灰色	C
07003	杯身	Fig60 PL29	口径　11.5 器高　4.2 たちあがり高 1.8	たちあがりは太く、内傾してのちやや直立して端部にいたる。端部は丸く、内側に内傾する巾広の凹面を有する。受部はたちあがりに比べて薄手であり、基部に1条の沈線を有する。体底部は浅く平坦で内湾してのち、外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端から2.3cmの所から回転ヘラ削り調整。ヘラ削り痕は深い。	焼成　良好、堅緻 色調　内面、黒灰色、外面　黒色 胎土　小礫を含む、蓋口縁部が付着	A
07005	杯蓋	Fig60 PL31	口径　12.8 器高　3.6	口縁部は内湾して下って直立し、端部近くで僅かに外反する。端部内側に内傾する凹面を有す。天井部との境に浅い一条の沈線をめぐらす。天井部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線より8mmの所から回転ヘラ削り調整。	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色 胎土　細砂を含む	C
07006	杯身	—	口径　10.8 残存高 4.5 たちあがり高 1.4	口縁部は太く、内傾して端部にいたる。端部は内側に内傾するごく浅い凹面を有する。受部との境に鋭い一条の沈線を有する。受部は下り気味で断面は細い三角形である。底部は不明であるが丸味をもつであろう。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.8cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰黒色	A
08001	杯蓋	Fig23 PL10	口径　13.1 器高　4.4	口縁部は直立し、端部近くで僅かに外反する。端部は丸い。天井部は深く丸い。口縁部との境は軽い稜部をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は稜部より3cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　中央部は不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　淡黄色 胎土　密 天井部　ヘラ記号あり	C

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
08003	高杯	Fig60 PL31	口径 10.9 脚裾経 10.1 器高 11.8 脚部高 7.3	口縁部は直立し、端部はやや尖る。体部上位に２条の沈線を有し、底部は深い。脚部の基部は細く、脚柱部に２条の沈線を引いている。裾部は大きく開き、僅かな稜をもって端部にいたる。端部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 杯部　外面 底部は回転ヘラ削り調整の上、カキメ調整 内面 底部は不定方向ナデ調整	焼成　やや軟質 色調　灰黒色 胎土　密	D
09009	杯蓋	—	残存高 3.0	口縁部は内湾しながら開き、端部内側に内傾する凹面を有す。天井部との境に一条の沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黄色	B
10001	杯身	Fig29 PL11	口径 10.9 器高 5.1 たちあがり高 1.6	たちあがりは長く、内傾してのち、中央部よりやや直立気味になる。受部は上外方へ長くのびる。底部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より5.1㎝の所より回転ヘラ削り調整	焼成　不良 色調　灰黄色	B
10005	横瓶	Fig29 PL11	口径 13.2 胴部径 38.0 器高 29.4	口頸部は直立してのち外反し、端部に偏平凸帯を貼りつけている。胴部は俵状を呈す。	口縁部マキアゲ、ミズビキ成形胴部は輪積み、胴部両端円形貼り付け成形 口縁部　回転ナデ調整 胴部　外面平行叩 内面　青海波叩	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色 胎土　砂粒含む	B
10007	壺	Fig29 —	口径 20.0 残存高 18.3	口頸部は短かく外反し、端部に偏平凸帯を貼りつけて肥大させている。端部は丸い、肩部はなだらかで、胴部球形を呈す。	口縁部　マキアゲ、胴部輪積み 口縁部　回転ナデ調整 胴部　外面は平行叩の上、部分的にカキメ 内面は青海波叩	焼成　良好、堅緻 口縁部から肩部にかけて自然釉 色調　明青灰色	B
10008	杯身	Fig29 PL11	口径 12.4 器高 3.8 たちあがり高 0.8	たちあがりは短かく直線的に内傾し、端部は丸い。受部は浅く僅かに上外方へのびる。底部は浅く平坦である。	マキアゲ、ヨコナデ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端から2.8㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　淡灰色～淡青灰色 胎土　密	E
10010	杯蓋	Fig60 —	口径 13.9 器高 4.6	口縁部は外反したのち、稜をもって直立する。端部は細く尖る。天井部は深くやや平坦。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁端部から4.1㎝の所より粗いヘラ削り調整	焼成　不良、軟質 色調　茶橙色～淡黄色 胎土　砂粒多し	D
11004	杯身	Fig31 —	口径 11.9 残存高 3.8 たちあがり高 1.4	たちあがりは直線的に内傾し、端部は丸い。受部は浅く水平に横にはる。底部は不明だが平坦になろう。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端から1.8㎝の所より回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　青灰色	C
11005	杯身	Fig31 —	残存高 3.5 たちあがり高 1.4	たちあがりは直立気味で、端部はやや尖る。受部は断面三角形で下り気味。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.4㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　青灰色	C

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
12021	杯身	Fig33 PL13	口径径12.1 器高　3.8 たちあがり高 1.0	たちあがりは内傾し、中間で軽い稜をもってやや直立する。端部は丸い。受部は浅く短かく上外方へのびる。底部は浅く平坦。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.6㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　不良、軟質 色調　淡青灰色 胎土　精良	D
12022	杯蓋	Fig60 PL31	口径　13.1 器高　4.1	口縁部は外側へ強くはり、端部は丸い。天井部は平坦に近く、丸味をもって口縁部へと移行する。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整、口縁部外面にナデは特に強い 外面　底部は口縁部端より3.3 ㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色 胎土　砂粒若干含む	D
13006	杯身	Fig36 PL18	口径　11.7 器高　4.5 たちあがり高 1.7	たちあがりは長く、内傾してのち、やや直立気味になる。端部は基部と同等の厚みを保っている。端部内側に稜のにぶく浅い段を有する。受部はたちあがりとの境に沈線をめぐらし、浅い底部は焼き歪みしているが平坦で、直線的に上外方へ開いて受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.4㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰～灰黒色 胎土　砂粒多し	A
13007	杯身	Fig36 PL18	口径　11.8 器高　4.7 たちあがり高 1.4	たちあがりは直線的に内傾し、端部は内側に稜の丸い凹面を有する。受部は外上方へのび、断面薄い。底部は浅く平坦に近く、内湾しながら大きく開き、受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部直下まで回転ヘラ削り調整 内面　底部は青海波叩の上不定方向ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色 胎土　密	A
13009	杯身	Fig36 PL18	口径　11.3 器高　4.6 たちあがり高 1.4	たちあがりは強く内傾してのび、その中間に強いナデ稜をもつ。後若干立ち上る。端部の内側に稜の弱い段を有する。受部はたちあがりとの境に沈線をめぐらし、浅く短かい。底部は浅く丸い	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より1.6㎝の所より回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色	A
13010	杯蓋	Fig36 PL18	口径　14.9 器高　5.6 稜径　14.6	口縁部が内湾気味に下り、外反して端部に至る。端部は内傾する凹部を有する。稜部は明瞭で鋭く、口縁部との間に浅い沈線を有する。天井部は浅く、やや丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は稜端から8㎜の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　暗灰色～黒色 胎土　若干砂粒含む	A
13011	杯蓋	Fig36 PL18	口径　13.3 器高　5.0	口縁部はふくらみをもって直立し、部分的にその後若干外反する。端部は内側に稜の丸い段を形成する。天井部との境に深い沈線を有する。天井部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線端より1㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　不良、軟質 色調　淡灰色 表面磨耗し、口縁部内面にススト付着	A
13012	壺	Fig36 PL18	頸部径　8.0 胴部径　12.8 残存高　10.7	球形胴部をもち、口縁部は直立してのち、強く外反すると思われる。	ワズミ、ミズビキ成形 外面　平行叩調整　肩部はその上、カキメ＋ヨコナデ、胴部はその上カキメ、底部はその上、ヨコナデ	焼成　良好、堅緻 色調　灰色～灰黒色 胎土　精良	A
13014	杯身	Fig36 PL18	口径　12.5 器高　4.7 たちあがり高 1.2	たちあがりは直線的に内傾してのち、端部近くでやや直立気味になる。端部内側に内傾する狭小な凹面をもつ。受部はたちあがりとの境に一条の沈線を有し、上外方へのびる。断面三角形である。底部は平坦で薄い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.2㎝の所まで回転ヘラ削り調整 内面　底部は青海波叩の上不定方向ナデ	焼成　良好、堅緻 色調　淡青灰色 体部外面に窯炭化物付着し底部に重ね焼痕あり	A

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
13015	杯身	Fig36 PL18	口径　11.2 器高　5.2 たちあがり高 1.5	たちあがりは内傾してのち、若干立ち上る。端部は内側に稜の浅い丸い凹部を有する。受部との境に一条の沈線をめぐらす。受部は細く上外方へのびる。底部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色 胎土　若干砂粒含む 外面に窯炭化物付着	A
13016	杯蓋	Fig36 PL18	口径　13.6 器高　5.6	口縁部は凹凸をもちながらも外反気味に下り、端部にいたる。端部内側に稜の丸い段部を形成している。天井部との境に沈線を有し、天井部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線端より回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色 胎土　密	A
18001	杯身	Fig41 PL22	口径　11.6 器高　4.1 たちあがり高 0.8	たちあがりは内傾し、ゆるやかに直立気味になる。端部は鋭く尖る。受部は浅く、短かく水平にのびる。底部は浅く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は受部端より2.8cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色 胎土　砂粒含む	E
18002	杯蓋	Fig41 PL22	口径　12.4 器高　4.2	口縁部は直立し、端部近くでやや外反する。端部は丸い。天井部は浅く丸い。口縁部との境に稜をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁部端より4.7cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　天井部は不定方向ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　暗橙色 胎土　精良	E
20001	杯蓋	Fig45 PL22	口径　13.2 器高　約5.3	口縁部は直立し、中間で強いナデ稜をもって端部近くで外反する。端部は丸い。天井部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁部端より4.4cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色	C
20002	杯身	Fig60 PL22	口径　12.0 残存高　4.2 たちあがり高 1.7	たちあがりは内傾し、スムーズに直立して端部にいたる。端部内側に狭小な段部を有する。受部との境に一条の沈線が入る。受部は薄く水平にのびる。底部は深く丸いと推定される。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.2cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰黒色	A
20007	杯蓋	Fig60 —	口径　13.6 器高　4.2	口縁部はやや外方へ直線的に下がる。端部内側は内傾し稜をもつ、天井部との境に2条の沈線をめぐらしている。天井部は浅く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線端より2.1cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰色	C
21016	杯身	Fig48 PL22	口径　11.3 器高　4.4 たちあがり高 1.1	たちあがりは内傾したのち端部近くで直立する。端部は丸い。内面は体部との境に明瞭な稜を生じている。受部は断面三角形で水平にのび、端部は尖る。底部は浅く丸味をもち、外反してのち上外方へのびて受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より3cmの所からヘラ削り調整 内面　底部は青海波叩の上一部不定方向ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　青灰色	E
21017	杯蓋	Fig48 PL22	口径　12.5 器高　4.0	口縁部は内湾しながら下り、端部は直立する。天井部との境に一条の沈線をめぐらしている。天井部は浅く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線直上より回転ヘラ削り調整 内面　天井部は一部青海波叩が残り、不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　細砂粒含む	C

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
22002	杯身	Fig52 PL26	口径　10.7 器高　5.2 たちあがり高 1.5	たちあがりは内傾し、中間よりやや直立する。端部内側は内傾する凹面を有している。受部は浅く水平にのびる。底部は深く丸い。内湾しながらのびてのち、外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部、受部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　青灰色	A
23001	甕	— PL26	口径　18.8 残存高　9.5	口頸部は短かく強く外反し、端部は折りかえして丸く仕上げられている。肩部は下り気味である。	ワズミ、ミズビキ成形 口頸部　内外面は回転ナデ調整 肩部　外面は平行叩 内面は青海波叩	焼成　不良、軟質 色調　灰白色 胎土　砂粒含む 器面　磨耗	C
23003	杯蓋	Fig55 PL26	口径　13.2 器高　4.3	口縁部は内湾しながら下がり、端部は直立し断面は丸い、天井部との境に2条の浅い沈線をめぐらしている。天井部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線端より1.6cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰褐色	C
23004	杯身	Fig55 —	口径　11.2 器高　4.1 たちあがり高 0.8	たちあがりの内傾は甚しく、端部は丸い。受部は浅く平坦で上外方へのびる。底部は浅く丸い。内湾して開き、外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.9cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　僅かに砂粒含む	C
25004	杯身	Fig60 PL29	口径　10.3 器高　5.0 たちあがり高 1.6	たちあがりはふくらみをもって内傾したのち直立する。端部内側にごく浅い内傾する凹面を有している。受部は部厚く水平にのび端部は尖る。底部は深く平坦で、内湾しながらのび、短かく外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.8cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　不良、軟質 色調　淡青灰色 胎土　密	A
25036	杯蓋	Fig60 PL29	口径　12.6 器高　4.3 稜径　12.4	口縁部は中ぶくらみで直立し、端部近くで外反する。端部内側に内傾する凹面を有する。稜部は丸く鈍い。天井部は浅く丸味をもち、内湾しながら下って外反して稜端にいたる。	マキアゲ、ミビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は稜端より2.1cmの所から回転ヘラ削り調整 ナデ及びヘラ削り調整は丁寧	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色 胎土　砂粒含む	A
25041	杯蓋	Fig60 PL29	口径　12.6 器高　5.1 稜径　12.1	口縁部は中ぶくらみして僅かに外に開く。薄手であり端部がやや太目である。端部内側に内傾する。浅い凹面を有している。稜部との境目に一条の沈線が入る。天井部は浅く丸く、内湾しながら下って稜部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は稜端まで回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰色 胎土　砂粒含む	A
25042	杯蓋	Fig60 PL29	口径　13.4 器高　4.7 稜径　13.9	口縁部は直立し、端部近くで僅かに内湾する。端部内側に稜の丸い段部を有する。稜部と口縁部との境は明瞭である。天井部は浅く丸味をもち、内湾しながら下って稜部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は稜端より2.2cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　天井部は不定方向ナデ調整 調整は丁寧	焼成　良好、堅緻 色調　灰色～灰黒色 胎土　砂粒多く含む	A
25045	高杯	Fig60 PL29	口径　13.2 脚裾径 8.4 器高　9.6	口縁部は直立気味から外反する。端部は丸い。体底部との境に深い一条の沈線をめぐらす。底部は平坦である。脚部の基部は広い、柱部に3個の長方形透しを設けている。裾は外反しながら下って端部近くで水平に短かくのびる。端部中央に一条の沈線をひいている。	マキアゲ、ミズビキ成形 杯部　口縁部は内外面回転ナデ調整。 外面底部は沈線端より1.2cmの所から回転ヘラ削り調整 脚部　内外面回転ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　淡灰色 胎土　密	A

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
25125	杯身	Fig60 —	口径　12.7 器高　3.8 たちあがり高 1.0	たちあがりは内傾し、ややふくらみをもってから端部にいたる。端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は浅く平坦である。内湾して大きく開いてのち、僅かに外反して受部にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受端部より3.1㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面　底部は青海波叩の上不定方向ナデ調整	焼成　やや軟質 色調　暗灰色 胎土　砂粒多く含む	D
25126	杯蓋	Fig60 PL31	口径　15.1 器高　4.2	口縁部は内湾して下り、外反して端部にいたる。端部内側に内傾する僅かな稜がある。天井部との境に一条の沈線をめぐらしている。天井部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線端から1.1㎝の所から粗い回転ヘラ削り調整 内面　天井部は不定方向ナデ調整	焼成　やや軟質 色調　青灰色 胎土　砂粒多く含む	C
B023	杯身	Fig60 PL32	口径　12.5 器高　4.7 たちあがり高 0.7	たちあがりは僅かのふくらみをもって内傾し、中間より若干直立気味になる。受部は浅く、短かく上外方へのびる。底部は深く丸味をもってのび、短かく外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.8㎝の所から粗い回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰黒色 胎土　密	E
B024	杯蓋	Fig60 PL31	口径　13.3 器高　4.3	浅く丸い天井部から内湾しながらのびた体部は直立し、軽い稜をもって内傾して口縁端部へいたる。端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁端から3.8㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　暗灰色～灰黒色 胎土　砂粒多く含む天井部ヘラ記号あり	E
B025	杯蓋	Fig60 PL31	口径　12.8 器高　3.9	浅く平坦な天井部から内湾しながらのびた体部は直立し、そのまま口縁部にいたる。端部はやや尖る。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁部から3.6㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　軟質 色調　淡青灰色 胎土　密 天井部　ヘラ記号あり	E
B026	蓋	Fig60 PL31	口径　11.2 残存高　3.8	身受けのかえりは内傾してのち直立する。端部は丸い。受部は下外方へのび端部は丸い。天井部は不明だが、ボタン状つまみがつくと考えられる。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 天井部はカキメ調整	焼成　やや軟質 色調　暗青灰色 胎土　密	D
B027	蓋	Fig60 PL31	口径　12.1 器高　5.4 つまみ径　2.8	口縁部は外面なかぶくらみしながら直立し、端部は丸い。天井部は深く丸い。天井部中央に中心の凹むつまみを有す	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は口縁端より2.8㎝の所から回転ヘラ削り調整 つまみ　貼り付け	焼成　軟質 色調　淡青灰色 胎土　密 天井部　ヘラ記号あり	D
B032	杯蓋	Fig60 PL30	口径　14.8 器高　4.8	口縁部は直立し、短かく外反して口縁端にいたる。端部内側に稜の丸い内傾する凹面を有する。天井部との境に一条の沈線をめぐらす。天井部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　天井部は沈線端より5㎜の所から回転ヘラ削り	焼成　軟質 色調　淡青灰色 胎土　密	B
B035	蓋	—	口径　10.1 器高　3.8	口縁部は外反したのち、短かく直立する。端部は尖る。天井部は深く平坦で、体部中央に稜が入る。	マキアゲ、ミズビキ成形 丁寧な回転ナデ調整 外面　天井部は口縁端より3㎝の所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　淡青灰色 胎土　密	E

番号	器種	挿図番号	図版番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
B036	杯身	Fig60	PL32	口径 10.7 器高 4.2 たちあがり高 0.7	たちあがりは内傾し、そり気味に端部へいたる。端部は尖る。受部は水平にのび、断面三角形を呈する。底部は深く丸い。全体に薄手である。	マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整 外面　底部は受部端より2.9cmの所から回転ヘラ削り調整	焼成　良好、堅緻 色調　淡青灰色～灰色 胎土　砂粒多く含む	E

土　師　器

杯 (Fig. 62, PL. 33～36, Tab. 4)

69個体以上出土している。住居跡床面出土のものとしては9号・12号・21号跡から検出された。25号跡覆土中からは45個体以上が集中して出土しており，それらを中心として分類したのが Fig. 62 である。以下，成形，調整，彩色，型態について主に記す。なお，器高が口径の½以上のものは椀として区別した。

成　　形

成形法としては2種類ある。1）須恵器杯の成形と同様でマキアゲ，ミズビキしている。杯体部から口縁部の内外面にかけてのヒキダシは丁寧で，器厚はほぼ均等で薄い。2）マキアゲでミズビキしない類である。当然器厚に凹凸があり厚手である。両種は製作者の差であろう。ロクロを持つ作者と持たない作者の差である。ロクロを持った作者とは須恵器の製作者と同一であった可能性もある。09007・12003・12018に見られる×印のヘラ記号は裏ノ田窯跡出土須恵器にも観察され，上記の指摘は充分可能なことであろう。一方，ロクロを使用しない杯は専業者によって専門的に製作されたものではなく，それに似せつつも自家製に近い状況の下に製作されたと考えられる。

調　　整

外面体底部は停止ヘラ削り，停止ヘラ削りの上をヨコナデあるいはハケメを施している。ヘラ磨きした例も多い。口縁部はヨコナデ調整あるいはヘラ磨きである。内面はナデ，ヨコナデ調整あるいはヘラ磨きである。

前記成形のうち，ロクロ成形のものにはヘラ磨きした例を含み，ロクロ未使用の例はその逆である。

彩　　色

使用された顔料は酸化鉄，丹・漆・ススである。酸化鉄は鉄分の多い土砂を水ゴシし，製品胎土の上がけスリップとして用いたものである。ススは製品生乾きの状態でニカワでといて塗り込んだもので，後世黒色土器あるいは瓦器のように燻し込んだものではない。これらの顔料は単一かあるいは2種類組み合わせて用いる例が多い。後述するように型態によって彩色する部位や使用される顔料に差異があるようである。

型　　態 (Fig. 62, PL. 33～36)

口縁部の形状によって8類に区分される。

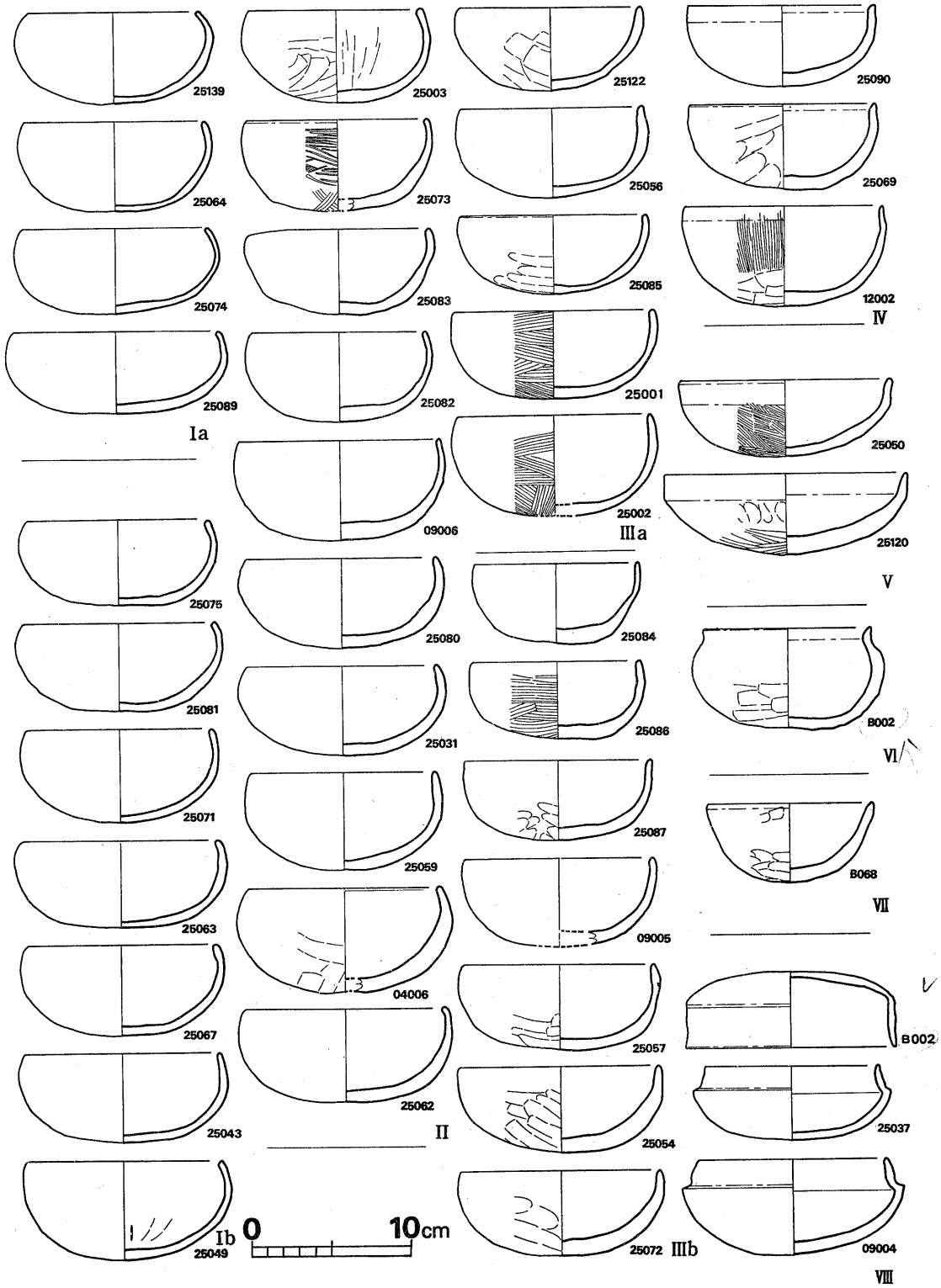


Fig. 62　各地点出土土師器杯実測図（縮尺 1/4）

Ⅰ　口縁部は内彎甚しく，内側に紆れ込むように曲る。従って最大胴径に比して器高は低い。

Ⅱ　口縁部は内彎するが，Ⅰ類ほど極端ではない。

Ⅲ　口縁部内面が直立し，外面はやや内彎気味である。

Ⅳ　口縁部外面が直立する。体部との境に軽い稜をもつものもある。口縁端部は内傾する平坦面をもつ。

Ⅴ　口縁部は短かく外反する。

Ⅵ　尖り気味の底部から大きく開き，稜をもって口縁部は直立する。

Ⅶ　口径に比して器高が深く，底部から口縁部まで椀形に開く。

Ⅷ　須恵器蓋杯形の類である。

以上8種それぞれの成形法，調整法，彩色法に差がみられる。成形法のうちロクロミズビキはⅠ～Ⅲ及びⅧ類の製作にみられる。特にⅠ類とⅧ類は全てロクロ使用である。Ⅳ～Ⅶ類は全てロクロ未使用である。調整法のうちハケメはⅡ・Ⅲ類に，ヘラ磨きはⅠ～Ⅲ類及びⅧ類にみられる。Ⅷのヘラ磨きは丁寧である。彩色はⅠ～Ⅲ類とⅧ類のほとんどにみられ，Ⅳ類の一部(21002)もスリップがかけられている。漆はⅧ類の全てに塗られており，Ⅰ～Ⅲ類の一部(25061・25063・25064・25067・25055・25082)の外面にも塗られ，内面はススかスリップがけである。

各型式で時期の知りうるものは，第9・12・21号住居跡床面出土の例である。第9号跡はB式期でⅢ類を，第12号跡はD式期でⅠ～Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ類を，第21号跡はE式期でⅡ～Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ類を出土している。Ⅰ類はD式期にのみみられ，Ⅶ・ⅧはD・E式期に認知される。つまりD式期に最も多彩になるといえる。なおⅤ類とⅥ類については所属時期が不明である。津古内畑第2号住居跡出土遺物のセットを考慮するならば，Ⅲ類はA式期相当かそれ以前にまで溯るものと考えられる。

Tab. 4　土　師　器　杯　観　察　表

番号	挿図番号 図版番号	法量			型式	成形	調整				彩色				備考		時期
		口径	胴径	器高			外面		内面		外面		内面		胎土	焼成	
							体底部	口縁部	体底部	口縁部	体底部	口縁部	体底部	口縁部			
04006	Fig62 PL34	12.2	13.6	6.5	Ⅱ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	良	—
09004	Fig62 PL36	12.0	14.0	5.95	Ⅷ	L	ヨコヘラ削りの上、ヘラ磨き	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	ウルシ	ウルシ	ウルシ	ウルシ	密	良	—
09005	Fig62 —	11.8	12.3	5.5	Ⅲ	L	ヘラ磨き	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
09006	Fig62 PL34	12.3	13.3	6.2	Ⅱ	L	ヘラ磨き	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
12001	Fig33 PL13	11.1	12.5	5.4	Ⅱ	L	底平行削り中ヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	D
12002	Fig62 PL36	12.5	12.8	6.3	Ⅳ	T	ハケメヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	ス　ス	ス　ス	ス　ス	ス　ス	粗	良	D
12003	Fig33 PL13	11.7	12.3	5.2	Ⅰ	L	底削りは大きく上をナデ？中ヘラ削り	ナ　デ	不　明	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	良	D
12004	Fig33 PL13	12.0	12.6	4.6	Ⅱ	L	ヘラ削り上、ナデ	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	D
12005	Fig33 PL13	11.4	12.8	5.4	Ⅱ	L	ヘラ削り？	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	粗	不良	D
12006	Fig33 PL13	12.55	—	4.6	Ⅷ	L	櫛目の上ナデ	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	ウルシ	ウルシ	ウルシ	ウルシ	密	不良	D

※　成形の項のTは手づくね、Lはロクロの意

番号	挿図番号 図版番号	法量			型式	成形	調整				彩色				備考		時期
		口径	胴径	器高			外面		内面		外面		内面		胎土	焼成	
							体底部	口縁部	体底部	口縁部	体底部	口縁部	体底部	口縁部			
12017	Fig33 PL13	12.0	12.35	4.7	Ⅵ	T	停止ヘラ削り、底部磨キナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ?	—	—	スリップ	スリップ	密	良	D
12018	Fig33 PL13	12.3	13.0	5.1	Ⅱ	L	ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	D
12019	Fig33 —	11.8	12.8	5.2	Ⅱ	L	ヘラ削りの上、磨き	ヨコ磨き	ナデ(磨き)	ナデ(磨き)	—	—	—	—	密	良	D
12020	Fig33 —	9.7	11.05	5.5	Ⅶ	T	停止ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
12023	Fig33 PL13	13.1	14.0	6.4	Ⅱ	L	磨き	磨き	ナデ	磨き	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	良	D
21001	Fig48 PL23	14.0	—	4.4	Ⅷ	L	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	—	—	—	—	密	不良	E
21002	Fig48 PL23	13.4	—	5.3	Ⅳ	L	ハケメヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ス ス	ス ス	ス ス	ス ス	粗	良	E
21005	Fig48 PL23	11.1	—	4.55	Ⅶ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	E
21013	Fig48 PL23	13.0	—	5.6	Ⅳ	L	ヘラ削りの上ヘラナデ	ヨコナデ	不明	ヨコナデ	—	スリップ	—	スリップ	密	不良	E
21014	Fig48 PL23	11.4	12.5	5.25	Ⅱ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	不良	E
21015	Fig48 PL23	12.3	12.7	5.25	Ⅲ	T	停止ヘラ削り	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	E
25001	Fig62 —	12.2	13.0	6.3	Ⅲ	T	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—		良	—
25002	Fig62 PL35	12.6	13.0	5.5	Ⅲ	T	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	良	—	—
25003	Fig62 PL34	11.0	11.9	5.8	Ⅱ	T	停止ヘラ削り	ヨコナデ	ヘラ平行移動ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	蜜	良	—
25035	—	11.1	12.1	5.75	Ⅷ	L	ヘラ磨き	ヘラ磨き	不明	不明	ウルシ	ウルシ	—	ス ス	蜜	不良	—
25037	Fig62 PL36	10.8	12.3	4.7	Ⅷ	L	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ス ス	ス ス	ス ス	ス ス	蜜	不良	—
25043	Fig62 PL33	12.3	13.2	5.6	Ⅱ	L	削りの上ヘラ磨き	削りの上ヘラ磨き	ナデ	ナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	蜜	不良	—
25049	Fig62 PL33	12.25	13.15	6.2	Ⅱ	T	ヘラ削りの上ナデ	ヨコナデ	ヘラ削りの上ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	—
25050	Fig62 PL36	13.05	13.5	4.8	Ⅴ	T	粗いハケメ	ヨコナデ	不明	ヨコナデ	—	—	—	—	砂混じるが密	良	—
25051	— PL35	11.7	12.75	5.4	Ⅲ	L	ヘラ削り	不明	不明	不明	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	粗	不良	—
25052	—	12.6	13.0	4.1	Ⅲ	L	ヘラ停止削りの上、ナデ?	ヘラ停止削りの上ナデ	不明	不明	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25053	—	12.45	13.1	5.85	Ⅱ	L	ヘラ磨きの上ナデ	ヘラ磨きの上ナデ	ヘラ磨きの上ナデ	ヘラ磨きの上ナデ	丹塗りスリップ	丹塗りスリップ	丹塗りスリップ	丹塗りスリップ	密	不良	—
25054	Fig62 PL35	12.4	12.8	5.35	Ⅲ	L	停止ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	—	—	密	不良	—
25055	—	12.1	13.1	5.95	Ⅲ	L	不明	不明	不明	不明	ウルシ	ウルシ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25056	Fig62 —	11.4	12.0	5.65	Ⅲ	L	不明	不明	不明	不明	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	粗	不良	—
25057	Fig62 —	11.0	11.8	5.6	Ⅵ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
25059	Fig62 PL34	11.6	12.6	6.1	Ⅱ	T	底ナデ中ヘラ削り	磨き	ナデ	磨き	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	良	—
25061	— PL34	12.0	13.1	5.6	Ⅱ	L	磨き	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ウルシ	ウルシ	ス ス	ス ス	密	良	—
25062	Fig62 PL34	12.4	13.4	5.8	Ⅱ	L	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	ウルシ	ス ス	ス ス	密	良	—
25063	Fig62 PL33	12.4	13.5	5.4	Ⅰ	L	磨き	磨き	磨き	磨き	ウルシ	ウルシ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25064	Fig62 PL33	11.5	12.5	5.6	Ⅰ	L	磨き	磨き	磨き	磨き	ウルシ	ウルシ	スリップ	スリップ	密	良	—
25067	Fig62 PL33	12.0	13.0	5.6	Ⅱ	L	磨き	磨き	磨き	磨き	—	ウルシ	スリップ	ウルシ	密	不良	—
25069	Fig62 PL36	11.7	12.0	5.35	Ⅳ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	—
25071	Fig62 PL33	11.8	12.5	5.8	Ⅱ	L	磨き	磨き	磨き	磨き	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	良	—
25072	Fig62 PL35	12.5	13.0	5.3	Ⅲ	T	ヘラ削りの上ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	—

番号	挿図番号	図版番号	法量			型式	成形	調整				彩色				備考		時期
			口径	胴径	器高			外面		内面		外面		内面		胎土	焼成	
								体底部	口縁部	体底部	口縁部	体底部	口縁部	体底部	口縁部			
25073	Fig62	PL34	11.4	12.0	5.6	Ⅱ	L	ハケメの上磨き	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25074	Fig62	PL33	11.8	13.1	5.3	Ⅰ	L	磨き	ヨコナデ	磨き	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25075	Fig62	PL33	11.6	12.6	5.3	Ⅰ	L	磨き	磨き	ナデ	ヨコナデ	—	ウルシ	ウルシ	ウルシ	密	不良	—
25078	—		9.6	—	4.8	Ⅲ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	(なめらか)不明	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	粗	良	—
25079	—		10.4	12.0	5.6	Ⅱ	T	ハケ目	ハケ目	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
25080	Fig62	PL34	12.0	12.95	5.6	Ⅱ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	スリップ	スリップ	やや粗	良	—
25081	Fig62	PL33	12.2	13.2	5.5	Ⅱ	L	底ナデ中間ヘラ削り、ハケ目	磨き	ナデ?	磨き	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25082	Fig62	PL34	11.2	11.8	5.6	Ⅱ	L	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ウルシ	ウルシ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25083	Fig62	PL34	11.4	12.0	5.3	Ⅱ	T	底ナデ中ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	不良	—
25084	Fig62	PL35	10.4	10.6	5.0	Ⅲ	T	ヘラ削り→ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	粗	良	—
25085	Fig62	PL35	11.7	12.0	4.9	Ⅲ	L	ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	不良	—
25086	Fig62	PL35	10.6	11.05	4.85	Ⅲ	T	底ナデ中ハケ目	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	粗	良	—
25087	Fig62	PL35	11.8	11.9	5.6	Ⅳ	T	ハケ目の上ヘラ削り	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	不良	—
25088	—		11.8	12.7	5.5	Ⅱ	L	磨き	磨き	磨き	磨き	ス ス	ス ス	ス ス	ス ス	密	良	—
25089	Fig62	PL33	13.1	14.2	5.1	Ⅰ	L	磨き	磨き	不明	磨き	スリップ	スリップ	スリップ	スリップ	密	不良	—
25090	Fig62	PL36	11.8	11.9	5.1	Ⅳ	T	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	不良	—
25120	Fig62	PL36	15.3	15.3	5.05	Ⅴ	L	上位指オサエ下位ヘラ削り上ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	—
25122	Fig62	—	11.35	11.8	5.2	Ⅲ	T	ヘラ削りの上ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	不良	—
25138	—		11.1	13.1	5.5	Ⅰ	L	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ナデ	ヘラ磨き	—	—	—	—	密	不良	—
25139	Fig62	—	10.8	12.7	5.7	Ⅰ	L	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ス ス	ス ス	スリップ	スリップ	密	良	—
B002	Fig62	PL36	10.65	12.1	6.3	Ⅵ	T	底不明(ナデ)中ヘラ削り	ヨコナデ	底ナデ中ヨコヘラ削り	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
B022	Fig62	PL36	13.25	13.15	4.7	Ⅷ	T	ヨコヘラ削りの上ナデ	ヨコナデ	ヨコヘラ削り	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
B068	Fig62	PL36	10.55	—	5.0	Ⅶ	T	ヘラ削り	削りの上ヨコナデ	ナデ	削りの上ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—

椀 (Fig. 63, PL. 37, Tab. 5)

10個体以上出土している。住居跡床面出土のものとしては第9・10・11・12号跡から検出された。25号跡覆土中からは5個体以上出土した。

成形法は全てマキアギでロクロミズビキしたものはない。外面停止ヘラ削りで，その上からハケメを施した例も多い。口縁部内外面はヨコナデし，内底面をナデている。11001はヘラ磨きしている。彩色したものはほとんどなく，僅かに25058がスリップがけしている。

口縁部の形態により3区分される。

Ⅰ　口縁部が内彎する類である。25058は口縁部が他例に比して薄手で，端部が僅かに内湾する。

Ⅱ　口縁部が直立する類である。大小2種あり，10009が大形品である。

Ⅲ　口縁部が外反する類である。12016がこの類に含まれる。口縁部は体部との境に稜をも

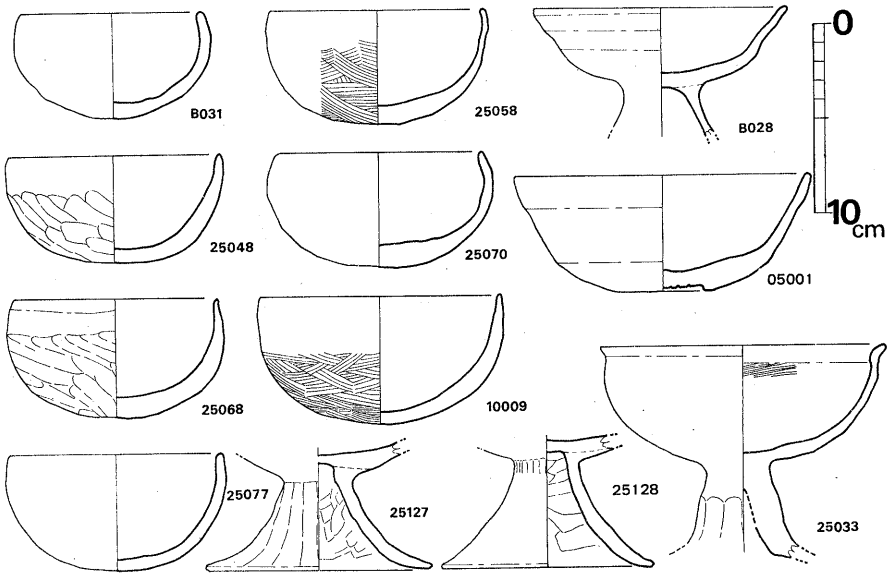


Fig. 63　各地点出土　土師器椀・高杯実測図（縮尺 1/4）

って軽く外反し，端部はやや尖る。

出土例が少ないので時期的な型式差を述べることは困難である。B～D式期に存在する。

Tab. 5　土　師　器　椀　観　察　表

番号	挿図番号 図版番号	法量 口径	法量 胴径	法量 器高	型式	成形	調整 外面 体底部	調整 外面 口縁部	調整 内面 体底部	調整 内面 口縁部	彩色 外面 体底部	彩色 外面 口縁部	彩色 内面 体底部	彩色 内面 口縁部	備考 胎土	備考 焼成	時期
09003	Fig23 PL10	10.9	11.2	5.7	Ⅱ	T	底ヨコナデ 中ハケメ	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	B
10009	Fig63 PL37	12.6	13.05	6.8	Ⅱ	—	ハケメ	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	D
11001	Fig31 PL11	11.7	12.6	6.9	Ⅱ	T	条痕 ハケメ	ヘラ ハケメ	ヘラ磨き	ヘラ磨き	—	—	—	—	密	良	C
12016	Fig33 —	12.0	—	6.4	Ⅲ	T	停止ヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	D
25048	Fig63 PL37	11.1	11.2	5.6	Ⅱ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	—
25058	Fig63 PL37	11.3	11.8	6.0	Ⅱ	T	中ハケメ	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	スリップ	スリップ	スリップ	—	粗	良	—
25068	Fig63 PL37	10.7	11.5	6.3	Ⅱ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
25070	Fig63 PL37	11.0	12.0	6.0	Ⅰ	T	底ナデ 中ヘラ削り	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	良	—
25077	Fig63 PL37	11.3	11.8	6.1	Ⅱ	T	ナデ？	ヨコナデ	ナ　デ	ヨコナデ	—	—	—	—	密	不良	—
B031	Fig63 —	9.4	10.4	5.6	Ⅰ	T	ヘラ削り	ヨコナデ	指ナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	粗	良	—

※　成形の項のTは手づくねの意

高杯 (Fig. 63, PL. 38, Tab. 6)

10個体以上出土している。このうち住居跡床面出土のものは第10・21・22号跡から検出された。25号跡覆土中からは3個体出土した。

ワズミ成形である。杯部は少なくとも底部・体部・口縁の三段積みと思われる。脚部との接

Tab. 6　土師器高杯観察表

番号	図版番号	挿図番号	法量 杯部 口径	法量 杯部 高	法量 脚部 脚裾径	法量 脚部 高	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
05001	Fig63	PL38	15.3	6.1	—	—	Ⅰa	口縁部は短かく、直線的に開き端部は丸い。体部との境に稜を生じている。体部はく字に曲り脚接合部へいたる。	内外面　ヨコナデ 脚接合部は径4.2cmの円形くぼみをもち、中に同心円刻みを入れている。	焼成　不良、軟質 色調　赤褐色 胎土　精良 内面に使用痕あり	
10002	Fig29	—	14.8	5.5	8.7	6.6	Ⅰa	口縁部は若干内湾気味に開き、端部は丸い。体部との境は内外面共稜を生じている。体部は外反して稜部にいたり、内湾して脚接合部へいたる。稜は不明瞭である。脚は基部が狭く外反してやや平坦な端部へいたる。	杯部内外面　ヨコナデ 脚部調整不明 脚接合は杯底部をくぼめる	焼成　不良、軟質 色調　黄灰色 胎土　密、僅か砂粒含む	D
10003	Fig29	PL11	15.1	5.5	—	—	Ⅰa	口縁部は外面ナデによる凹凸が若干あるが、直線的に外傾し、端部は丸い。体部に4本の沈線をめぐらし、内湾して脚接合部にいたる。	外面　ヨコナデ　丹塗り 内面　口縁部ヨコナデ 底部ナデ	焼成　不良、軟質 色調　黄褐色 胎土　密	D
21004	Fig48	PL23	—	—	10.0	4.1	Ⅱb	杯部は球形で、体部中央が僅かに屈曲する。脚部は短かく、大きく外反して端部はそり上がる	杯部内面底部　ナデ調整 脚部外面　脚柱部ヘラ削り 脚端部ヨコナデ調整 内面　脚端部　ヨコナデ調整 脚接合は杯底部をくぼめる	焼成　良好、堅緻 色調　赤褐色 胎土　密	E
22001	Fig52	PL25	14.8	4.3	10.8	9.3	Ⅱa	杯部は大きく開く丸い鉢形を呈し、口縁部下に一条の沈線をめぐらしている。端部内側に僅かな内傾する凹面をもつ。脚部は基部が細く、長くのびて裾部にいたる。端部は平坦である。	器面がまったく剝げ、調整法不明 脚接合は杯底部をくぼめる	焼成　不良やや軟質 色調　淡褐色 胎土　密 竈支脚に使用	A
22003	Fig52	PL26	—	—	—	—	Ⅱa	杯部は大きく開く丸い鉢形を呈す。脚は基部がやや広く、大きく広がる。	器面がまったく剝げ、調整法不明	焼成　不良、軟質 色調　淡黄橙色 胎土　密	A
25033	Fig63	PL38	15.1	6.1	—	—	Ⅲ	杯部は口縁部が外反する。端部は尖り、内面は肥厚して体部との境に稜を生じている。体底部は直立してのち丸い椀形を呈する。脚部は基部が細く、ふくらみをもって外傾して立ったのち広い裾部へと移る。	杯部外面　器面剝落して、調整法不明 内面　ヘラ削り 脚部外面　ヘラ削り 杯部内外面　丹塗り 脚接合法不明	焼成　不良、軟質 色調　黄橙～赤橙色 胎土　密、若干砂含む	
25127	Fig63	PL38	—	—	—	12.0	Ⅱb?	杯部は底部を残すのみで、外上方へのびる。脚部は基部が締り短かく大きく開く裾部をもち、端部はやや尖る。	杯部外面　ヨコナデ調整 脚部外面　タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄橙色 胎土　密	
25128	Fig63	PL38	—	—	—	11.3	Ⅱb?	杯部は底部をのこすのみで、外上方へ内湾気味にのびる。脚部は基部が締り、短かく大きく開く裾部をもち、端部は丸い。	杯部底部外面　ヘラ磨き調整 脚部外面　ヘラ磨き調整 内面　ヨコヘラ削り、裾端部ヨコナデ調整 外面　丹塗り	焼成　良好 色調　明橙色 胎土　密	
B 028	Fig63	PL38	13.3	4.0	—	—	Ⅰb	口縁部は外面ナデによる凹凸はあるが直線的に開き、端部はやや尖る。体部との境は丸く、稜はにぶい。体底部は内湾して脚接合部へいたる。	器面剝落して調整法不明 脚接合は、中空脚貼り付け	焼成　不良、軟質 色調　淡黄橙色 胎土　密	

合法には杯底部を円形にヘラで削り取り，刻みを入れて貼り付ける方法と，中空の脚頂部を引き伸ばして貼る方法とがある。

杯部の形状により3種に区分される。

Ⅰ　底部・体部・口縁部それぞれの境に緩い稜をもち，口縁部は直線的に上外方へのびる。大小2種がある。10003は体部に4本の沈線をめぐらしており，外面丹塗りである。脚は10004のみが完形であり，裾径は杯部口径に比して小さい。

Ⅱ　端部まで丸味をもって伸びる類である。2種に細分される。a）杯部の口径は大きく，浅い。脚部は基部が細く，柱部が長い。22001と22002が含まれる。b）完形品はないが杯部の口径は小さく，深いと思われる。脚部は短かく大きく開く。21004，25127，25128が含まれる。

Ⅲ　口縁部が短かく外反する。25033は杯部が深く，薄手である。裾は大きく開くと思われる。

出土例が少なく各時期の器形を決定することは困難である。住居跡床面出土例でみると，Ⅰ—aはD式期，Ⅱ—aはA式期，Ⅱ—bはE式期である。Ⅲは時期が確認できない。但しⅢは類品が野黒坂遺跡第30号住居跡の床面一括遺物中及び西中隈遺跡第4号住居跡床面出土品中にみられ，A式期～B式期に比定される。

壺 (Fig. 64, PL. 39, Tab. 7)

壷の出土例は極めて少ない。甕として分類した中に球形胴部をもつ例があるが，高度の加熱を受けており，少くとも廃棄された時点では煮沸容器として使用されたものである。貯蔵容器は須恵器が用いられていたのだろうか。

大小2種あり，大形のⅡ類は口縁部の形状によりさらに細別される。a）口縁部は直立し，胴部は球状を呈する。b）口縁部は外上方へのび，胴部はやや下位が最も脹る。25102の内面には有機物が付着している。

鉢 (Fig. 64, PL. 45, Tab. 9)

計4点出土している。このうち住居跡床面から出土したのは13号跡と23号跡である。大小2種ある。

Ⅰ類　大形品で13017と25026が含まれる。13017は薄手である。口縁部は直立し，体部から底部にかけては球形である。25026は厚手である。歪が大きいが，口縁部から体部まで直立する。

Ⅱ類　小形品で05002と23002が含まれる。口縁部は前者が直立し，後者は外反するが，体部から底部にかけての球状は同質である。

出土例が少なく器種ごとの時期別は困難である。少くともA式期の13号跡からは小形品が出土しておらず，この時期には含まれない可能性があるといえる。

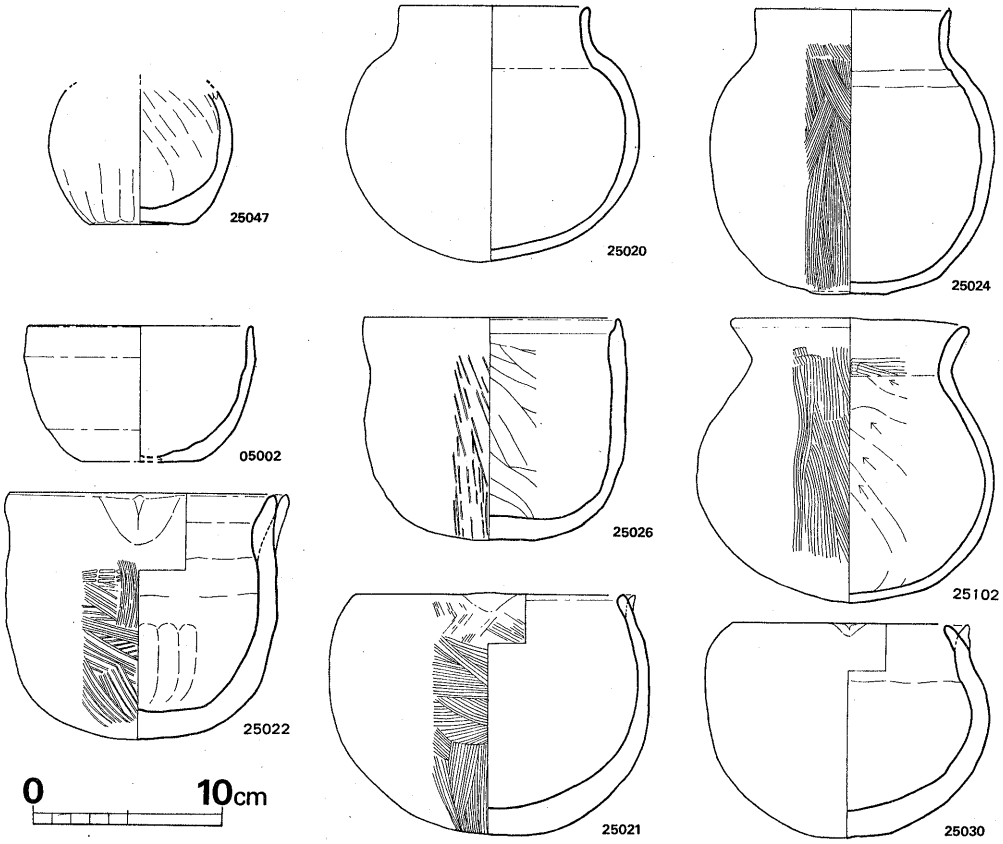


Fig. 64　各地点出土　土師器壺・鉢・片口鉢実測図（縮尺 1/4）

Tab. 7　土　師　器　壺　観　察　表

番号	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
21012	Fig48 PL24	口径 9.8 胴部径11.8 器高 9.2	Ⅰ	口縁部は短かく直立し、端部は尖り気味である。内面が肥厚する。胴部は偏球形で底部が若干平坦になる。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　肩部タテハケメの上ヨコナデ　胴部ヨコハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヘラナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　明橙色～暗橙色 胎土　密、精良	E
25020	Fig64 PL39	口径 10.0 胴部径15.7 器高 13.3	Ⅱa	口縁部は直立し、端部は丸い。体部との境目内面が僅かに稜をもつ。胴部は球形である。口縁部と底部は薄く肩部がやや部厚い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削りののちヘラ磨き調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヨコナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　赤橙色 胎土　密、精良	
25024	Fig64 PL39	口径 10.4 胴部径15.2 器高 14.7	Ⅱa	口縁部は直立し、端部は尖り、内側が内傾する。胴部は球形で底部はやや凸出して平坦である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部細いハケメ　底部ナデ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部粗いヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　黄橙色 胎土　砂粒多し	

番号	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
25102	Fig64 PL39	口径 12.3 胴部径15.6 器高 15.0	Ⅱb	口縁部は外上方へ直線的にのび、端部は丸い。胴部はや下位が最も張る。球形で底部は若干尖り気味である	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　密僅かに砂粒含む 胴部上半内面に有機物付着	

甕 (Fig. 65～67, PL. 40～43, Tab. 9)

完形品に近いもののみで63個体出土している。これらは大きさから3類に大別される。Fig. 65～67は第25号跡覆土中から出土したものを中心として分類した。

Ⅰ　小形甕である。胴部の形状から2種に細別される。a）胴部は直立気味になるか，僅かに下位が脹る類である。口縁部は短かく，外反度も弱い。b）胴部は球形に近く，肩がやや脹るものも含まれる。

Ⅱ　中形甕である。胴部から底部にかけての形状によって6類に細別される。a）胴の脹った鉢形で，口縁部は極く短かく外傾する。端部はやや平坦である。b）胴部は中央が最も脹る球形を呈し，口縁部は軽く外反して端部は丸い。c）頸部が締り，胴部は下位が最も脹っている。以上3種が球形胴の類である。d）肩から胴部中位が脹り，底部は丸く小さい。口縁部は軽く外反し，端部は直立気味で太く丸い。e）頸部は締り，口縁部は短かい。胴部中央から下位にかけてが最も脹る。以上2種が長胴の類である。f）口縁部から体部中位までほぼ直立し，底部に円盤を貼り付けている。

Ⅲ　大形の長胴甕である。大きく外反する口縁部を持ち頸部はよく締っている。底部が丸いもの(a)と，平底のもの(b)がある。

以上3種に大別し，それぞれをさらに細分した。その差異が編年的にどのような関係になるのか。参考となるはA式期の13号，B式期の1・4・9号，C式期の3・20号，D式期の12号，E式期の18・21・23号跡の床面出土甕類であろう。それぞれの出土甕型式は次の通りである。

右表のうちⅡ—a・e・fについては時期はまったく不明である。

Tab. 8　各時期出土甕分類一覧表

分類＼時期	Ⅰ		Ⅱ						Ⅲ	
	a	b	a	b	c	d	e	f	a	b
A		○	／	○	／		／	／	○	○
B	○	○	／	○	○	○	／	／	○	○
C	○		／			○	／	／		／
D		○	／	○	○		／	／	○	／
E	○	○	／		○		／	／	○	／

野黒坂遺跡第9・10類土器と比較してみる。9類土器を出土した43号住居跡出土品中第23図—9は，Ⅱ—a類の13001に近似している。10類土器のうち，第25図—24・26はⅠ—a類に近いが，平底である。25はⅠ—b類の04007に近い。第27図—24はⅢ—b類の01003に類似するが，胴脹りである。第30図—13も同様である。第29図—6はⅠ—a類の03002に，

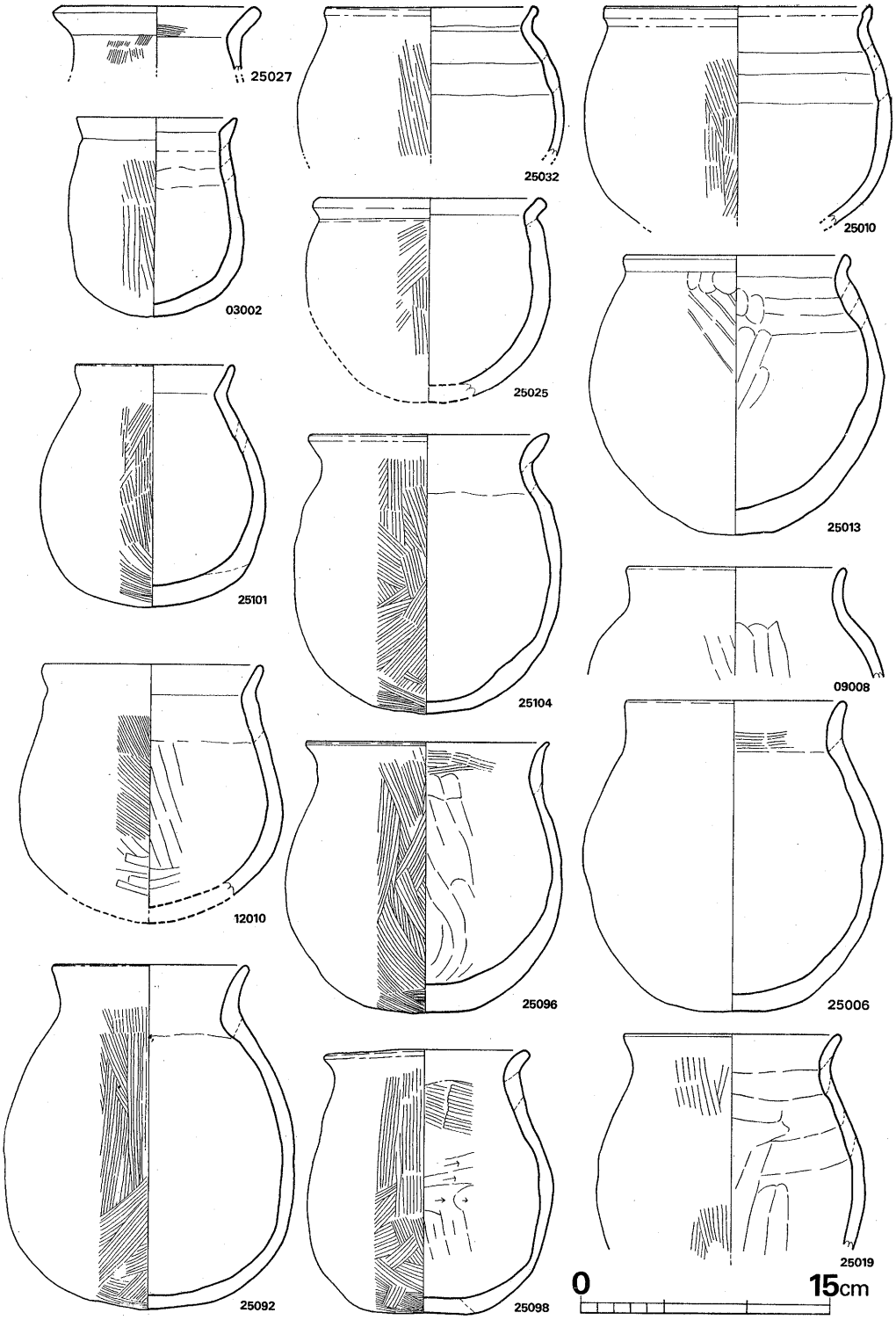


Fig. 65 各地点出土土師器甕実測図①（縮尺 1/4）

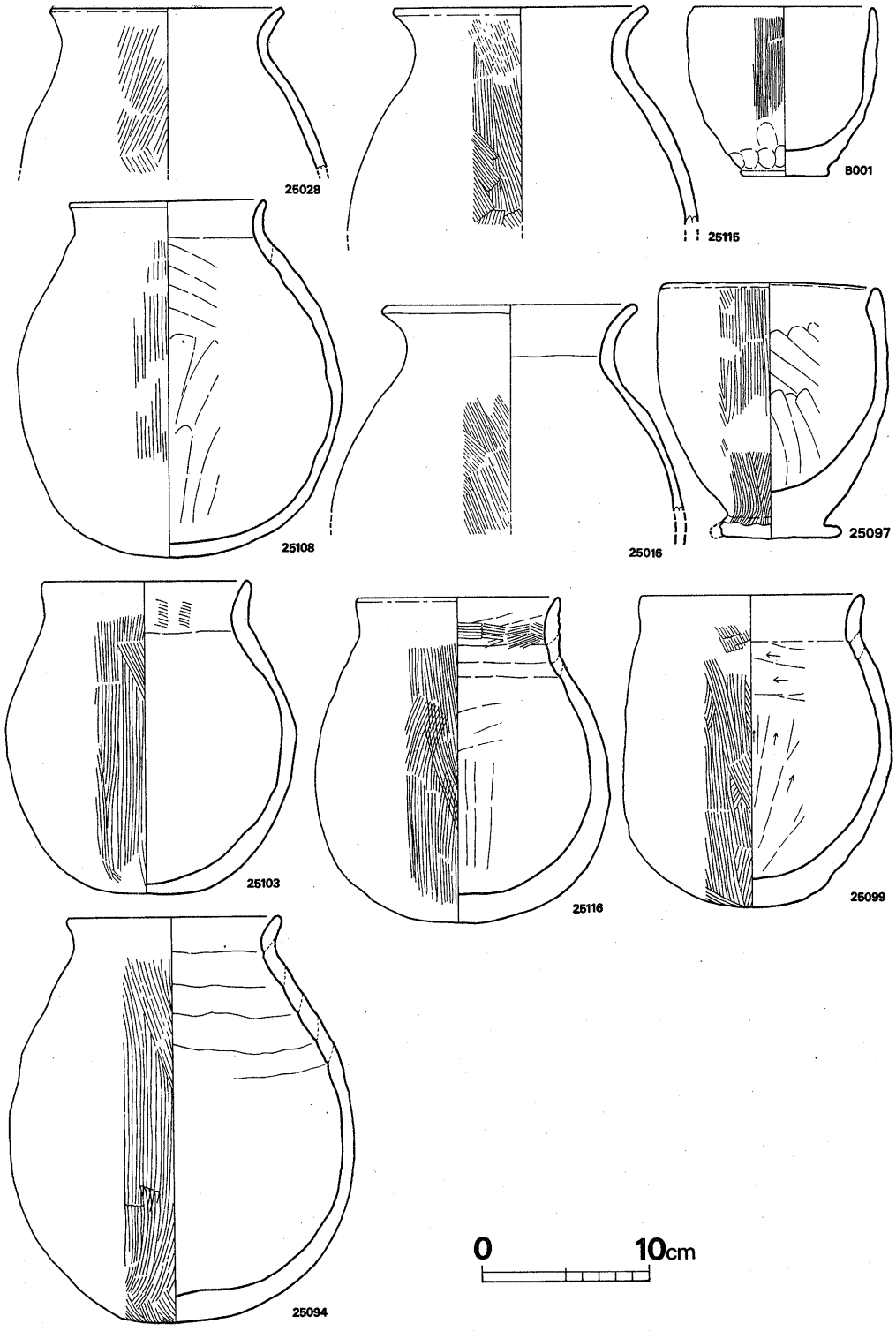


Fig. 66　各地点出土土師器甕実測図②（縮尺 1/4）

10はⅢ—a類の04001に近似する。

野黒坂遺跡における9類土器中の土師器甕はA式期Ⅱ類甕に，10類土器中の甕はB—C式期のⅠ及びⅢ類甕に類似しているといえる。B・C式期のⅡ類甕については，野黒坂遺跡第34号跡が火災を被り，炊事用容器が完全に残っていたにもかかわらず類品が少ない。また把手付鍋形土器が当遺跡でみられない点も注目される。

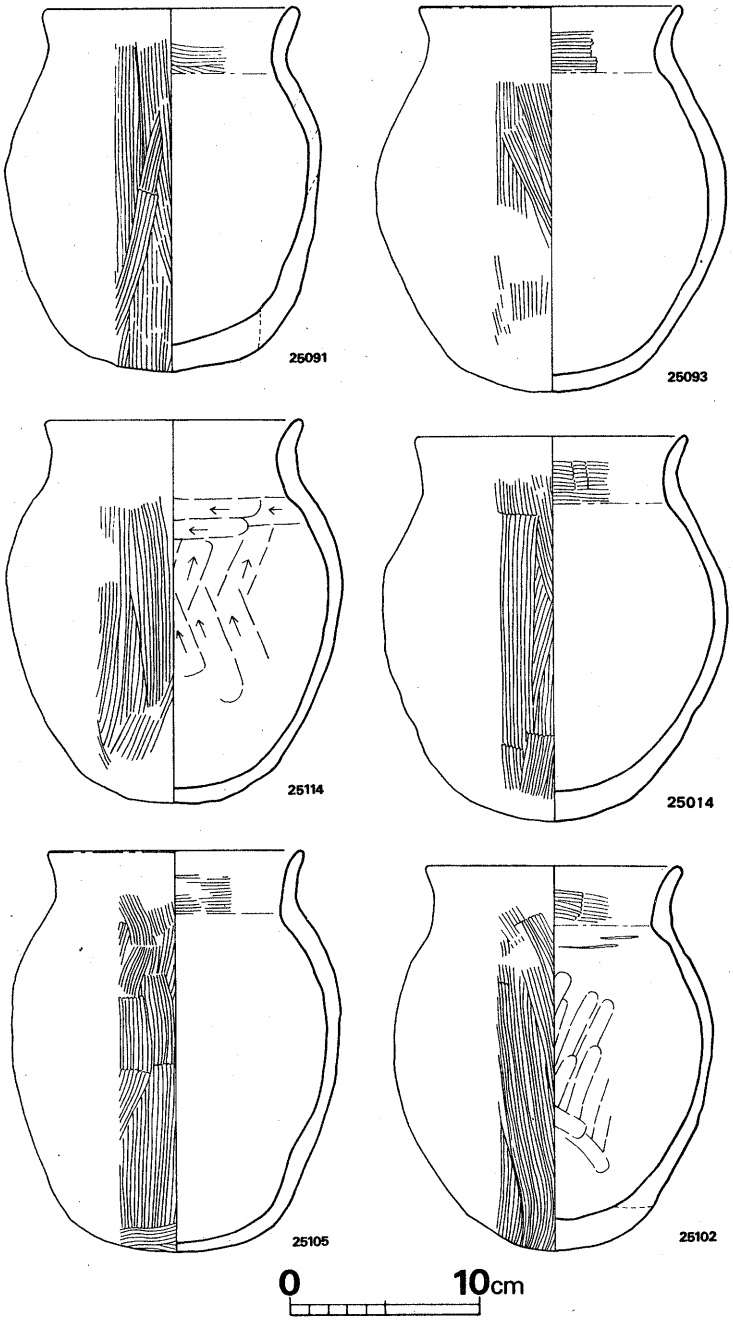


Fig. 67　各地点出土　土師器甕実測図③（縮尺 1/4）

Tab. 9　土　師　器　甕・鉢　観　察　表

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
01003	甕	Fig 7 PL 6	頸部径17.5 胴部径22.5 残存高22.1	Ⅲb	頸部は広く、胴も張らない胴下半が広く平底である。	ワヅミ成形 外面　胴部上半タテハケメ、下半ナナメハケメ　底部ハケメ調整 内面　肩部ヨコハケメ　胴部上半指オサエ調整　胴部下半ヘラナデ調整	焼成　やや軟質 色調　淡黄色 胎土　砂粒多く含む 器面粗く剝離	B
01007	甕	Fig 7 —	口径　13.2 残存高 6.6 頸部径12.5	Ⅱb	口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。頸部でしまることなく、胴部の張りも弱い。器壁厚はほぼ均一。	ワヅミ成形 外面　口縁部指オサエ　胴部ナデ調整 内面　口縁部ナデ　胴部指ナデ調整	焼成　やや硬質 色調　黒褐色 胎土　小礫を含む	B
03001	小形甕	—	口径　8.9 頸部径 8.3 胴部径 8.5 器高　6.1	Ⅰb	口縁部は短かく外反し、端部は尖る。胴部は直線的に下ってのち丸底の底部へと移行する。	テヅクネ成形 外面　口縁部指オサエ　胴部ナデ調整 内面　口縁部ナデ　胴部指ナデ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　小礫を含む	
03002	小形甕	Fig65 PL40	口径　9.5 頸部径 8.8 胴部径10.4 器高　11.9	Ⅰa	口縁部は直線的に外傾し、内側に稜をもつ。端部は丸い。胴部は歪が大きいが下半が張り、やや尖り底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ調整　胴部不明	焼成　不良 色調　赤褐色 加熱で器壁剝落赤変	
04001	甕	Fig14 PL 6	口径　16.2 頸部径13.9 胴部径23.4 器高　29.2	Ⅲa	口縁部は大きく外反し、端部を面取りしている。最大胴径を胴部中央におき、底部は張らない丸底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメの上、部分的ヘラナデ調整 内面　口縁部ヨコハケメ　胴部タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　砂粒多く含む	B
04007	小形甕	Fig14 PL 6	口径　11.6 頸部径11.0 胴部径11.8 器高　13.1	Ⅰa	口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。頸部でしまることなく、胴部の張りも弱い。底部は丸底。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部指タテナデ調整	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　小礫を多く含む	B
05002	鉢	Fig64 PL45	口径　11.6 器高　7.2		口縁部は直立し、端部は丸い。稜をもって体底へと下り、内湾しながら平坦な底部へいたる。	ワヅミ成形 内外面　丁寧なヨコナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　茶褐色 胎土　小礫を僅かに含む 加熱を受けている	
09001	甕	Fig23 PL10	口径　13.0 頸部径12.1 胴部径14.8 器高　12.9	Ⅱc	口縁部は直線的に上外方へ広がり、端部は丸い。頸部は部分的に稜をもって肩部へ下がる。胴部は丸く下半が張り底部はやや平坦である。	ワズミ成形 口縁部内外面　ヨコナデ調整 他は不明	焼成　不良 色調　灰褐色 胎土　小礫を少し含む 加熱を受け赤変	B
09002	小形甕	Fig23 PL10	口径　9.5 頸部径 9.4 胴部径11.8 推定高13.0	Ⅰb	口縁部は長く、僅かに上外方へのび、端部は丸い。頸部の締りは弱い。長球状の胴部から丸底の底部へと下がる。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ調整　胴部不明 内面　口縁部ヨコナデ　肩部指オサエ　胴部ヨコヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黒褐色 胎土　小礫を含む 加熱を受け器外面剝落	B

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
09008	甕	Fig65 —	口径 13.0 頸部径12.9 残存高 6.5	Ⅱc	口縁部は短かく、僅かに外反し端部は丸い。頸部の締りは弱く肩が張る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　肩部タテヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　茶褐色 加熱のため器外面剝落	
09011	甕	Fig23 —	胴部径26.8 残存高13.1	Ⅲa	丸底の大甕である。長胴であろう。	ワヅミ成形 外面　ハケメ調整	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　小礫を含む	B
09012	甕	Fig23 PL10	口径 11.5 頸部径10.8 残存高 7.1	Ⅱb	口縁部は短かく強く外反し端部は丸い。球形の胴部をもつと考えられる。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　小礫を含む	B
10006	甕	Fig29 —	頸部径13.0 胴部径25.1 残存高30.7 推定高35.6	Ⅲa	大きく外反する口縁をもつと思われる。頸部は締り、長胴で丸底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整　底部ハケメの上ナデ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部タテヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　茶褐色 胎土　大砂を含む	D
12007	甕	Fig33 PL15	口径 12.1 頸部径11.5 胴部径14.7 推定高17.1	Ⅱc	口縁部は上外方へ直線的にのび、端部は丸い。頸部の締りは弱い。胴部はやや長胴で下半が張る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部タテヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し 加熱により器外面剝落黒変	D
12008	甕	Fig33 PL14	口径 13.6 頸部径13.2 胴部径13.9 器高 14.7	Ⅰa	口縁部は短かく、僅かに外反する。端部は丸い。頸部の締りは弱く、胴部もほとんど張らない。胴下半は細くすぼまり、底部は小さく、やや平坦である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部粗いタテヘラ削り調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ナデ調整	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し 加熱により器外面剝落	D
12009	甕	Fig33 PL14	口径 13.5 頸部径12.5 胴部径12.8 残存高12.5	Ⅱd	口縁部は外反し端部は丸い。頸部はよく締まり、肩がやや張る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削りの上ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部下半タテヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　黒褐色 胎土　砂粒多し 加熱により胴部外面赤変	D
12010	甕	Fig65 —	口径 13.0 頸部径12.6 胴部径15.8 残存高13.6	Ⅱc	口縁部は短かく上外方へのび端部は丸い。頸部から直線的に伸び胴部下位で最も張って浅く底部へ至る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ハケメ　下半ヘラ削り調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部下半タテヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　茶褐色～明橙色 胎土　砂粒多し 加熱により外面赤変	D
12011	甕	Fig33 PL14	口径 10.6 頸部径 9.8 胴部径12.7 器高 12.0	Ⅰb	口縁部は体部との境に内外面共軽い稜をもって外反する。胴部は球形で、底部は丸味をもった平底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部粗いヨコハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部タテヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　茶褐色 一部黒変 胎土　砂粒多し	D

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
12012	甕	Fig33 PL14	口径 10.7 頸部径 9.7 胴部径11.8 器高 12.0	Ⅰb	口縁部は長く内湾気味にのび、内面の底部との境に稜を生じている。胴部は肩がやや張り、底部は丸味をもった平底である。	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部粗いハケメ調整 内面 口縁部ヨコナデ 肩部指オサエ	焼成 良好 色調 暗橙色 加熱により外面剝落	D
12013	甕	Fig33 PL15	口径 11.4 頸部径10.8 胴部径13.9 器高 15.0	Ⅰb	口縁は短かく、端部は平坦である。胴部中央が最も張り、底部は尖り気味である	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削りの上ハケメ調整 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り調整	焼成 良好 色調 黄褐色～暗褐色 胴部内面にススが付着。加熱をうけて赤変	D
12014	甕	Fig33 PL15	口径 14.8 頸部径13.5 胴部径15.1 器高 14.1	Ⅱb	口縁部の歪大きく、外反して端部は丸い。胴部は球形で丸みをもって平底をなす	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削りの上ヘラナデ調整 内面 口縁部ヨコナデ 胴部上半ヨコナデ 胴部下半ヘラ削り調整	焼成 良好堅緻 色調 暗黄色～暗褐色 胎土 砂粒多し 加熱を受け赤変	D
12015	甕	Fig33 PL15	口径 12.4 頸部径11.4 胴部径14.3 器高 14.7	Ⅱb	口縁部は短かく外反し、端部は丸い。胴部は中央が張り球形である。底部は丸い。	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部粗いタテハケメ調整 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ削り調整	焼成 良好堅緻 色調 赤褐色 胎土 砂粒多し 加熱を受け外面剝落	D
12024	甕	Fig33 PL15	口径 15.9 頸部径13.8 残存高14.7	Ⅲa	口縁部は大きく外反し端部は丸い。頸部はよく締り、胴部は大きく張る長胴であろう。	ワヅミ成形 外面 口縁部タテハケメの上ヨコナデ 胴部タテハケメ調整 内面 口縁部ヨコナデ 肩部ヨコハケメ 胴部上半ハケメの上ヨコヘラ削り調整	焼成 良好堅緻 色調 茶褐色～黄橙色 胎土 砂粒多し	D
12025	甕	Fig33 PL15	口径 14.3 頸部径13.5 胴部径18.0 残存高17.6	Ⅱc	口縁部は歪大きい。外反して端部やや尖る。胴部は偏球状で下半が張り平底である。	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部不明ハケメ調整 内面 口縁部ヨコナデ 胴部不明指ナデ調整	焼成 良好 色調 黄褐色 胎土 砂粒多し 加熱により外面赤変	D
13001	甕	Fig36 PL19	口径 15.3 頸部径13.6 胴部径17.7 器高 17.7	Ⅱb	口縁部は直立気味に外反しさらに軽い稜をもっと外反する。端部は丸い。胴部は球形で平底気味である。器壁厚はほぼ均一である。	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部ハケメ調整 内面 口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ 胴部不明ヘラナデか	焼成 良好 色調 茶褐色 胎土 砂粒含む 加熱により器外面剝落	A
13002	小形甕	Fig36 PL19	口径 12.6 頸部径12.0 胴部径13.3 器高 11.6	Ⅰa	口縁部は短かいが強く外反し端部は丸い。胴部上位が最も張り、以下急に細まる丸底である。器形厚はほぼ均一である。	ワヅミ成形 外面 口縁端部ヨコナデ 以下タテハケメ調整 内面 口縁部ヨコハケメ 胴部タテヘラ削り調整	焼成 不良 色調 淡褐色 胎土 大粒砂多く含む 胴部内面に有機物付着	A
13004	甕	Fig36 PL19	口径 11.1 頸部径10.6 胴部径14.0 残存高 8.8	Ⅱb	口縁部は軽く外反し端部はやや平坦である。肩はなだらかで、胴部球状をなす。胴部器壁厚は均一。	ワヅミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 胴部タテハケメ調整 内面 口縁部ヨコハケメ 胴部タテヘラ削り調整	焼成 良好 色調 淡橙色～灰褐色 胎土 砂粒多し 加熱により赤変 器外面剝落	A

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
13005	甕	Fig36 PL19	口径 14.8 頸部径12.3 胴部径 23.8+α 残存高17.5	Ⅲa	口縁部は長く外反してのちさらに外へ開き端部は丸い。肩はなだらかで張らず長胴である。器壁厚薄い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部粗いハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　石粒多し 胴部外面一部黒変	A
13017	鉢	Fig36 PL19	口径 14.8 器高 8.8		口縁部は直立し端部近くでやや外反する。底部は広い丸味をもった平底をなす。器壁厚はほぼ均一。	ワヅミ成形 外面　口縁部細いヘラ削りの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整　底部細いヘラ削り調整 内面　口縁部細いヘラ削り　胴部ヨコヘラ削り　底部ナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　黄灰色～黄橙色 胎土　砂粒多し	A
13018	甕	—	胴部径17.2 残存高 7.9	Ⅲa	直立した胴部から広い平底になる底部に木葉文がスタンプされている。器壁は極めて薄く均一。	ワヅミ成形 外面　条痕 内面　ヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　淡黄橙色 胎土　砂粒多し 加熱により外面赤変	A
20003	甕	Fig45 —	口径 15.1 残存高 5.7	Ⅱ	口縁部は直く上外方へ開き端部は丸い。肩は張る。	ワヅミ成形 口縁部内外面ヨコナデ　胴部外面ハケメ	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し	C
20004	甕	Fig45 —	口径 14.5 残存高11.6	Ⅱe	口縁部は内傾し、端部近くで僅かに外反する。肩はなだらかである。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し	C
21006	小形甕	Fig48 PL24	口径 11.6 頸部径11.0 胴部径11.7 器高 12.2	Ⅰa	歪が大きい。口縁部は直立気味に外反し、端部は丸い。頸部の締りは弱く、胴もほとんど張らない。底部は丸味をもった平底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部粗いタテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り	焼成　良好 色調　赤褐色 胎土　砂粒多し 加熱により外面黒変	E
21007	甕	Fig48 PL24	口径 13.3 頸部径12.7 胴部径14.1 残存高14.0	Ⅱc	口縁部の外反は弱く、頸部の締りも弱い。胴部は下位で張り、丸底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部タテヘラナデ調整	焼成　良好 色調　暗赤橙色 胎土　砂粒多し 加熱により赤変 内面有機物付着	E
21011	甕	Fig48 PL24	口径 13.0 頸部径11.4 胴部径14.3 器高 15.7	Ⅱc	口縁部は大きく開き、端部は丸い。胴部は下位で張り、平底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメ　端部近くのみヨコナデ　胴部タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　暗赤橙色 胎土　砂粒多し 加熱により外器面剝落	E
23002	鉢	Fig55 PL26	口径 12.6 器高 7.5		口縁部は肥厚し、端部は丸い。上げ底の底部から内湾しながら体部を作り、軽く外反して口縁部へと至る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ハケメのヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部指ナデ調整	焼成　不良 色調　赤褐色 胎土　砂粒多し	E

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
23005	甕	Fig55 —	口径 15.2 頸部径13.2 胴部径18.5 残存高12.1	Ⅲa	口縁部は短かいが大きく外反する。端部は丸い。肩はなだらか。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 胴部内面有機物付着	
25005	甕	—	口径 17.4 頸部径14.6 残存高 6.3	Ⅲa	口縁部は大きく外反し端部は丸い。肩部との境内側に稜をもって体部へと下がり肩は張る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヨコヘラ削り調整	焼成　不良 色調　白褐色	
25010	甕	Fig65 PL41	口径 15.7 頸部径15.5 胴部径18.3 残存高13.0	Ⅱa	口縁部は短かく僅かに外反する。端部は丸い。胴部は球形を呈する。	ワヅミ成形 外面　口縁部～肩部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ調整	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し 外面赤変、スス付着	
25011	甕	—	口径 14.7 頸部径13.0 胴部径18.7 残存高 9.6	Ⅲa	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。頸部が締ってなだらかな胴部へと下がる。	ワヅミ成形 外面　口縁部ハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヨコハケメ	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し	
25013	甕	Fig65 PL41	口径 13.2 頸部径13.3	Ⅱa	口縁部は短かく僅かに外反する。胴部は大きく張って球状をなし、小さな丸味をもった底部をもつ。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　頸部指オサエ　胴部ヘラナデ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部指ナデ調整	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し 加熱により赤変スス付着	
25016	甕	Fig66 PL42	口径 14.8 頸部径12.6 胴部径21.3 残存高14.2	Ⅲa	口縁部は大きく外反し、端部はやや平坦気味。頸部はよく締り、なだらかな肩へと下がる。全体に薄手である。	ワヅミ成形 口縁部内外面ヨコナデ　胴部外面ハケメ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胴部外面加熱により黒変している	
25019	甕	Fig65 PL40	口径 12.7 頸部径12.0 胴部径16.2 残存高12.8	Ⅱb	口縁部は軽く外反し、端部は丸い。頸部の締りは弱く、胴部中央が最も張る。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部下半タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　茶褐色	
25025	甕	Fig65 PL41	口径 13.3 頸部径13.3 胴部径14.8 残存高11.8	Ⅱa	口縁部は短かく端部は太く平坦である。胴部はあまり張らず、鉢形に丸い。器壁厚は口縁部から底部までほぼ均一。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部調整不明	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し 内面に有機物多く付着	
25032	甕	Fig65 PL41	口径 12.4 頸部径12.4 胴部径16.0 残存高 9.0	Ⅱa	口縁部は短かく僅かに外反する。端部はやや平坦。胴部中央が張って鉢形に丸い。器壁厚はほぼ均一。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部調整不明	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　砂粒多し	

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
25060	甕	—	口径 11.2 頸部径10.9 胴部径13.4 残存高 7.0	?	口縁部は短かく僅かに外反し、肩はなだらかで張らない。胴部下半は急に細まる	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部不明	焼成　良好 色調　黄褐色～褐色 胎土　大砂粒を含む 外面に炭化物付着	
25091	甕	Fig65 PL40	口径 13.2 頸部径12.7 胴部径16.7 残存高19.0	Ⅱd	口縁部は軽く外反し端部は丸い。頸部から胴部上位にかけて直線気味に広がり、その後内湾して細まる。底部はやや平坦。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上位ヨコヘラ削り　胴部下位タテヘラ削り	焼成　不良 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 加熱により外面赤変	
25092	甕	Fig65 PL40	口径 11.6 頸部径10.9 胴部径16.8 器高 20.5	Ⅱb	口縁部はやや長く外反して端部は丸い。頸部は締り、胴部は大きく下位が張る。器壁厚は口縁部と肩部の接目が最も厚く胴部はほぼ均一である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部上半ヘラ削り　胴部下半ナデ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し	
25093	甕	Fig67 PL42	口径 14.2 頸部径13.6 胴部径18.3 器高 20.2	Ⅱd	口縁部は歪んでいるが軽く外反し端部は丸い。頸部の締り弱く、胴部上位が最も張り、内湾して底部へいたる。底部は部厚い。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部上位ヨコヘラ削り　胴部下位タテヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　黄褐色～赤褐色 胎土　大粒砂を含む 加熱により外面器壁剝落	
25094	甕	Fig66 PL43	口径 12.5 頸部径12.1 胴部径20.6 器高 24.3	Ⅱe	口縁部は短かく軽く外反し端部は丸い。胴部は大きくやや下位が張る。底部は丸く部厚い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半指オサエ　胴部下半ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 外面　炭化物付着	
25096	甕	Fig65 PL41	口径 14.8 頸部径13.7 胴部径16.7 器高 16.1	Ⅱb	頸部の締りは弱く、口縁部は軽く外反する。端部はやや尖る。胴部は球形で底部は丸い。口縁部から肩部にかけては薄く仕上げられ底部は部厚い。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　淡黄色～赤褐色 胎土　僅か細砂を含む 内面肩部有機物付着	
25097	甕	Fig66 PL43	口径 12.6 胴部径13.8 底部径 7.8 器高 15.1	Ⅱf	口縁部は直立し、端部は丸い。内側に肥厚し内傾する凹面を有する。胴部は直ぐ下がり中央部から細まる。底部には円盤を貼り付けており部厚い。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色～黒褐色 胎土　砂粒多量に含む 内面口縁部に炭化物付着	
25098	甕	Fig65 PL40	口径 12.0 頸部径11.3 胴部径14.8 器高 15.7	Ⅱc	口縁部は大きく歪んでおり短かく開いて端部は丸い。胴部は偏球状で下位が最も張る。底部は平底。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部上位ヨコハケメ　胴部下位ヘラ削り　底部ナデ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し	
25099	甕	Fig66 PL43	口径 13.0 頸部径13.1 胴部径16.0 器高 18.7	Ⅱb	器形の歪みが甚しい。口縁部は直立気味で、端部は丸い。胴部は中央が張って底部は部厚い。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部下半タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色～淡褐色 胎土　砂粒少ない	

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
25100	甕	— PL43	口径 13.0 頸部径12.4 胴部径16.7 残存高14.5	Ⅱc	器形の歪みが甚しい。口縁部は軽く外反し、端部は丸い。胴部は下位が張り平坦な底部をもつと思われる。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部上位ヨコハケメ　胴部下位タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 加熱のため外面赤変	
25101	甕	Fig65 PL40	口径 9.5 頸部径 8.8 胴部径13.6 器高 14.5	Ⅰb	口縁部は内湾気味に上外方へ開き、端部は丸い。頸部内面に部分的な稜を生じている。胴部は大きく中央部が張って底部も大きい。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　下半タテヘラ削り調整　底部と胴部接目外面に指オサエ痕あり。	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒を多量に含む 加熱の為外面赤変、内面有機物付着	
25102	甕	Fig67 —	口径 13.4 頸部径12.6 胴部径16.9 器高 20.1	Ⅱd	口縁部は直立して外反する。端部は丸い。頸部から胴部へゆるやかに開いて下り、中央よりやや上位が最も張る。底部は細まって部厚い	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　肩部ヨコヘラ削り　胴部タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 加熱のため外面赤変	
25103	甕	Fig66 PL43	口径 12.2 頸部径12.2 胴部径17.4 器高 18.6	Ⅱe	口縁部は直立気味で端部は丸い。肩はなだらかに下り胴部中央が最も張る。底部は広く丸い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　褐色 胎土　砂粒含む 内面胴上部上半に有機物付着	
25104	甕	Fig65 PL41	口径 14.2 頸部径12.7 胴部径16.0 器高 16.6	Ⅱb	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。胴部は球形である。器壁厚は凹凸あるが薄手。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヘラ削りの上ナデ　胴部下半ナデ調整	焼成　良好 色調　褐色 胎土　大粒砂を含む 肩部内面に有機物付着	
25105	甕	Fig97 PL42	口径 12.2 頸部径12.7 胴部径17.3 器高 21.2	Ⅱe	口縁部は直立気味に立ち、端部は丸い。頸部の締りは弱く、肩がやや張り、底部へと細まる。長胴である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　褐色 一部黒色 胎土　大粒砂を含む 加熱により外面赤変	
25106	甕	—	口径 11.1 頸部径11.2 胴部径14.1 残存高 7.7	Ⅱb	口縁部は上外方へ直線的に開き、端部は外傾する平坦面を有する。肩はなだらかで、胴部は球形を呈すると思われる。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　褐色 胎土　砂粒多し	
25107	甕	—	口径 12.5 頸部径12.0 残存高 8.5	Ⅱd	口縁部は軽く外反し、端部は丸い。肩がやや張り長胴になると思われる。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　ヘラ削り調整	焼成　良好 色調　褐色 胎土　砂粒多し	
25108	甕	Fig66 —	口径 11.3 頸部径11.2 胴部径19.4 器高 21.2	Ⅱe	口縁部は短かく直立気味である。端部は丸い。胴部は長く、中央よりやや下位が最も張り、底部は大きく丸い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部下半タテヘラ削り調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 加熱の為底部外面赤変	

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
25114	甕	Fig67 —	口径 13.2 頸部径12.9 胴部径17.7 器高 20.1	Ⅱd	口縁部は内傾したのち外反する。端部は丸い。頸部で締ることなく肩が張る。長胴で底部は小さく丸底である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上位ヨコヘラ削り　胴部中位タテヘラ削り　底部ナデ調整	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒多し 加熱による外面全体赤変	
25115	甕	Fig66 PL42	口径 15.1 頸部径13.3 胴部径21.2 残存高12.9	Ⅲa	口縁部は直く大きく外反する。頸部はよく締りなだらかな肩へと下る。長胴である。	ワヅミ成形 外面　口縁部タテハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヨコヘラ削り調整 口縁部内外面スリップかけ　調整は丁寧	焼成　良好 色調　黄褐色 胎土　砂粒若干含む	
25116	甕	Fig66 —	口径 12.0 頸部径12.1 胴部径17.2 器高 19.1	Ⅱe	口縁部は直立し端部やや尖る。端部は下半が大きく張り、底部は球形をなす。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部上半ヨコヘラ削り　胴部下半タテヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　茶褐色 胎土　砂粒多く含む 加熱のため底部外面赤変	

甑　(Fig. 68・69, PL. 44, Tab. 10)

完形品に近いものが10例出土した。住居跡床面の出土例としては第13・21号跡の品であり，他は25号跡覆土中の出土例である。なお把手は他遺構覆土中から多量に出土している。

形態は鉢形と甕形に大別される。

Ⅰ　甕形の類である。床面からの出土例は第13号跡と21号跡のみである。口径と器高はほぼ同一で，底部の透しは13113が半円透し2口(a)で，他は素透し（無底式）(b) である。半円透しの甑は津古内畑第2号住居跡から古式須恵器と共に出土している。素透しの甑は Fig. 70-32の落し底とセットになると考えられる。

全てに把手が取りつけられている。その手法にはバラエティーがあり，大きく4種に別けられる。(1) 取り付け位置にあらかじめ穴を開ける類である。この類には穴に粘土を押し込み外側へ脹り出させるものと，あらかじめ用意した棒状粘土を穴に刺し込むものとがある。いづれもその上に粘土を巻き上げ，下位にも粘土を貼って補強する。13013は前者，21009は後者の部類である。Fig. 68 は表土層より出土した把手心棒である。6は当類の心棒で，表面ナデ調整されている。(2) 取り付け位置の器壁外面を削り取り，その上に粘土を盛り上げて山を作る。(3) 取り付け位置に小さな粘土塊か1種で述べたと同様な心棒を貼りつけ，その上に薄く伸ばした粘土を数回貼って盛り上げる手法である。Fig. 68-

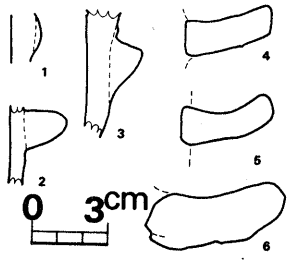


Fig. 68　各地点出土土器甑把手心実測図（縮尺 1/3)

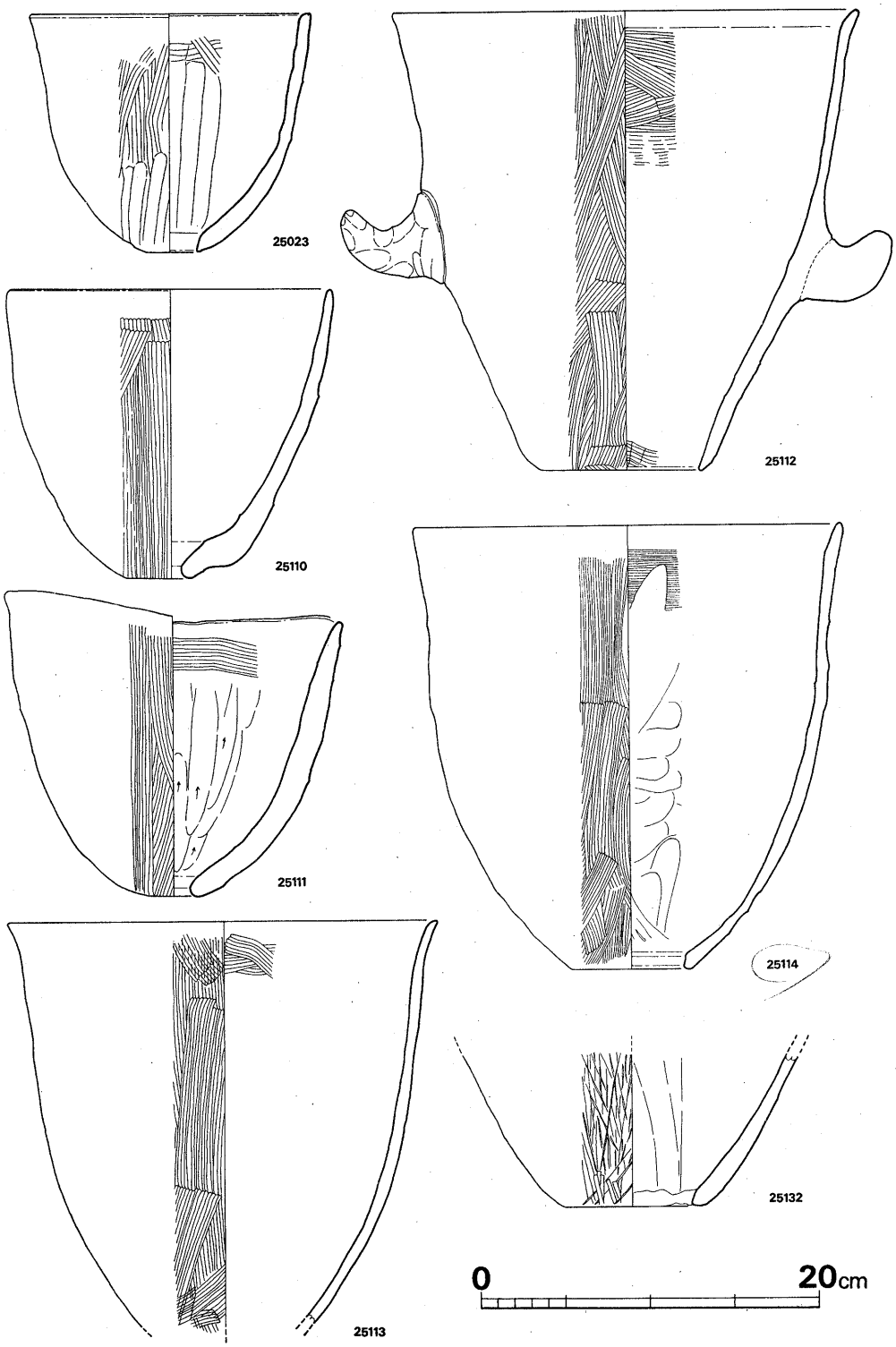


Fig. 69　各地点出土土師器甑実測図（縮尺 1/4）

1～5はこの種の心棒である。（4）取り付け位置の器壁外面に刻みを入れ，別作りの把手を貼り，接合部を粘土で補強する類である。25112の取り付け手法である。以上4種の手法の時期的な変遷について明確にたどることは困難である。同時期にも数種の手法があったと思われる。少くともⅠ—a種の13013よりⅠ—bの21009が新式といえる。器壁外面に直接把手を貼る手法は他遺跡の例から見て新式であろう。

Ⅱ　鉢形の類である。床面からの出土品は21号跡のみである。深いものと浅いものがある。

a）21010は口径に比して器高が低い。口縁部は直立する。器壁は薄く丁寧な作りである。

b）深鉢形で，口縁部はやや外反する。25110・25111の器壁は部厚く歪が大きい。

鉢形甑の上限がどこまでのぼるか不明である。

Tab.10　土　師　器　甑　観　察　表

番号	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
13013	Fig36 PL19	口径 27.8 透部径 8.8 器高 23.5	Ⅰa	口縁部は僅かに外反し端部は丸い。以下内湾して底部にいたる。底部に半円透しが2個あけられている。把手は太く若干偏平である。	ワヅミ成形、把手は刺し込み 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削りの上粗いハケその上を細いヘラナデ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削りの上ヘラナデ　底部ヨコナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　黄褐色 胎土　密砂粒含む 把手下に無数の使用痕あり	A
21009	Fig48 PL24	口径 23.6 透部径 6.8 器高 19.9	Ⅰb	口縁部は外反せず端部は面取りされている。やや反り気味に下ってから内湾して底部にいたる。底部は素透しである。把手は偏平で小さい。	ワヅミ成形、把手は刺し込み 外面　口縁部ヨコナデ胴部タテハケメ　底部ヨコナデ調整 内面　口縁部ハケメの上ヨコナデ胴部タテヘラ削り　底部ヨコナデ調整	焼成　やや軟質 色調　淡黄色 胎土　砂粒多く含む	E
21010	Fig48 PL24	口径 16.9 透部径 2.5 器高 10.3	Ⅱa	鉢形で口縁は直立し端部は丸い。器壁は薄く透部のみ部厚い。透部は内側が広い	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメの上若干ヨコナデ調整 内面　口縁部指ナデの上ヨコナデ胴部ヨコヘラ削り	焼成　良好 色調　明橙色 胎土　密 胴部外面下位無数に使用痕つく	E
25023	Fig69 PL44	口径 16.6 透部径 2.9 器高 13.9	Ⅱb	口縁部は僅かに外反し端部は平坦気味である。胴部は下位で直立気味になってのち透部へと下がる。透部は内側が広い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部上半粗いハケメ胴部下半ヘラ削り調整 内面　口縁部粗いヨコハケメの上ヨコナデ　胴部タテヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　橙色～黄橙色 胎土　密	
25110	Fig69 PL44	口径 19.0 透部径 1.2 器高 16.9	Ⅱb	深鉢形で口縁は直立し端部は丸い。器壁厚は口縁部から胴部にかけて僅かづつ厚くなり透部が最も厚い。透部は内側を広くそぎ取りその粘土を外面周囲に貼りつけて端部を丸くしている。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ　透部ヨコナデ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部タテヘラ削り透部ナデ調整	焼成　良好 色調　褐色～淡黄橙色 胎土　密砂粒を若干含む	
25111	Fig69 PL44	口径 20.0 透部径 1.8 器高 14.4	Ⅱb	歪が大きい。深鉢形で口縁部は直立し部分的に僅かに外反する。端部は丸い。器壁は部厚く胴部中位で1.6cmはかる。透部端は丸く内側が広い。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ透部ナデ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部タテヘラ削り調整　透部ナデ調整	焼成　やや軟質 色調　褐色 一部黒色 胎土　砂粒多く含む	

番号	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
25112	Fig69 PL44	口径 27.4 透部径 8.4 器高 26.9	Ⅰb	口縁部は僅かに外反し内側に軽い稜を生じている端部は丸い。内傾して胴部中位に把手を取りつけ上下を粘土で補強している。透部は素孔で端部は若干尖り気味である。把手は短かく丸い	ワヅミ成形　把手は外面貼り付け 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメの上ナデ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヨコハケメの上ヘラ削り調整　透部はヨコハケメの上ナデ調整 把手より上位の外面と口縁部内面スリップかけ	焼成　良好堅緻 色調　黄褐色 胎土　密砂粒を若干含む 内外面共炭化物付着	
25113	Fig69 PL44	口径 25.0 残存高23.6	Ⅰb	口縁部は僅かに外反し端部は丸い。把手部・透部は残っておらず不明。薄手である。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部タテハケメ調整 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部上位ヨコヘラ削り　胴部下位ヘラ削り調整	焼成　良好堅緻 色調　黄褐色 胎土　砂粒多く含む	
25114	Fig69 PL44	口径 25.0 透部径 6.2 器高 26.0	Ⅰb	口縁部は僅かに外反し端部は丸い。内湾して透部にいたる。端部はやや太くなり丸い。	ワヅミ成形 外面　タテハケメ 内面　口縁部ヨコハケメの上ヨコナデ　胴部ヘラ削り	焼成　良好堅緻 色調　黄褐色 胎土　砂粒なし	
25132	Fig69 —	透部径 7.0 残存高 9.0	Ⅰb	胴部下位のみを残す。透部は素孔で端部はやや尖り内側が広い。	ワヅミ成形 外面　細いヘラナデ調整 内面　タテヘラ削り　透部指ナデ	焼成　良好堅緻 色調　淡黄橙色 胎土　砂粒若干含む	

片　口　鉢 (Fig. 64, PL. 45, Tab. 11)

第13号跡床面から1例，第25号跡覆土中から3例出土している。球形のもの（Ⅰ）と口縁部から体部が直立するもの（Ⅱ）とがある。口部はⅡ類の25022が幅広で大きい。

Tab.11　土師器片口鉢観察表

番号	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
13003	Fig36 —	胴部径17.6 残存高12.3	Ⅰ	口縁部を欠く。胴部は球形で底部はやや平坦になる。	ワヅミ成形 外面　ハケメ調整後斜横位に丁寧にヘラナデ調整 内面　横位の丁寧なヘラ削り調整	焼成　やや軟質 色調　淡橙色　一部灰黒色 胎土　密	A
25021	Fig64 PL45	口径 14.4 胴部径17.0 器高 12.5 口巾 3.2	Ⅰ	口縁部は内湾し、端部は平坦である。口縁部から底部にかけて屈曲はなく球形である。口部端は尖り、6㎜凸出する。	ワヅミ成形 外面　口縁部ハケメの上ヨコナデ　胴部ハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半粗いナデ　胴部下半指ナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　灰黒色～淡黄色 胎土　砂粒多し	
25022	Fig64 PL45	口径 14.1 胴部径14.0 器高 12.9 口巾 4.4	Ⅱ	口縁部は内湾してのち直立し、端部は丸い。胴部は直立し底部は広く丸い。器壁厚は部厚い。口部はやや薄手で7㎜凸出する。	ワヅミ成形 外面　口縁部ヨコナデ　胴部粗いハケメ調整 内面　口縁部ヨコナデ　胴部上半粗いナデ　胴部下半指ナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　赤橙色 胎土　密、砂粒僅かに含む	
25030	Fig64 PL45	口径 11.2 胴部径14.9 器高 11.3 口巾 1.7	Ⅰ	口縁部は内湾し、端部は丸い。胴部は歪んでいるが球形で底部も丸い。口部は小さく11㎜凸出して端部は尖る。	ワヅミ成形 外面　器面剝落して不明 内面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ調整	焼成　良好堅緻 色調　茶褐色 胎土　砂粒を若干含む	

ミニチュア土器 (Fig. 67, PL. 46)

24個出土した。住居跡床面から出土したのは第20・21号跡である。他は住居跡覆土及び表土

層中の出土品である。底部の形状により２種に区分される。

Ⅰ　平底である。口縁部の形状によって３区分される。a）１は底部から直線的に上外方へ開く。b）２～４は底部から丸味をもって体部にいたり，のち直立する。c）５は口縁部が軽く外反する。丁寧な作りである。

Ⅱ　丸底である。法量からみて３区分される。a）９～17は器高2.5～2.7㎝のものである。

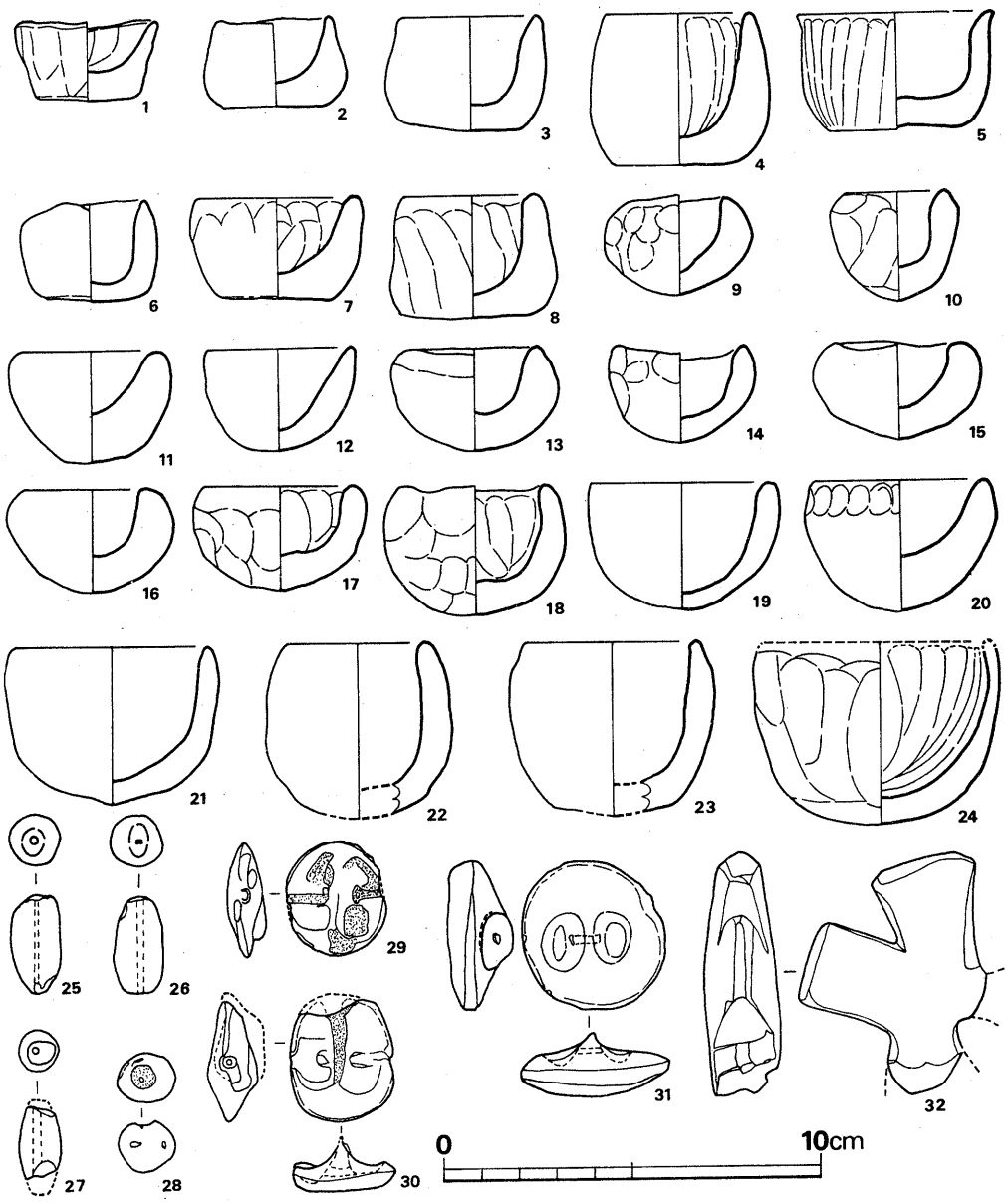


Fig.　70　各地点出土土師器ミニチュア土器・土製品実測図（縮尺 1/2）

粘土塊に指を突き入れ回転して作り，外面を指でオサエている。12は第21号跡床面出土品である。b）18～20は器高3.3～3.5cmのものである。c）21～24は器高4.1～4.8cmのものである。前2種に比べて調整は丁寧である。21～23は第20号跡の床面出土品である。

Tab.12　ミニチュア土器観察表

番号	挿図番号 図版番号	法量	型式	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
04009	Fig70 PL46	口径 4.7 器高 3.3	Ⅱb	口縁部は直立し、底部はやや尖り気味である。	内外面　指ナデ調整	焼成　軟質 色調　灰褐色	
06004	Fig70 PL46	口径 3.8 器高 3.5	Ⅱa	口縁部は内湾し、胴部は球形。	外面　指オサエ調整 内面　指ナデ調整	焼成　軟質 色調　淡橙色	
20004	Fig70 PL46	口径 3.6 器高 4.6	Ⅱb	口縁部は内湾し、やや胴長。	内外面　指ナデ調整	焼成　軟質 色調　茶褐色	C
20005	Fig70 PL46	口径 4.5 器高 4.6	Ⅱb	口縁部は直立し、外面は内傾する。底部はやや尖ると思われる。	内外面　指ナデ調整	焼成　軟質 色調　茶褐色	
20006	Fig70 PL46	口径 5.1 器高 4.1	Ⅱb	口縁部は直立し、底部は尖る。	内外面　指ナデ調整	焼成　軟質 色調　茶褐色	
25008	Fig70 PL46	口径 3.3 器高 2.7	Ⅱa	口縁部の歪大きい。口縁部直立し、端部尖る。偏平で部厚い。	外面　指オサエ調整 内面　指回転	焼成　軟質 色調　橙色～黄褐色	
25009	Fig70 PL46	口径 3.3 器高 2.6	Ⅱa	口縁部の歪大きい。口縁部直立し、端部尖る。薄手である。	外面　指オサエ 内面　指回転	焼成　軟質 色調　淡黄橙色	
25038	Fig70 PL46	口径 4.2 器高 2.7	Ⅰb	口縁部は上外方へのび、端部は丸い器壁は部厚い。	内外面　指ナデ調整	焼成　硬質 色調　淡黄橙色	
25039	Fig70 PL46	口径 3.7 器高 3.0	Ⅰa	口縁部は直立し、端部はやや尖る。胴部下半が張って平坦な底部へと下る。	内外面　指ナデ調整	焼成　硬質 色調　暗橙色	
25040	Fig70 PL46	口径 3.4 器高 3.2	Ⅰa	口縁部は直立し、端部は丸く部厚い。胴部下半が張って平坦な底部へと下る。	内外面　指ナデ調整	焼成　硬質 色調　橙色	
25133	Fig70 PL46	口径 2.4 器高 2.5	Ⅱa	口縁部の歪大きい。口縁部内面が直立し、端部はやや尖る。胴部は偏球状。	外面　指オサエ調整 内面　指回転	焼成　硬質 色調　赤橙色	
B016	Fig70 PL46	口径 3.8 器高 4.0	Ⅰa	口縁部は直立し、胴部下位が最も張る	外面　ナデ調整 内面　指ナデ調整	焼成　硬質 色調赤橙色～淡黄色	
B018	Fig70 PL46	口径 3.8 器高 2.7	Ⅱa	口縁部内側が直立し、端部は丸い。底部はやや尖る。	外面　指オサエ調整 内面　指ナデ調整	焼成　やや軟質 色調　橙色～淡黄色	
B038	Fig70 PL46	口径 5.9 器高 4.8	Ⅱc	口縁端部を欠損している。口縁部は僅かに内湾し底部は丸く広い。	内外面　指ナデ調整	焼成　硬質 色調　淡黄色	
B040	Fig70 PL46	口径 3.6 器高 3.0	Ⅱa	器壁部厚く、口縁端部は丸い。底部はやや尖る。	内外面　指ナデ調整	焼成　硬質 色調　赤橙色	
B055	Fig70 PL46	口径 5.2 器高 3.1	Ⅰc	口縁部が軽く外反し、端部は尖る。	内外面　丁寧る 指ナデ調整	焼成　硬質 色調　淡橙色	

土　製　品 (Fig. 70, PL. 48)

玉 (25～28)　管玉と丸玉がある。管玉は楕円形を呈し土錘に類似している。25・26は長さ2.6cm最大径1.3cmで同大である。26の中央孔は断面方形である。28の丸玉は径1.5cmで歪である。

模造鏡 (29～31)　29は第25号跡覆土中，他2例は表土層中の出土品である。鏡面はいづれも凸面である。指で摘まみ上げて鈕を作り出し，片方より穿孔している。

十字形土製品 (32)　第4号跡覆土中から出土した。中央部の厚い径7cm前後の円盤をヘラで切り取って十字形に仕上げている。折れた2本の脚は各々バチ形を呈すると思われ，全体は歪な十字形になる。胎土，焼成ともに良好である。甑落し底と考えたのは，7cm前後と推定される径が，出土した素透しの甕形甑の透部径より僅かに大きいからである。甑透部径は21009が6.8cm，25114が7.0cm，25132が6.2cmである。また二次加熱を受けた形跡はまったくない。

焼成土塊 (PL. 48-3)　胎土試験用かと思われる焼成された土塊が出土している。第3号及び11号住居跡の床面から出土しており，いづれもC式期である。

石製品・石器 (Fig. 71, PL. 47)

有孔方板（1）　厚さ3㎜の方板で，長方形を呈する。短辺は丸味をもつ。短辺頂部より15㎜下に径1.5㎜の孔が穿たれている。表裏とも粗い条痕が残っている。

平玉（2～5）　第21号跡床面から出土した。厚さ2～3㎜でほぼ7㎜角に折り取られ，中央に径1㎜の孔が一方より穿たれている。2の上下両面小口は折った後，磨かれている。

紡錘車（6～12）　8・9・12については第21号跡出土品であり，p. 47を参照されたい。7は20号跡覆土，6は表土中の出土物である。両者共製品で使用痕が観察される。

3種の形態がある。1）は盤状（6・7・9），2）は平底円頭状（8），3）は截頭円錐状で大形である（12）。

子持勾玉（10・11）　10は6号跡，11は21号跡の出土品である。10は長さ9.3㎝，最大幅5.0㎝で子をもつ。背と腹の子は凹形で背が長2.5㎝，腹の子3.2㎝でやや大きい。側面の子は截頭円錐形で，削り出したままである。11は長さ10.7㎝，最大幅6.8㎝である。腹部に細工のカット面が観察される。他は荒割りのままである。形状，長幅とも10と同大同形の未製品と考えられる。

有孔円盤未製品（13）　表土層から出土した。平たく割った板石を円形に細かくカットし，図上天井部に研磨の痕がみられる。表裏両面の中央部に打ちかきの窪みがある。

以上各種の製品・半製品・未製品の他に，削り屑や原石が出土している（PL. 47）。第21号床面から最も集中して出土した。当住居跡が祭祀用具，生活用具としての滑石製品加工場を兼ねていたことは，削り屑や台石の存在から疑いない。子持勾玉製品を出土した6号跡は床面出土土器がなく，時期はまったく不明である。竈をもち土製支脚を据えていたのに覆土中土器は別として破片一片さえ床面に残していない。17の磨石は竈中から出土したものであるが，時期決定の資料には供せない。なお，子持勾玉については佐田茂氏の論考があり，当遺跡出土品を含めて考察されている。(註8)

砥石（14・15）　砂岩製で，他に10点ほど出土している。いづれも断面方形で3～5面が使用面である。玉造り用か鉄器用かは不明である。

磨石（16・17）　偏平丸石で，17は上面中央に使用によると考えられる凹部がある。

註　1）近藤喬一「大曲り遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第一集』福岡県教育委員会，1970.
2）前川威洋「野黒坂遺跡」同上.
3）酒井仁夫「西中隈遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』福岡県教育委員会，1971.
4）柳田康雄編『津古内畑遺跡一第2次』小郡市教育委員会，1971.
5）鷺久嗣郎・宮崎貴夫「田尻遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第1集』1976.
6）関晴彦編「大道端遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一XⅣ』福岡県教育委員会，1976.
7）小田富士雄・柳田康夫・真野和夫『野添・大浦窯跡』福岡県教育委員会，1970.
8）佐田茂「九州の祭祀遺跡」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編　東出版，1975.

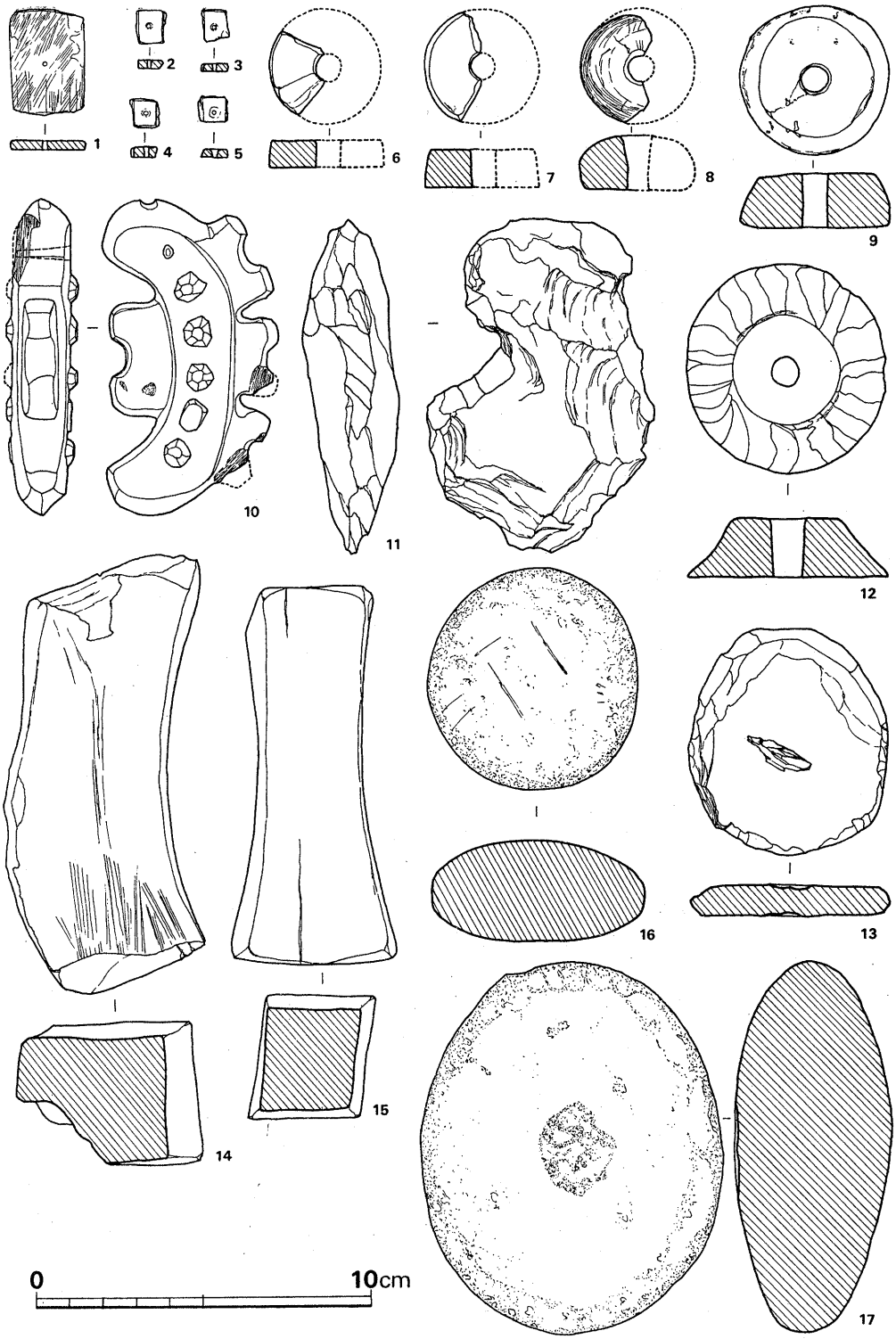


Fig. 71　滑石製品及び石器実測図（縮尺 1/2）

2. 窯跡の調査

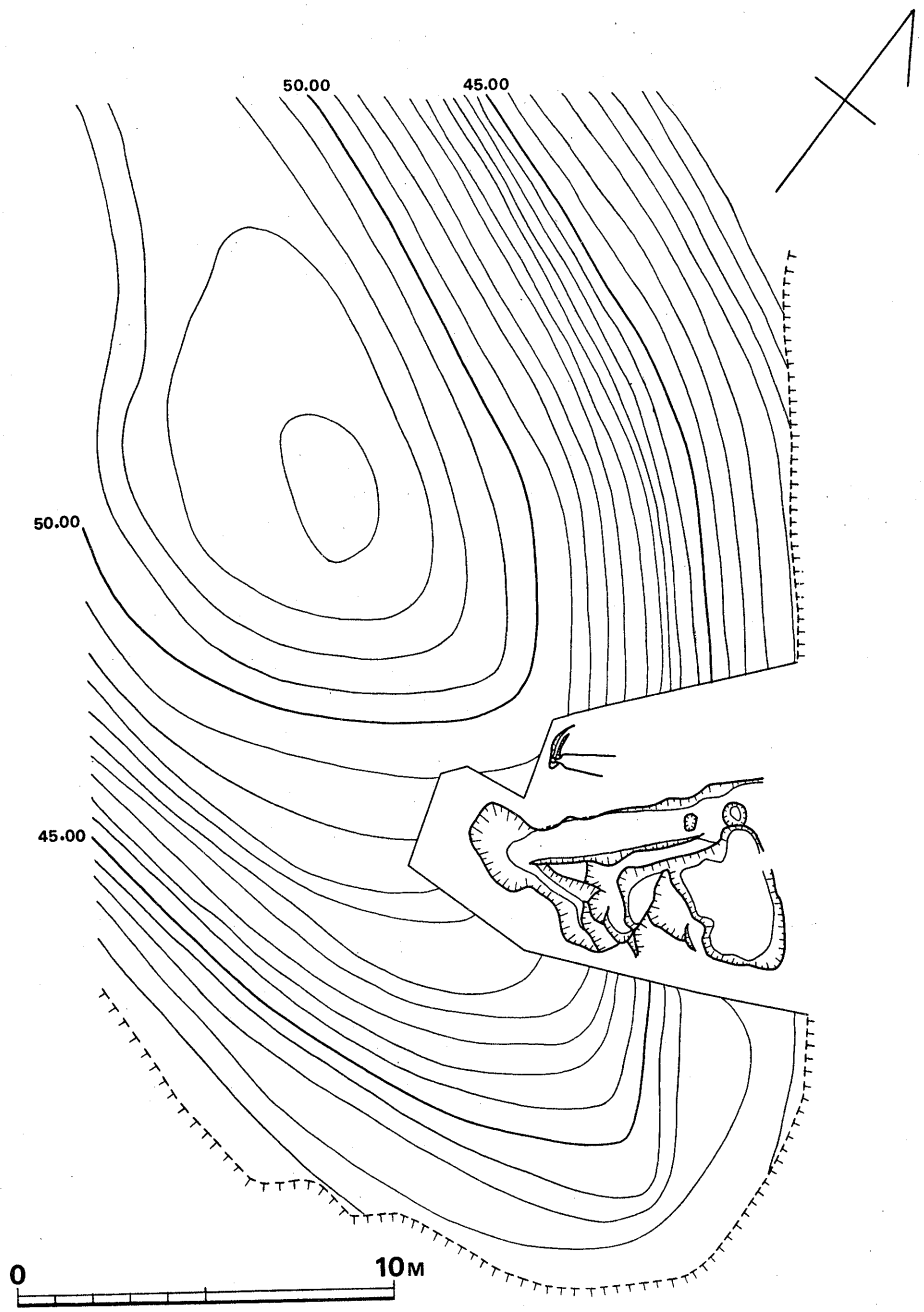


Fig. 72 窯跡周辺地形実測図(縮尺 1/200)

立　　地 (Fig. 70, PL. 50)

住居跡群の中心部より北東側約65mの丘陵裾部斜面に位置している。焚口は丘陵と東側の四王寺山塊とがちぎれた谷頭部に面している。谷頭部は水位が高く，表土下約30mで灰色粘質土になる。窯の作られた丘陵は花崗岩バイラン土で，焚口付近は赤色粘土である。

A. 第 1 号 窯

窯 体 の 構 造 (Fig. 73, PL. 51)

主軸上の全長は14mで，最大幅2m，焚口開口方向はN-42°-Eである。焚口床面と煙道部床面との比高差は4.0mである。

前　庭　部

バチ形に焚口より開き，主軸上の延長約4mを残している。中央に上幅1.4mの摺鉢状ピットがある。南壁は上部排水溝から続く階段状掘り込みによって切られている。

傾斜角15°である。

焚口・燃焼部

傾斜変換点までの主軸上における延長は4.2m，傾斜角15°である。先端が最も幅広く1.9m，焚口幅1.6mである。焚口中央に長径1.2mの浅い楕円形ピットがある。天井は崩壊しているが，推定高1.5mの地山掘り抜きのドーム形と思われる。床面及び両壁は青灰色によく焼き締っている。

焼　成　部

主軸上の延長は5.5m，最大幅2m，先端幅1.2m，傾斜角30°である。床面の下半は破損しているが，上半は残りが良く，下位4列，上位3列の土器置き段部がしつらえられている。床面及び壁面は1枚であった。

煙　道　部

延長30mの平坦面が焼成部に続いており，煙道位置と推定された。煙道はすでに壊れており，摺鉢状を呈していた。

排　水　溝

煙道部から窯体南側へ排水溝が通じている。底面幅25～30cmのV字形を呈している。その端部は1.2mと幅を広げ，窯体と並行する末広がりの階段状ピットへと続いている。その最下位は上幅4.8×8mの不整形ピットとなり，前庭部ピットに接している。

灰　　原

前庭部ピットに南接する上述不整形ピット中に炭灰が充満している。窯の北東側の丘陵裾部

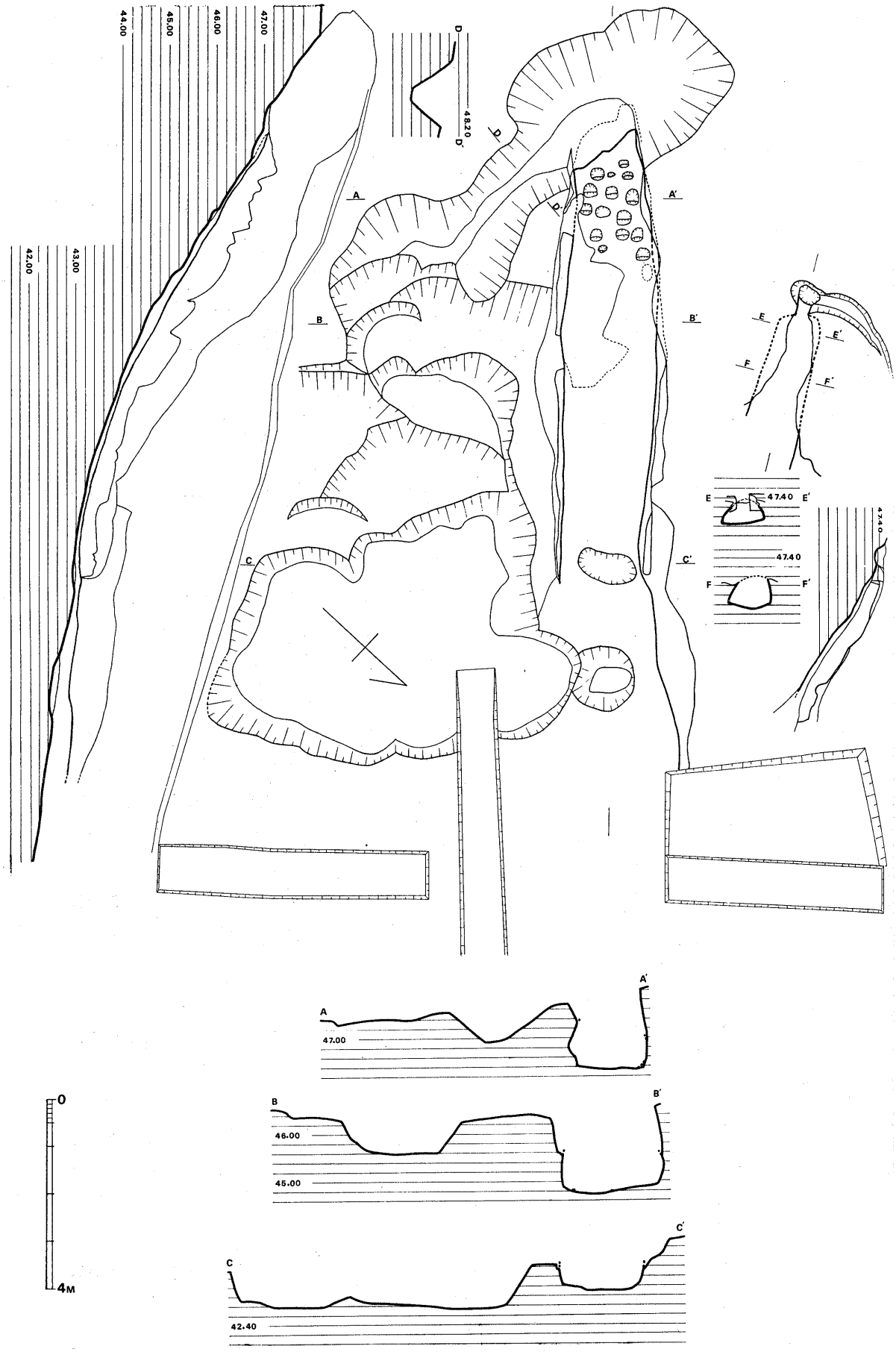


Fig. 73 第 1・2 号 窯 実 測 図 (縮尺 1/120)

及び谷頭部に数本のトレンチを設け調査したが，灰原の広がりはみられなかった。ピット中の灰原は三枚の炭化物層を挾んで17層に及ぶ焼土や炭灰層がみられた。

遺　　物

窯内部から須恵器はまったく検出されなかった。灰原から出土したものが全てである。

B. 第 2 号 窯

窯体の構造

第1号窯の北西側約2 *m*の斜面で検出された。焚口，燃焼部は崩れている。主軸の延長で全長3.7*m*を残す。開口方向はN-62°-Eで，1号窯の主軸より東へ20°振っている。

焼　成　部

残存長3 *m*で，最大幅1.06*m*，先端部幅0.82*m*である。傾斜角33°，床面からの推定高0.6～0.7*m*である。床面及び壁面は青灰色を呈し，焼き締っている。

煙　道　部

焼成部から30*cm*伸びて垂直な煙出し部に至る。高さ26*cm*を残す。

排　水　溝

煙道部から窯体北側へ2.5*m*排水溝がのびている。底部幅は煙道寄りで18*cm*，先端で5 *cm*である。

遺　　物

窯体内部から後出するF類の須恵器片が一点出土した。

C. 灰原出土須恵器・土師器 (Fig. 74・75, PL. 52・53, Tab. 13)

第1号跡灰原は10数層にわたって堆積していたが，時期的な差としてとらえることはできなかった。よって形態によって4類区分し，住居跡出土遺物と対応してC～F型式とした。このうちF型式は2号窯のものであることは確かである。E型式は1号・2号窯いづれとも決しがたい。C・D型式は1号窯のものであろう。

C　型　式

01～03の杯蓋，16～18の杯身，45・46・48・49の蓋と有蓋壷が含まれる。住居跡出土の例に比べ若干大きめであるが，11004は当窯の製品と思われる。有蓋壷は窯出土品としては稀である。45と46は釉着し，完全なセットである。49の広口内側に釉着した蓋のかえりは直立して1.3*cm*と長い。1号窯操業開始の時期が当C式期と考えられる。

D　型　式

04～07の杯蓋，19～23の杯身，47の蓋がこの型式に含まれる。40・41・44は次のE型式とい

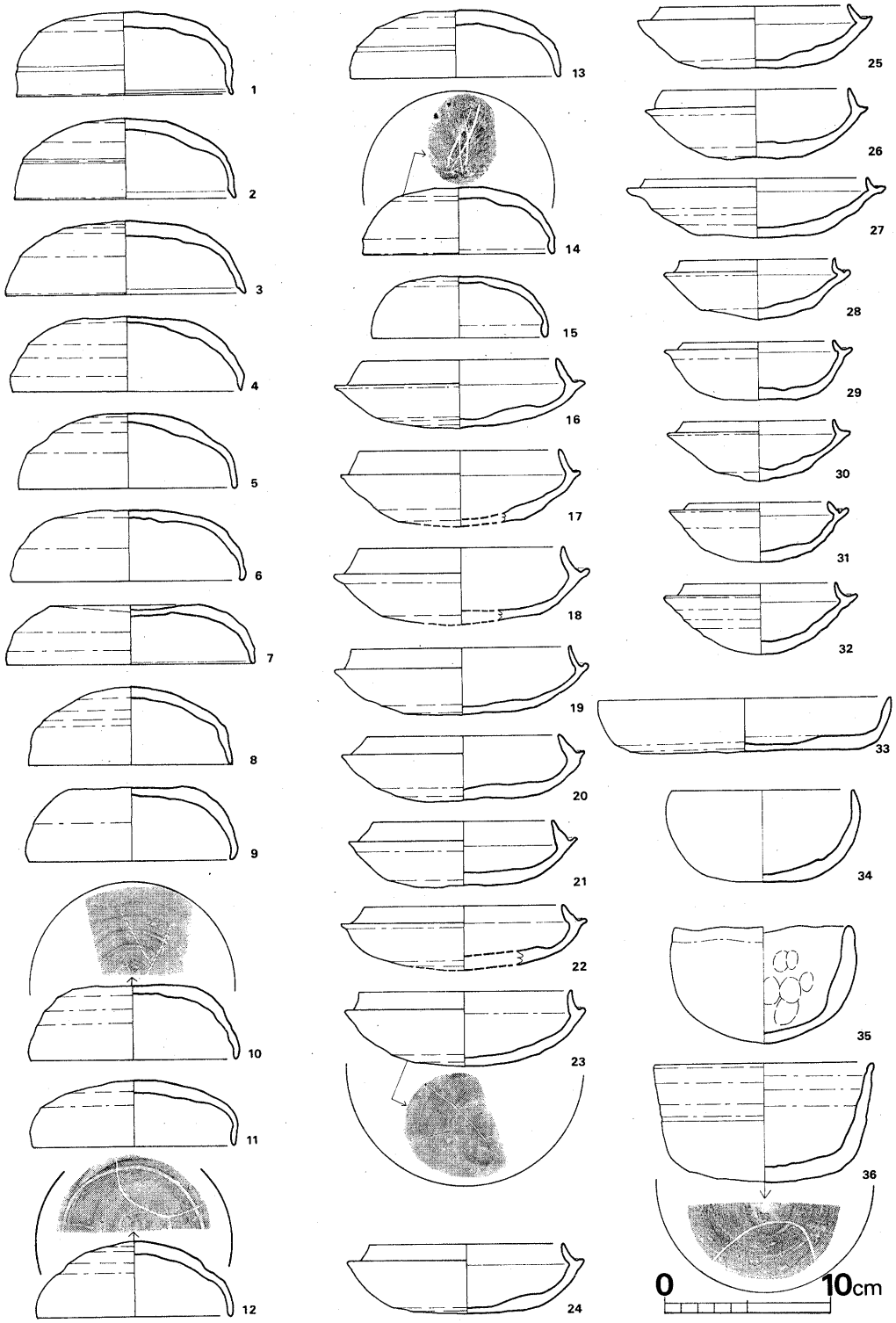


Fig. 74　第 1・2 号窯灰原出土須恵器実測図（縮尺 1/4）

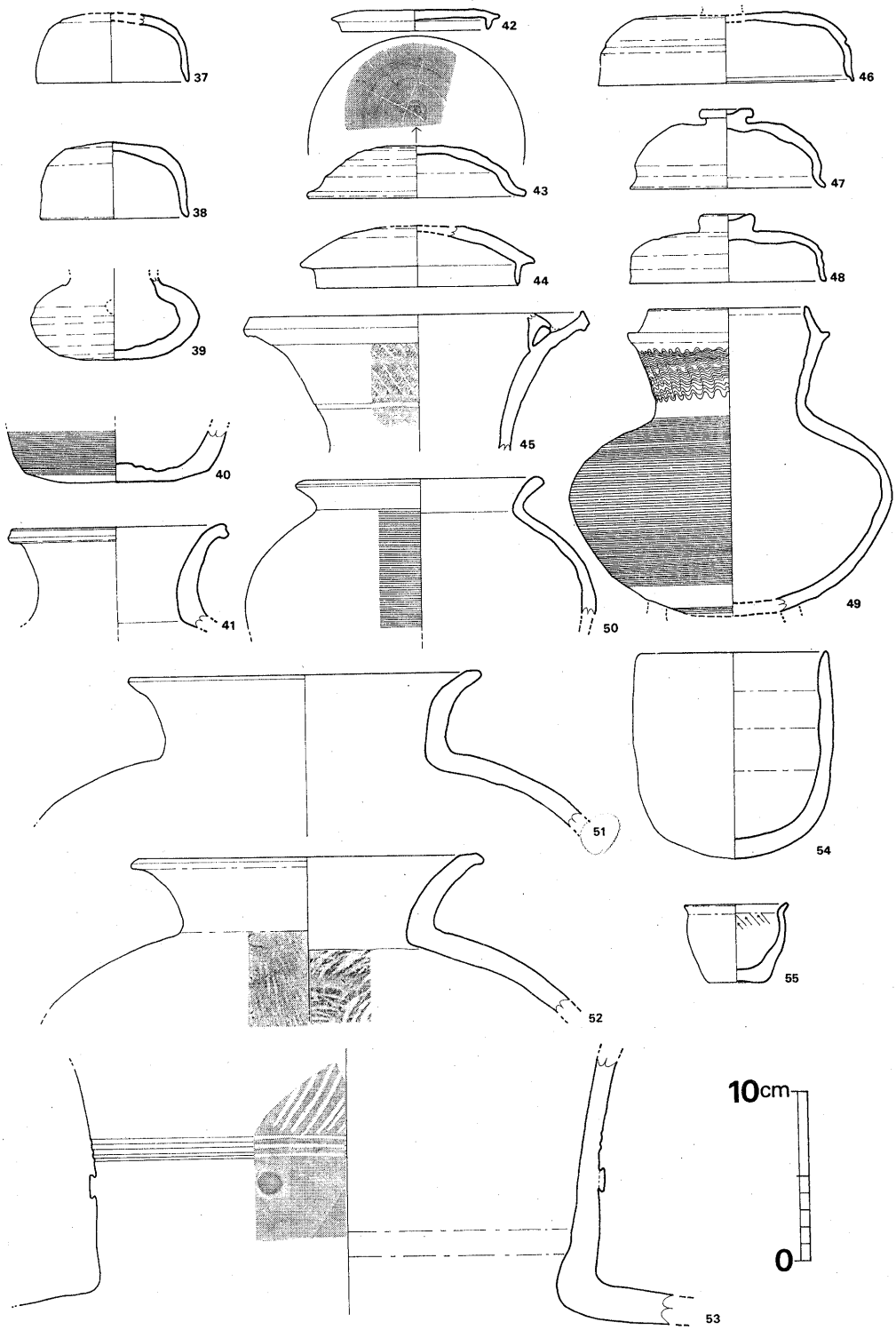


Fig. 75 第1・2号窯灰原出土須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

づれか決し難い。40の類品は萩原古墳から出土しており，小田氏編年のⅢb～Ⅳaに該当させている。(註1) 47の蓋は48に比べて体部が丸く，口縁部が強く外反するなど差があり，後出のものと考えられる。また当型式中の製品からヘラ記号が見られる点，住居跡出土例と同様である。また出土品のうちもっとも多量なのは当型式と次のE型式のものである。このころが最も窯操業の盛んな時期であったと思われる。

E　型　式

08～13の杯蓋，24～27の杯身，39の甕，43の蓋，50の壷，51～53の甕が当型式に含まれる。住居跡出土品のうち小形品と近似する。27の杯身に近似した類品は第5号住居跡床面から出土している。

F　型　式

住居跡の調査では検出されなかった型式である。杯蓋は口径10.6～11.5，器高3.7～4㎝で，薄手である。天井部は丸い。杯身は口径8.5～9.4，器高3.2～3.6㎝とほぼ同大で，たちあがりの形状も近似し，E型式から比べて急激に小形化している。当型式が短かい操業期間中に作製されたことを思わせる。43の蓋の類例は近くの王城山C古墳群出土品中にみられる。(註2)

型式不明品

土師器に近い器形をした須恵器が2点出土している。34は住居跡群の項で検討したⅢ類の土師器杯に類似している。35の椀はロクロ成形ではない。これらの品は日常生活用品として供されるものと思われる。

54・55は土師器である。54は口径6㎝，器高4.7㎝の小形鉢で，口縁部は外反し，端部は丸い。底部は平底である。内外面を丁寧にナデている。焼成は良好，淡茶褐色を呈し，胎土中に砂粒を含む。55は口径11.0，器高12.3㎝の深鉢である。体部中央が最も脹り，僅かに内傾して口縁部まで直線的にのび，端部は丸い。底部は球形である。ワヅミ成形で，内外面を指ナデ調整している。焼成は良好で赤褐色を呈している。胎土中砂粒を多く含んでいる。内面に煤が付着している。

D. 小　　結

これまで述べてきたことを総括すると次のようになる。

1）第1号窯は全長14m，最大幅2mと大形で，地山掘り抜きである。第2号窯は1号窯に近接し，20°東へ主軸を振っている。残存長3.7m，最大幅1.06mと小形である。

2）灰原中よりC～F型式の須恵器が出土した。第1号窯はC型式から恐らくE型式まで，第2号窯はF型式の須恵器を焼いたと考えられる。

3）製品中には日常生活用器を含んでいる。

4）製品中，住居跡出土の須恵器と類似したものを含んでおり，時期的にみても住居跡の住人によって営まれた窯と考えられる。

5）住居跡出土品中にみられたA・B両型式の須恵器は窯跡からは出土していない。別地点に窯が営まれていたか，あるいは他地から持ち込まれた須恵器と考えられる。

6）第2号窯出土のF型式の須恵器を出土する住居跡は検出されなかった。居住地を移動したのであろう。またF型式の蓋杯は法量をほぼ等しくしており，短期間の操業によるものと考えられる。

7）D・E型式にみられたヘラ記号は「－」字，「×」字形及びその組み合わせがほとんどであり，この点住居跡出土の須恵器・土師器と同様である。しかし同型式の全てにヘラ記号を刻んだのではなく，むしろその数は少ない。古墳出土の同型式の須恵器の場合，ヘラ記号をもった例の割合はより高い。この点，今後検討を加える必要性があろう。

註 1）川述昭人「萩原古墳」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VI』 1975.
2）酒井仁夫「王城山C古墳群」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IX』 1977.

Tab.13 裏の田窯跡須恵器観察表

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
01	杯蓋	Fig74 —	口径 13.0 器高 5.0	口縁部は内湾し端部で短かく外反する。内面に極く浅い凹面をもつ。天井部との境に浅い沈線を一条めぐらせる。天井部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 口縁部回転ナデ 天井部は沈線端より2.5㎜のところから回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整	焼成 良好、堅緻 色調 灰黒色 胎土 密	C
02	杯蓋	Fig74 —	口径 13.4 器高 4.8	口縁部は外傾してのち直立し、端部は僅か外反する。端部内側は内傾し軽い稜をもつ。天井部との境に浅い沈線をめぐらしている。天井部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビケ成形 外面 口縁部回転ナデ 天井部は沈線より1.5㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 密	C
03	杯蓋	Fig74 —	口径 14.3 器高 4.4	口縁部は大きく開き、端部でやや内湾する。端部内側は内傾し稜をもつ。天井部との境に軽い稜をもつ。天井部は浅く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 口縁部回転ナデ調整 天井部は稜より2.4㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面 口縁部回転ナデ調整 天井部不定方向ナデ調整	焼成 やや軟質 色調 黄褐色 胎土 密	C
04	杯蓋	Fig74 —	口径 13.7 器高 4.5	口縁部は内湾しながら開き、端部で短かく直立する。天井部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 口縁部、回転ナデ調整 天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面 口縁部回転ナデ調整 天井部不定方向ナデ調整	焼成 やや軟質 色調 黄褐色 胎土 密	D
05	杯蓋	Fig74 —	口径 13.0 器高 4.5	口縁部は僅かに内湾して長くのび端部は丸い。天井部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 口縁部回転ナデ調整 天井部は口縁端部から3.9㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面 口縁部回転ナデ調整 天井部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 密	D

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
06	杯蓋	Fig74 —	口径　13.8 器高　4.3	口縁部は直立し、やや外反したのち、端部は内湾し丸い。天井部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　細い砂粒多く含む	D
07	杯蓋	Fig74 —	口径　14.8 器高　3.5	口縁部は内湾しつつ下り、端部で直立気味になる。天井部は焼歪んでおり浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　密	D
08	杯蓋	Fig74 —	口径　12.2 器高　4.7	口縁部は内湾し外反してのち端部で直立気味になる。天井部は深く丸い。	マキアゲ　ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より3.6㎝の所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　乳灰色 胎土　密	E
09	杯蓋	Fig74 —	口径　12.4 器高　4.5	口縁部は内湾しつつ広く開き、端部近くで内湾する。端部は丸い。天井部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズヒキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部ナデ調整	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　密	E
10	杯蓋	Fig74 —	口径　12.6 器高　4.4	口縁部は凹凸多いが内湾しつつ開き、端部近くで内湾する。端部は丸い。天井部は深く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　密 天井部ヘラ記号あり	E
11	杯蓋	Fig74 —	口径　12.0 器高　4.0	口縁部は内傾してのち直立する。薄手である。端部は丸い。天井部は浅く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰色 胎土　密	E
12	杯蓋	Fig74 —	口径　11.7 器高　4.6	口縁部は内傾し、端部近くで直立する。端部は丸い。天井部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黄色 胎土　細砂粒含む ヘラ記号天井部にあり	E
13	杯蓋	Fig74 —	口径　12.4 器高　4.1	口縁部は内湾しつつ下り直立してのち端部で僅かに外反し、丸い天井部との境に沈線をめぐらしている。天井部は丸く、頂部のみ平坦になる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部僅かにナデ調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　密	E
14	杯蓋	Fig74 —	口径　11.5 器高　4.0	薄手である。天井部からなだらかな丸味をもって口縁部にいたり、端部近くで直立する。端部は丸く、内面肥厚する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　密	E

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
15	杯蓋	Fig74 —	口径 10.6 器高 3.7	薄手である。天井部からなだらかな丸味をもって口縁部にいたり端部近くで直立する。端部は丸く内面肥厚する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 口縁郎回転ナデ調整 天井部は頂部のみ回転ヘラ削り調整 内面 口縁部回転ナデ調整 天井部不定方向ナデ調整	焼成 不良 色調 乳灰色 胎土 細砂粒含む	F
16	杯身	Fig74 —	口径 11.8 たちあがり高 1.4 器高 4.1	たちあがりは1.8cmと長い。歪んで内傾がはげしい。端部は丸い。受部浅く窪んでのち水平にのび、端部は丸い。底部は浅く大きく開いてのち外傾して受部端部にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部は受部端より3.2cmの所から回転ヘラ削り調整。 内面 回転ナデ調整 底部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 灰色 胎土 密	C
17	杯身	Fig74 PL52	口径 12.1 たちあがり高 1.3 残存高 4.3	たちあがりは内傾してのち若干立ち立る。端部は丸い。受部は浅く窪んでのち水平に短かくのびる。端部はやや尖る。底部は平坦気味と思われる。内湾しつつ開き外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部は受部端より3cmの所から回転ヘラ削り調整。 内面 回転ヘラ削り調整 底部不明	焼成 良好 色調 灰色 胎土 密	C
18	杯身	Fig74 —	口径 12.3 たちあがり高 1.5 残存高 4.4	たちあがりは反り気味に内傾し、端部はやや尖る。受部は深く上外方へのびて端部は丸い。底部は平坦気味と思われる。内湾しつつ開き外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部は受部端より2.8cmの所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整底部不明	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 砂粒多し	C
19	杯身	Fig74 PL52	口径 13.1 たちあがり高 1.2 器高 4.0	薄手である。たちあがりは反り気味に内傾し端部は尖る。受部は短かく上外方へのび、端部は丸い。底部は平坦で大きく開き、僅かに外反して丸い受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部は受部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整	焼成 良好 色調 灰色 胎土 密	D
20	杯身	Fig74 PL52	口径 11.6 たちあがり高 1.1 器高 3.9	たちあがりは内傾甚しく端部は丸い。基部は厚手である。受部は浅く短かい。端部は尖る。底部は浅く平坦で内湾しつつ大きく開いて受部下で直立気味になり、上外方へのびて受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部は受部端より3.8cmの所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整 底部タタキ痕あり	焼成 良好 色調 灰色 胎土 密	D
21	杯身	Fig74 PL52	口径 11.1 たちあがり高 1.2 器高 3.8	たちあがりは内傾甚しく中央よりやや直立気味になって端部へいたる。端部はやや尖る。たちあがり基部は太い。受部は薄く短かく上外方へのび端部は尖る。底部は平坦で内湾しつつ大きく開いてのち外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 受部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整底部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 灰色 胎土 砂粒多し	D
22	杯身	Fig74 —	口径 11.9 たちあがり高 1.0 残存高 3.6	たちあがりは内傾甚しく中央よりやや直立気味になって端部へいたる、端部は丸く内側は肥厚する。受部は薄く短かく外方へのび端部は丸い。底部は平坦で内湾しつつ大きく開いて外上方へのびて受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 受部端より3.7cmの所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整底部不明	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 密	D
23	杯身	Fig74 —	口径 13.0 たちあがり高 1.2 器高 4.5	たちあがりは内傾してのち反り気味になり、端部で直立する。端部は丸い。受部は短かく上外方へのびて端部は丸い。底部は浅く丸い。器壁厚はほぼ均等である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 受部端より3.8cmの所から回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整 底部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 黒褐色 胎土 細砂粒含む ヘラ記号あり	D

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
24	杯身	Fig74 —	口径　11.9 たちあがり高 1.0 器高　4.1	たちあがりは反り気味に内傾し、端部で直立する。端部は丸い。体部との境に明瞭な稜をもつ。底部は平坦で内湾しつつ大きく開き、短かく外傾してのち上外方へのびて受部端へいたる。受部は浅く水平にのびて端部はやや尖る。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部平坦面のみ回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　赤褐色 胎土　密 ヘラ記号あり	E
25	杯身	Fig74 PL52	口径　11.4 たちあがり高 0.8 器高　3.7	たちあがりの内傾は甚しく、端部は丸い。受部は上外方へのび断面三角形である。端部は細く丸い。底部は平坦で内湾して大きく開き外反してのち上外方へのびて受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部平坦面のみ回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部小範囲のみナデ調整	焼成　良好 色調　淡黄灰色 胎土　細砂粒含む	E
26	杯身	Fig74 PL52	口径　11.2 たちあがり高 1.0 器高　4.1	たちあがりは直立気味に立ってから内傾し、端部は丸い。受部は短かく下外方へのび、端部は尖る。底部は平坦で内湾して開き、外反してのち短かく上外方へのびて受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部平坦面のみ回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　密	E
27	杯身	Fig74 PL52	口径　13.4 たちあがり高 0.5 器高　3.5	たちあがりは極く短かく内傾し、端部は鋭く尖る。内面は直立気味である。受部は浅く水平にのび、端部は丸い。底部は平坦で広い大きく開いてのち外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.6cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整	焼成　良好 色調　暗赤橙色 胎土　密	E
28	杯身	Fig74 PL52	口径　9.4 たちあがり高 0.7 器高　3.6	たちあがりは大きく反って端部は直立し、尖る受部との境は一条の鋭い沈線をめぐらしている。受部は短かく丸い。底部は尖り、上外方へ開いてのち稜をもって「く」字に曲り外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部ヘラ切り未調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰褐色 胎土　細砂粒含む	F
29	杯身	Fig74 PL52	口径　9.2 たちあがり高 0.5 器高　3.5	たちあがりは直線的に内傾し、端部は尖って内側が肥厚する。受部浅くやや長めで端部は丸い。底部は平坦で内湾して開き外反して受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部ヘラ切り未調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰色 胎土　細砂粒含む	F
30	杯身	Fig74 —	口径　9.1 たちあがり高 0.6 器高　3.6	たちあがりは僅かに反り気味に内傾し、端部は尖って内側が僅か肥厚する。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は丸く内湾して開き、僅かに外反しつつ受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部ヘラ切り未調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰色 胎土　細砂粒含む	F
31	杯身	Fig74 PL52	口径　8.5 たちあがり高 0.5 器高　3.5	たちあがりの内傾は甚しく、端部は尖り、内側が肥厚する。受部との境に沈線をめぐらしている。受部はやや長目に上外方へのび、端部は丸い。底部は丸く内湾して開き、外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部ヘラ切り未調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　細砂粒含む	F
32	杯身	Fig74 —	口径　9.2 たちあがり高 0.8 器高　4.2	たちあがりは大きく反って端部は直立気味で尖る。内面は肥厚する。受部はたちあがりからなだらかに続き端部は丸い。底部は丸く内湾しながら開き、僅かに外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　淡灰褐色 胎土　密	F

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
33	盤	Fig74 —	口径 17.5 器高 3.2	口縁部は外上方へのびてのち直立し、端部は尖る。底部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部ヘラ削り 内面 回転ナデ調整 底部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 暗赤橙色 胎土 密	
34	椀	Fig74 PL52	口径 10.9 器高 5.5	土師器杯Ⅲ類形を呈する。口縁部内側が直立し端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部ヘラ切り 内面 回転ナデ調整 底部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 密	
35	椀	Fig74 PL52	口径 10.5 器高 7.0	歪がある口縁部は部厚く直立して端部は丸い。	マキアゲ、テヅクネ成形 外面 指オサエの上指ナデ 内面 口縁部ヘラ削り 体底部指オサエ	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 砂粒含む	
36	鉢	Fig74 —	口径 13.1 器高 7.3	体部から口縁部はほぼ直線的に外上方へのび、口縁部端部は丸い。底部は丸味を帯びた平底である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 底部ヘラ削り 内面 回転ナデ調整 底部不定方向ナデ調整	焼成 不良 色調 淡黄褐色 胎土 密 ヘラ記号あり 内面スス付着	
37	蓋	Fig75 —	口径 11.2 器高 4.2	体部から口縁までなだらかに内湾気味に下り、端部は直立しやや尖る。天井部は丸味を帯び平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 天井部回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整	焼成 良好 色調 灰褐色 胎土 密	
38	蓋	Fig75 —	口径 8.7 器高 4.6	体部から外傾して下り、直立してのち端部近くで外反する。端部は丸い。天井部は丸味を帯び平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ調整 天井部回転ヘラ削り調整 内面 回転ナデ調整 天井部不定方向ナデ調整	焼成 良好 色調 灰黒色 胎土 密僅かに砂粒含む	
39	瓶	Fig75 —	頸部径 5.4 球部径 10.2 残存高 4.9	偏球状胴部のみである。孔部も残している。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 胴部上半回転ナデ調整 下半回転ヘラ削り調整	焼成 良好 色調 灰褐色 胎土 密	E
40	平瓶	Fig75 —	残存高 3.0	平底で内湾気味に立ち上る。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面 カキメ調整 内面 ナデ調整	焼成 良好、堅緻 色調 灰色 胎土 密	D～E
41	横瓶	Fig75 PL53	口径 12.6 残存高 6.0	口縁部のみである。内湾したのち外反し端部は折りかえして丸く、中央をややナデくぼめている。	マキアゲ、ミズビキ成形 内外面 回転ナデ調整 内面頸部青海波叩	焼成 良好、堅緻 色調 青灰色 胎土 密	D～E

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
42	蓋	Fig75 —	口径　8.8 受部径　10.8 器高　1.2	偏平な蓋である、かえりは内傾し端部は尖る。内面やや肥厚する。受部は上外方へ短かくのび端部は尖る。天井部は平坦で僅かに反って受部端にいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　天井部ナデ調整 内面　かえり部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　密	F
43	蓋	Fig75 —	口径　13.0 器高　3.1	口縁部は強く外反して体部との境に内外面稜をもつ。口縁端部は水平気味になり丸い。天井部は平坦で内湾気味に広く開いて縁部との境稜へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　天井部回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　密 天井部ヘラ記号あり	E
44	蓋	Fig75 —	口径　12.2 受部径　14.3 残存高　3.5	かえりは僅かに内傾し、端部は直立気味である。受部は僅かに上外方へ長くのび端部は尖る。天井部は浅く僅かな丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　天井部は受部端から2.9cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　天井部タタキ痕残る。	焼成　良好、堅緻 色調　灰色 胎土　密	D~E
45	有蓋壺	Fig75 PL53	口径　20.0 頸部径　10.3 残存高　8.0	締った頸部から大きく外反し短かく水平になったのち再び外反して口縁部へいたる。頸部やや下位に一条の沈線をめぐらしている。口縁部は上外方へのび鋭く内傾して平坦画をつくって端部へいたる。内面上に内傾する平坦面をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　頸部上位波状櫛目文を描く 内面　回転ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　暗茶褐色～淡灰色 胎土　砂粒多し かえり付き蓋の一部が釉着	C
46	蓋	Fig75 —	口径　15.4 残存高　4.0	口縁部は直立してのち外反する。端部内側に稜の鋭い凹面をもつ体部との境に一条の沈線をめぐらしている。天井部は平坦で中央にボタン状ツマミが付されたと考えられる	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　天井部回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰黒色 胎土　密	C
47	蓋	Fig75 PL53	口径　11.6 器高　4.6	口縁部は内傾してのち強く外反し端部が尖る。天井部は平坦で体部はは丸い。ツマミはボタン状で頂部は水平に張り出す。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部回転ヘラ削り調整　ツマミ回転ナデ調整 内面　回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　灰色 胎土　密	D
48	蓋	Fig75 PL53	口径　11.9 器高　4.0	口縁部は外傾してのち直立し端部近くで短かく外反する。端部は面取りして平坦である。天井部は平坦で内湾して口縁部へいたる。ツマミは体部に比して大形でボタン状を呈する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部回転ヘラ削り調整　ツマミ回転ナデ調整 内面　回転ナデ調整、天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰色 胎土　砂粒含む 49と対になる	C
49	有蓋脚付壺	Fig75 PL53	口径　9.3 頸頭部径　8.9 胴部径　19.2	たちあがりは内傾してのち若干直立気味になる。端部内側は直立して稜をもつ。受部は水平に短かくのび端部はやや尖る。頸部は僅かに外反してのび、上外方へ短かく張って受部端へいたる。胴部は偏球状で脚部は接合部より欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　たちあがり部回転ナデ調整　頸部波状櫛目文　胴頸部接目回転ナデ調整　胴部カキメ調整 内面　口縁部～頸部回転ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰色～青灰色 胎土　砂粒含む 自然釉流れる	C
50	壺	Fig75 PL53	口径　13.8 胴部径　21.0 残存高　8.7	口縁部は強く外反し、端部は太く平坦である。胴部は偏球状を呈する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部カキメ調整 内面　口縁部～肩部回転ナデ調整	焼成　良好、堅緻 色調　灰色 胎土　砂粒若干含む	E

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
51	甕	Fig75 —	口径　20.8 残存高　9.5	口縁部は内傾し外反したのち端部下でさらに強く外上方へのびる。端部は丸く上面平坦である。	マキナデ、ミズビキ成形 口縁部　内外面　回転ナデ調整 肩部　内外面タタキ調整	焼成　良好 色調　暗茶褐色 胎土　細砂粒含む	E
52	甕	Fig75 —	口径　19.9 残存高　9.5	口縁部は内傾し外反したのち端部下でさらに強く上外方へのびる。端部は丸く上面平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 口縁部　内外面回転ナデ調整 肩部　内外面タタキ調整	焼成　良好 色調　暗茶褐色 胎土　細砂粒含む	E
53	甕	Fig75 PL53	頸部径　29.5 残存高　16.3	頸部は直立しボタン状付文を貼りつけ、その上位に三条の沈線をめぐらす。沈線部位から外反して口縁部へのびる。肩は水平に近く横へ張る。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整 内面　ヘラ削りののち回転ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　細砂粒を含む	E

3.　その他の遺構と遺物

A. 縄文時代の遺物

(1) 土　　器 (Fig. 76)

住居跡調査地の全区から縄文土器の細片が単発的に出土した。総数約150片で主に晩期Ⅲの土器である。遺構は検出されなかった。

第1類（1）　1点のみである。直線的に外傾し，口唇部に僅かな刻みをめぐらしている。上半を横走，下半を縦走する1㎝間隔の細隆線を配している。前期の轟D類土器と考えられる。

第2類（2～5）　施文により2区分される。

a（2～4）　2は鋭い沈線を表裏両面に刻んでいる。口縁に近い部分であろう。3は幅5㎜の凹線を引き，凸帯に刻みをめぐらしている。4は両面をヘラ削り調整し，口唇部に刻みを入れている。以上3点は後期前葉の南福寺式土器と考えられる。

b（5）　5は丸味をもった精製土器の胴部片である。磨消縄文帯は細く直線的である。後期前葉の福田KⅡ式土器であろう。

第3類（6～19）　晩期の土器であり，2型式含まれる。なお粗製土器については，いづれとも決しがたいものがある。

a（6）　口縁部が「く」字形に屈折する浅鉢で，口縁部に2本の凹線をめぐらしている。精製土器で，胎土中に雲母を含んでいる。晩期Ⅰの土器であろう。

b（10～19）　甕，深鉢，浅鉢，椀，壷が含まれる。10・12～14は精製土器，他は粗製土器である。10は斜格子の刻みを入れた口縁部片で，12は二枚貝の放射肋で調整した胴部片で両者共椀である。12は口縁部が大きく外反し，端部内外面に鋭い沈線をめぐらしている。13は「く」字口縁部をもつ。両者共浅鉢である。14は頭部から胴部にかけてなだらかに移行し，やや肩のはる壷である。15・16は底部で，いづれも円盤貼り付けである。他に10点以上の底部片が出土しているが，いづれも同様の成形法である。これらの類は晩期Ⅲの土器であろう。

なお，7～9については時期をふれなかった。7・8は二枚貝の条痕で調整されており，8

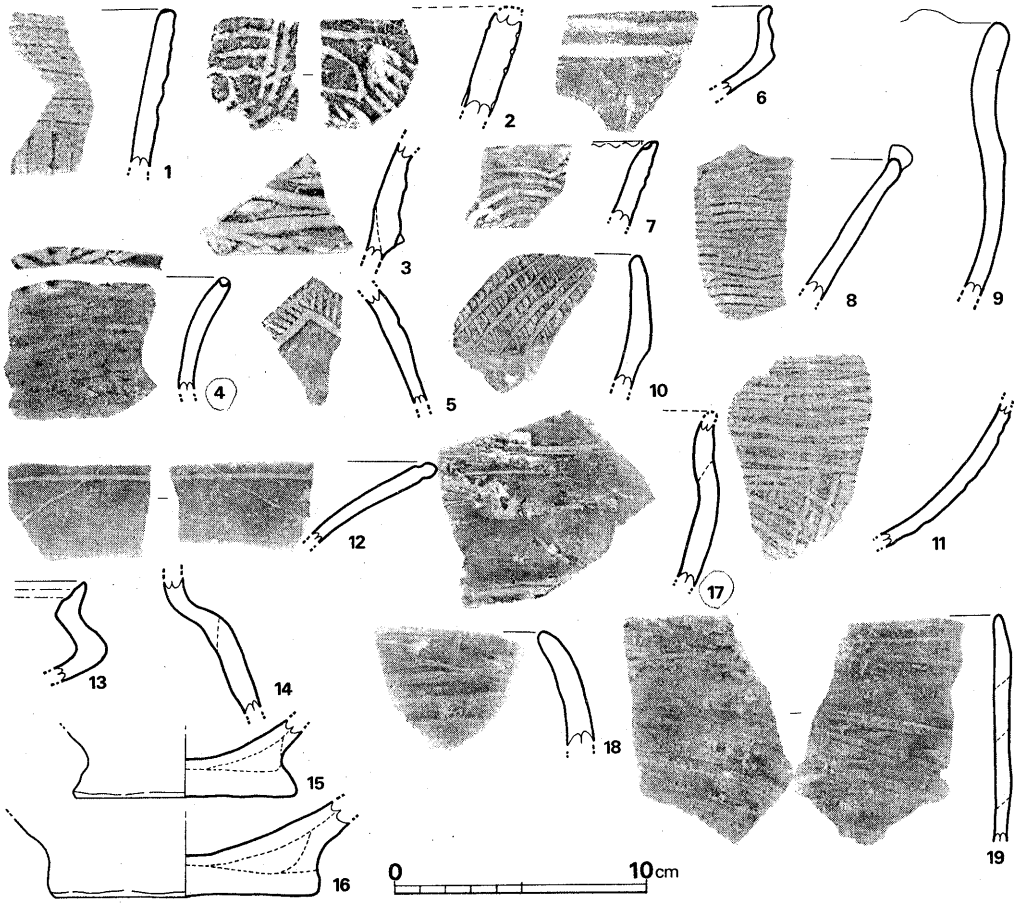


Fig. 76　各地点出土縄文土器実測図（縮尺 1/3）

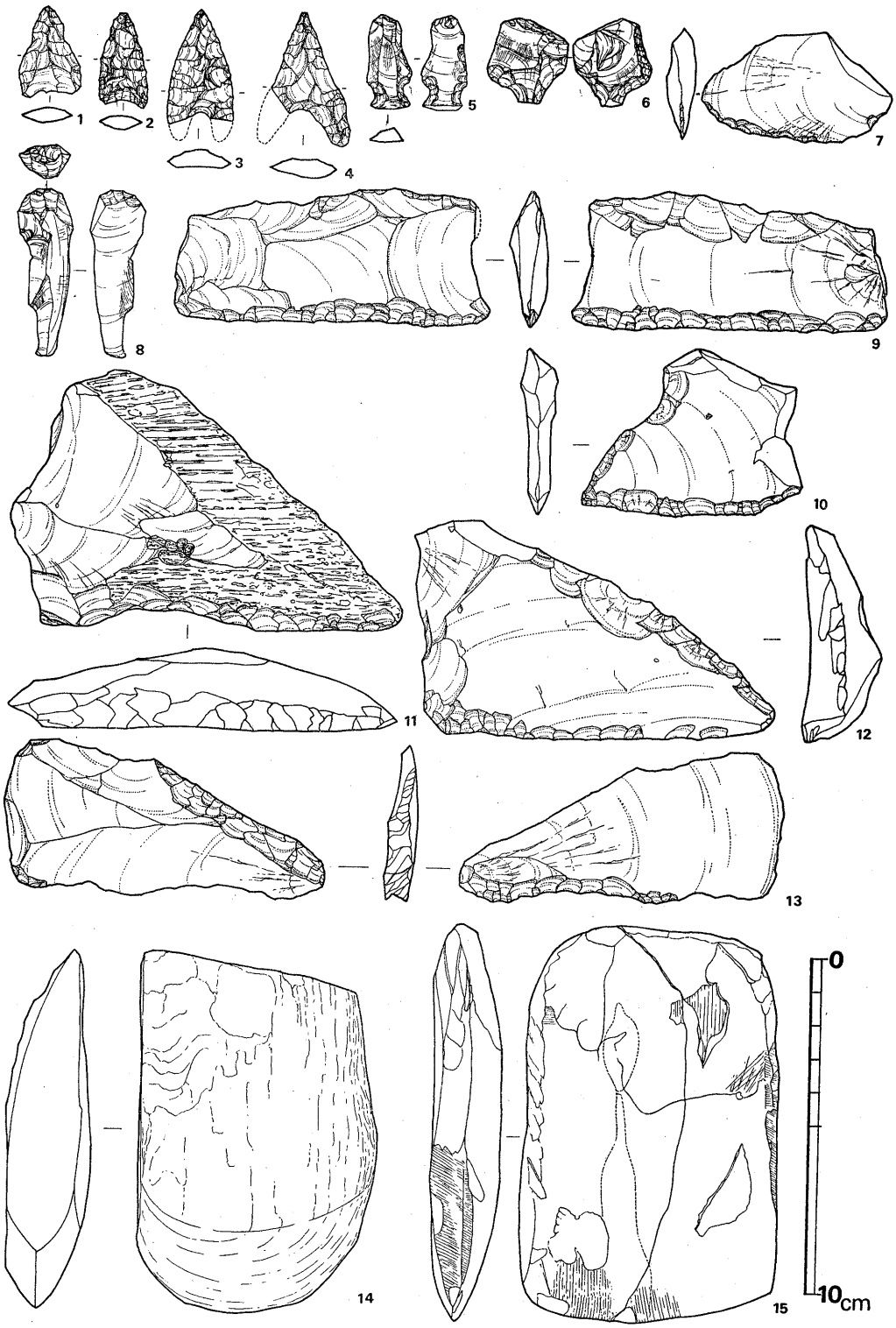


Fig. 77　各地点出土石器実測図(縮尺 1/2)

は山形の貼り付けを口縁部にもつ。9も同様の貼り付けをもっており，胎土は6と似て，雲母を含んでいる。雲母を含む土器は当遺跡出土品中この2点のみと限定されており，9は6と同じ晩期Ⅰの時期に比定されるかもしれない。

（2）石　　器 (Fig. 77, PL. 54)

13点の打製石器と3点の磨製石器が出土している。弥生時代の石器が含まれていないとの確証はないが，弥生式土器は遺跡全体でほんの数片の出土をみたにすぎず，弥生期には遺跡周辺が居住地たりえなかったと考えられる。磨耗した石鑿が一点出土しているが，図示した石器は全て上記の理由で縄文期のものと考えられる。

石鏃（1～4）　大小2種ある。1・4はサヌカイト製，2・3は黒耀石製である。全て作りは粗く，3の裏面には原剝片面を広く残している。

二次加工剝片（5・8）　5は縦形剝片に両面両側よりノッチ状加工がなされている。原剝片のバルブを残し，上端は加工基面と思われる。8も縦形剝片で，バルブを取り去る細加工が裏面になされている。両者共黒耀石製である。

錐（6）　剝片バルブを利用しており，両側はブランティングされている。上縁は原剝片の加工基面を残している。黒耀石製である。

削器（7・9～13）　いづれもサヌカイト製である。7は貝殻状剝片の側縁を簡単に刃付けした小削器である。9～13は大きな縦あるいは横形剝片の両側縁を二次加工している。9は縦形剝片を利用しており短冊形を呈する。上縁の加工は粗く，下縁の加工は丁寧であり，全体に薄手であるが，上縁はやや厚い。11～13は平面形が長三角形で，底縁全体と斜縁の一部が片面加工されている。10は半欠であるが，同様な形態をとると思われる。そのうち10・13の原剝片は縦剝ぎで，断面が偏平である。11・12の原剝片は横剝ぎで断面部厚く，刃部も90°に近い。特に12はバルブを基縁としているため，その傾向は顕著である。両者は用途を異にすると思われる。

磨製石斧（14・15）　玄武岩製である。14は風化のため表面に自然脈を露呈させている。図上左側は砥石として再利用されている。15は幅広で，縦断面はやや反り気味である。表面は一度破損した後再び磨研されている。刃部に縦方向の使用痕が観察される。斧以外の用途を考えるべきかもしれない。これら2点の他，蛇紋岩製石斧の刃部片が出土している。

出土した石器は以上である。このうち削器は形態上数分類され，上記した通りである。このうち9の短冊形削器は「石庖丁形石器」あるいは「穂摘具形石器」と呼ばれているものに類似しており，晩期の所産である。また5の抉入加工剝片は後期に通有のものである。

B. 奈良時代以降の遺構と遺物

遺　　構

住居跡を切っていた計9口の楕円形ピットと井戸1基，正方形ピット1口がある。

楕円形ピット

約3×2 *m*の楕円形を呈し，深さ1.5*m* の摺鉢状である。埋土や床面から遺物はほとんど出土せず，僅かに第25号住居跡を切るピット中より糸切り底土師器杯が出土した（Fig. 81-9)。13世紀後葉のものであろう。

井　　戸 (Fig. 79, PL. 55)

P－6～7区で検出された石組み井戸である。口径6.8*m*の掘り方で，深さ4.2*m*で不透水層である黄色粘土に達し，基盤面としている。裏込め土は粘土や小礫を混じた砂土である。

基盤面上に小口横幅40*cm*，平長60*cm*の石を径160*cm*の円形に敷き並べ，その上に高さ60*cm*にわたって2～3段小礫を積み，その上に小口高40～60*cm*の大振りの石材を乗せている。それより上も同様に小礫を高さ60*cm*前後乗せては大石という順序をくりかえして口に至っている。口の石材は特に大きい。

井戸中から Fig. 81-10・11と同様の土師器片と共に木製椀片や竹・梅実が出土した。14世紀前葉の井戸であろう。なお調査時も湧水は甚しかった。

方形ピット (Fig. 78)

P－6区で検出された。底面で1.07×1.15*m*の方形を呈しており，残存する深さは15*cm*である。南壁側中央に接して両口摺鉢 (Fig. 81-14) と土師器杯（7）が重ねられた状態で出土した。摺鉢は割って重ねられていた。13世紀後葉に位置付けられよう。

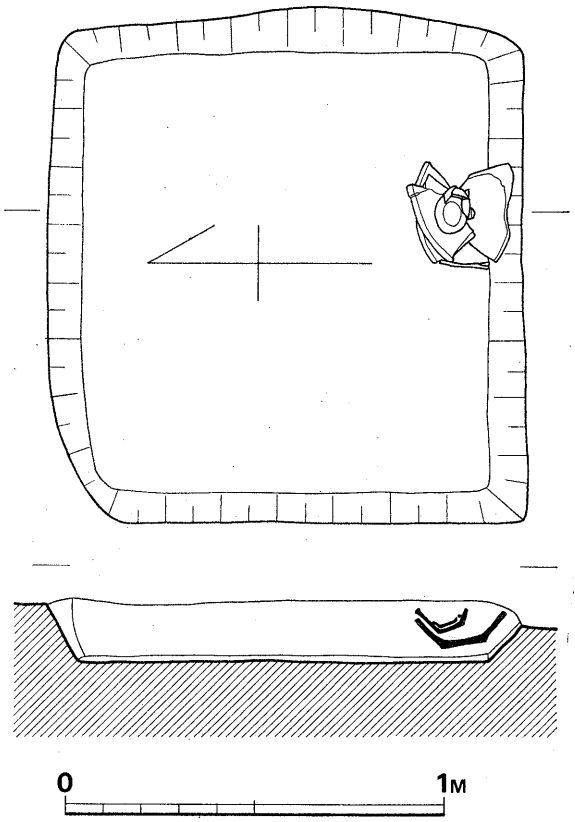


Fig. 78　P－6区方形ピット実測図（縮尺 1/20)

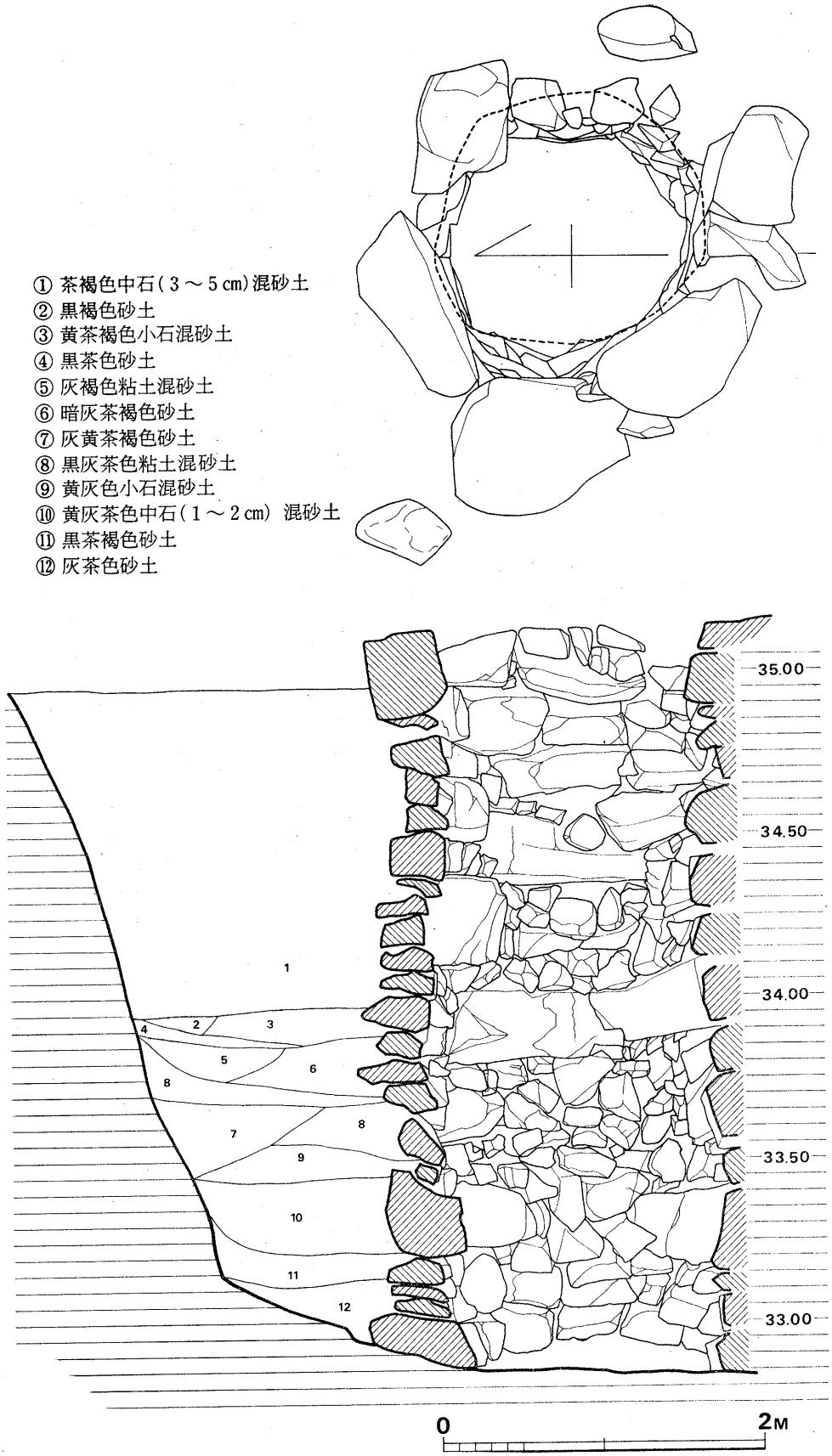


Fig. 79　P－6～7 区 井 戸 実 測 図 (縮尺 1/40)

遺　　物

須　恵　器 (Fig. 80)

各地点より出土したが，全て遺構に伴うものではない。1・2の底面はヘラ切りで，高台は幅広く，1は直立，2は短かく外反する。3～5は蓋で，同種のものは近接する成屋形遺跡の住居跡から出土している。(註1)以上は亀井氏のいう歴史時代Ⅱ期のもので，8世紀前葉に(註2)位置付けられよう。6・7の体部は直線的に外傾し，高台は低く偏平であり，底面中央からづれて貼り付けられている。8は特殊な須恵器で指成形である。口縁端部は平坦で，底部は部厚い。時期については類例がなく，決め難いが，須恵器生産の最終段階のものではないかと推定した。

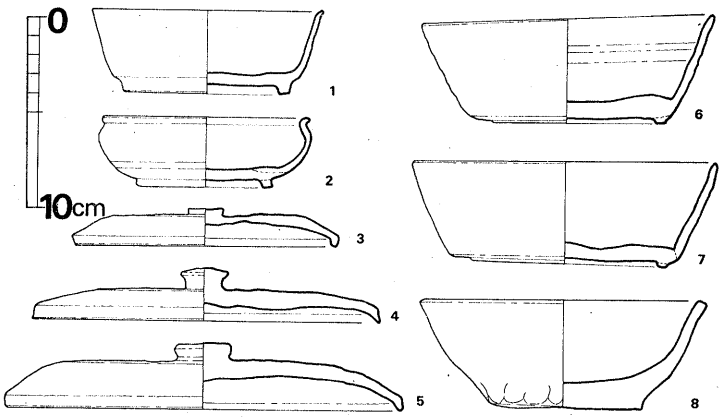


Fig. 80　各地点出土奈良時代須恵器実測図（縮尺 1/4）

以上は亀井氏のいうⅢ期，8世紀後葉と考えられ，次の土師器 (Fig. 81-1～4) と同時代の所産と思われる。

土　師　器 (Fig. 81)

各地点から出土したが，遺構に伴うのは方形ピットから出土した杯（7）と摺鉢 (13) のみである。これらを4期に区分した。

第　1　期（1～4）

椀と杯がある。椀は体部が直線的に外傾する。1は口径16.1㎝，器高5.9㎝，2は口径15.7㎝，器高5.5㎝である。杯は底部ヘラ切りである。3は口縁部が体部からそのまま引き出されている。口径12.7㎝，器高3.4㎝である。4は口縁部が若干外反する。口径13.4㎝，器高3.8㎝である。

第　2　期（5・6）

椀のみである。5は体部下位に稜をもち，体部はやや丸味をもつ。高台は直立する。口径14.8㎝，器高4.9㎝。6は薄手で，体部下位に稜をもち，口縁は僅かに外反する。口径16.8㎝。

第　3　期（7～9）

杯と摺鉢である。杯は底部糸切りである。7は口径11.9㎝，器高2.9㎝。8は口径12.5㎝，

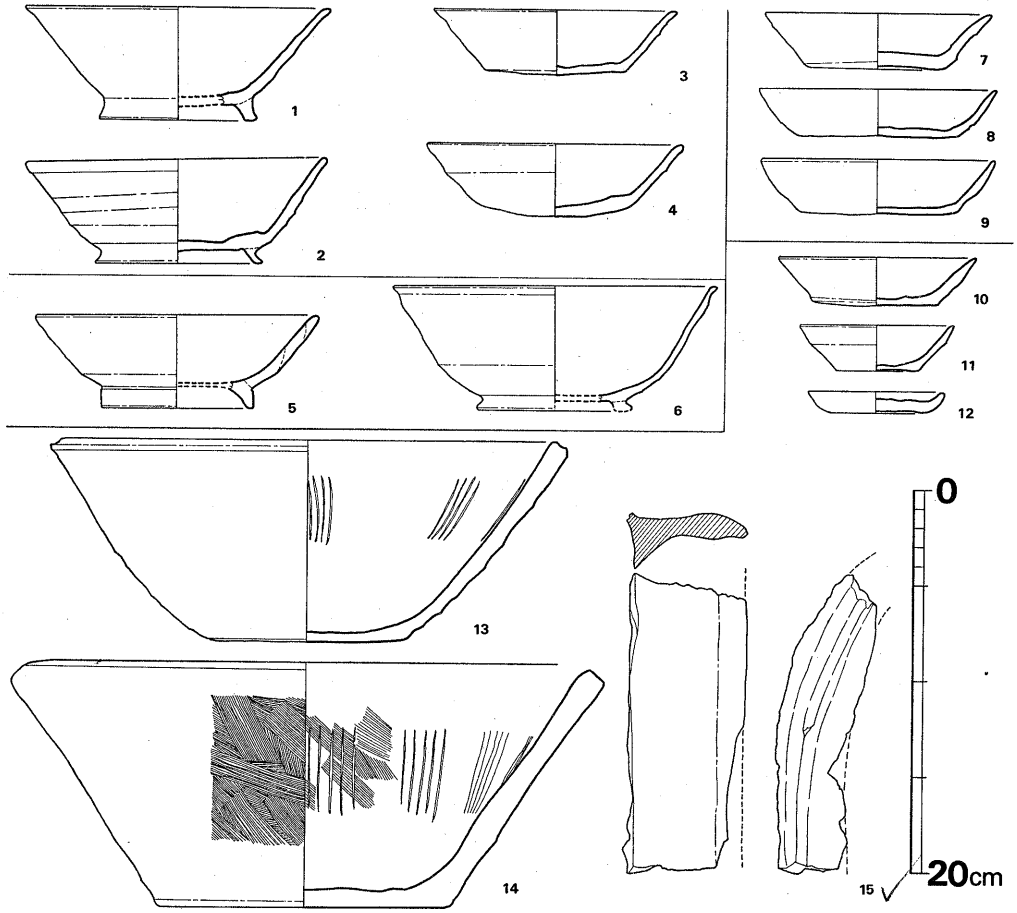


Fig. 81　各地点出土奈良時代以降土師器・土製品実測図（縮尺 1/4）

器高2.5㎝。9は口径12.3㎝，器高2.9㎝である。摺鉢は土師質で口縁端は平坦である。14は両口である。

第　4　期（10～12）

杯と小皿がある。底部はいづれも糸切りである。10は口径10.4㎝，器高2.5㎝。11は口径8.1㎝，器高2.4㎝。12は口径7.1㎝，器高1.1㎝である。

以上4期は大宰府政庁地区及び条坊地区の調査により次の時期が妥当かと思われる。(註3)

第1期　8世紀後半

第2期　9世紀後半

第3期　13世紀後半

第4期　14世紀前半

竈 (Fig. 81-15)

移動式竈の庇が一点出土している。竈体との貼り付け部から剝げ落ちたものである。

註　1）亀井明徳『成屋形遺跡』エーザイ株式会社，1970.
2）亀井明徳「向佐野，長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI』福岡県教育委員会，1975.
3）前川威洋他『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　第2集』福岡県教育委員会，1975.
横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集2，1976.

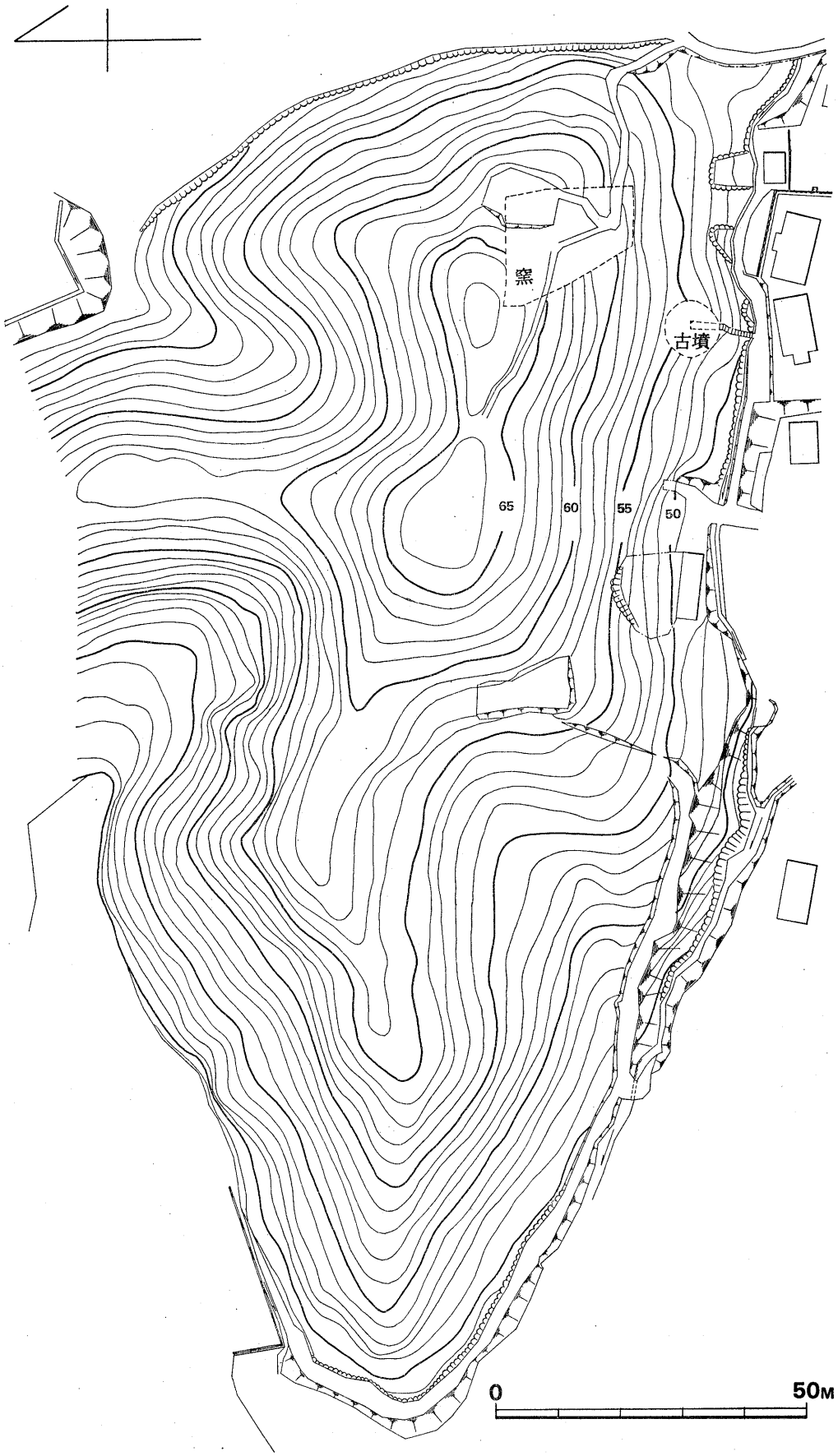


Fig. 82 雉子尾窯跡周辺地形実測図（縮尺 1/1000）

Ⅳ　雉子ケ尾窯跡の調査内容

立　　地 (Fig. 82, PL. 56)

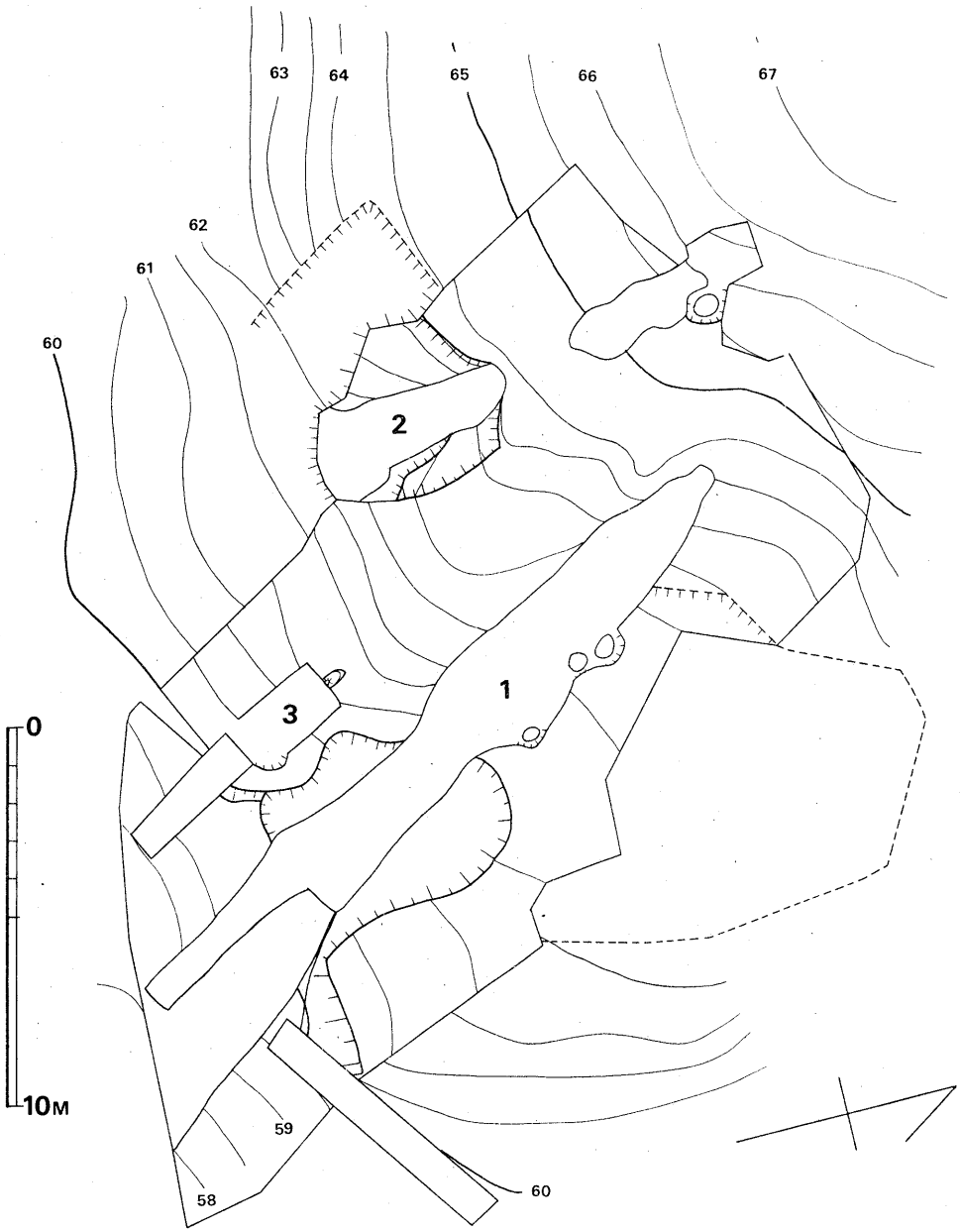


Fig. 83　雉子尾窯跡地形実測図(縮尺 1/200)

乙金山から西派する雉子ケ尾丘陵は南北から入った谷によってへだてられ，一見独立丘陵の様相を呈している。最高所は標高67mである。丘陵南麓には5基の横穴式石室を主体とした円墳が散在する。

丘陵の根元に近い南斜面に2基の窯が存在する。標高は59mから64mにかかっている。なお窯跡は古野古墳群とは直線距離で，1,200m，裏ノ田窯跡とは900mの距離にある。

1. 第1号窯と出土遺物

窯体の構造 (Fig. 83, PL. 57-1・58)

主軸上の全長は15.5mで，最大幅2.3m，焚口開口方向はN-149°-Eである。焚口床面と煙道部床面との比高差は4.54mである。また焚口下に道がついており，4.6mにわたって検出した。地山掘り抜きのドーム形窯である。

焚口・燃焼部

傾斜変換点までの主軸上における延長は2.0m，傾斜角は第一次床面ではほぼ水平で，第2・3次床面では嵩上げされ，8°の傾斜をもつ。先端1.2mにわたる壁及び床面は青灰色によく焼き締っており，この部分が燃焼部と思われ，幅1.7mである。その下位は床面幅を1.1mと縮めており，口部であろう。口部に続く前庭部は底幅1.7mと広げ，長さ2.1mをはかる。

焼成部

主軸上の延長は10.2m，最大幅2.3m，先端幅0.8m，下半の傾斜角22°，上半35°である。床面は3次にわたって作り直されている。第3次床面も破損が著しく，部分的に第2次床面が露出している。第1次床面の先端部には5列の段部がしつらえられている。なお，焼成部は明治時代以降の墓穴によって4個所損われている。

煙道部

延長80cmの平坦面が焼成部に続いており，その先端部に40×50cmの楕円形を呈した煙道がある。残存高35cmである。

灰原

焚口に続く前庭部及びそれに続く道とその西側にかけて炭灰が堆積していた。その下方は道によって切られていたが，灰原としてはさほどの広がりはなかった。

遺物 (Fig. 85・86, PL 61・62, Tab. 14)

多くは灰原中の出土遺物であるが，焚口床面や焼成部内の堆積層中や第2次床面上からも若干の遺物が出土している。1は焼成部内堆積層中出土破片と灰原出土破片が接合した。10は焚口，8は第2次床面上，19は焼成部内堆積層中の出土品である。

出土した器種は杯蓋・杯身・高杯・壷・提瓶・横瓶・甕・釜である。

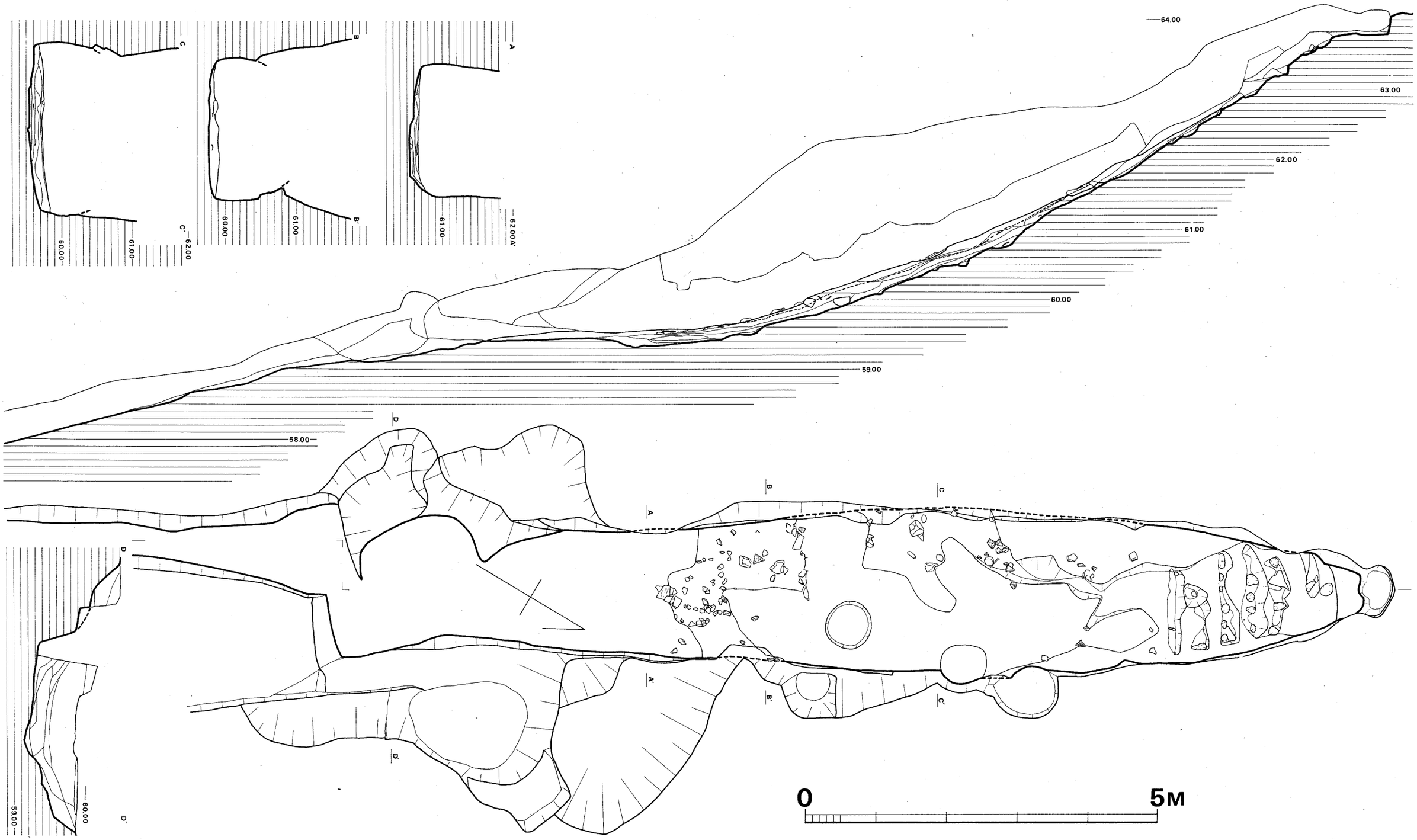


Fig. 84 第１号窯実測図（縮尺1/60）

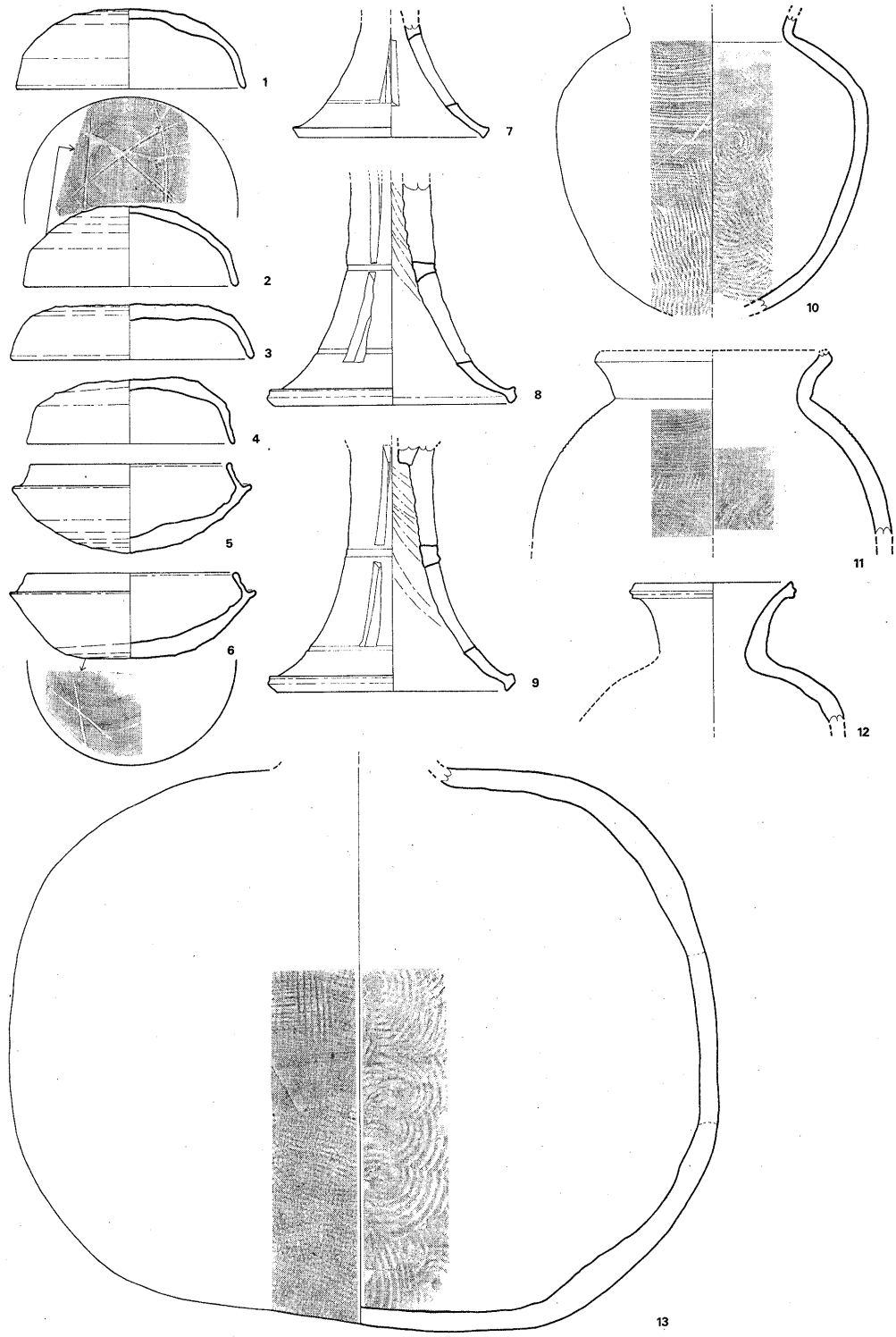


Fig. 85　第1号窯出土須恵器実測図（縮尺 1/4）

杯蓋　1・2はほぼ同様の形状を呈し，天井部は深く丸い。口縁部は直線的に開き，端部も太く丸い。ただし口径に0.8cmの差が認められる。3は天井部平坦であるが，口縁部の形状は1・2に類している。4は口径からいっても，口縁部の作り方からいっても前者と異っており，回転ヘラ削り調整の範囲も狭い。

杯身　5・6はほぼ同様の形状を呈し，底部は深く丸い。たちあがりは中央部よりも端部のほうが太く丸い。一種の作風を示していよう。5は口径13.8cm，6は14.3cm前後の蓋とセットになろう。

高杯　脚のみであるが大小2種ある。7は透し1段分を残し，器壁は薄手である。8・9は器形の特徴は7と同様であるが，透し2段分を残し，厚手である。両種の透孔の入れ方，沈線の引き方，焼成，色調，胎土共に同様である。

壷　10・11共に球形胴部である。外面の胴部上半に叩きの上からカキメ調整を施している。胎土は密である。

提瓶　12は口縁部のみであるが，かなりの大形品と思われる。

横瓶　13は胴部片平を残すのみである。内側面の作業孔塞ぎの接合部はよくナデられている。全体の形状は第2号窯出土品に類似する。

甕　口縁端部は粘土貼り付けによって肥厚させて面取りするが，単純な幅広い沈線をめぐらしている。口縁部が短かく外反するものと，大きくラッパ状に開くものの2種が含まれ，後者は大甕であり，櫛目波状文が付されている。

釜　19は焼成不良であるが完形品である。焼成部内堆積層中より出土したので，最終操業時に窯に入れられたまま何らかの理由で放置され，窯崩壊時に転置したものと考えられる。須恵器としては特殊な類であろう。

Tab.14　雉子尾第1号窯出土須恵器観察表

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
01	杯蓋	Fig85 PL61	口径　13.6 器高　4.7	口縁部は直線的に開き、端部は丸い。天井部は深く丸く口縁部との境に軽い稜をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より4.4cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　黄褐色 胎土　僅かに砂粒含む
02	杯蓋	Fig85 PL61	口径　12.8 器高　4.7	口縁部は直線的に開き、端部は太く丸い。天井部は深く丸く口縁部との境に軽い稜をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整、天井部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　黄褐色 胎土　僅かに砂粒含む 天井部にヘラ記号あり
03	杯蓋	Fig85 PL61	口径　14.3 器高　3.2	口縁部は若干内湾気味に開き、端部は太く丸い。天井部は浅く平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より3.0cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　茶灰色 胎土　僅かに砂粒含む

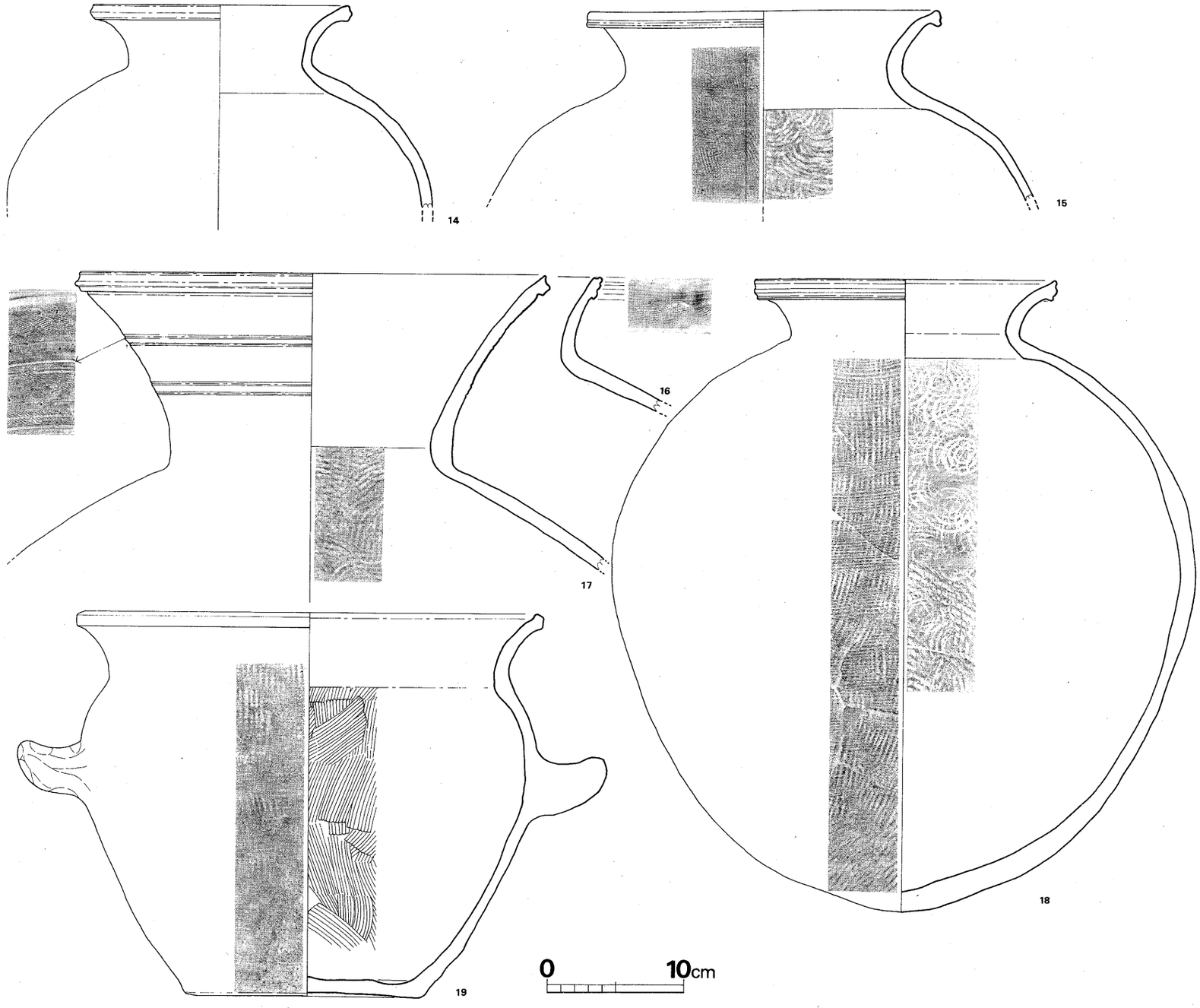


Fig. 86 第１号窯出土須恵器実測図②（縮尺1/4）

番号	器種	挿図番号 図版番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
04	杯蓋	Fig85 PL61	口径　12.3 器高　3.9	口縁部は直立気味に立ったのち外傾し、端部は細く丸い。天井部は浅く平坦で口縁部との境に内外面共稜をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色 胎土　大砂粒多し
05	杯身	Fig85 PL61	口径　11.8 たちあがり高 1.3 器高　5.2	たちあがりは内傾してのち端部近くで直立する。端部は太く丸い。受部は浅く短かく上外方へのび端部は丸い。底部は深く丸く受部下で短かく外反して受部端へいたる。たちあがり部から受部に比して底部は部厚い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.9cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　茶褐色 胎土　僅かに砂粒含む
06	杯身	Fig85 PL61	口径　12.5 たちあがり高 1.1 器高　5.0	たちあがりは内傾してのちやや直立気味になり端部へいたる。端部は太く丸い。受部は浅く短かく上外方へのび端部は丸い。底部は深く平坦で受部下で短かく外反して受部端へいたる。たちあがり部から受部に比して底部は部厚い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　受部端より3.7cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整、底部同心円叩の上不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　赤灰色 胎土　僅かに砂粒含む 底部にヘラ記号あり
07	高杯	Fig85 PL61	脚裾径　11.0 残存高　6.7	脚部はゆるやかに大きく開き端部へいたる。端部は面取りされ平坦である。柱部に4個所の長方形透しがあけられ、その下端に接して一条の沈線がめぐっている。	マキアゲ、ミズビキ成形 内外面　回転ナデ調整	焼成　良好 色調　青黒色 胎土　僅かに砂粒含む
08	高杯	Fig85 PL61	脚裾径　14.0 残存高　13.0	脚柱部上半は直立気味で一条の沈線をめぐらした下は大きく開き、裾部との境にも沈線を一条めぐらしている。裾部をひきだし端部で太く肥厚させて「く」字に面取りしている。柱部に3個所二段に方形透しを入れている。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整 内面　裾部回転ナデ調整　柱部シボリ痕	焼成　良好 色調　黒色～青灰色 胎土　僅かに砂粒含む
09	高杯	Fig85 PL61	脚裾径　13.8 脚基部径　4.9 残存高　14.3	脚柱部上半は直立気味で一条の沈線をめぐらした下は大きく開く。裾部との境にも沈線を一条めぐらしている。裾部をひきだし、端部で太く肥厚させて「く」字に面取りしている。柱部に3個所2段に方形透しを開けている。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整 内面　裾部回転ナデ調整　柱部シボリ痕	焼成　良好 色調　黒色～青灰色 胎土　僅かに砂粒含む
10	壺	Fig85 PL61	頸部径　9.8 胴部径　18.7 残存高　17.3	頸部はよく締り、胴部はやや肩が張った球形を呈する。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部上半カキメ調整　胴部下半平行叩調整 内面　口縁部～胴部上半回転ナデ調整　胴部下半同心円叩	焼成　不良 色調　褐色 胎土　密
11	壺	Fig85 —	口径約　13.3 頸部径　11.6 胴部径約　21.6 残存高　10.8	口縁部は短く中央より強く外反する。端部は平坦で内側へ若干張り出していたようである。胴部は球形を呈する。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部上半カキメ調整　胴部下半平行叩の上部分的カキメ調整 内面　口縁部～胴部上半回転ナデ調整　胴部下半同心円叩	焼成　良好 色調　黒色～青灰色 胎土　僅かに砂粒含む
12	提瓶	Fig85 PL61	口径　9.1 頸部径　6.2 残存高　8.3	口縁部は中央より大きく外反し端部外面に薄い粘土紐一条を貼り付けて肥厚させ、中央をナデくぼめている。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部　回転ナデ調整、胴部カキメ調整 内面　口縁部　回転ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色～灰色 胎土　密
13	横瓶	Fig85 —	頸部径　10.4 残存高　33.2	胴部は約½残存するのみで全形状は不明である。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　肩部回転ナデ調整　胴部平行叩 内面　肩部回転ナデ調整　胴部同心円叩	焼成　良好 色調　黒色～青灰色 胎土　僅かに砂粒含む

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
14	甕	Fig86 PL62	口径 18.8 頸部径 13.6 胴部径 18.8 残存高 15.1	口縁部は大きく外反し、端部外面に粘土紐を一条貼り付けて肥厚させ、面取りしつつナデつけている。肩部は丸く胴部へと下がる。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部平行叩 内面　口縁部回転ナデ調整　胴部同心円叩	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　僅かに砂粒を含む
15	甕	Fig86 —	口径 27.5 頸部径 20.4 残存高 14.4	口縁部は大きく外反し端部外面に厚く粘土紐を一条貼り付けて肥厚させ、面取りしつつナデつけている。頸部の締りはゆるく肩も下り気味である。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部平行叩 内面　口縁部回転ナデ調整　胴部同心円叩	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　僅かに砂粒含む 口縁端部に自然釉
16	甕	Fig86 —	残存高 9.8	口縁部はやや立ち気味で端部外面に巾広く粘土紐を貼りつけて肥厚させ、2条の沈線をめぐらしている。頂部もナデくぼんでいる。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　中央に波状櫛目文　胴部平行叩 内面　口縁部回転ナデ調整　胴部同心円叩	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　やや粗
17	甕	Fig86 PL62	口径 33.8 頸部径 20.6 残存高 22.1	口縁部は長く大きく外反し、端部外面に偏平な粘土紐を一条貼りつけて肥厚させ面取りしつつナデている。上半に波状櫛目文を施してから2本づつ2段の沈線帯を設けている。頸部口はよく締り胴部は大きく張るようである。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整＋波状櫛目文　胴部平行叩 内面　口縁部回転ナデ調整　胴部同心円叩	焼成　良好 色調　黒色～青灰色 胎土　密
18	甕	Fig86 PL62	口径 22.0 頸部径 17.6 胴部径 42.5 残存高 47.2	口縁部は短かく強く外反し、端部外面に偏平な粘土紐を一条貼り付けて肥厚させ、2条の沈線をめぐらしている。胴部は大きく球形に張ったのち内傾して尖り底となる。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部平行叩 内面　口縁部回転ナデ調整　胴部同心円叩	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　僅かに砂粒含む
19	釜	Fig86 PL62	口径 33.0 頸部径 29.1 底径 16.2 器高 28.6	口縁部はゆるやかに外反し、端部は「く」字に面取りし、内側に段部を有する。頸部は締りは弱く内側に軽い稜をもつ。胴部は僅かに湾曲しながら底部に至る。底部はやや上げ底である。器壁は胴下半がやや薄い他均一である。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　胴部平行叩　底部不定方向ナデ調整 内面　口縁部回転ナデ調整　胴部ハケメ調整	焼成　不良 色調　明黄橙色 胎土　砂粒多し

2. 第2号窯と出土遺物

窯体の構造 (Fig. 87, PL 57-2・59・60)

主軸の残存長は9.7*m*で，前庭部南端は崖によって若干切られている。煙道部は崩れている。最大幅1.75*m*，焚口開口方向はN-169°-Eで，1号窯と20°のづれがある。焚口床面と残存焼成部最高床面との比高差は3.7*m*である。地山掘り抜きのドーム形窯である。

前庭部

窯体から東側では「コ」字に，西側ではバチ形に開き，中軸で約1.5*m*のびた所で崖によって切られている。床面は4*cm*の厚さで2回補修されている。

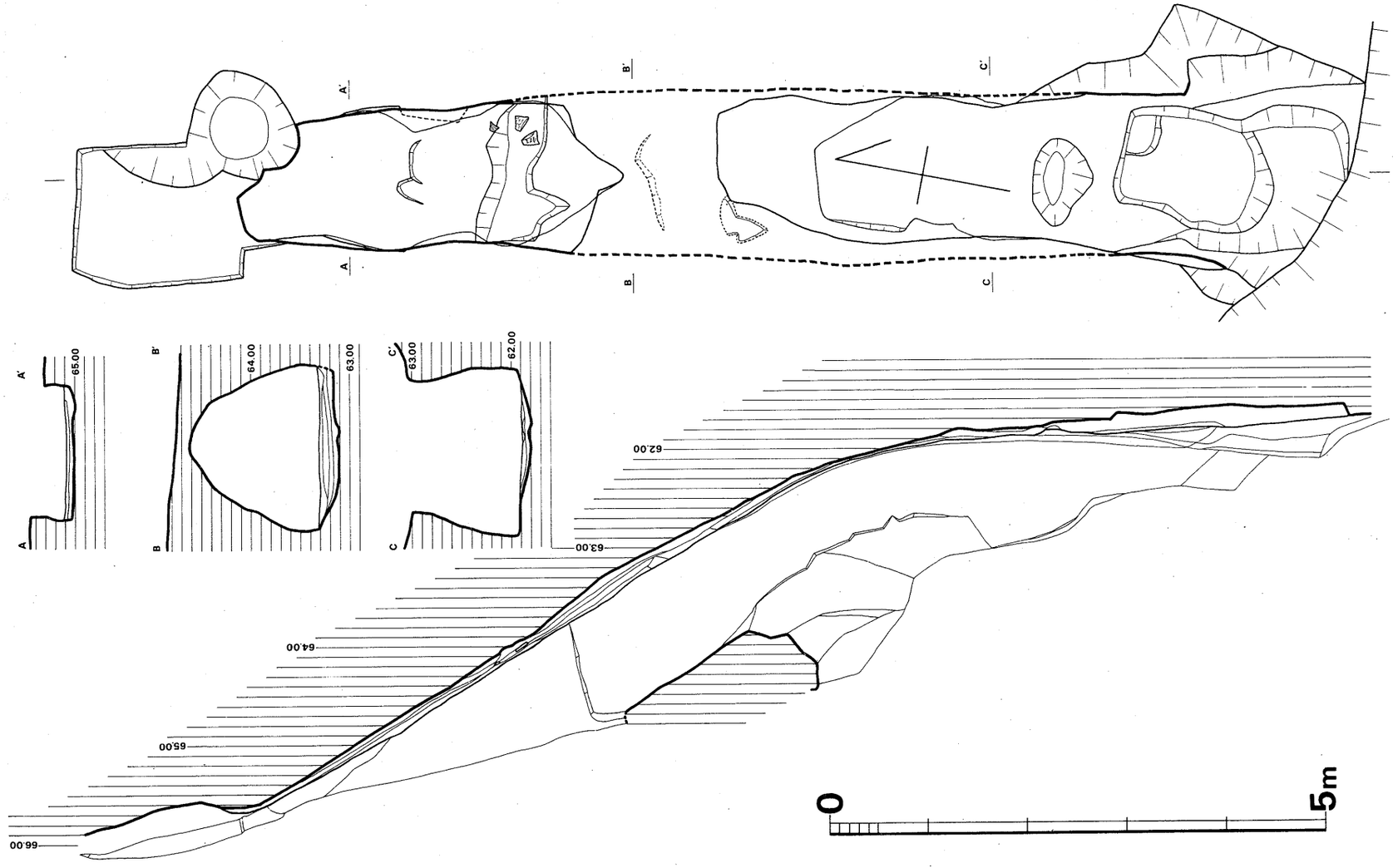


Fig. 87 第2号窯実測図（縮尺1/60）

焼　成　部

主軸上の延長は6.5*m*残している。幅は燃焼部との境が最も広く，その後1.3*m*まで幅を縮める。その後すぐ1.4*m*と若干広がりを見せて煙道部へと狭くなる。傾斜角30°である。床面は最高4回補修されているが，最終床面は部分的に破損し，下位の床面が露出している。天井は長さ95*cm*分のみ完残していた。この部分での高さは，第1次床面より1.45*m*，最終床面より1.3*m*である。先端部及び煙道部は残存していなかった。

灰　　原

前庭部楕円形ピットを埋め，床面と水平にした上から炭灰層が堆積する。約1.1*m*延びた所で崖によって切られている。

遺　　物 (Fig. 89・90, PL. 63・64)

遺物は焼成部内最終床面上及び灰原中から若干出土したが，大半は焚口最終床面上よりの出土品である。蓋杯を主とし，高杯，甕を含んでいる(Fig. 88)。

出土した器種は杯蓋・杯身・高杯・椀・甕・横瓶である。

杯蓋　4を除き全て体部と口縁部の境に軽い稜をもっている。口縁部は外傾してのち端部近くで外反するもの (1)，直立するもの (3～

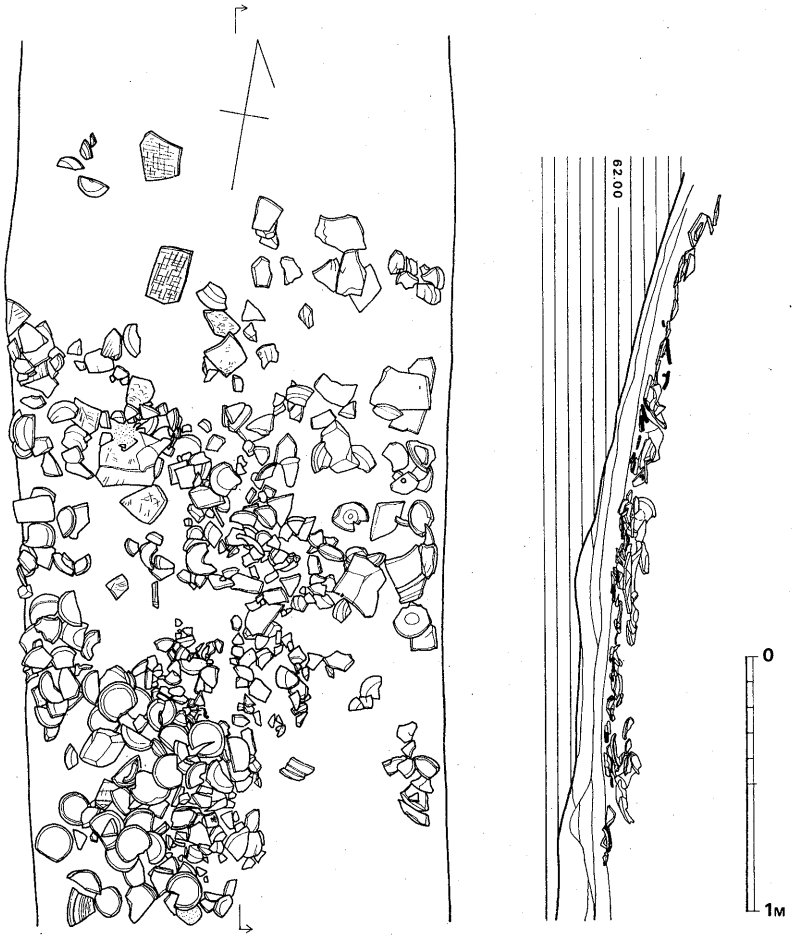


Fig. 88　第2号窯焚口遺物出土状況実測図（縮尺 1/30）

5・7）と直線的に開くもの（2・6・8）とがあるが，焼歪みもあろう。口径から大きく3区分される。a）口径13cm弱で，1と2が含まれる。1は1号窯の4に似て天井部は平坦で口縁部は外反する。2は同様の2に類じて天井部は丸く，口縁部に直線的に開いている。b）口径は13.4cmで，3～7が含まれる。天井部は深く平坦である。口縁端部はいづれも太く丸い。1号窯の1は天井部が丸いが，口径はこの類と合致する。c）口径14.3cmで8の一点のみである。天井部が平坦で口縁部が直線的に開く点は1号窯の3と同様である。

杯身　たちあがりの高さはいづれも1.2～1.4cmあり高い。口径からみて2区分される。a）

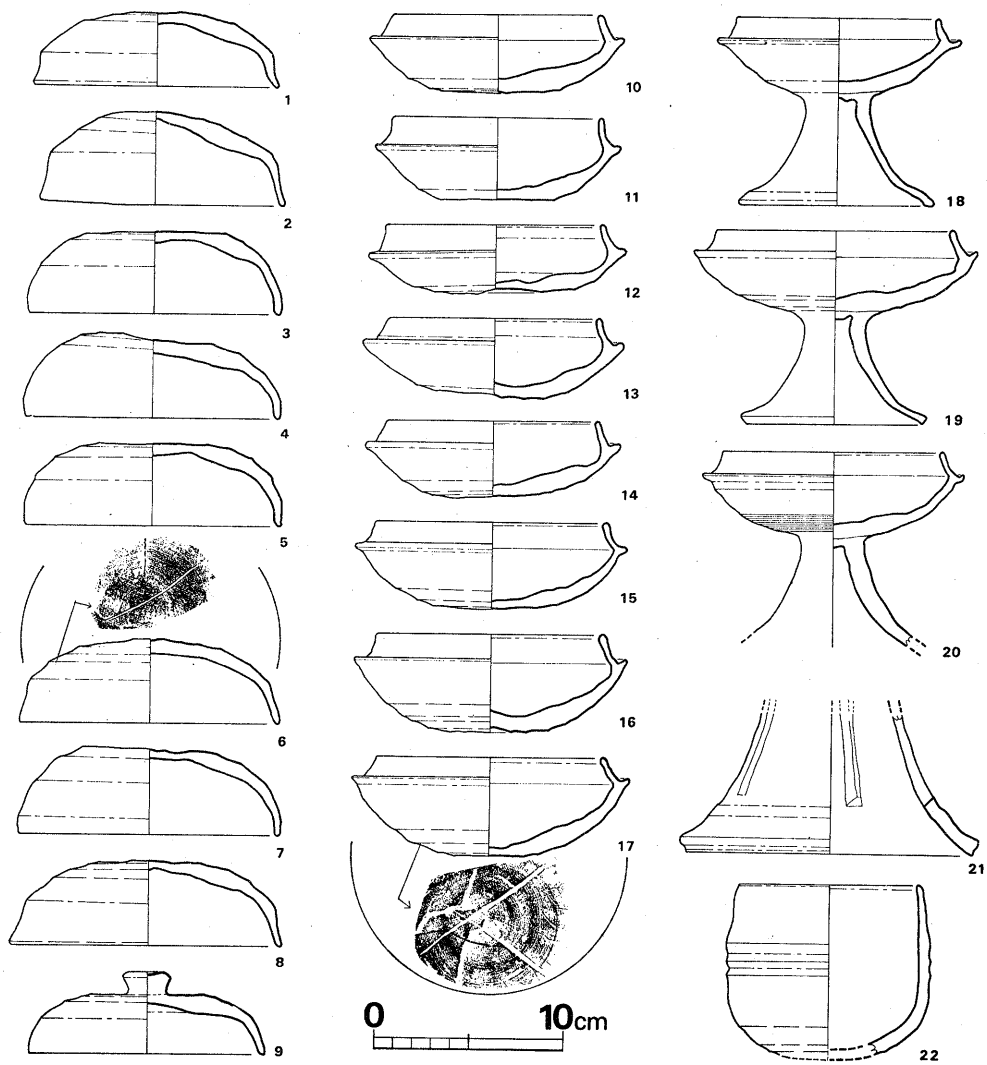


Fig. 89　第2号窯出土須恵器実測図①（縮尺 1/4）

口径10.8～11.2㎝で，10～14が含まれる。このうち底部の浅い12は蓋a類の1に，底部の深い10・11・13・14は蓋a類の2とセットになると思われる。b）口径11.8～12.1㎝で15～17が含まれる。底部は深く丸く，たちあがりは端部が太く，1号窯の5・6と同様の形状を呈している。蓋b類とセットになろう。なお蓋c類とセットになる身は1号窯の6と同形であろう。

高杯　18～20は有蓋の透孔なしの脚付きである。9の蓋はこれらとセットになる。なお，1号窯で出土した大形高杯はまったく検出されず，両窯間の高杯に見られる生産品の差が何に起

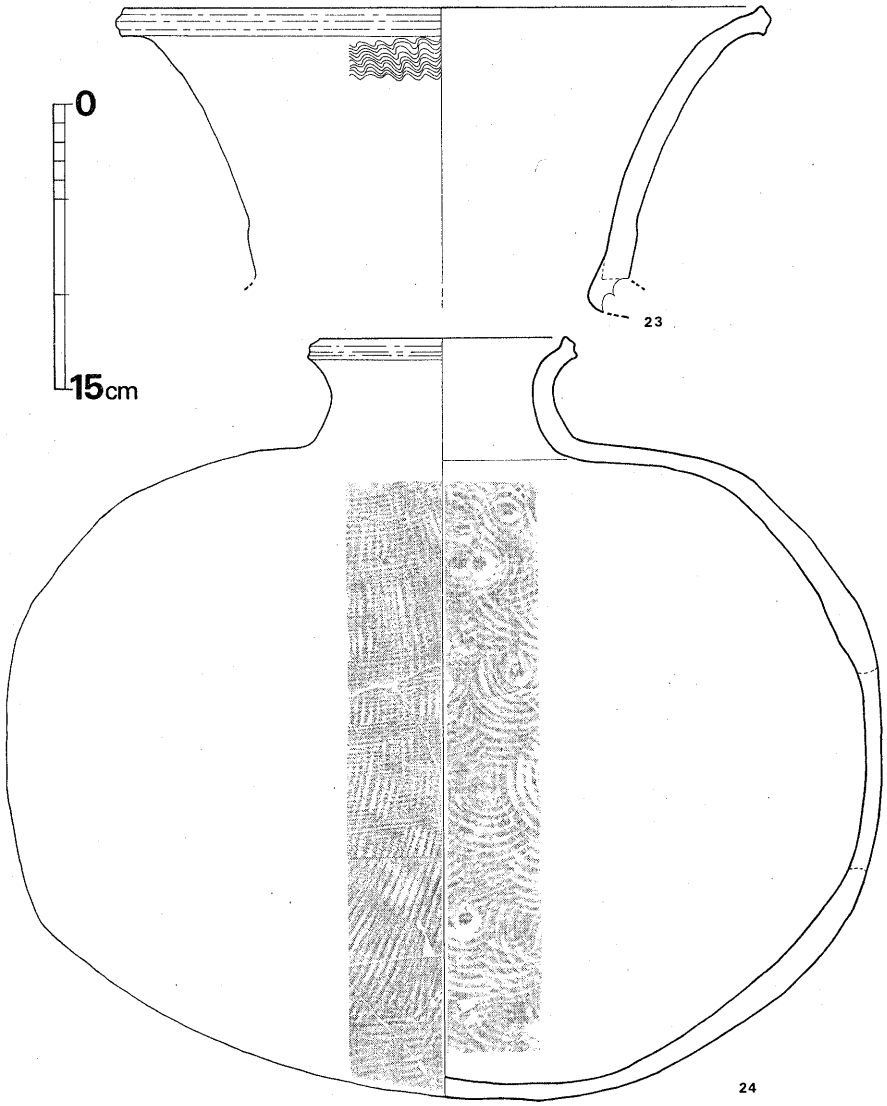


Fig. 90　第2号窯出土須恵器実測図②（縮尺 1/4）

因するのか興味が持たれる。

その他壷の脚と思われるものや椀・甕・横瓶があるが，このうち横瓶は1号窯とほぼ同大同形である。なお壷は出土していない。

以上2基の窯は構造上においても規模についても若干の差がみられる。特に前庭部の形状と焼成部の形状に明瞭な差異がある。

出土遺物は裏ノ田遺跡第D型式に相当し，第1・2号窯共同時期に操業されていたと考えられる。ただし，その開始時期及び終了時が同時であったかどうかは詳かではない。

Tab.15　雉子尾第2号窯出土須恵器観察表

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
01	杯蓋	Fig89 PL63	口径　12.9 器高　3.9	口縁部直立してのち強く外反し、端部は丸い。天井部は浅く丸く口縁部との境に軽い稜を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁部端より4.1cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色～灰色 胎土　僅かに大砂粒を含む
02	杯蓋	Fig89 PL63	口径　12.8 器高　4.9	口縁部は直立気味から僅かに外反する。端部は丸い。天井部は深く丸い。口縁部との境に稜を有する	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より4.1cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　茶褐色～淡青灰色 胎土　僅かに大砂粒を含む
03	杯蓋	Fig89 PL63	口径　13.4 器高　4.3	口縁部は内湾しつつ下り、端部近くで直立する。端部は太く丸い。天井部は平坦で口縁部との境に稜を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より4.3cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　不良 色調　淡褐色～淡青灰色 胎土　僅かに砂粒含む
04	杯蓋	Fig89 PL63	口径　13.4 器高　4.4	口縁部は内湾しつつ下り、端部近くで直立する。端部は太く丸い。天井部は焼き歪み平坦部をもつ。体部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より4.0cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　暗赤橙色 胎土　僅かに砂粒含む
05	杯蓋	Fig89 PL63	口径　13.6 器高　4.3	口縁部は外傾してのち直立し、端部近くで短かく外反する。端部は太く丸い。天井部は深く平坦で、口縁部との境に稜を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より3.9cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　やや不良 色調　茶褐色 胎土　僅かに砂粒含む
06	杯蓋	Fig89 —	口径　13.6 器高　4.4	口縁部は直立気味から僅かに外反する。端部は丸い。天井部は深く丸い。口縁部との境に軽い稜を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色 胎土　僅かに砂粒含む 天井部にヘラ記号あり
07	杯蓋	Fig89 PL63	口径　13.7 器高　4.5	口縁部は外傾して広がり、端部近くで直立する。端部は太く丸い。天井部は深く平坦で、口縁部との境に軽い稜を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より4.4cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　暗茶褐色 胎土　僅かに砂粒含む

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
08	杯蓋	Fig89 —	口径　14.3 器高　4.4	口縁部は直立気味から僅かに外反する。端部は太く丸い。天井部は深く平坦で、口縁部との境に緩い稜を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整　天井部は口縁端部より3.8cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　茶褐色 胎土　僅かに大砂粒を含む
09	蓋	Fig89 PL63	口径　12.4 器高　4.3	口縁部は僅かに内湾気味に広がり端部は太く丸い。天井部は平坦で口縁部との境に軽い稜を有する。ボタン状ツマミは強く立ち、中央クボミは浅い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部回転ナデ調整、天井部は口縁端部より3.2cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　口縁部回転ナデ調整　天井部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色 胎土　僅かに砂粒含む
10	杯身	Fig89 PL63	口径　11.0 たちあがり高 1.3 器高　4.1	たちあがりは内傾し、端部は太く丸い。受部は浅く短かく上外方へのびる。端部は丸い。底部は浅く平坦で、僅かに外反して受部端にいたる。全体に厚手である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.0cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　僅かに大砂粒含む
11	杯身	Fig89 PL63	口径　11.2 たちあがり高 1.4 器高　4.3	たちあがりは内傾したのち直立し端部は細く丸い。受部は水平に短かくのび、端部は丸い。底部は浅く平坦で僅かに短かく外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.2cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整　底部同心円叩が残る。	焼成　不良 色調　茶褐色～淡青灰色 胎土　僅かに砂粒含む
12	杯身	Fig89 PL63	口径　11.2 たちあがり高 1.2 器高　3.6	たちあがりは内傾したのち端部近くで短かく直立する。端部は太く丸い。受部はやや下がり気味で、端部は丸い。底部は浅く平坦で短かく外反して受部へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より2.3cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色～暗赤橙色 胎土　僅かに大砂粒含む
13	杯身	Fig89 PL63	口径　11.1 たちあがり高 1.3 器高　4.2	たちあがりは内傾したのち、ゆるやかに直立し端部は丸い。受部は太く上外方へ短かくのびて端部は丸い。底部は浅く丸味をもつ、内湾しつつ大きく開いてそのまま受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色 胎土　僅かに砂粒を含む
14	杯身	Fig89 PL63	口径　10.8 たちあがり高 1.2 器高　4.1	たちあがりはほぼ直線的に内傾し端部は丸い。受部は浅く、端部は太く丸い。底部は浅く平坦で僅かに外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より2.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　やや不良 色調　茶褐色 胎土　僅かに大砂粒含む
15	杯身	Fig89 —	口径　12.1 たちあがり高 1.2 器高　4.6	たちあがりは内傾してのち直立気味に立ち、端部は太く丸い。受部は細く下がり気味で端部は丸い。底部は深く丸い。短かく強く外反して受部端へいたる。全体に薄手である。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.0cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　やや不良 色調　茶褐色 胎土　僅かに砂粒含む
16	杯身	Fig89 PL63	口径　12.1 たちあがり高 1.4 器高　5.1	たちあがりは内傾してのち長く直立気味に立ち、端部は太く丸い。受部は細く上外方へ短かくのびて端部は丸い。底部は深く丸い短かく外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より2.9cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　やや不良 色調　茶褐色～淡青灰色 胎土　僅かに砂粒を含む
17	杯身	Fig89 —	口径　11.8 たちあがり高 1.2 器高　5.2	たちあがりは強く内傾し、端部は丸い。受部は細く上外方へ短かくのびて端部は丸い。底部は深く丸い短かく外反して受部端へいたる。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　底部は受部端より3.5cmの所から回転ヘラ削り調整 内面　回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　やや不良 色調　茶褐色～淡青灰色 胎土　僅かに砂粒を含む 底部ヘラ記号あり

番号	器種	図版番号 挿図番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	高杯	Fig89 PL64	口径 11.2 たちあがり高 1.2 脚裾部径 10.5 器高 9.8	たちあがりはややふくらみをもって内傾したのち、端部近くで直立する。端部は太く丸い受部は薄くやや長く上外方へのび、端部は丸い。底部は浅い脚柱部に直線的に開いて裾部でさらに開いてのち端部で立ち気味になる端部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 杯部　内外面口縁部回転ナデ調整　外面底部受部端より3.3㎝の所から回転ヘラ削り調整 脚部　内外面回転ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色 胎土　僅かに砂粒含む
19	高杯	Fig89 PL64	口径 12.4 たちあがり高 1.3 脚裾部径 9.4 器高 10.2	たちあがりは内傾してのちゆるやかに直立気味になる。端部は太く丸い。受部は薄く小さいが強く上外方へのび、端部は丸い。底部は浅い。脚基部はよく締り杯部の割に小さく短い端部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 杯部　内外面口縁部回転ナデ調整　外面底部は受部端より3.0㎝の所から回転ヘラ削り調整 脚部　内外面回転ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色～灰白色 胎土　僅かに砂粒含む
20	高杯	Fig89 PL64	口径 11.6 たちあがり高 1.3 杯部高 4.6 残存高 10.2	たちあがりは強く内傾してのちやや直立気味になる。端部は太く丸い受部は薄く小さく、端部は丸い。底部は浅い。脚基部はよく締り杯部に比べて部厚い。	マキアゲ、ミズビキ成形 杯部　内外面口縁部は回転ナデ調整　外面底部はカキメ調整 脚部　内外面回転ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色～灰色 胎土　僅かに砂粒含む
21	壺脚	Fig89 PL64	脚裾部径 15.2 残存高 7.3	脚柱部には5個所にわたって方形透しが入り、裾はあまり広がっていない。裾端部は平坦である。	マキアゲ、ミズビキ成形 内外面　回転ナデ調整	焼成　良好 色調　青灰色 胎土　僅かに砂粒を含む
22	椀	Fig89 PL64	口径 9.4 胴部径 10.7 残存高 9.1 推定高 9.4	口縁部は直立し、端部近くで内傾する。端部は丸い。胴部も直立し中央に貼り付けをし浅い凹線を2条めぐらしている。底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形 外面　口縁部～体部回転ナデ調整　底部回転ヘラ削り 内面　口縁部～体部回転ナデ調整　底部不定方向ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色 胎土　密
23	甕	Fig90 PL64	口径 34.0 頸部径 20.0 残存高 15.9	大きく外反し、端部近くで水平になる。端部は貼りつけして肥厚させ「く」字に面取りし頂部をはね上げている。	ワヅミ、ミズビキ成形 外面　回転ナデ調整　上位波状櫛目文 内面　回転ナデ調整	焼成　良好 色調　黒色～灰色 胎土　砂粒含む
24	横瓶	Fig90 PL64	口径 13.1 胴部径 器高 40.4			

3. 雉子ケ尾古墳群 (Fig. 91～93)

第1章で触れたごとく，雉子ケ尾丘陵南麓には7基の古墳が確認されている。いづれも横穴式石室を内部主体としている。東側より第1・2・3号墳と順次呼び，その東端第1号古墳は縦貫道路線敷内に含まれた。しかし，後世の盛土と削平があったにしても，事前調査の不備と調査担当者（筆者）の認識の不足も相い俟って，調査開始時にはすでに工事で破壊されていた。時後の見聞は縦貫道関係報文Ⅸの第Ⅱ章で触れた通りであり，石室内より7世紀後葉の須恵器蓋杯を出土した。

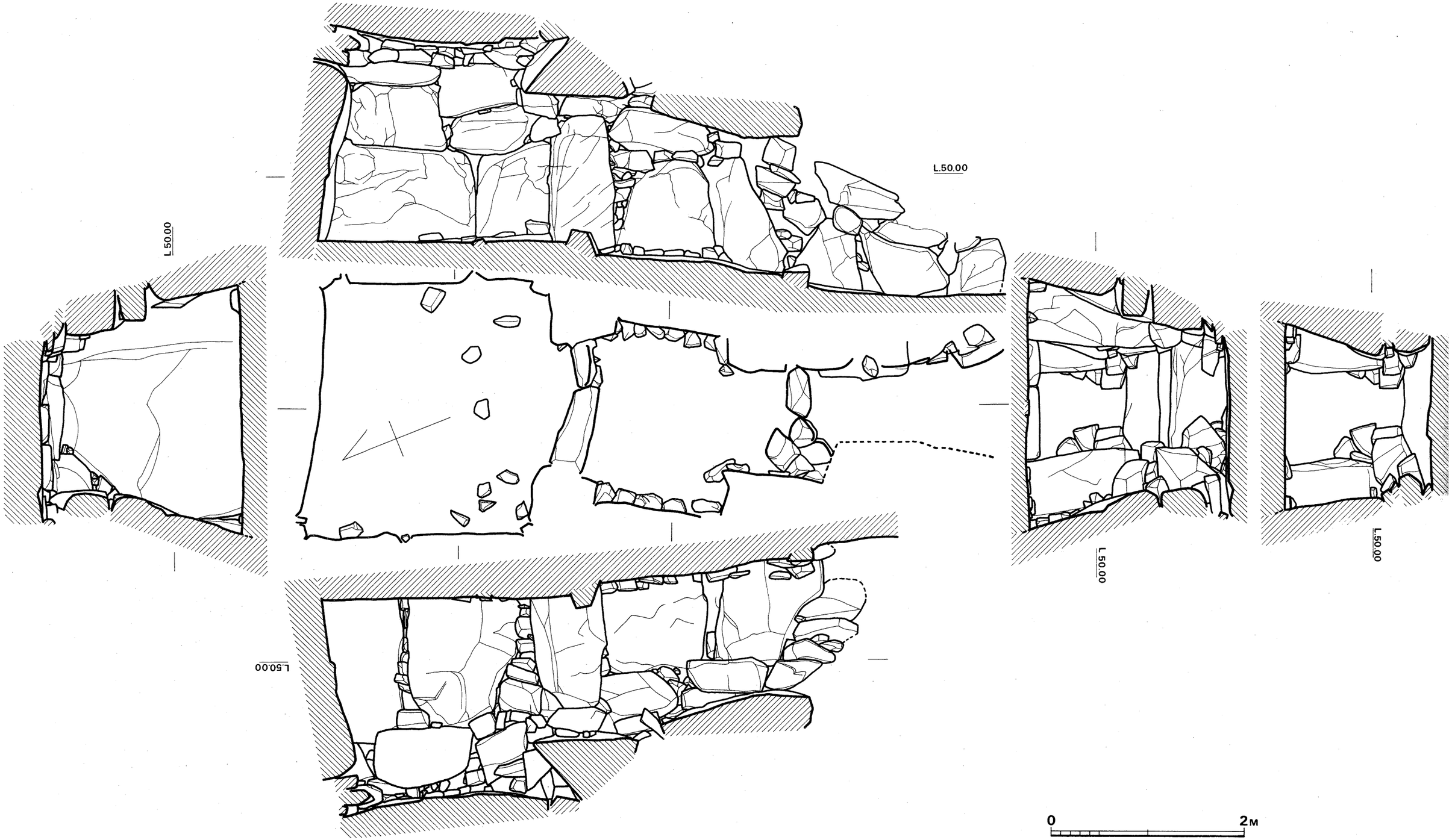


Fig. 91　雉子尾第３号墳石室実測図（縮尺1/40）

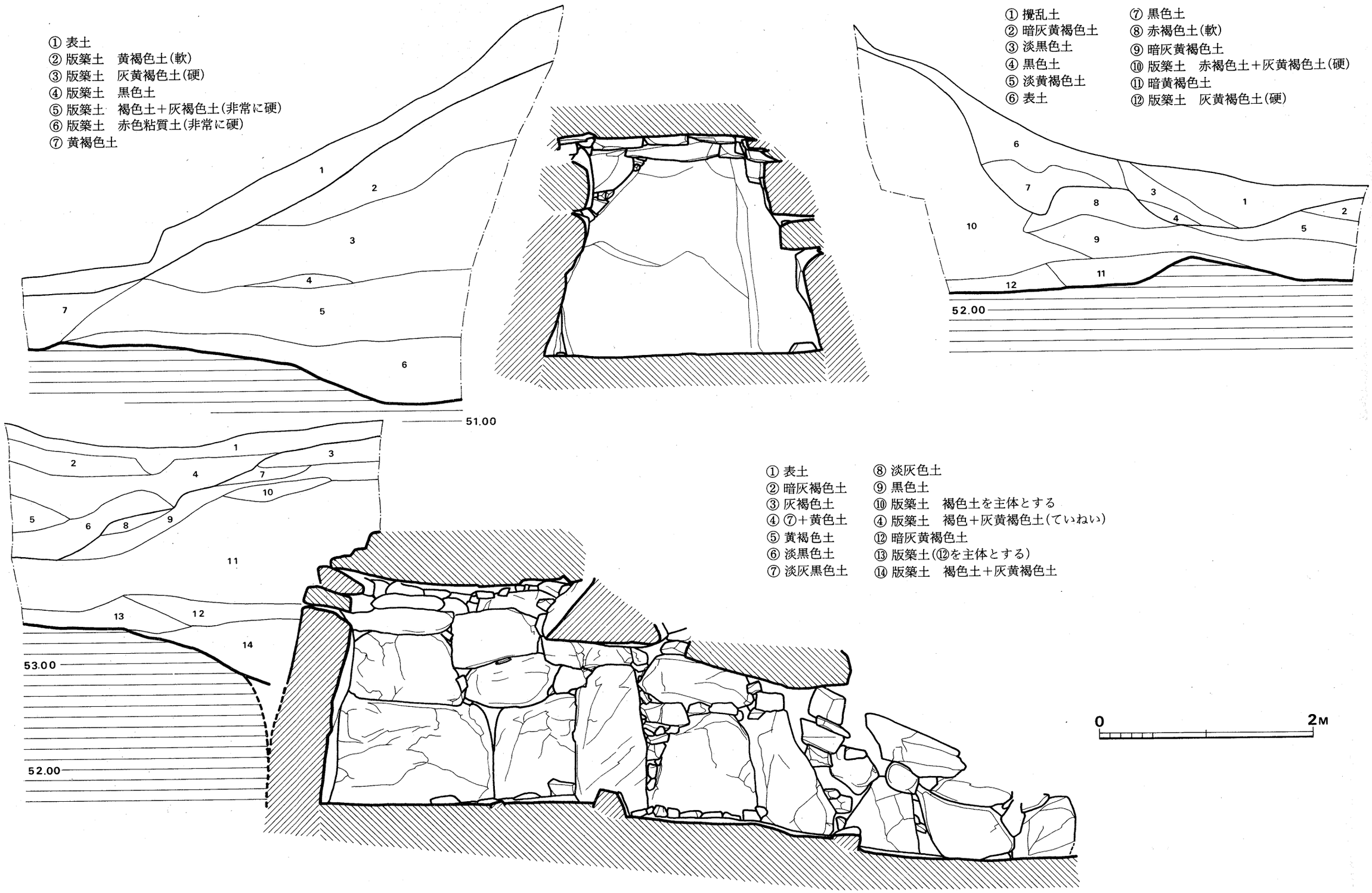


Fig. 92　雉子尾第3号墳墳丘土層断面図（縮尺1/40）

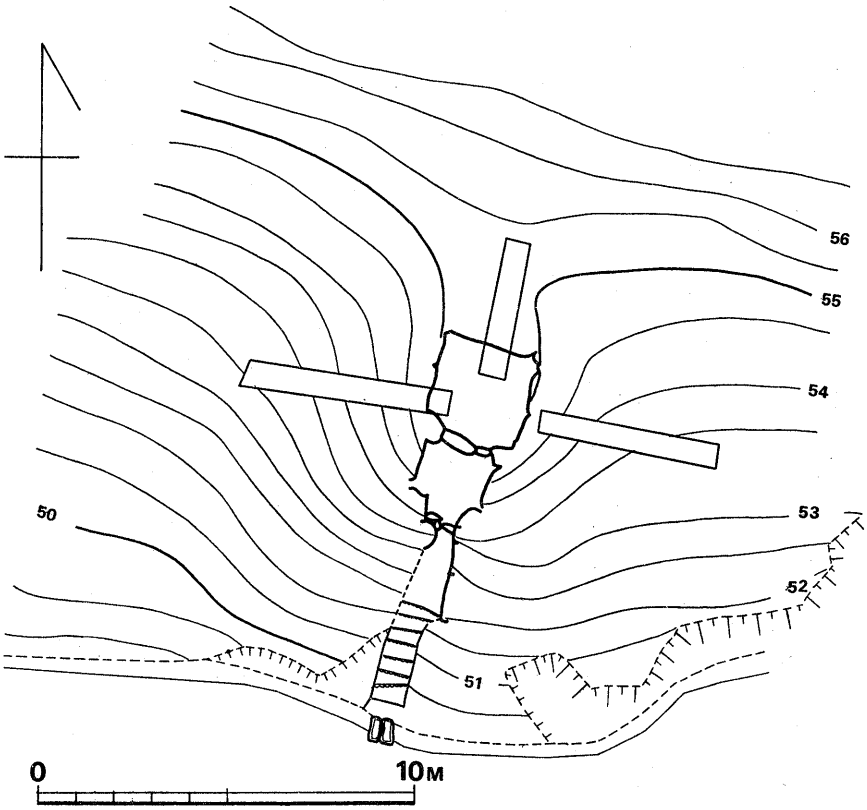


Fig. 93　雉子尾第3号墳地形実測図（縮尺 1/200）

ここで述べるのは雉子ケ尾第3号墳についてである。なお，第2号墳は第1・3号墳間に位置し，現在している。

第3号墳は雉子ケ尾第2号窯の真南に位置し，その距離15*m*と近接する。この古墳は採土工事範囲と近接していたものの，地権者岡本鹿次郎氏所有地内にあり，主体部石室が破壊されるという由ではなかった。ただし，墳丘裾線及び周溝の有無について確認する必要があり，調査を実施した。なお石室は開口しており，その清掃と実測を伴せ行った。

調査は墳丘上開口している石室の主軸に合わせて3本のトレンチを掘り，周溝範囲の確認と墳丘盛土の状況を観察した。

1.　墳　　丘

径9*m*の円墳である。盛土は4次にわたって積まれ，褐色土及び灰黄褐色土を版築していた。石室床面からの墳丘の高さは約2*m*である。山側を掘り割り，周溝をしつらえている。

2.　石　　室 (Fig. 92)

N-158°-Wに開口する副室両袖式の石室である。用材は巨石で奥壁は一枚石である。玄室側壁腰石は2個，前室の側壁腰石は各1個の用材を縦積みしている。

石室各部位の計測は次の通りである。

玄室	奥幅	2.6*m*
	前幅	2.5*m*
	左側長	2.4*m*
	右側長	2.34*m*
	中央長	2.56*m*
	中央高	2.05*m*
前室	奥幅	1.9*m*
	前幅	1.85*m*
	左側長	1.3*m*
	右側長	1.15*m*
	中央長	1.6*m*
	中央高	1.4*m*
羨道	奥幅	1.1*m*
	前幅	?
	中央長	2.9*m*

V　成屋形遺跡の調査内容

立　　地 (Fig. 94)

裏ノ田遺跡の北面丘陵から西派した台地上にあり，現在の御笠川に東面する距離約400mである。すでに第I章で触れたごとく，当遺跡は過去4次にわたって調査されており，今次調査したプレ縄文時代石器及び石棺が多量に検出されている。

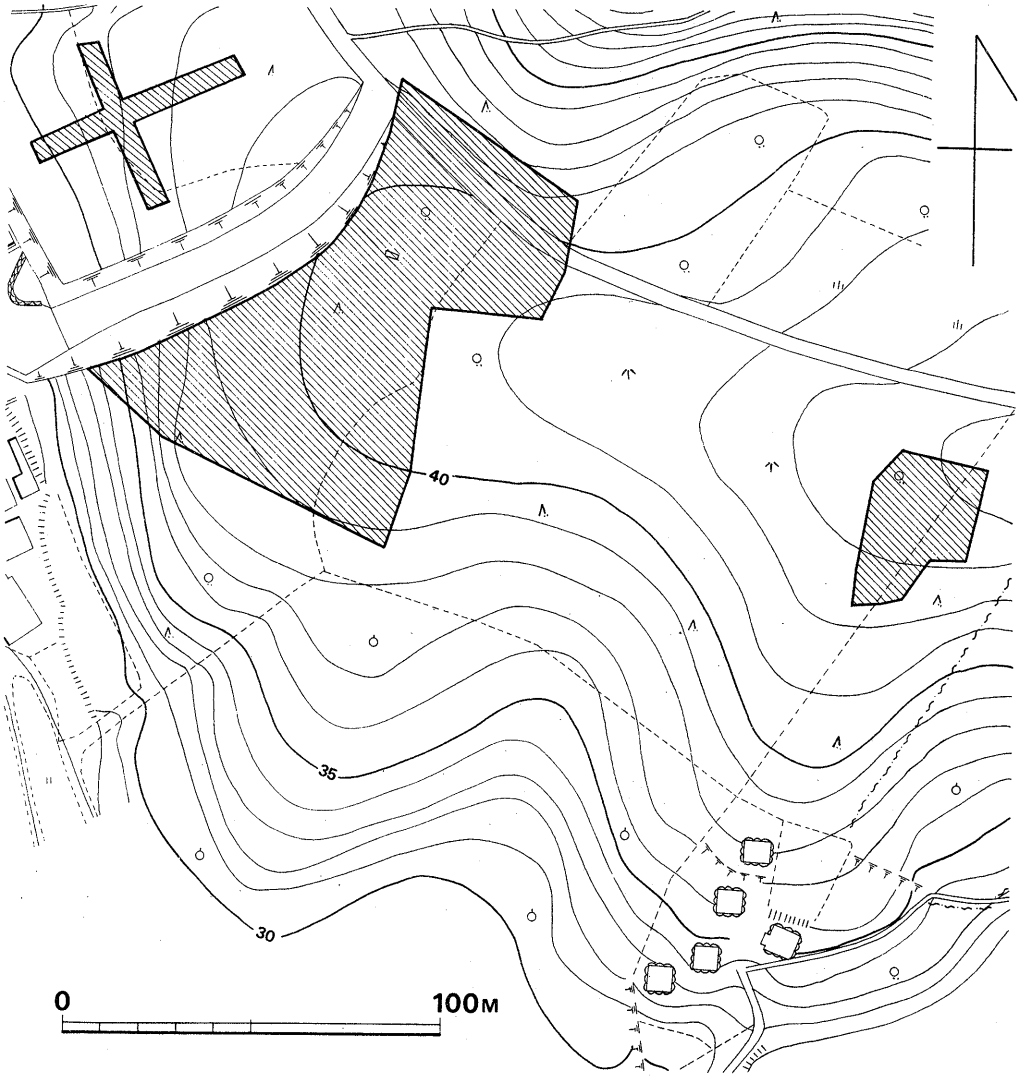


Fig. 94　遺跡周辺地形実測図(縮尺 1/2000)

1.　プレ縄文・縄文時代の遺物 (Fig. 95, PL 65・67)

ソフトローム上面より3点の石器が検出された。ナイフ・ポイント・コアーの3点である。

ナイフ（1）　黒耀石製である。透明度が低く濃黒で良質な石材である。縦長剝片のバルブ部をカットし，先端部としている。表面の原剝片剝離方向も裏面と同一で，一部下半に原石自然面を残し，図上左に偏して稜をもっていたと考えられる。形態的には基部が尖り，背部は僅かに彎曲し，刃部は直線的である。断面は原剝片の反りを残している。背部のブランティングは上半は2次にわたり，下半は表裏両面に施され1次であり，いづれも粗い調整である。刃部側基部のブランティングは表面のみ1次施され，裏面には背部側上りの長い剝離が及んでいる。

ポイント（2）　サヌカイト製である。原剝片面を残していない。形態は先端部が鈍く，基部は有舌状を呈する。断面稜は大きくジグザグを呈する。表面下半は中央稜を有し，裏面は平坦である。打調は左右両側より粗い加工を施してのち，基部と先端部に細調整している。

コアー（3）　チャート製である。未調整打面を持ち各面より調整打を於しており，ブレード剝離打はみられない。

以上3点が発掘したプレ縄文時代遺物であるが，他に遺跡の北側より，かつて採集されたナイフ（6）は良質の透明度の低い黒耀石製で，未調整石核から横剝ぎされた剝片を側方より折り取ったバルブ部をナイフ基部として利用している。背部はその折り取部りを未加工で利用している。刃部側基部のブランティングは両面に施されているが，裏面のそれは，バルブを取り除くことに主眼をおいている。

縄文時代の遺物と考えられる2点の石器の他，晩期甕の細片が出土した。4はサヌカイト製のスクレーパーで，片面に自然面を残し，他面は両側より打ち欠いてのち，周縁に刃部を両面より細加工している。5は蛇紋岩製の磨製石斧で頭部を欠損している。磨研は不充分で側縁に自然石凹面部を残している。

2.　古墳時代の遺構と遺物

遺　　構

第1号箱式石棺墓 (Fig. 96-1, PL. 66-2)

墓壙は隅丸長方形を呈しており，規模は主軸長280㎝，幅190㎝，深さ40㎝を測る。一つのコーナーは区域外となるために調査できなかった。棺材はすべて抜き去られており，多数の小さな石材が散在していた。墓壙底面には，石材を据えるための掘り込みがめぐっている。墓壙の壁面は直とならない。床面は長さ180㎝，幅55㎝である。墓壙内からは朱，粘土などは検出されておらず，また出土遺物もない。

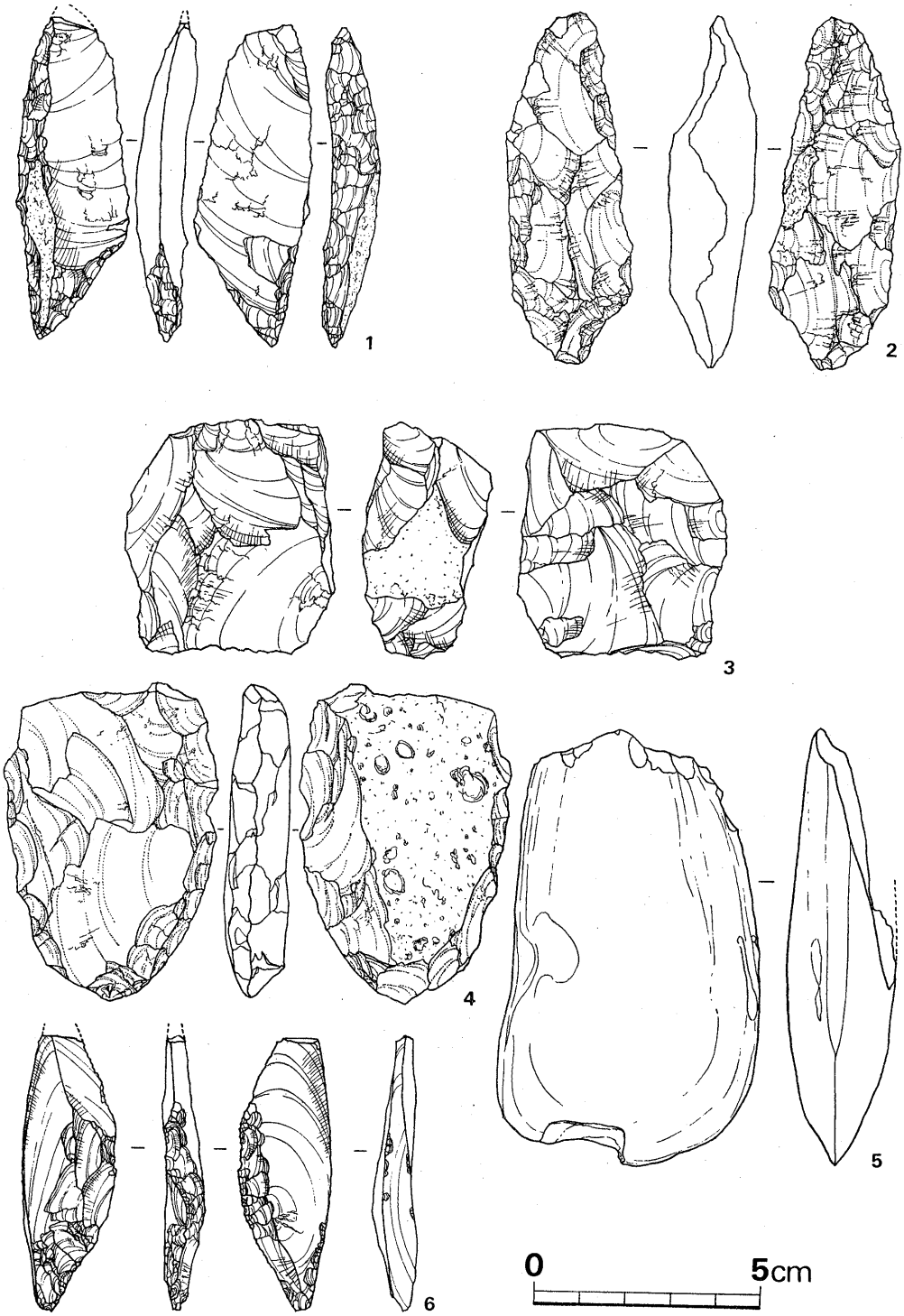


Fig. 95　石　器　実　測　図（縮尺 2/3）

第2号箱式石棺墓 (Fig. 96-2)

蓋石は抜き去られており現存しない。墓壙は削平されているためその形状と規模は不明である。石棺は側壁長170cm＋α，小口壁長約30cm，高さ25cmである。側壁は，やや内傾しており，削平時の影響のためと思われ，残存する小口壁を見ると，小口壁は両側壁にはさまれて内側に位置する。底面には石材を据えるための掘り込みが見られるが，これは第1号石棺と異って，個々の石材の部分だけを掘り込んでいる。朱，粘土などは見あたらず，また石棺内からの遺物の出土もなかった。

遺　　物 (Fig. 97, PL. 68)

須　恵　器 (Fig. 97-1～5)

杯身（1）　立上りは1.8cmを測り，やや内傾する。口縁端部内面は段を有しており，外面は直立する。蓋受け部はほぼ水平であり一条の沈線が入る。立上りと内傾斜面との境にはやや甘い稜がつく。調整法は底部外面は広範囲にわたって丁寧なヘラ削りが施されており，以外の部分は横ナデ調整を施している。底部内面は横ナデによる凹凸が著しい。なお，ヘラ削りの際の砂粒の走向は右廻りである。蓋受け部以下の外面にのみ自然釉が付着している事から蓋をかぶせて焼成した事がわかる。口径10.5cm，蓋受け部径12.7cm，器高4.6cmである。色調は灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。南区東南隅の地山面から出土した。

甕（2）　坩部と口頸部は接合されなかったが同一個体である。口縁部径10.1cmであり，端部は丸味をもつ。口頸部には突帯が入り，装飾を添える。頸部には鋭い櫛描き波状文が入る。坩部は底部を欠損している。円孔をはさんで上方には一条の，下方には三条の沈線を配している。この下方部の沈線以下の部分はヘラ削りを施した後ナデている。以外の部分は横ナデ調整を施している。坩部最大径は12.2cmである。色調は暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。北区EWトレンチ内の盛り土中からの出土である。

甕（3）　口頸部と肩部を一部残すのみである。頸部は2ヵ所に突帯を配して，三区に分けている。この突帯間の部分には櫛描き波状文が入る。口頸部内面は横ナデの凹凸が著しい。肩部外面は若干部に横方向のカキ目が入り，以下は平行叩きである。内面は同心円叩きの上をナデて消そうとしている。色調は灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径21.4cm，頸基部径12.0cm，口頸部高5.6cmである。北区EWトレンチ内の盛り土中から出土した。

横瓮（4）　把手近くを若干残存するのみである。把手下外面はヘラ削りを施している以外は横ナデ調整を施す。色調は灰黄色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

高杯（5）　無蓋高杯の杯部であり，底部以下を欠損している。口縁部はやや外反して口径

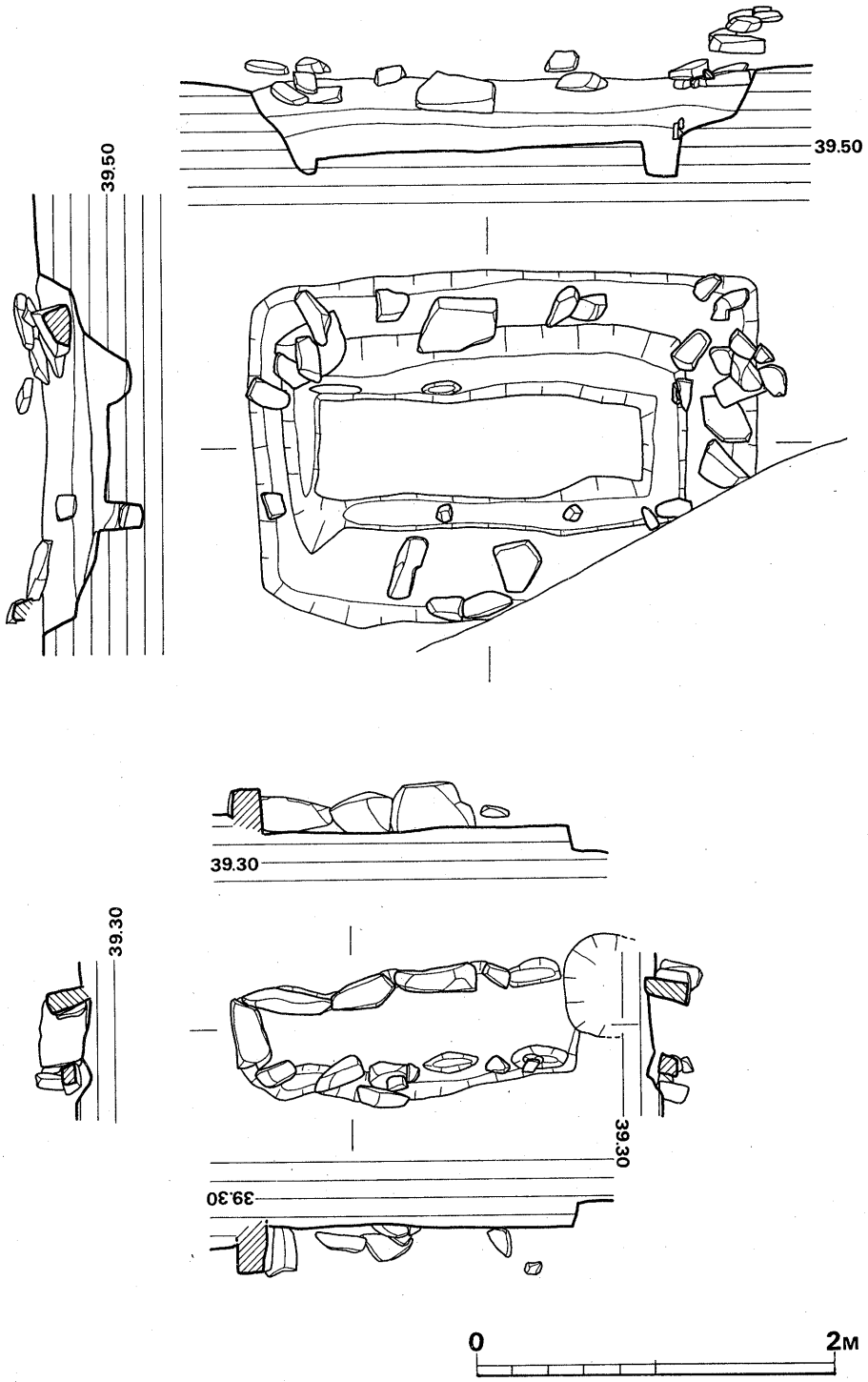


Fig. 96　石　棺　実　測　図（縮尺 1/40）

を拡げており，口縁端部内面は段を有しており，先端部は平坦である。体部には2ヵ所に沈線が入り，この間に櫛描き波状文が入る。底部はロクロを静止した状態でのヘラ削りを施している。内面上方部には一条の沈線が入る。内外面とも横ナデを施しており，内面は横ナデの凹凸が著しい。色調は暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。口径は17.6㎝である。

土師器

(Fig. 97-6～13)

成屋形遺跡出土品（6～10）と釜蓋原遺跡出土品（11～13）がある。

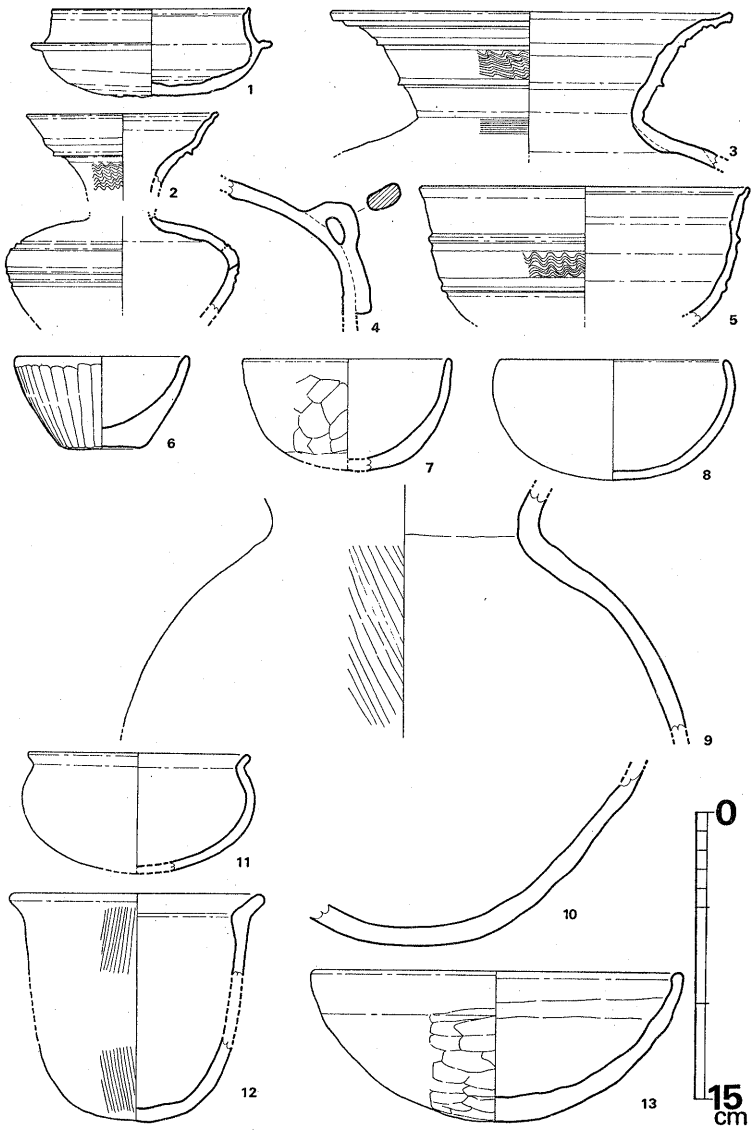


Fig. 97　須恵器・土師器実測図（縮尺 1/4）

（6）底部はわずかに上げ底となり，器壁は厚い。口縁端部は丸くつくられる。調整法は底部を除く外面はヘラ削りを施しており，内面はナデを施す。南区の地山直上層からの出土品である。色調は明黄褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径9.1㎝，器高4.9㎝である。

（7）は椀である。底部を一部欠損している。丸底であり，口縁部は垂直に近い。端部は丸

くつくられる。調整法は外面ヘラ削りを施しており，内面はナデを施す。黄褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径10.9cm，器高5.8cmである。

（8）は椀である。丸底であり，体部は内湾する。口縁部は内傾しており，端部は丸くつくられている。淡褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。口径11.9cm，器高6.3cmである。外面はヘラ磨き調整を施しており，内面は横ナデである。

（9）・(10) は甕である。頸部から胴部にかけてと底部付近の小片である。残存する底部片から丸底である事がわかる。胴部，底部とも外面は刷毛目が入り，内面はナデを施すが器表は粗雑である。黄褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。

(11) は鉢である。全体に薄手造りである。底部を一部欠損している。体部上半部は内湾し，口縁部は短く外反する。底部の内面はナデを施すがその他の部分はヘラ磨きしている。茶褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。復元口径11.8cm，器高6.3cmである。

(12) は甕である。胴部中程を欠損している。口縁部は短く外反する。底部は平坦面を有しているが体部との境部は丸味をもつ。外面は刷毛目が入る。灰黄色を呈しており，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径13.6cm。

(13) は鉢である。丸底であり，体部も若干の凹凸はあるが全体的には丸い形態である。内面は横ナデによる凹凸が著しい。外面はヘラ削りを施している。灰黄色を呈しており，焼成は良好である。胎土は多量の砂粒を含む。復元口径19.8cm，器高7.9cmである。

以上個々の土器の説明をしてきたが，出土した須恵器の年代は，杯身においてはたち上りは1.8cmでわずかに内傾し，口縁端部内面は段を有する事，無蓋高杯は破砕していたため，つまみの有無は不明だが，恐らくつまみがつくものと思われる。体部中程には波状文が入り，口縁端部内面には段を有する。瓶においては，口頸は坩部最大径よりも小さく，器高と最大径はほぼ等しい数値と思われる。坩部は肩が張らずに丸味をもち，波状文などの装飾をもたない事などは陶邑ＴＫ 208型式(註1)にあたり，この時期にはまだ地方で須恵器は焼成されていない事から，ここよりの到来品と思われる。従って，その実年代は５世紀後半に比定され，成屋形遺跡出土の土師器も同時期に比定されよう。なお，杯身は，これよりもやや新しい様相を呈する。

註　1）田辺昭三『陶邑古窯址群　Ｉ』平安学園考古学クラブ，1966.

Ⅵ　御笠川東岸における須恵器の編年について (Fig. 2)

近年，須恵器窯跡の調査は増加しつつあり，その資料も多くなってきているが，まだ充分とは言えないのが現状である。筑前地方においては1970年大野城市上大利所在「野添・大浦窯跡群」(註1)の調査報告書が刊行され，筑前地方における須恵器ⅢA，ⅢB，Ⅳ，Ⅴ期の編年表が作成され，須恵器研究の礎石が築かれた。その後，大野城市牛頸平田所在，「筑前平田窯跡」(註2)の調査報告がなされ，Ⅲ期—Ⅵ期の須恵器窯跡である事が報告されている。さらに太宰府町向佐野所在の「向佐野，長浦窯跡の調査」(註3)では，Ⅵa期（長浦窯跡）と歴史時代Ⅱ期（向佐野1号窯跡）の須恵器の資料を得ている。

以上の窯跡の資料は筑前地方のなかでも御笠川を狭んだ西岸に位置している。ここでは御笠川東岸地域に所在する古墳，窯跡，住居跡から資料を抽出して，須恵器編年を試みた。もとより，窯跡出土の資料が最も精度の高いものであるが，古墳出土品でも最終埋葬時の一括品や，住居跡内の一括出土品は純粋度の高いものとして併用する事にした。ここではⅠ期からⅥ期までの資料を得ることができた。以下，各時期の須恵器の特徴を述べる事にする。

Ⅰ　A　期

中・寺尾遺跡2号住居跡内出土品と成屋形遺跡出土品の大半がこれに相当する。(註4) 器種は杯蓋，杯身，有蓋高杯，無蓋高杯，瓮，甕がある。杯蓋は口径12.3cm，器高3.9cmである。天井部は4/5をヘラ削りし，平らにつくっている。天井部と口縁部の境は突出しており，鋭い稜がつく。口縁部はほぼ直に近いため，稜線部径が口径を上まわる。口縁端部内面は斜めの平坦面を有する。杯身は口径10.5cm，蓋受け部径12.6cm，器高4.2cm，立上りは1.5cmである。立上りはやや内傾し，中程から立つ。口縁端部は平坦であり，水平よりもわずかに傾く。蓋受けは水平であり，端部はとがる。ヘラ削りは底部の4/5に及び，平らにつくられている。以上の様に杯蓋，杯身ともに口縁端部は平坦面をもち，底部，天井部は平らである。口径に比して器高が低く，断面は箱形を呈する。有蓋高杯は杯部では立上りは2.0cmと長く，やや内傾する。口縁端部は平坦であり，わずかにくぼむ。底部はヘラ削りのあとカキ目を施している。杯身に比して口径は変らないが，器高が増している。脚部では脚端部を上下に突出させるものと，丸くおさめるものがある。透しは長方形透しが3方にあくものと4方にあくものとがある。瓮は頸部は外彎し，口縁部との境は鋭い凸帯を有する。口縁端部は丸くおさめている。頸部には櫛状器具による波状文が入る。坩部はこの時期のものとして底部はやや尖り気味となると思われるが現存しない。肩は張るが角張らずに丸味をもっており，この部分に円孔が入る。坩部にはカキ目，波

状文などの装飾は入らない。底部周辺はヘラ削り後に横ナデを施す。この時期の甕は口頸部は大きくなくて，坩部最大径よりも小さく，器高と最大径とはほぼ等しい数値になるものと思われる。無蓋高杯は杯部のみであり杯底部と脚部を欠損する。体部には2ヵ所に沈線を入れる事によって生じた凸帯があり，この間に櫛描波状文が入る。陶邑古窯跡群Ⅰの調査報告によると，TK 208型式から無蓋高杯につまみを付設する事が慣例化されておりⅠ期末に消失すると云う事であるので，この土器にもつまみがつくものと思われる。なおTK 208内ではこの土器と非常に良く似たもので，これよりもひとまわり大形品には特例であるとして，底部近くにつまみを2個有するものがあるので，この土器についても1個または2個のつまみがついたものと考えられる。甕の口頸部は外反度が著しく，口縁端部上面はあまり角張らない。頸部には2ヵ所に鋭い三角突帯がつき，この間に櫛状器具による波状文が入って装飾を添える。器表の外面は平行叩き目が残っているが，内面は同心円叩き目をナデて消している。この時期では内面の叩き目を消す手法は一般的なものであったと思われる。横瓮かと思われる小片が出土しており，今までは古墳などからの出土例もなかったのでその出現の時期が不明であったが，Ⅰ期から現われていた可能性が強い。

(註5)

Ⅰ　B　期

成屋形遺跡の出土品である。杯身は口径10.5㎝，器高4.6㎝器高4.6㎝，立上り1.8㎝でありⅠ期Aの杯身とほぼ同大である。立上りはやや内傾し，口縁端部内面は段をもつ。蓋受けは水平であり，1条の沈線を配する。ヘラ削りは底部全体の⅔に及び，やや丸味を有する。

この時期のものは大半はTK 208型式に属しており，杯身の1個体だけTK23型式に属する。田辺昭三氏によるとTK 208型式以前には2型式あって，陶邑での須恵器生産の開始は5世紀前半であるという。また，5世紀前半～5世紀後葉までの4，50年間は陶邑のみで生産されており，他の地域ではまだ生産されていない時期である。従ってこの土器は，陶邑の地から持ち込まれたものである事になる。5世紀末になると陶邑以外の地でも須恵器が生産されるようになり，その地域は，摂津，近江，尾張，伊勢，遠江，出雲，能登の7ヵ所があり，このほかに九州と吉備が加わる可能性があるとの事である。九州において将来発見される可能性は充分にある。

Ⅱ　期

Fig. ①のAにあたる。裏ノ田住居跡出土須恵器がこれに相当する。杯は口径12.5㎝～13.5㎝，器高4.7㎝～5.1㎝であり，大形品である。天井部と口縁部の境は段がつく。口縁端部内面は段を有するものと平坦で斜めに切られるものの両者がある。天井部は広範囲にヘラ削りを施しており丸味を帯びるものとやや平坦なものがある。杯身は立上りは1.2㎝～1.7㎝と数値には幅があり，基部から直線的に内傾するものと，内傾しつつも途中から立つものとがある。口縁部内面は段を有するものと，内方へ傾斜する平坦面をもつものとがある。この平坦部には浅い

沈線が入る。立ち上りは総じて太くしっかりしており，立上り基部と内傾斜との境も器壁が厚い。杯身の立ち上りからみて直線的に内傾する形態の方が途中から立つものよりも先行する可能性がある。内面底部には叩き目が残存しており，ナデて消そうとしているものもある。底部は広範囲にヘラ削りしている。高杯は短脚一段透しのものがあるが，長脚二段透しのものは出ていない。杯部，脚部にはカキ目，波状文などの装飾は入らず簡素である。陶邑では長脚一段透し高杯が出現する時期にあたるが，ここでは資料が乏しいため，明らかでない。野添・大浦窯跡群の調査報告の中でとりあげられているようにⅡ期後半に比定される日拝塚古墳(註6)からは長脚二段透しが出土しており，この時期には，高杯の長脚化と共に一段透しから二段透しへの移行が行われた。

Ⅲ　A　期

Fig. ①のB，Cに相当する。杯蓋，杯身については裏ノ田遺跡の遺物の項で述べているのでここでは簡単にのべる。杯蓋ではB型式は天井部と口縁部の境には明瞭な沈線が入り，口縁端部内面にも沈線状の段を有する。口縁部は古式の名残りで直に近いものと丸味をもって，よりⅢB期に近いものとがある。口径は12.5㎝前後である。同時期の野添6号窯は口径13～14.5㎝であり，やや大形である。杯身は立上りは1.6㎝以上あり，基部から直線的に内傾する。端部は段をなさずに丸味をもつ。「野添・大浦窯跡」ではこの時期のものは，立上り端部に段をなすものと丸くつくられるものとの両者があるが，ここでは後者のみである。C型式はB型式と大差はないが，天井部と口縁部の境には甘い沈線が入るものと凹彎するものとの二者があるが，口縁端部内面は両者とも沈線が入る。天井部は頂部が凹彎するものや丸味をもつもの，平坦に近いものなど各種であり，変化に富む。器形はB型式より，若干大きい。杯身は立上りはB型式より短く1.3㎝～1.5㎝であり，端部は丸い。口径は12.5㎝～13.1㎝であり，例外として15㎝がある。立上りと内傾斜面との境はB，Cともに稜がつかない。杯蓋に関して言えば，「立山山窯跡」(註7)では同時期のものは，古式の特徴である天井部と口縁部の境に段を有するものと沈線を有するものの両者があり，「野添・大浦窯跡」も段を有するものと沈線のものとがある。段を有するものの方が沈線の方よりも先行すると思われるが，御笠川を挾んで対岸の裏ノ田遺跡では，杯蓋の特徴として明瞭な沈線が入るものとやや沈線が甘くなるものとの二種である。B，C型式ともに小田氏のいうⅢ期前半に属するものと思われるが，B型式がC型式よりもより古式の特徴を残している。他の器種については資料に恵まれないため不明である。

Ⅲ　B　期

Fig. ①のD型式がこれに相当する。天井部と口縁部の境には段，沈線を有さずに丸くなる。口縁部外面の形態はバラエティに富むが端部はいずれも丸くつくられている。例外的に口縁端部内面に沈線の入るものがあるが，肩部は沈線を配さずに丸く，わずかに古式の特徴をとどめるだけである。口径は13㎝～14㎝でありⅢ期前半に比して大きくなるが，器高は変化な

い。杯身は立上りは1.0㎝～1.3㎝と短く内傾する。端部は丸くつくられており，段もしくは沈線は入らない。立上りの形態は断面三角形を呈するものと丸味をもって立つものなど多様である。高杯は有蓋高杯と無蓋高杯があり，高杯の小形化が行なわれている。八女の塚ノ谷各窯跡(註8)では小形高杯は出現しているが「野添・大浦窯跡」では小形高杯はまだ出現しておらずⅣ期にならないと小形化されないと報告されており，川を挾んだ西と東でも地域差が現われている。有蓋高杯の杯部は杯身と大差ない。坩，直口壷，長頸壷，有蓋脚付壷がある。提瓶がこの時期にみられており，背面はすでに平坦面を有している。このことから，ⅢA期には背面にやや丸味をもつ提瓶が出現した事は充分に考えられる。小形の提瓶も同時に出土しており，ともに口唇部は丸くつくられており，突帯を配さない。

Ⅳ　期

Fig. ①のE型式がこれに相当する。杯蓋には口径13㎝前後のものと，口径11㎝前後のものがあり，A，B類に2分類される。杯身も杯蓋に対応して二通りの大きさがある。立上りはAB類ともに5㎜～10㎜である。天井部，底部はともに平坦面をなしており，調整法は，狭い範囲を粗いヘラ削りするか，未調整である。一般にこの時期において身と蓋の逆転があらわれるとされているが，ここでは，土器の出土状態から，これを証明し得る資料は得られなかった。図示した蓋に身受けのかえりを有するものは器高が低いことと，身受けのかえりの形態から蓋とし，蓋受けのかえりをもたない身とセット的にとりあつかう事ができよう。高杯は有蓋高杯と無蓋高杯があり，ともに小形化している。前述した如く高杯の小形化はすでにⅢB期に出現しているが細部をみると脚部に比して杯部の口径が大きくなる。脚は頸基部の幅を減じており，頸部と口縁部の境には，沈線が残る。坩は小形化しており，底部は平坦に近くなる。底部の調整法は未調整であり，杯とともに粗雑化が目立つ。平瓶がこの時期に見られるが，ⅢB期にはすでに出現していたものと思われる。特殊な土器としては，古墳出土の新羅土器がある。落とし蓋となるものであり，いつ頃我が国に持ち込まれたかその時期を知る上でも好資料である。

Ⅴ　期

杯蓋では乳頭状のつまみと頂部をおさえた釦状のつまみがつく。身受けのかえりは身受け端面よりも外方へ突き出す。杯身は蓋受けのかえりをもたない。直口もしくはやや外反気味の口縁で，平底に近い形となる。底部の調整は未調整が大半をしめており，わずかにナデだけを施すものがある。Ⅳ期においてはヘラ削りと未調整のものとの両者が行なわれていたが，Ⅴ期ではすべてヘラ削りを行なわない。小形品と大形品の二通りがある。坩の大きさは二種あるがいづれも平底である。底部の調整法は未調整のものと，狭い範囲に粗いヘラ削りを施すものとがある。平瓶は非常に小形品であるが，同時に中形品も行なわれていたと思われる。小形甕は口頸部は短く，口唇部には突帯などの装飾は入らない。新羅土器の台付長頸壷が出土しており，

その時期決定にとって好資料となろう。

Ⅵ　A　期

杯蓋は身受けの短いかえりがつくが，口縁部を折り返した形状のものは共伴していない。杯身の底部には長目の高台が付いており，体部，口縁部はやや外彎気味にのびる。杯身，杯蓋とも大形化する。高杯は非常に小形となり，脚部に比して杯部は大きい。平瓶はやや肩が脹るようになってくるが，まだこの部分には稜はつかない。次の段階には肩が脹って稜のつく形態が考えられる。

最後に各型式の年代を求めて見る事にする。Ⅰ期とした土器のうち端部が平坦面をもつ杯蓋・杯身・有蓋高杯・無蓋高杯・瑞は，TK 208型式に属しており，この中では最も古式のものである。口縁端部内面に段を有する杯身は，底部もやや扁平さを失っており，TK 208型式よりは後出するTK 23型式(註9)に属すると思われる。従って，実年代はTK 208型式は5世紀後半，TK23は5世紀終末に比定される。Ⅱ期とした土器はMT15型式(註10)に属しており，6世紀前半に比定される。陶邑との対比で見れば小田富士雄氏の言う第Ⅱ期はTK47型式(註11)とMT15型式が該当し，編年表の土器はⅡ期でも新しい方に位置づけられる。前述した如く，5世紀末は地方でも須恵器が焼成された時期であるので，ここにとりあげた土器の窯跡が周辺部に存在する可能性は大である。ⅢA期は6世紀中葉に(註12)，ⅢB期は6世紀後半，Ⅳ期は6世紀末に比定される。Ⅴ期の年代を求める前にⅣ期について述べる。Ⅳ期としたものは小田氏のⅣA期のものだけであり，大宰府都府楼跡の調査結果(註13)では杯蓋で身受けのかえりをもつものと，かえりは消失して口縁端部を折りまげるだけのものが共伴しており，7世紀中葉に比定されている。ここでは口縁端部を折りまげる器形のものは伴出せずに身受けのかえりをもつものだけであるため，大宰府出土のものよりも若干先行するものであり，7世紀中葉以前，即ち，7世紀前半代に比定される。さてⅤ期の年代であるが，「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」(註14)によるとⅤ期に該当するものは同報告書の杯D類であり，7世紀前半期に比定されている。従ってⅤ期の年代はⅥ期よりもあまり隔らないものと思われ，7世紀初頭から前半代にかけての時期と考えたい。

註　1）小田富士雄・柳田康雄『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財報告書第43集，1970.
2）坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣，1974.
3）亀井明徳・高橋　章「向佐野・長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ』1975.
4）『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書　Ⅰ，1977.
5）田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ，1966.
6）『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯』福岡県教育委員会，1930.
7）小田富士雄『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅳ，1972.
8）小田富士雄『塚ノ谷窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅰ，1969.
9）註5）に同じ
10）註5）に同じ

11) 註５）に同じ
12) 註７）に同じ
13) 『大宰府史跡』九州歴史資料館，1976.
14) 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ｉ』奈良国立文化財研究所学報，第27冊，1976.

Tab.16　福岡県における窯跡とその年代

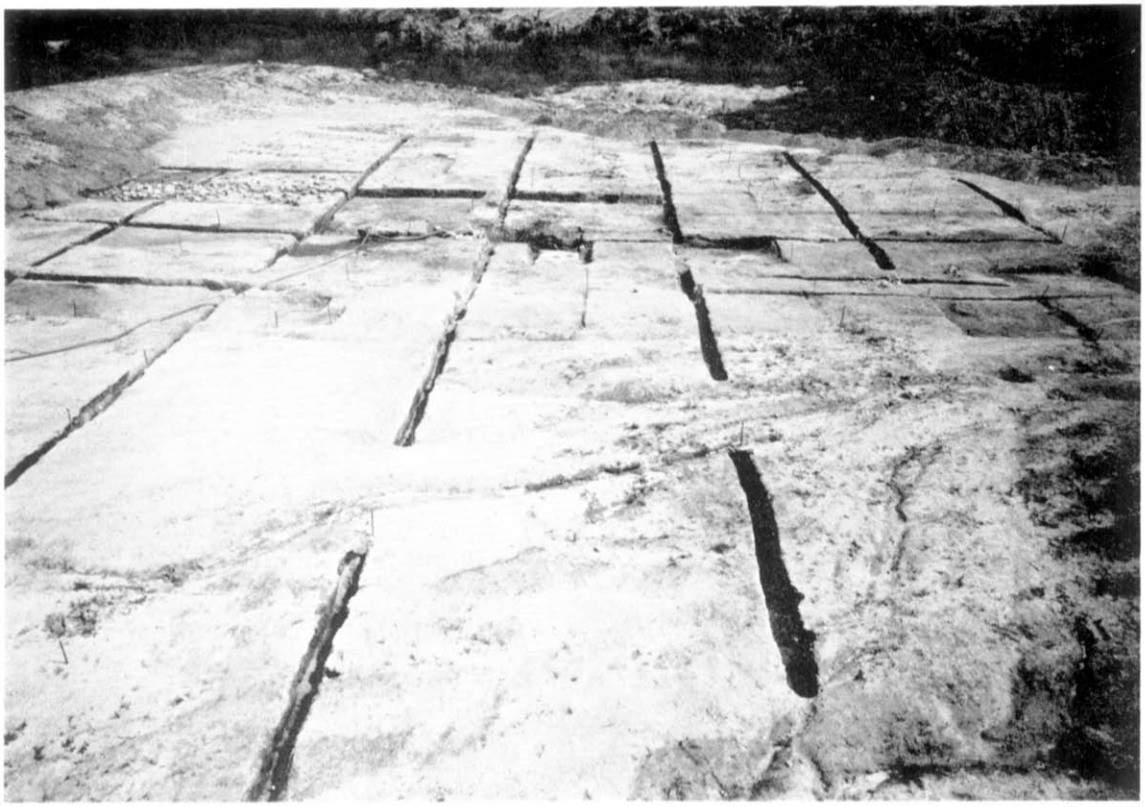
	Ⅲ A	Ⅲ B	Ⅳ A	Ⅳ B	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
筑後地方（八女市 八女窯跡群）	中尾谷 1～4号窯	塚ノ谷 3・4号窯			塚ノ谷	1号窯	塚ノ谷 2号窯
						牛	焼谷窯
							管ノ谷2号窯 管ノ谷1号窯
						三助山窯（採集）	
						はすわ窯	（採集）
筑前地方（大野城市を中心とした牛頸窯跡群）	野添6号窯	野添9号窯	大浦	1号窯			野添4・5号窯
				大浦	2号窯		
		平	田窯A地	点			
					平田窯B地点		
						長浦窯	
		雉ケ尾窯					
		裏ノ	田 1・2号	窯			
豊前地方（遠賀川流域 宗像地方）			向野窯	宇土窯			ドギバ窯
			小道窯				籾ノ粉池窯跡群
			天観寺	山窯			
			丸ケ谷	窯			
				夏井ケ	浜窯（採集）		
		古門	窯				
		井手が浦窯B	井手が	浦窯A			
						宗像郡須恵（採集）	

遺　跡　遠　望（釜蓋より）

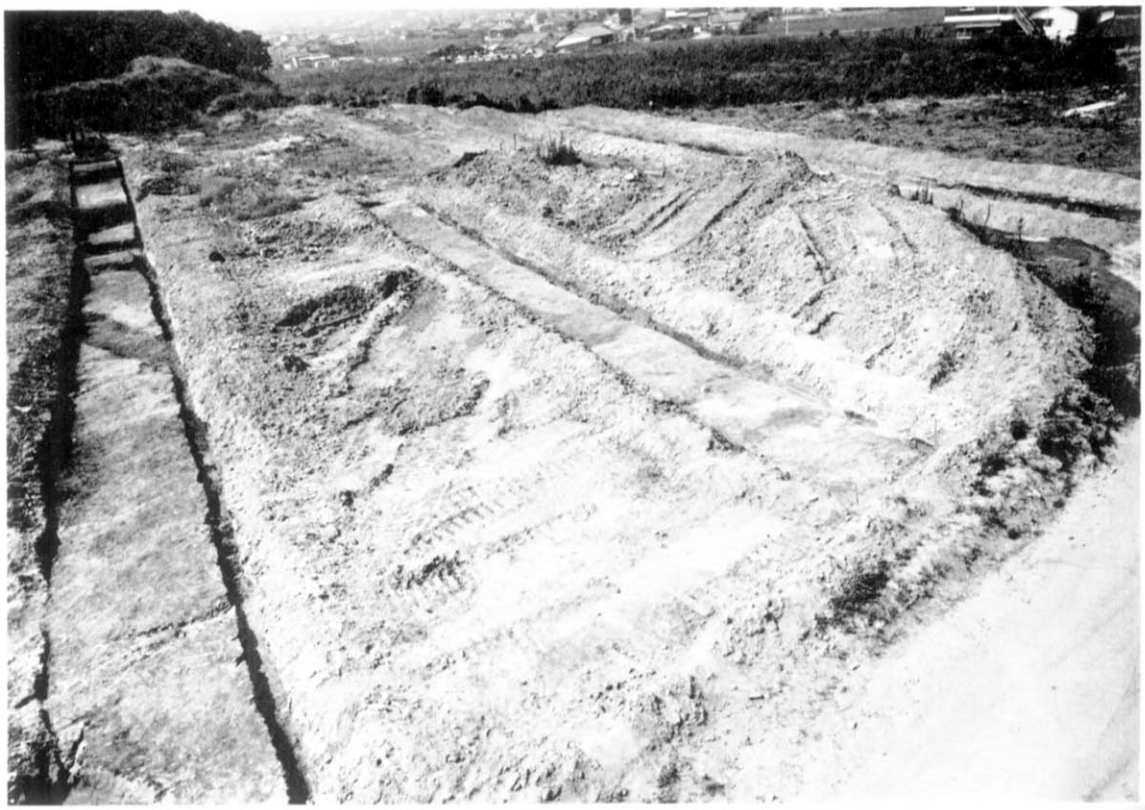
（1）調査前の状況（北東より）

（2）調査後の状況（北より）

遺跡遠望（釜蓋より）

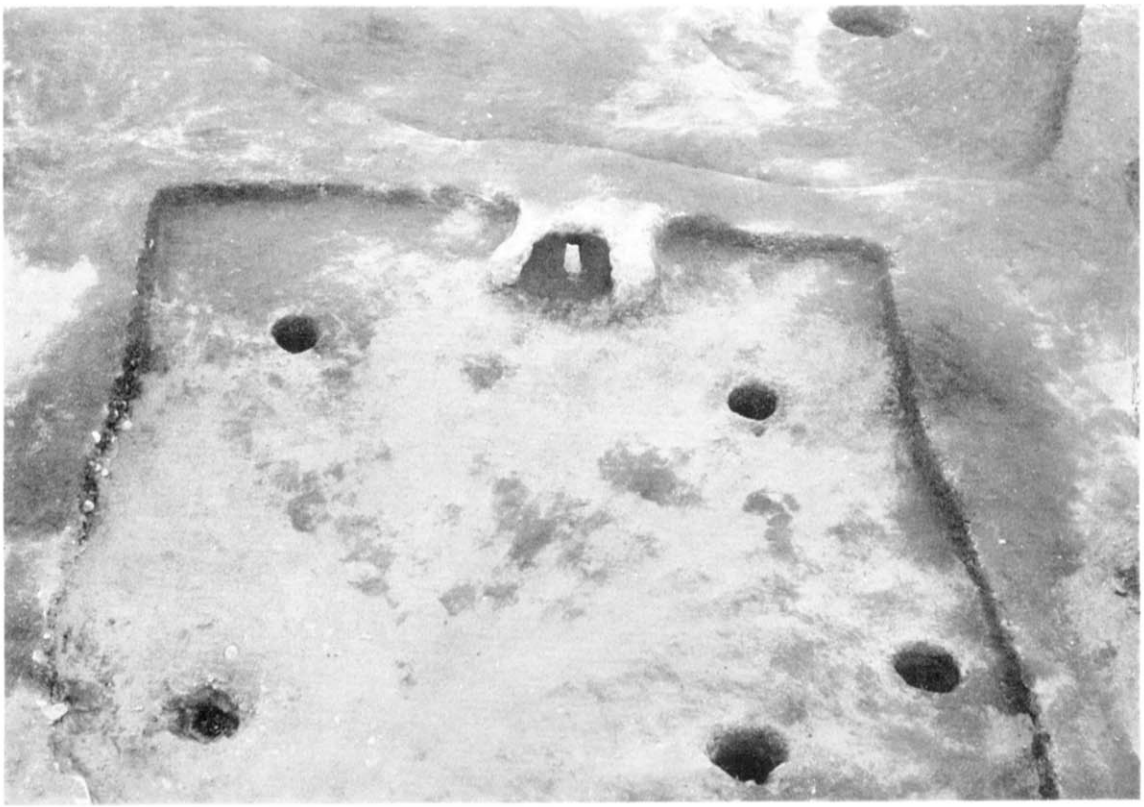


（1）O～R区北半　調査後の状況（南より）



（2）O～R区　南半調査後の状況（北東より）

（1）第3号住居跡（南より）

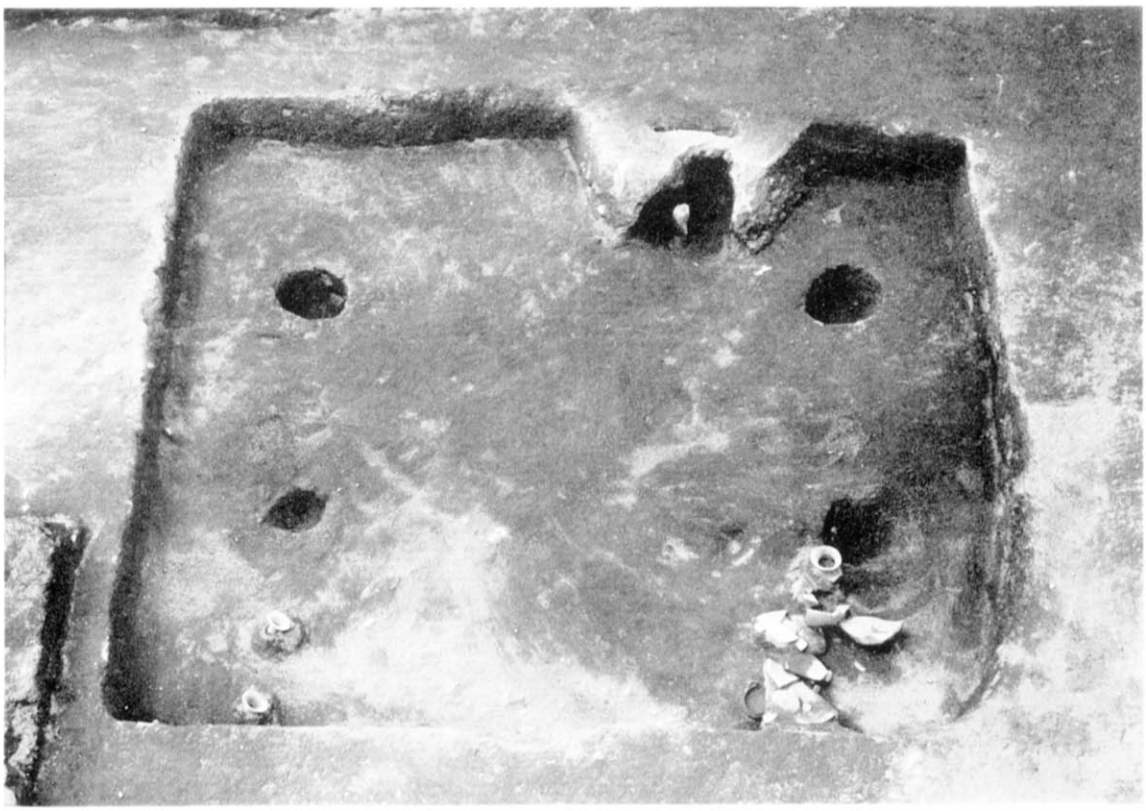


（2）第4号住居跡（南より）

（1）第1号住居跡出土土師器

（2）第3号住居跡出土須恵器・支脚

（3）第4号住居跡出土須恵器・土師器・支脚



（1）第5号住居跡（南より）

（2）第9号住居跡竈（北より）

05006

05004

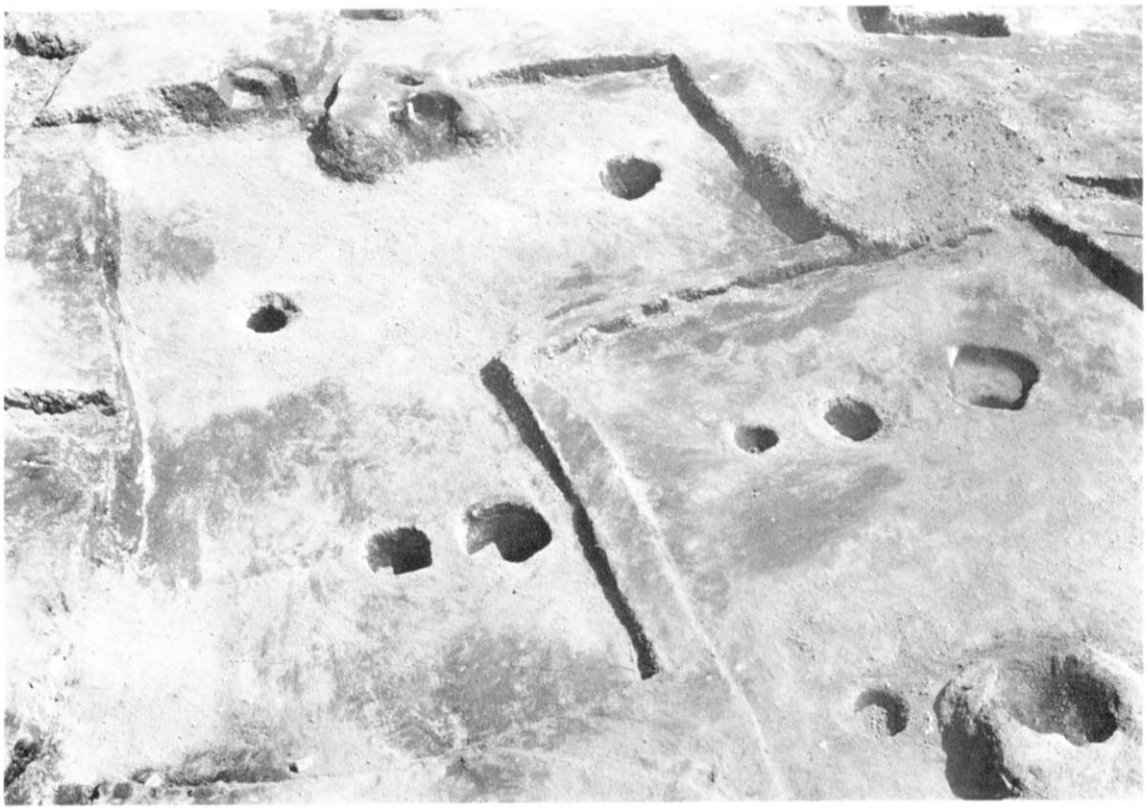
05009

05003

05008

05007

第5号住居跡出土須恵器



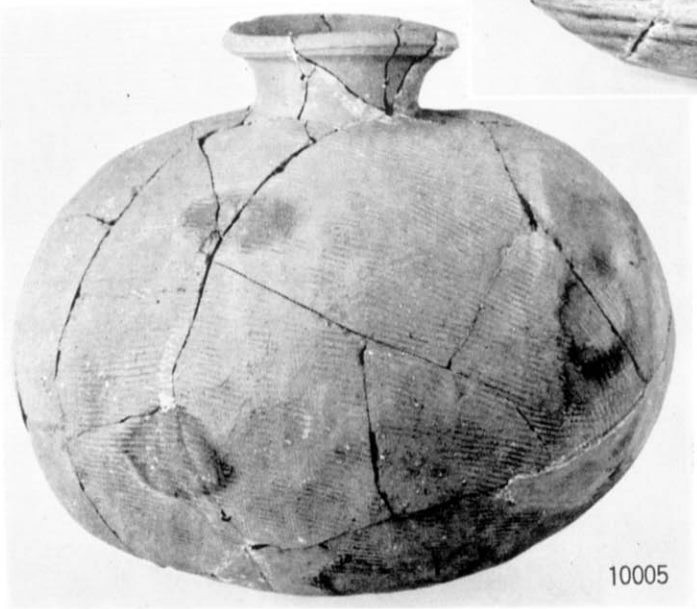
（1）第 9 号住居跡（北より）

（2）第10号住居跡（南より）

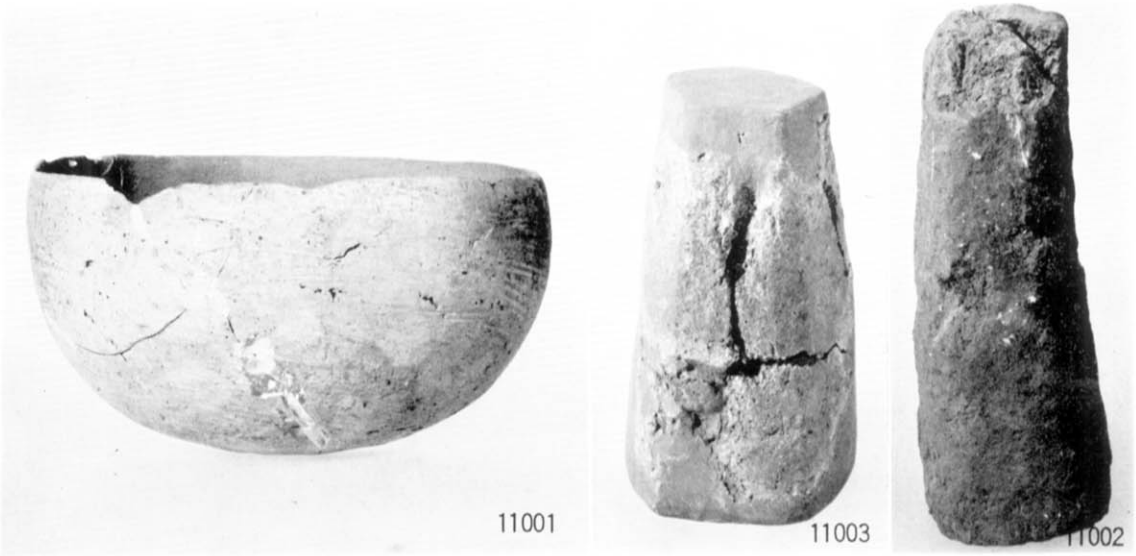
（1）第7号住居跡出土須恵器

（2）第8号住居跡出土須恵器

（3）第9号住居跡出土土師器



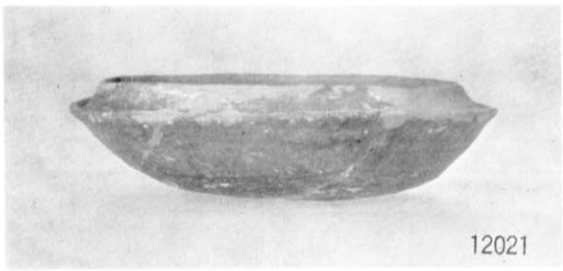
（1）第10号住居跡出土須恵器



（2）第11号住居跡出土土師器・支脚

（1）第11号住居跡（南西より）

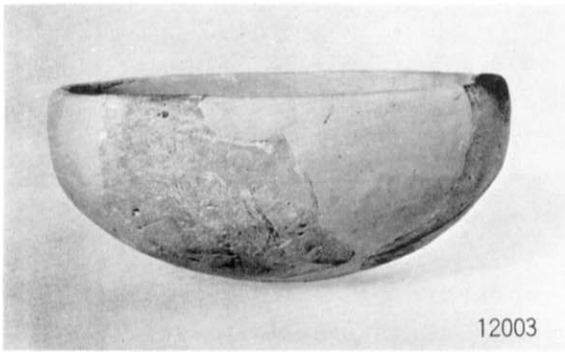
（2）第11・12号住居跡（南西より）


12021

12004

12017

12005


12003

12023

12001

12018　　12006

第12号住居跡出土須恵器・土師器

12020

12016

12012

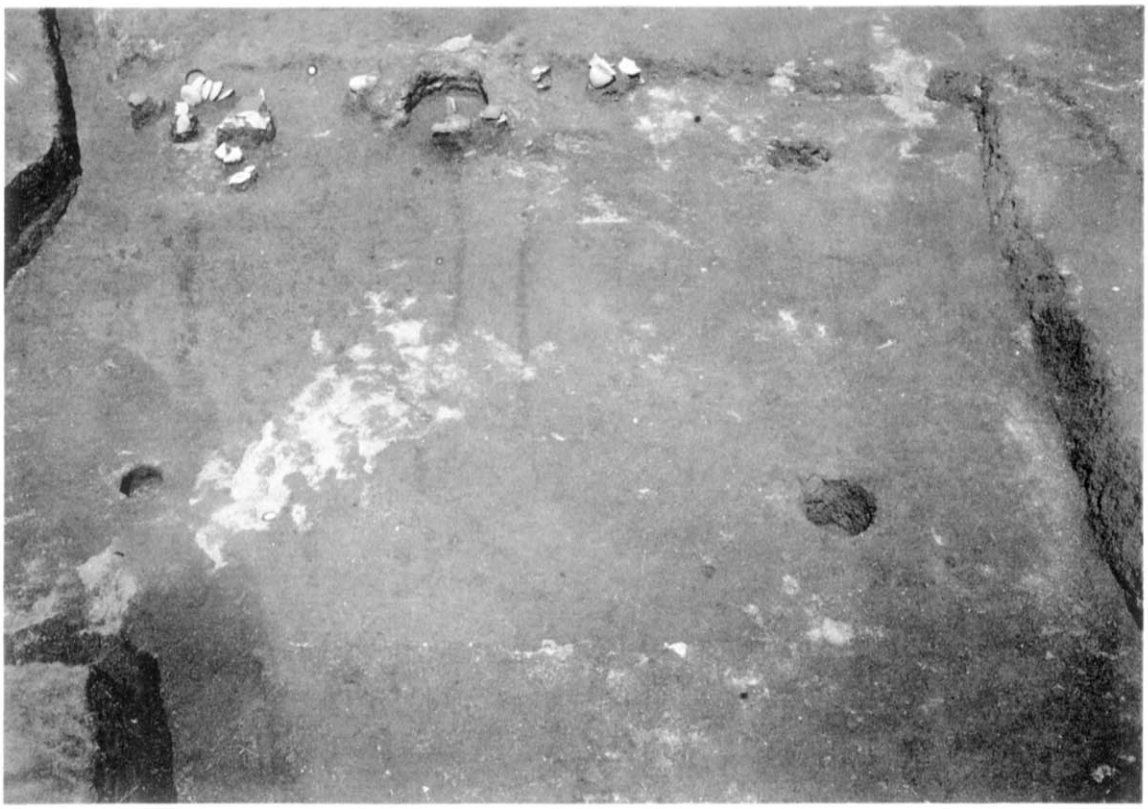
12011

12008

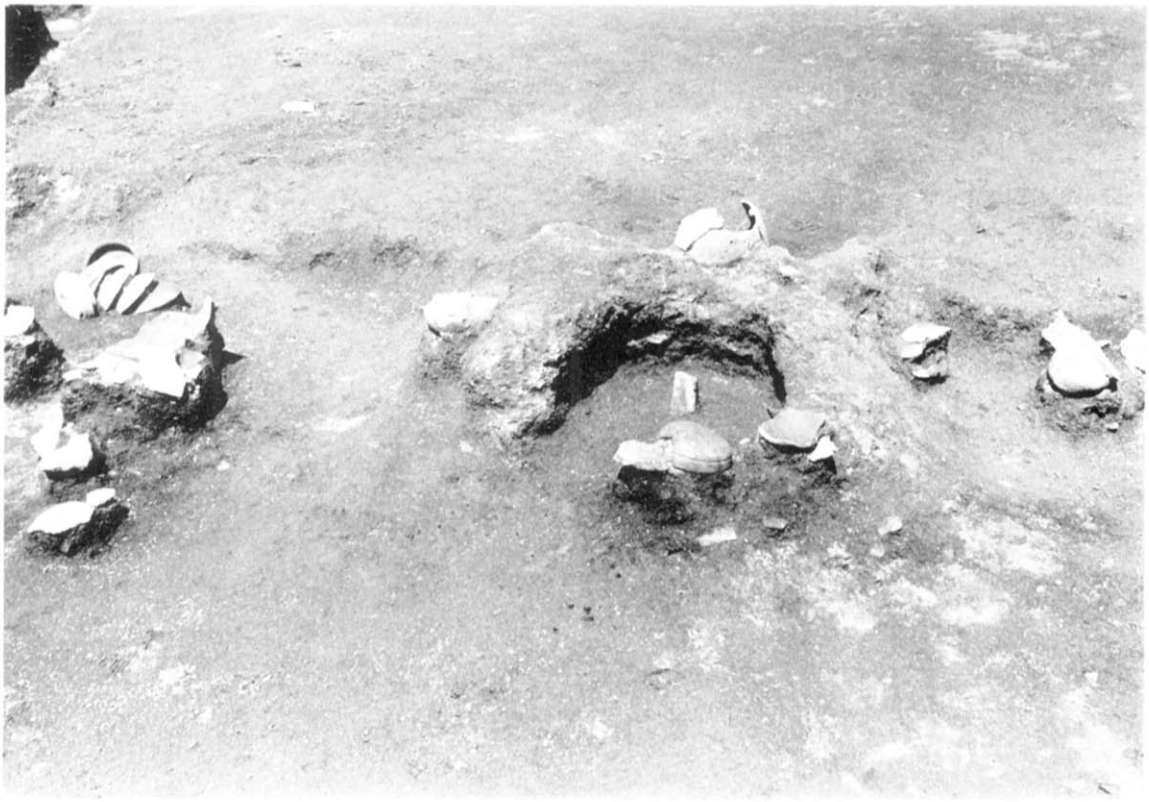
12009

第12号住居跡出土土師器①

第12号住居跡出土土師器②

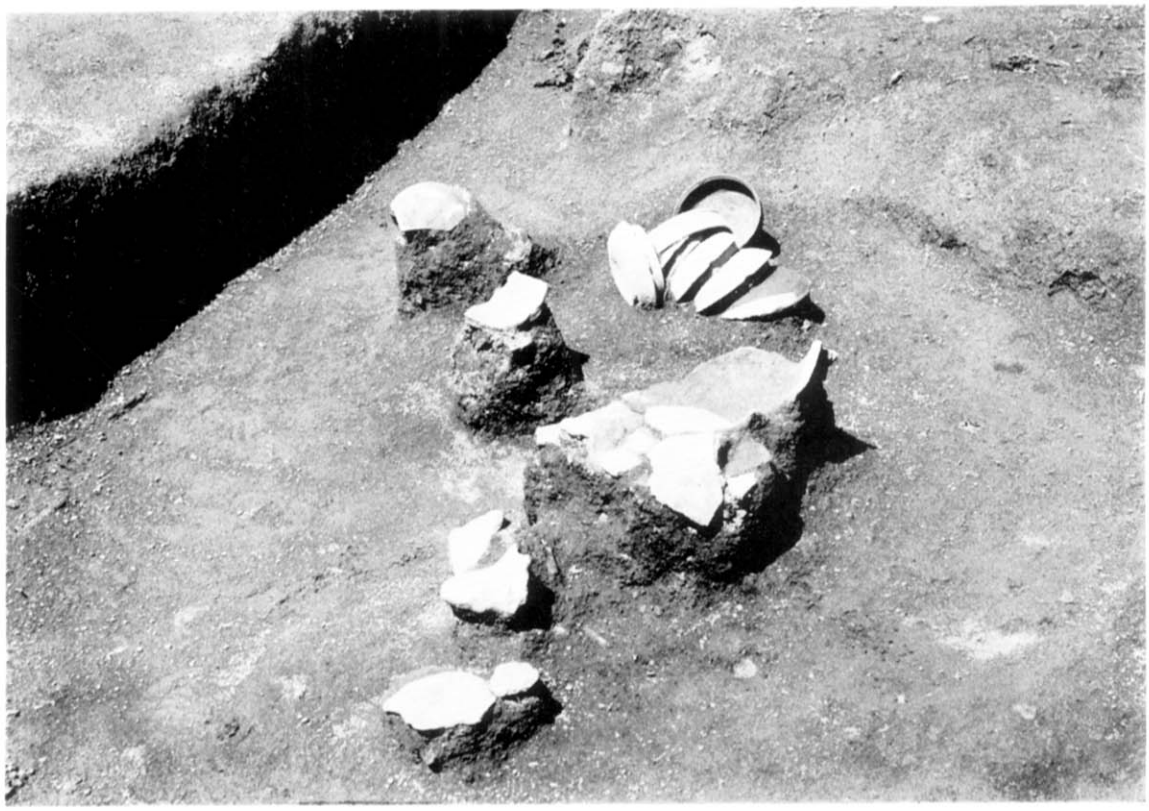


（1）第13号住居跡（南東より）

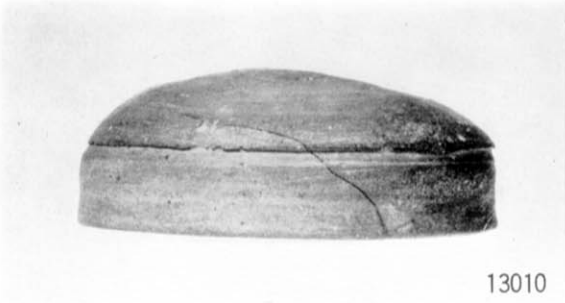


（2）第13号住居跡竈（南東より）

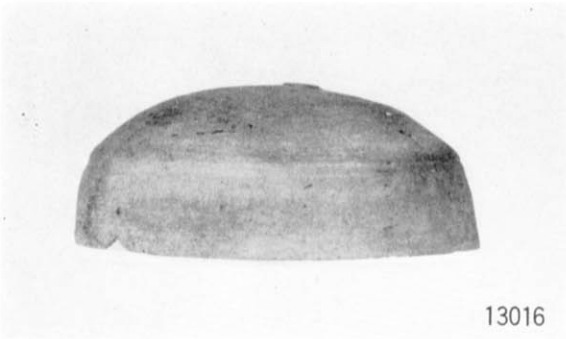
（1）第13号住居跡竈（北東より）



（2）第13号住居跡竈南西側土器出土状況（南より）

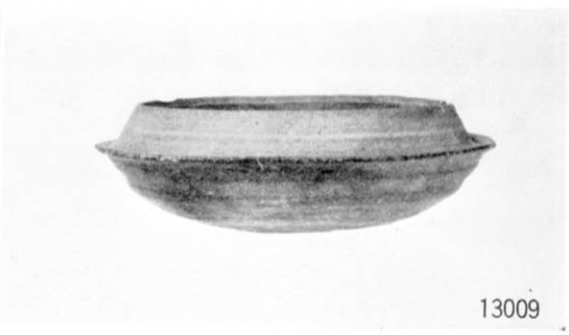

13010

13006


13016

13014

13011


13009

13007

13012

13015

第13号住居跡出土須恵器

13003

13017

13004

13005

13002

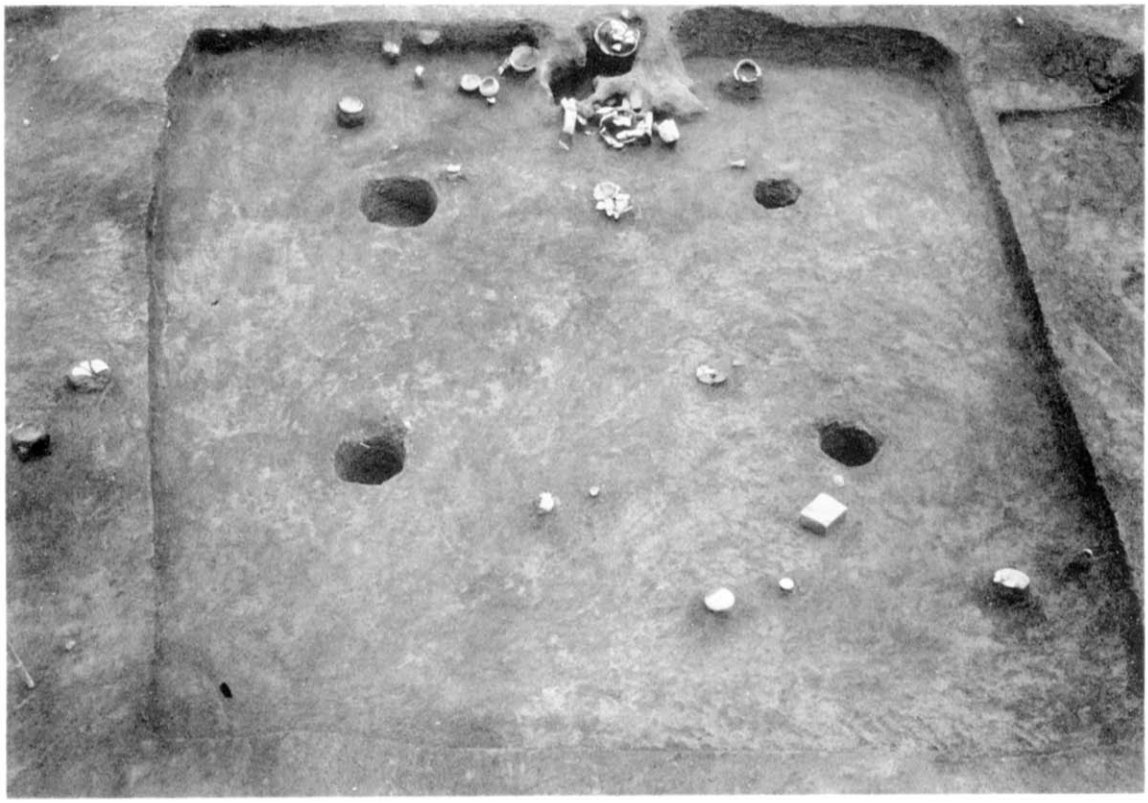
13001

13013

第13号住居跡出土土師器

（1）第14・15号住居跡（南より）

（2）第16～18号住居跡（南より）



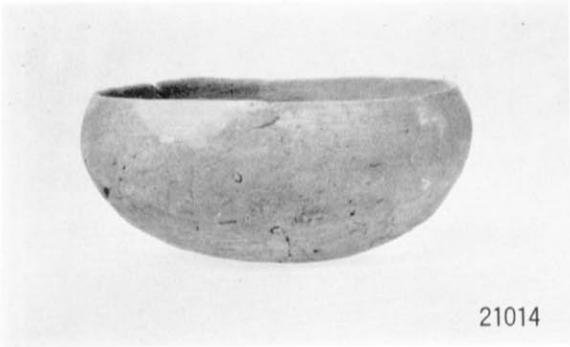
（1）第21号住居跡（南より）

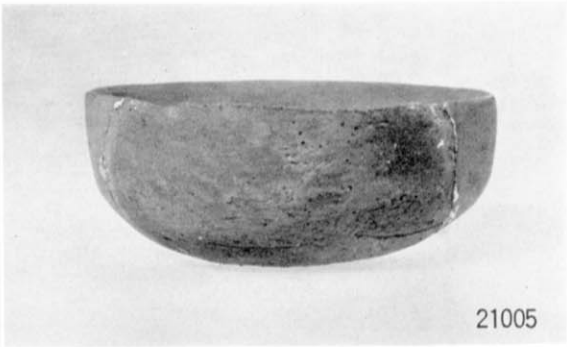
（2）第21号住居跡竈（南より）

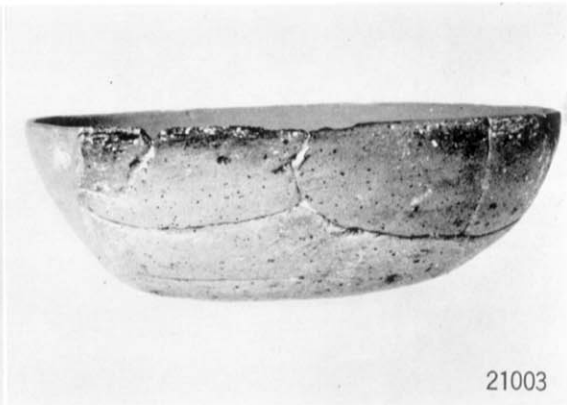
（1）第18号住居跡出土須恵器

（2）第20号住居跡出土須恵器

（3）第21号住居跡出土須恵器







第21号住居跡出土土師器①

21012

21006

21011

21007

21009

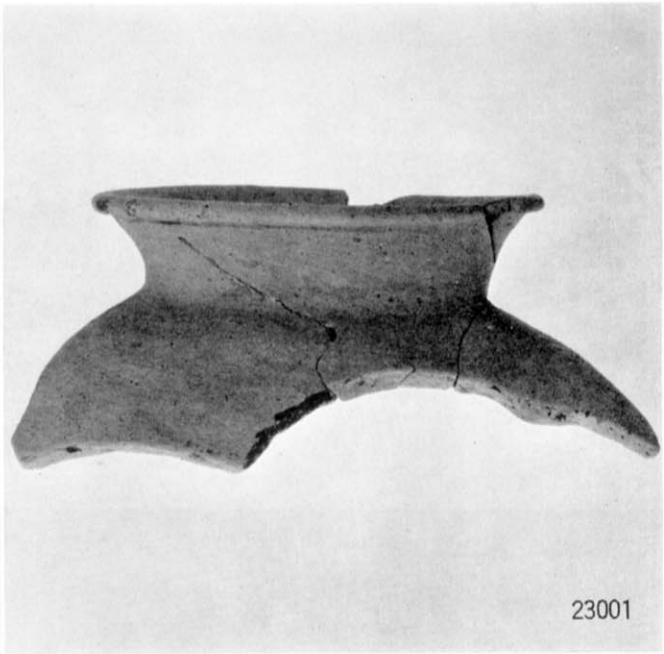
21010

第21号住居跡出土土師器②

（1）第22号住居跡竈（南より）

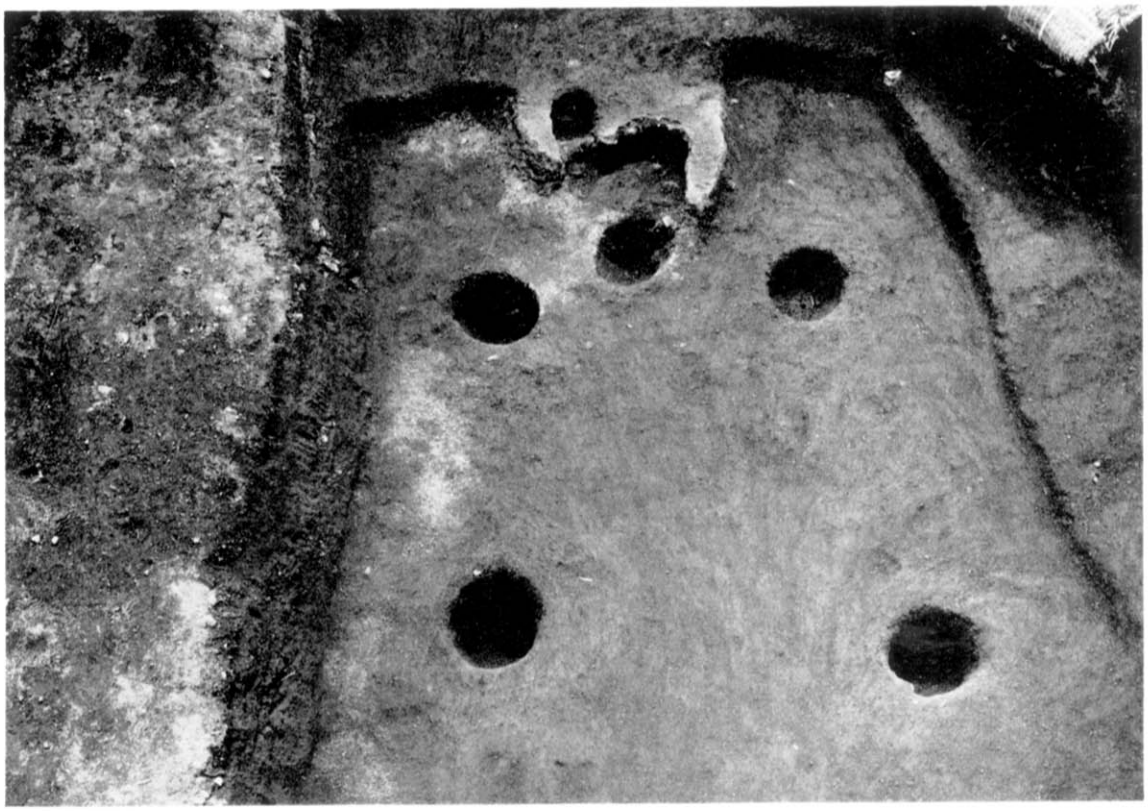
（2）第23号住居跡竈（南より）

（1）第22号住居跡出土須恵器・土師器



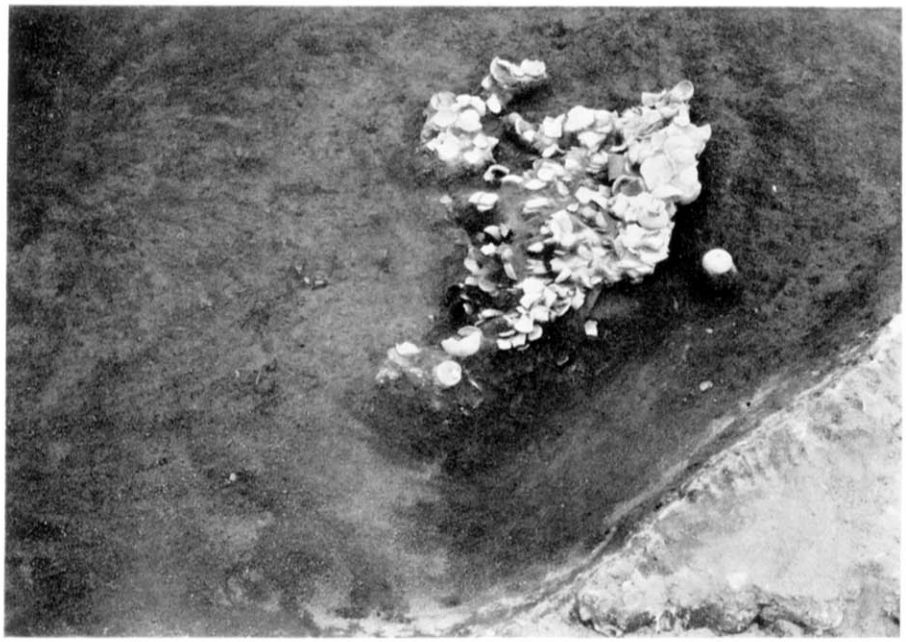
（2）第23号住居跡出土須恵器・土師器

（1）左　第25号住居跡　　右　第24号住居跡（南東より）



（2）第24号住居跡（西より）

（1）第25号住居跡（北東より）



（2）第25号住居跡覆土中土器出土状況（南東より）

25041

01001

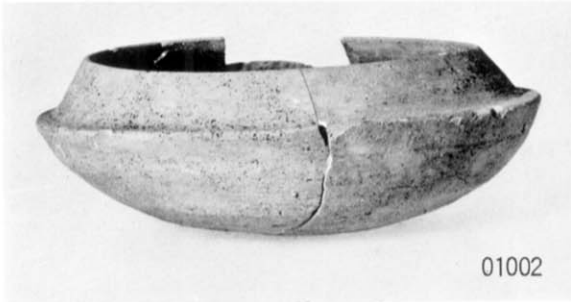
25042

07003

25036

07001

25004


01002

25045

各地点出土須恵器①　杯・高杯

02001

07005

03011

25005

B032

各地点出土須恵器②　杯

07005

12022

05011

B024

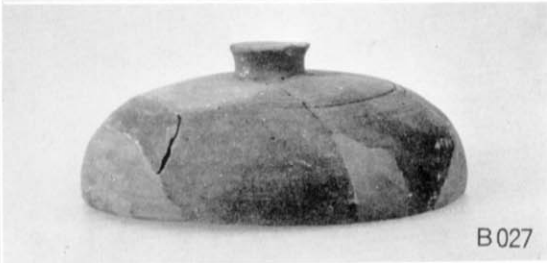
25126

B025

03008

B026

03009


B027

08003

各地点出土須恵器③　杯・高杯

B036

03005

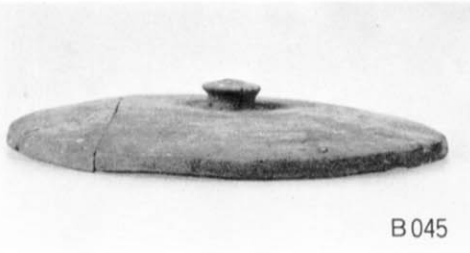
B023

03006

B007

B014

B012

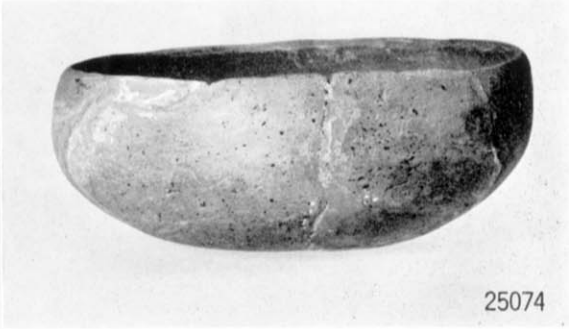

B045

B061

25064

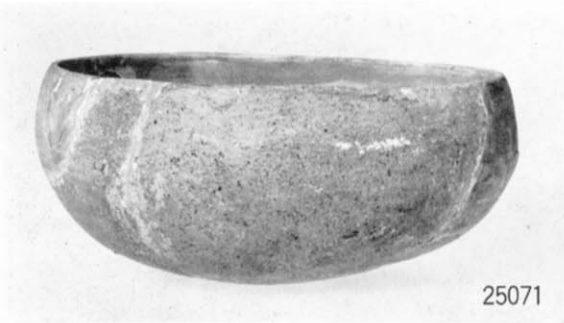
25089

25075

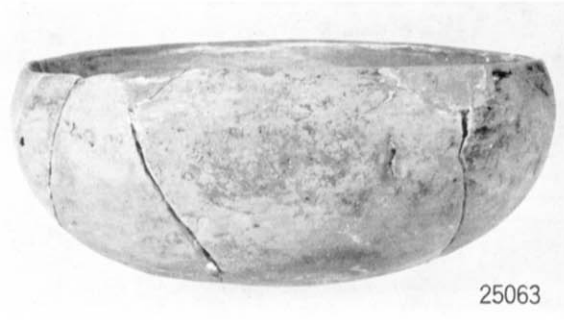

25074

25081

25067


25071

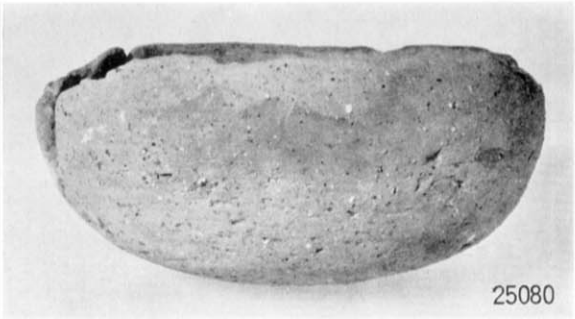
25043


25063

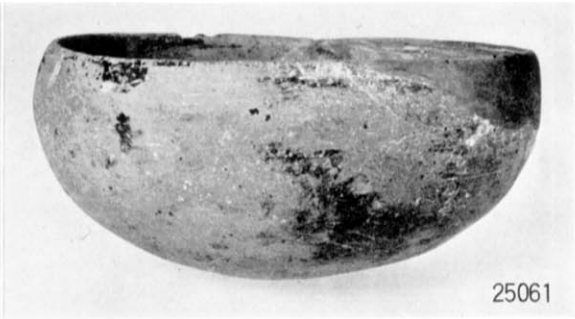
25049

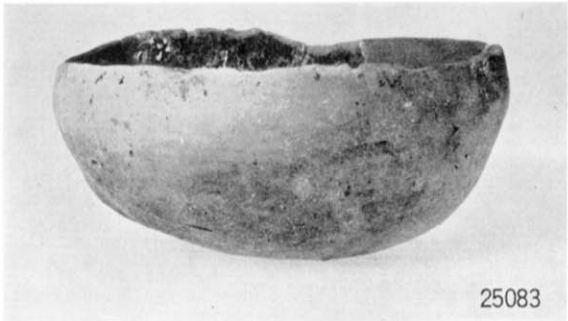
各地点出土土師器①　杯

25003


25080

25073


25061


25083

25059

25082

04006

09006

25062

各地点出土土師器②　杯

25051

25002

25085

25001

25084

25051

25086

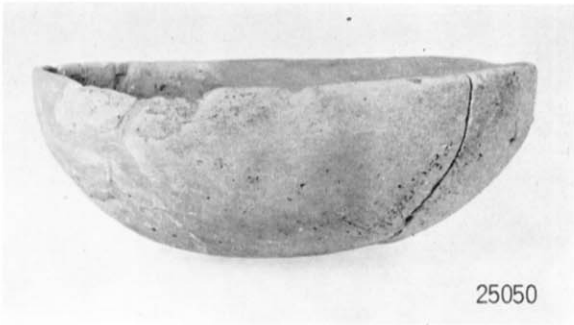
25054

25087

25072

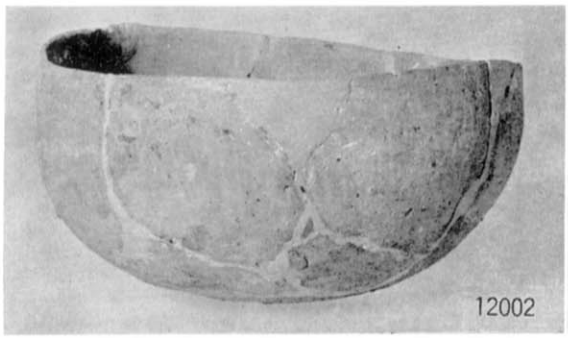
各地点出土土師器③　杯

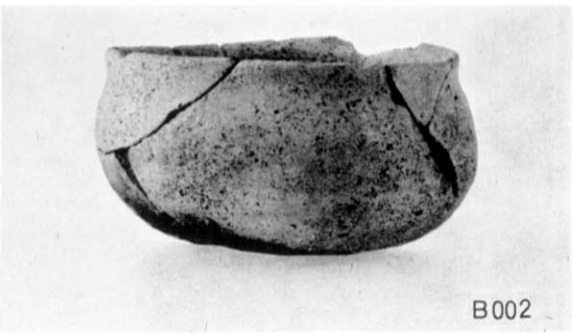
25090


25050

25069

25120


12002


B002

25037

B068

09004

B022

各地点出土土師器④　杯

25048

25058

25068

25070

25077

10009

各地点出土土師器⑤　椀

各地点出土土師器⑥　高杯

各地点出土土師器⑦　壷

03002

25101

25092

25091

25098

25019

各地点出土土師器⑧　甕

25032

25013

25025

25104

12010

25096

各地点出土土師器⑨　甕

25028

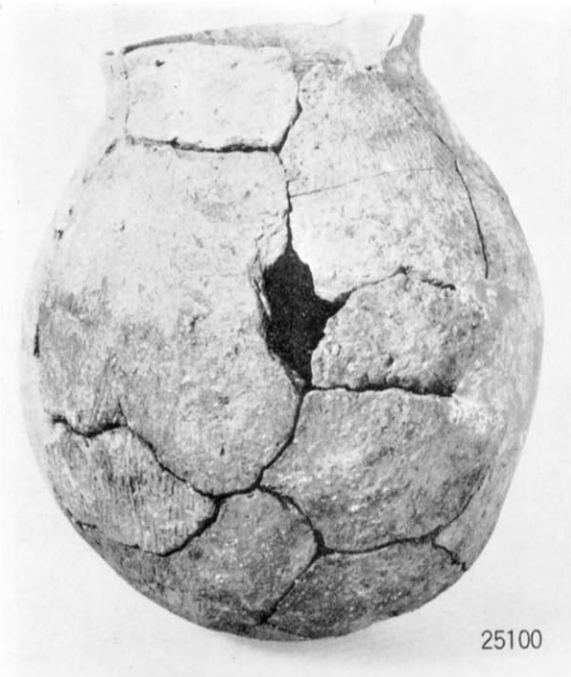
25016

25115

25093

25105

各地点出土土師器⑩　甕



各地点出土土師器⑪　甕

25023

25110

25111

25114

25112

25113

各地点出土土師器⑫　甑

05002

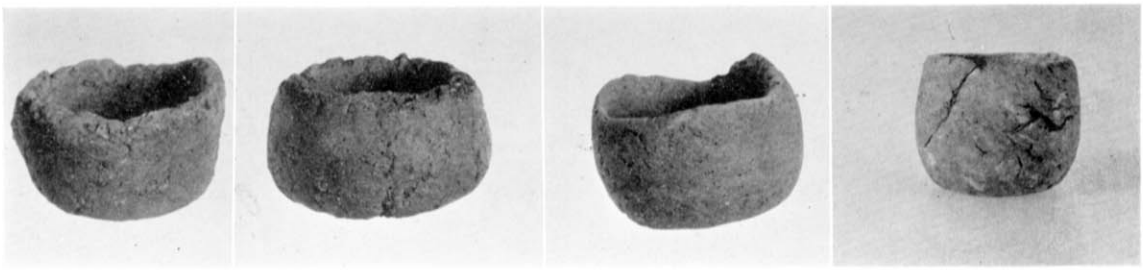
25026

25022

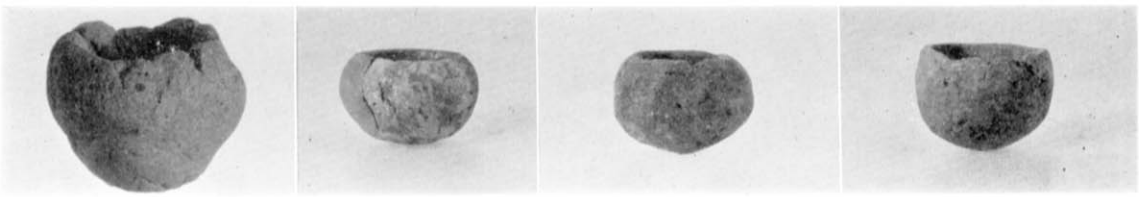
25021

25030

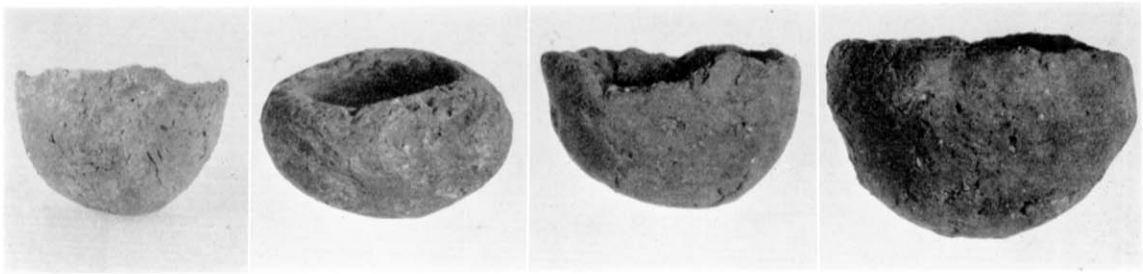
各地点出土土師器⑱　鉢・片口鉢



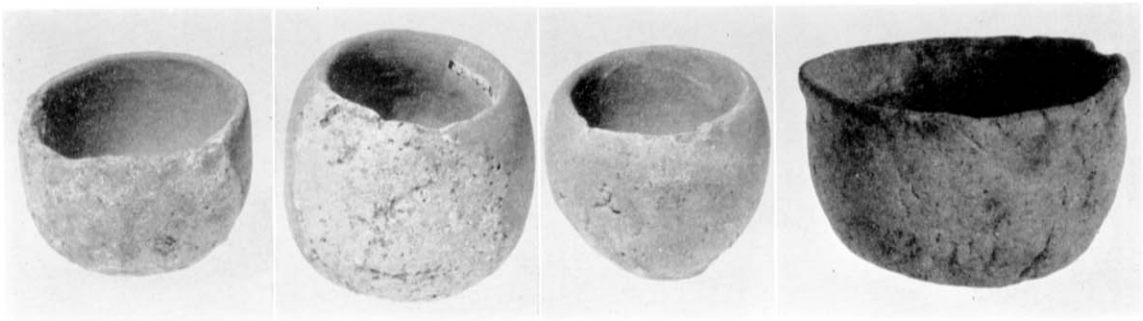
25039　25040　B056　B016



04009　B018　25133　B040

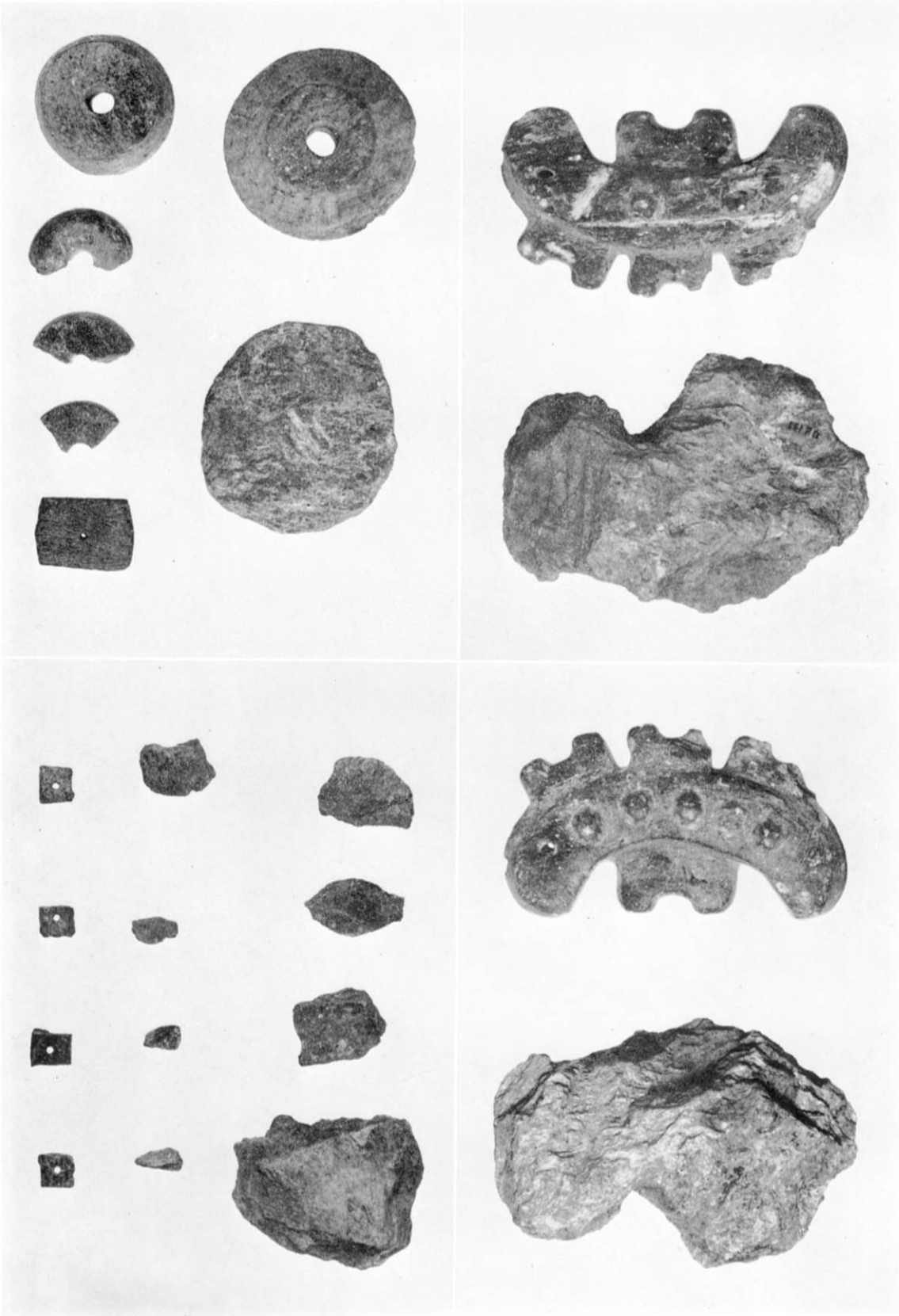


25009　25008　B038　25038

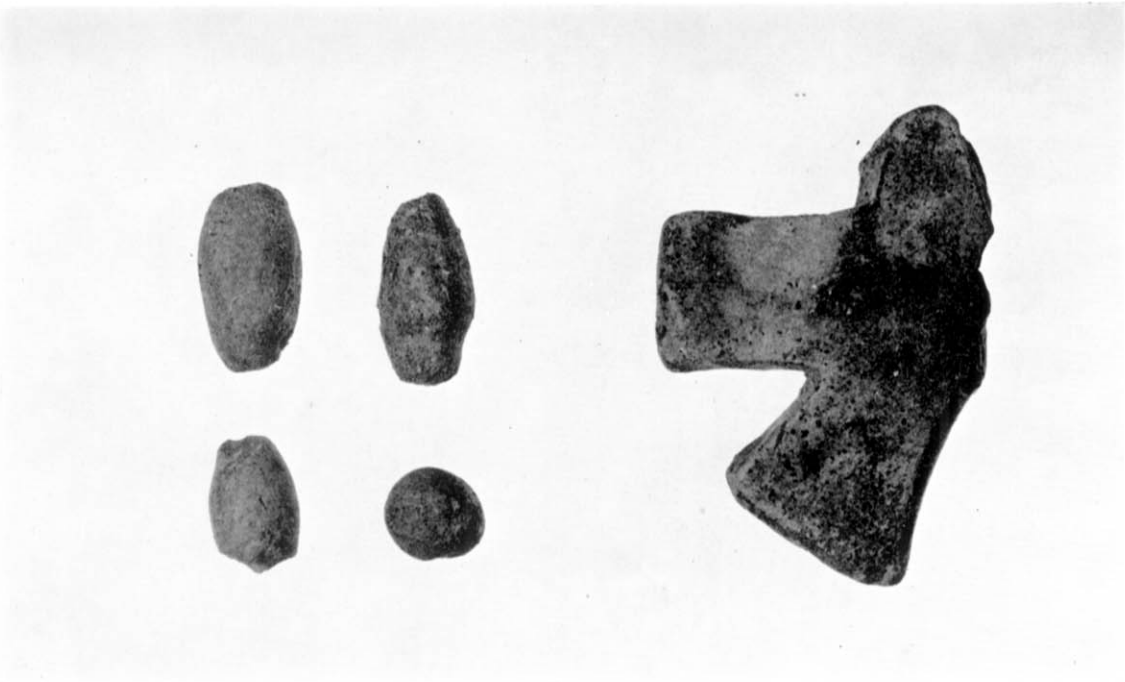


20006　20004　20005　B055

各地点出土土師器⑭　ミニチュア土器



滑石製品

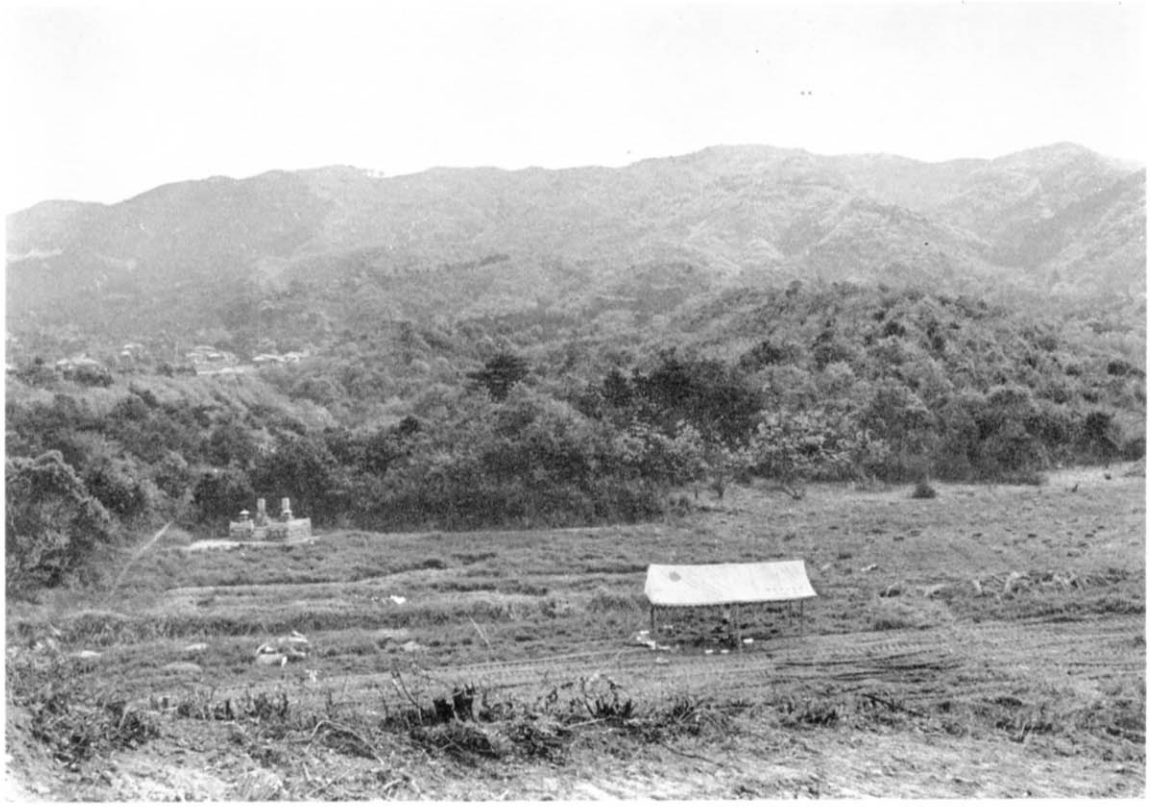


（1）土玉・十字形土製品

（2）土製鏡

（3）焼成粘土

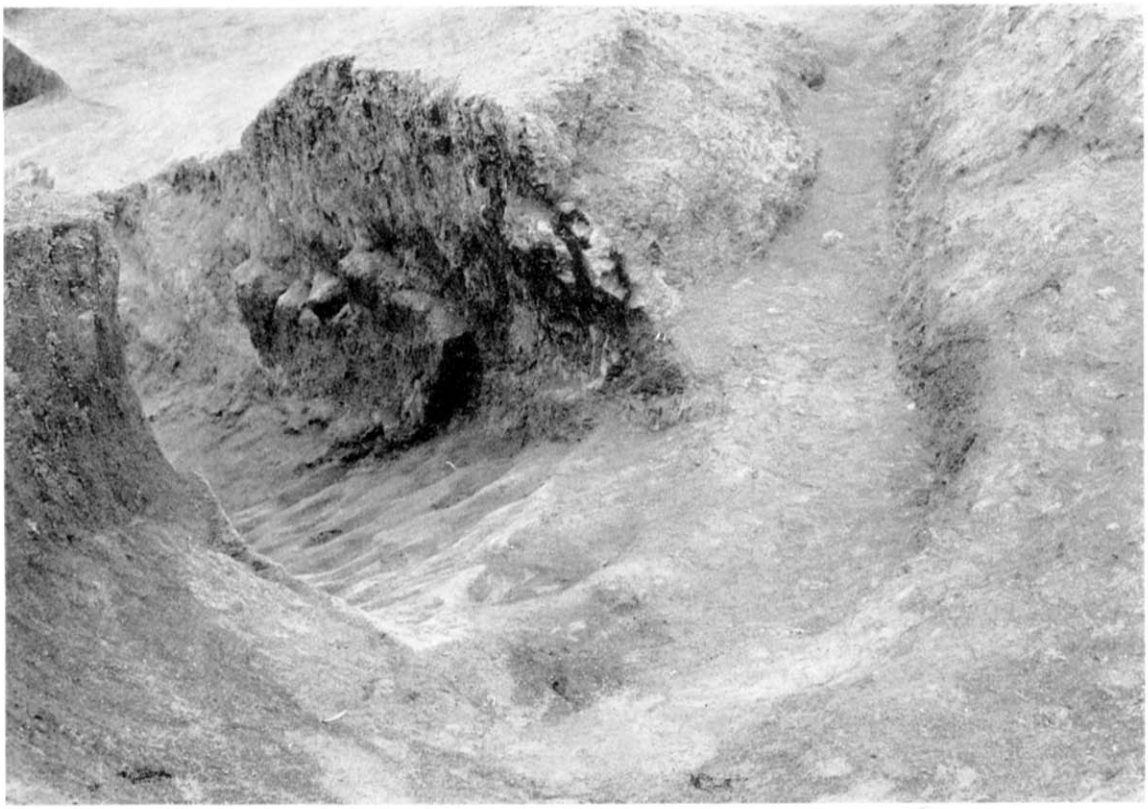
鉄製鋤先・刀子・耳環



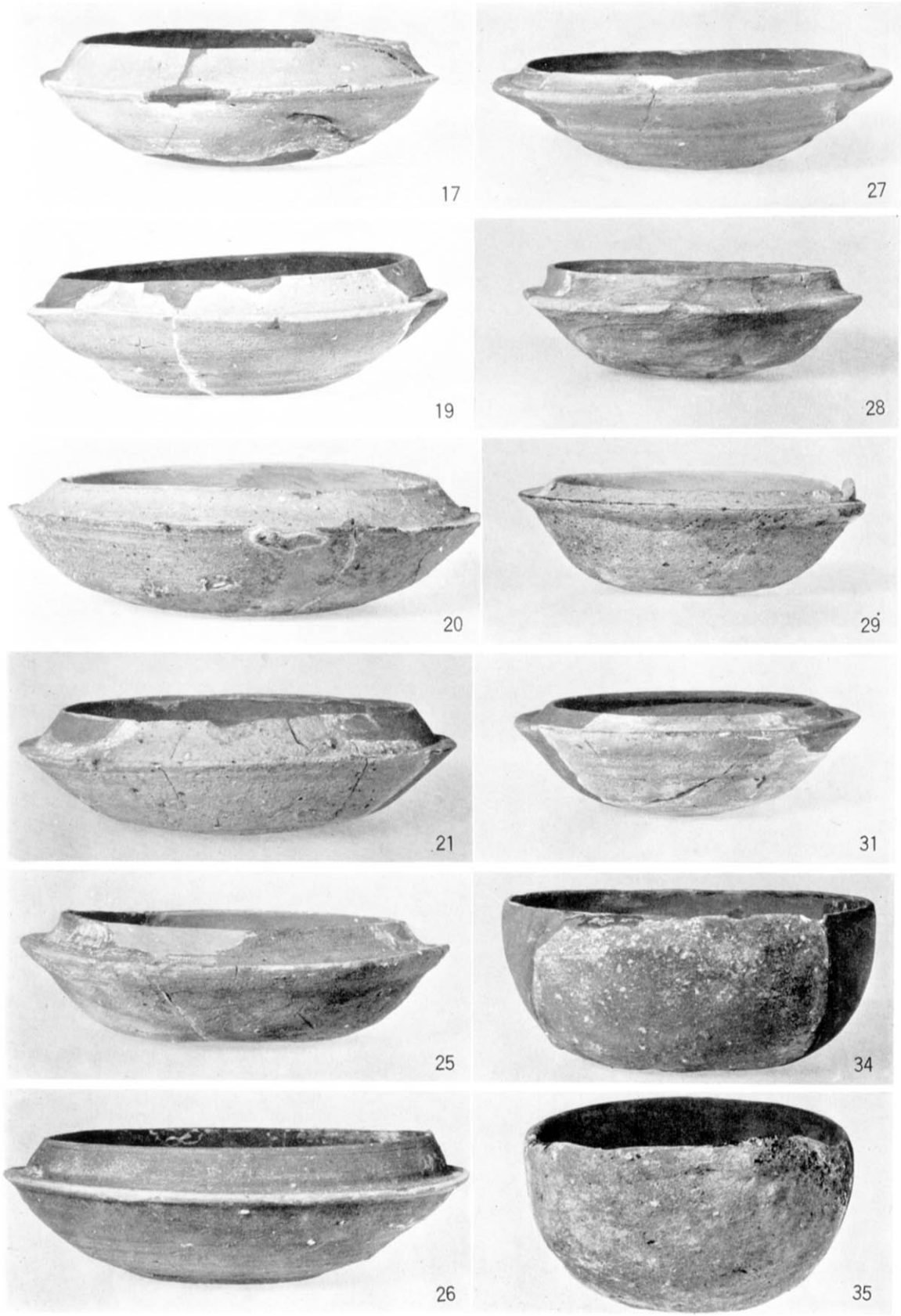
（1）調査地点東側谷部

（2）調査後の全景（東より）

（1）第1号窯燃焼部及び焼成部



（2）第1号窯焼成部及び煙道部



第1・2号窯灰原出土須恵器①

47

45

48・49

50

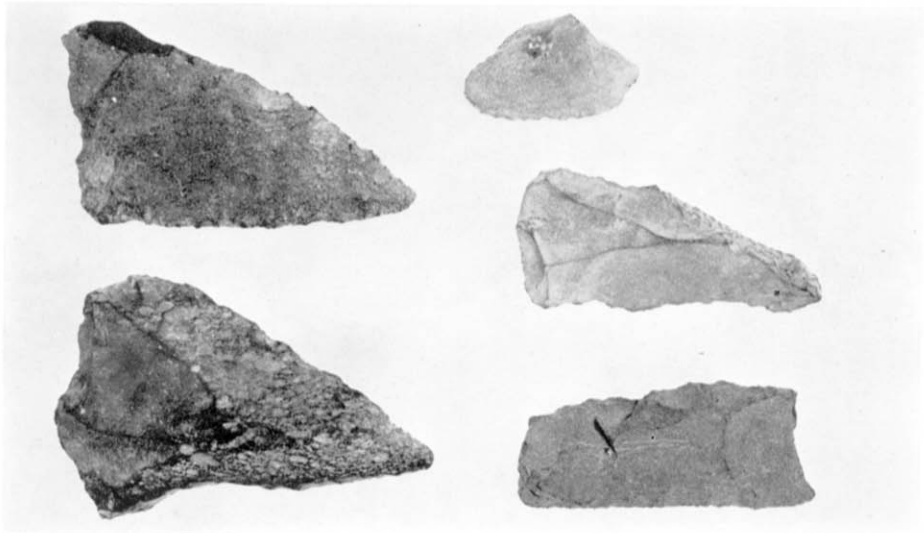
41

53

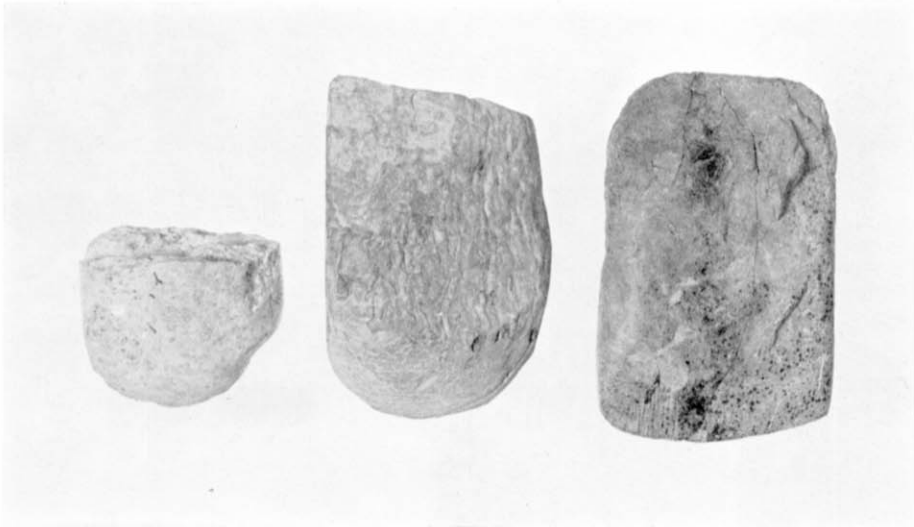
55

第1・2号窯灰原出土須恵器②

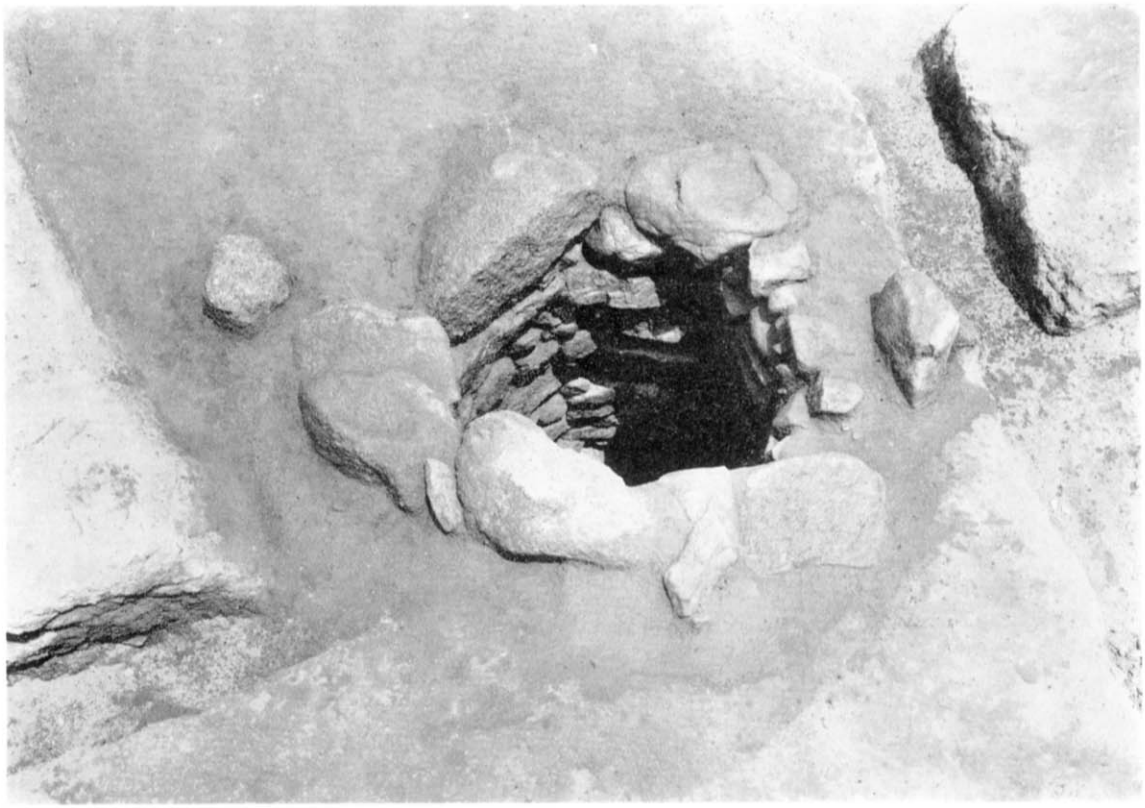
（1）打製石鏃



（2）削　　器



（3）磨製石斧



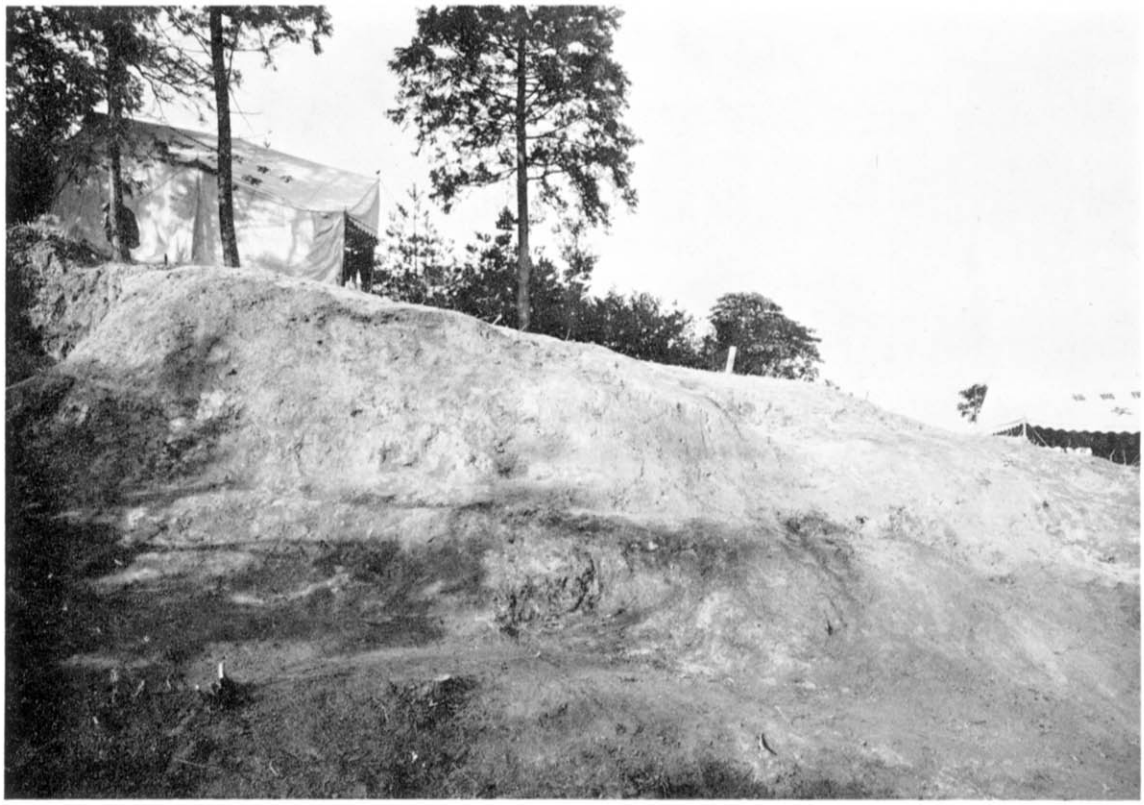
（1）P—6～7区井戸平面

（2）P—6～7区井戸掘り方土層断面

（1）四王寺山からの遠望

（2）全景（東より）

（1）表土剝ぎ後の第1号窯灰原（東より）

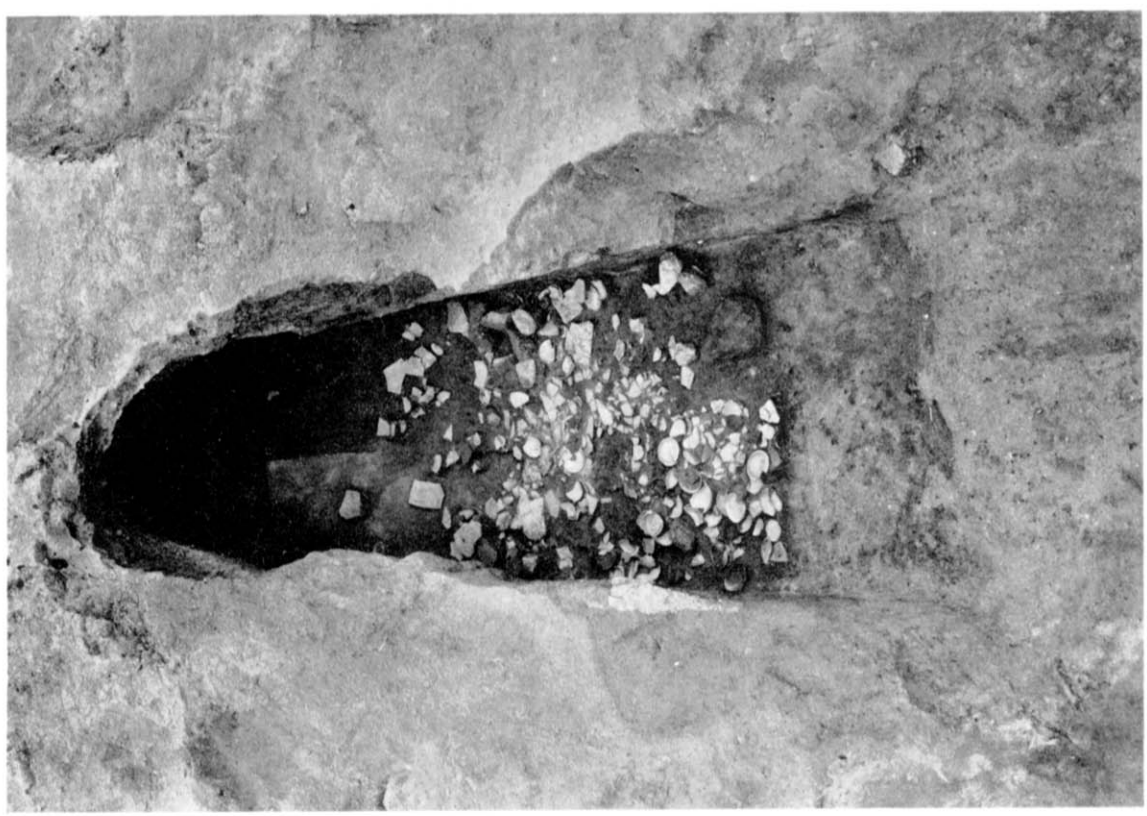


（2）表土剝ぎ後の第2号窯灰原（南より）

（2）第1号窯全景（煙道部より）

（1）第1号窯全景（前庭部より）

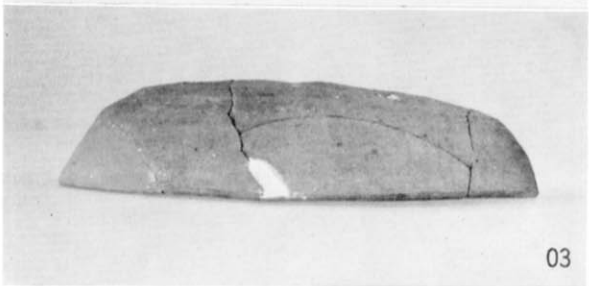
（1）第2号窯全景（前庭部側より）



（2）第2号窯焚口

（1）第 2 号窯全景（煙道部より）

（2）第 2 号窯焚口遺物出土状況



第1号窯出土須恵器①

10

12

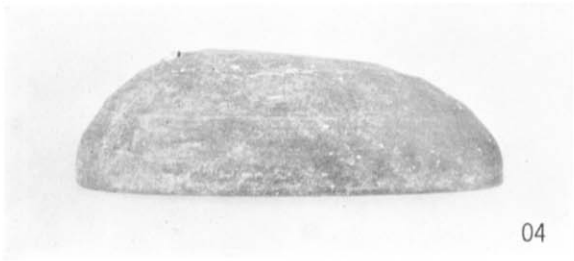
14

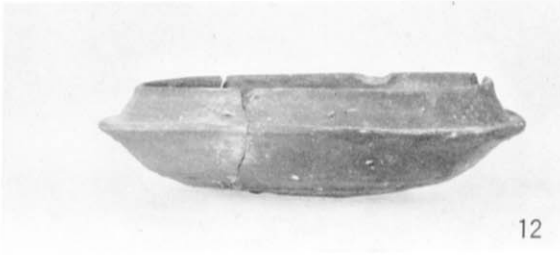
17

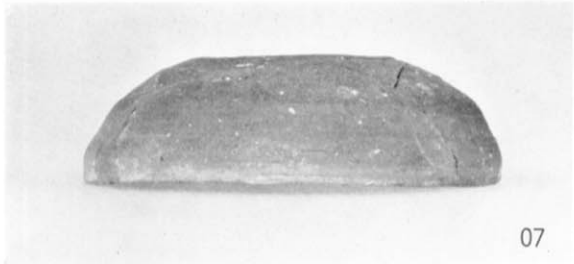
19

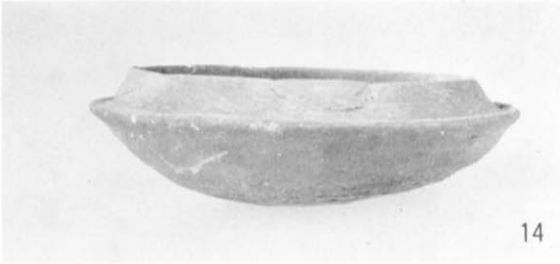
18

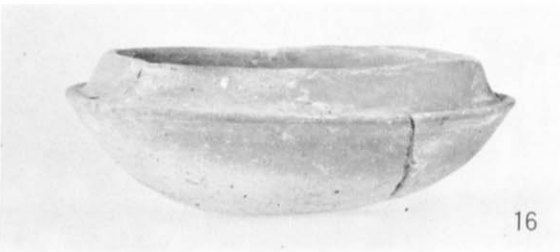
第1号窯出土須恵器②











第2号窯出土須恵器①

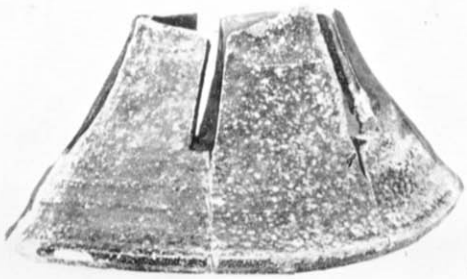
18

22

19

24

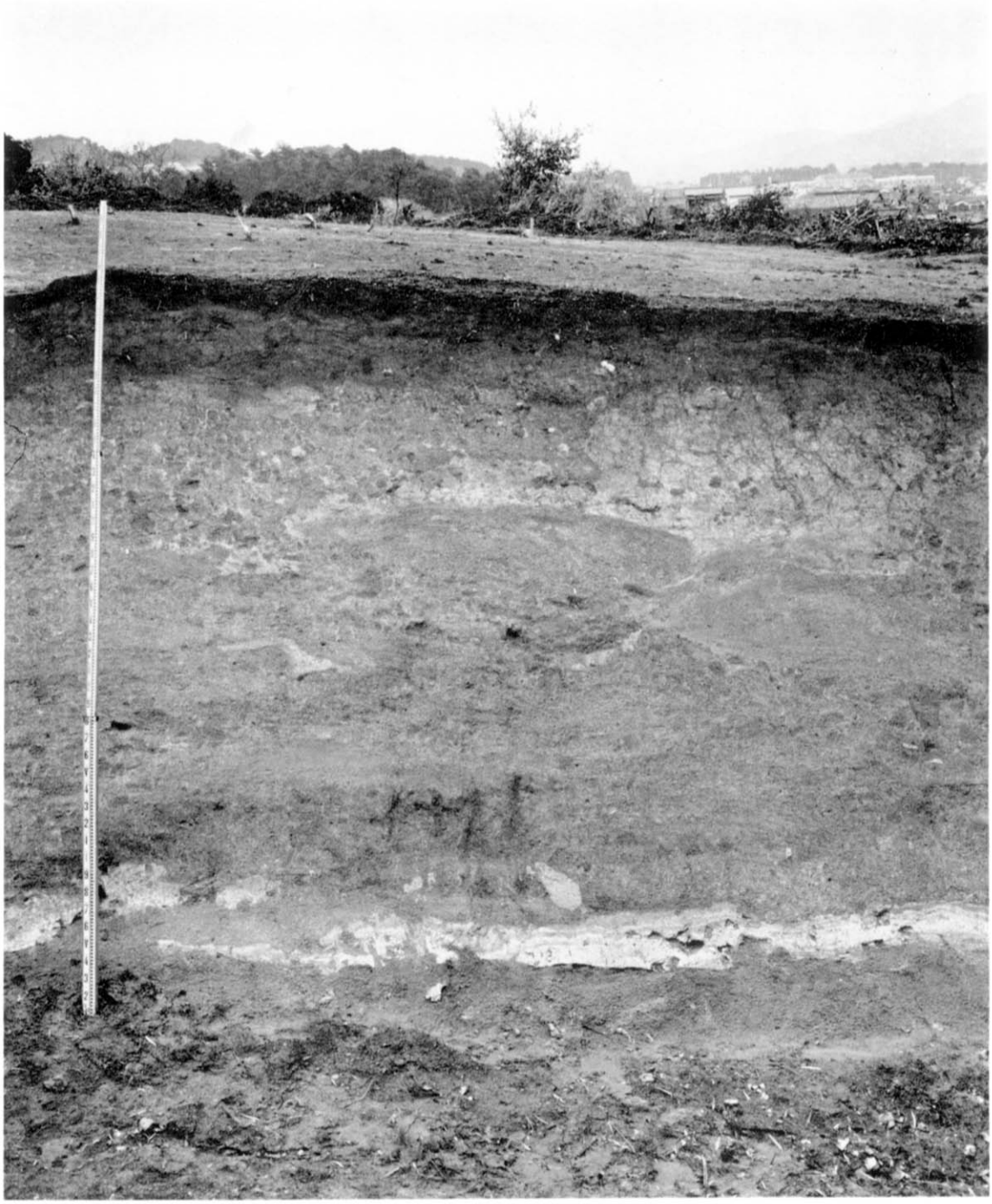
20



21

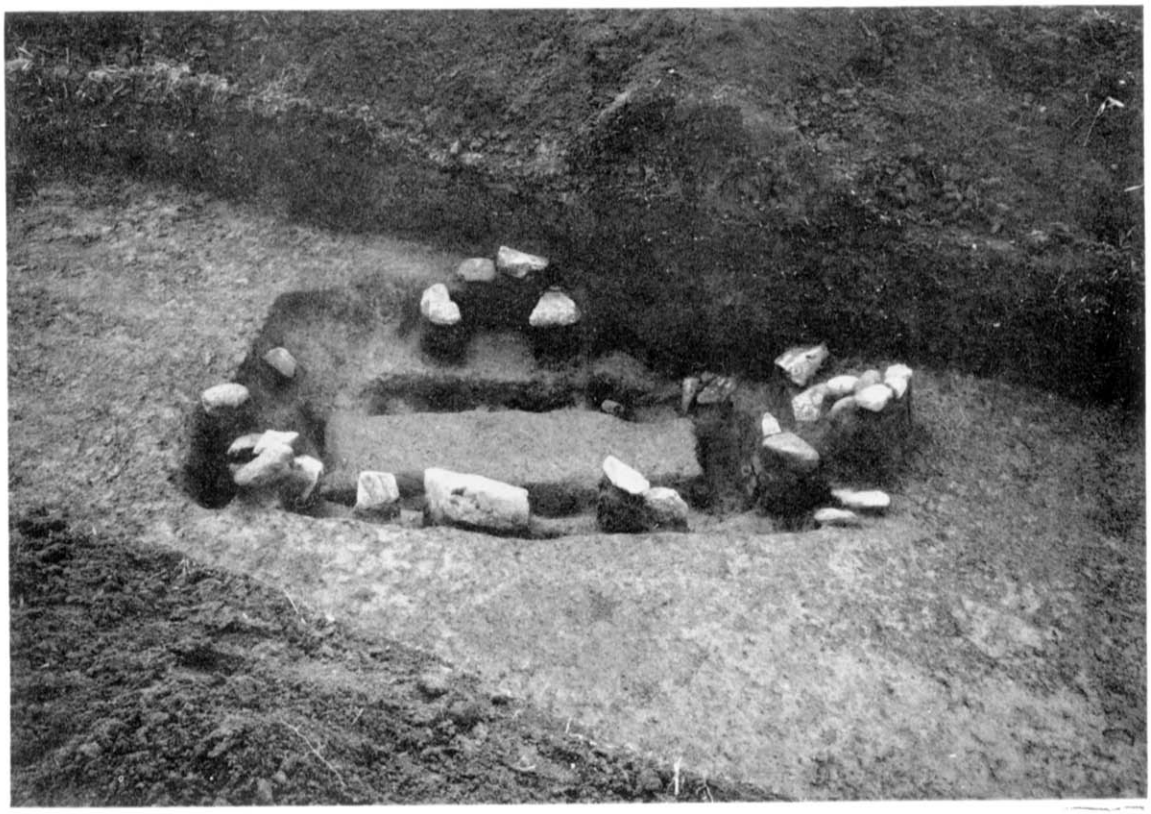
23

第2号窯出土須恵器②

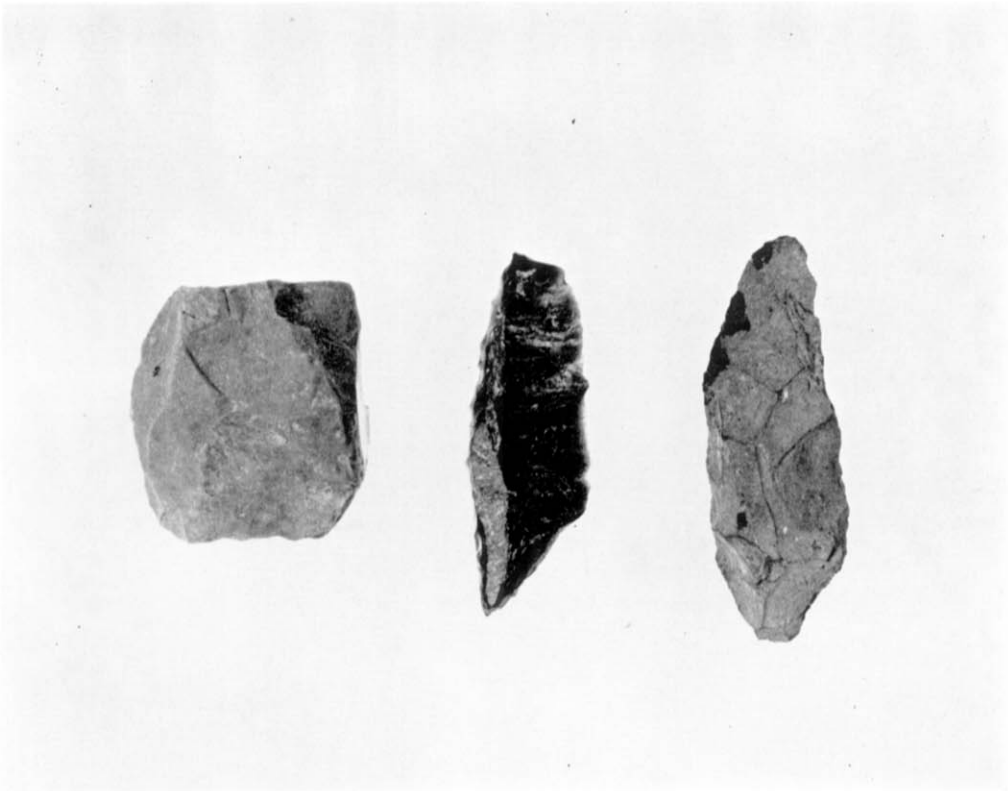


崖面露頭土層

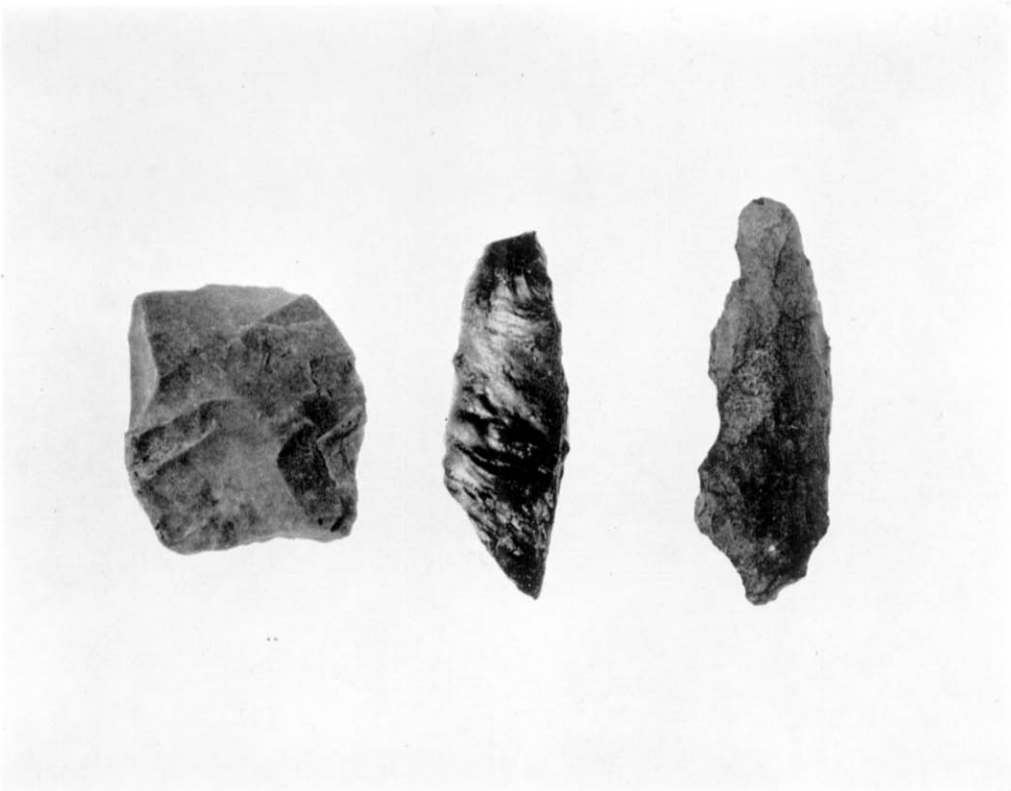
(1) 北区トレンチ(西より)



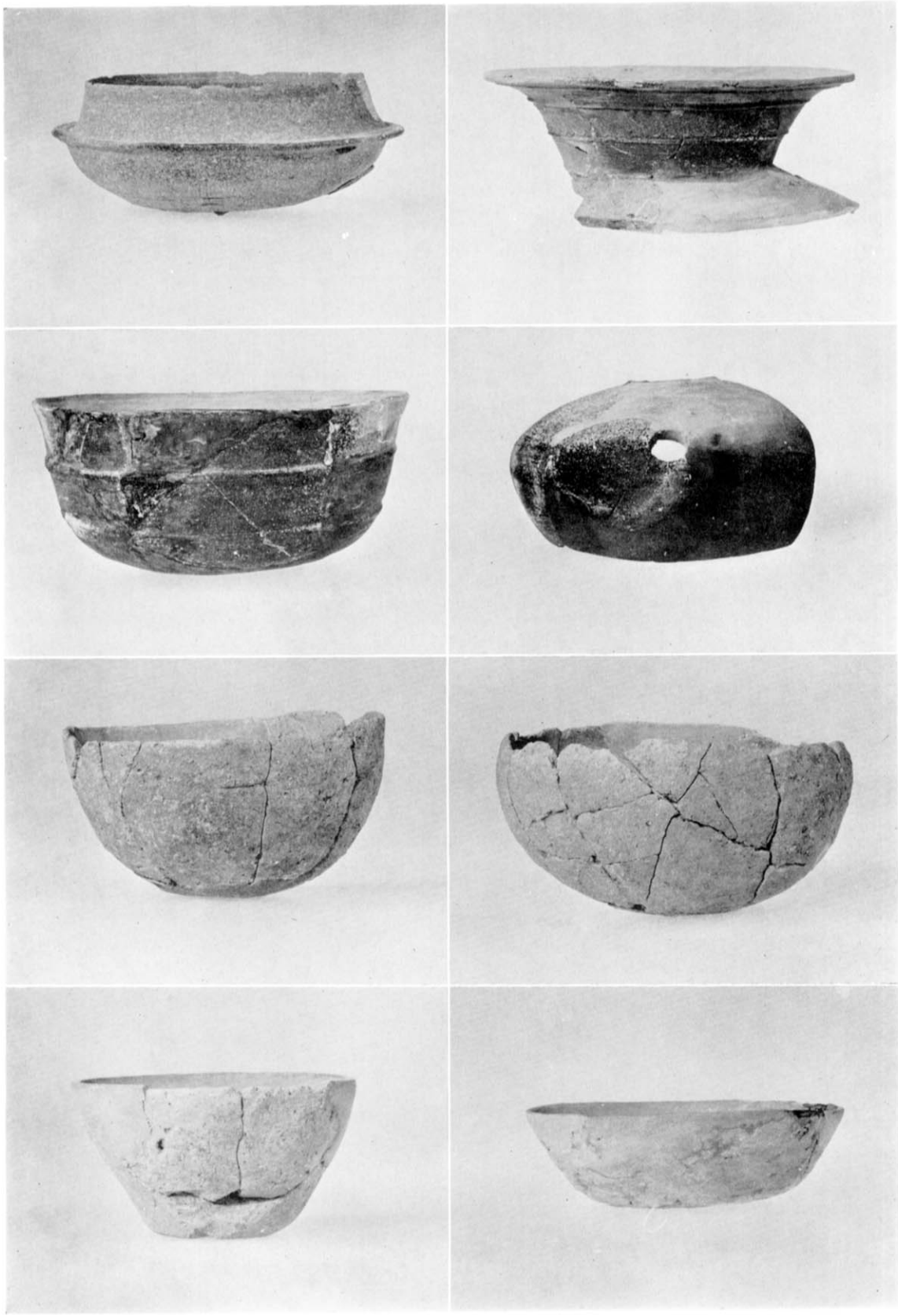
(2) 第1号石棺



（1）石器（表）



（2）石器（裏）



須恵器・土師器

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XVII—

昭和52年8月3日

発行　福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区大字那珂142